上峰町文化財調査報告書第16集

# 八藤遺跡 III

平成３～５年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年３月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第16集

# 八藤（やとう）遺跡 III

平成３～５年度佐賀県営農業基盤整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年３月

上峰町教育委員会

八藤遺跡６区・７区　道路側溝状遺構と掘立柱建物群（写真上方が北）

八藤遺跡6区・7区　道路側溝状遺構 SD-608・SD-609（西から）

# 序

従来より、上峰町は遺跡の宝庫と言われてきました。北部の脊振山系、その南麓から派生し南北に延びる洪積世丘陵と開析谷、さらに有明海へと続く沖積平野と変化にとんだ地形を含む町域には、いたるところに先人たちの暮らしの足跡が刻み込まれています。

教育委員会では、こうした人々の暮らしの足跡、歴史的資産を保存・活用し、将来へ継承していくために、開発と文化財の保護との調整に努めてまいりました。

上峰町では、町北部の大字堤地区を対象とした上峰北部県営農業基盤整備事業が昭和60年度より開始され、これに伴う埋蔵文化財発掘調査を進めてまいりました。

この報告書は、平成３年度から平成５年度にわたって実施した八藤遺跡の埋蔵文化財発掘調査事業の報告書であります。この３年間に及ぶ発掘調査では、先土器時代から近世に及ぶ人々の暮らしの跡が検出されました。とくに、平成２年にその一部が検出された堤土塁跡から続く道路状遺構が八藤丘陵を東西に横断することが確認され、堤土塁の性格を解明する上で、これまでの論考に加えて、古代道の存在が想定されるに至り、新たな一石を投じることとなりました。また、細石刃、丘陵を横断する中世の大溝などの興味深い遺構・遺物も検出され、この丘陵上での各時代の人々の活動を考える上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書を学術資料として、また国民の共有の財産としての文化財を大切に保存していくための資料として役立てていただければ幸いです。

なお、今回の調査にあたって、ご指導、ご協力いただいた文化庁、佐賀県教育委員会文化財課、佐賀県農林部をはじめ、地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成11年３月

上峰町教育委員会

教育長　古賀一守

# 例　言

1．本書は、平成３年度から平成５年度にわたり、佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴い、上峰町教育委員会が発掘調査を実施した、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字迎原に所在する八藤遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、平成10年度県営農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査事業において、国庫補助事業と佐賀県農林部の委託事業として、上峰町教育委員会が主体となり作成、刊行したものである。

3．発掘調査は、農業基盤整備事業の施工により地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ部分について、各年度ごとに便宜的な調査区域を設定し、一部を国庫補助事業として、その他を佐賀県農林部の委託事業として、上峰町教育委員会が主体となり実施したものである。

　各年度ごとの事業区分、調査区名、調査面積、調査期間は、以下のとおりである。

| 事業区分 / 年度 | 国庫補助事業 | | 佐賀県農林部委託事業 | | 調査期間（発掘調査） |
|---|---|---|---|---|---|
| | 調査区名 | 調査面積 | 調査区名 | 調査面積 | |
| 平成３年度 | ７区 | 3,750㎡ | ６区 | 11,250㎡ | 平成３年７月26日<br>〜<br>平成４年３月４日 |
| 平成４年度 | ８区 | 4,250㎡ | ９区 | 12,750㎡ | 平成４年６月25日<br>〜<br>平成５年２月９日 |
| 平成５年度 | 10区 | 1,250㎡ | 11区 | 3,750㎡ | 平成５年９月７日<br>〜<br>平成６年１月21日 |

4．八藤遺跡は、平成２年度までに２次の発掘調査が実施されている。調査年度、調査区名、調査面積は、以下のとおりである。

(1)　佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査　　平成元年度　　１〜３区　3,800㎡

(2)　佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査　　平成２年度　　４・５区　10,650㎡

5．現場での遺構実測作業は、各年度とも有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6．遺構及び出土遺物の写真撮影は、調査員が行った。また、気球による空中写真撮影は、各年度とも有限会社空中写真企画に委託した。

7．調査後の出土遺物、記録類の整理作業は、随時、上峰町船石文化財整理事務所にて実施した。

8．本文中の挿図の実測図作成、拓本、トレース作業等は調査員の指導で製図作業員があたった。

9．本書の執筆は、前文及び本文Ⅰ〜Ⅴ、Ⅵ－３・４、Ⅶを原田大介が、本文Ⅵ－１・２を鶴田浩二が担当した。

10．本書の編集は、原田が行った。

11．本報告書に係る調査で出土した全ての遺物、及び現場で作成した図面・写真・記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

# 凡　例

1．八藤遺跡の略号は、「ＹＴＯ」であり、調査区略号は、「ＹＴＯ－６」～「ＹＴＯ－11」とした。

2．遺構番号は、遺構の種別を表す２文字のアルファベットに続き、調査区の番号に01から99までの２桁の番号を組み合わせたもので、３ないし４桁の番号での表記を原則とした。

ＳＨ……竪穴式住居址　　ＳＢ……掘立柱建物址　　ＳＫ……土壙・貯蔵穴

ＳＤ……溝跡・溝状遺構　ＳＸ……性格不明・その他

例）ＳＫ－６　７０　→　６区の７０号土壙、　ＳＢ－１１　０５　→　11区の５号掘立柱建物跡

3．平成３年度調査の６区・７区の遺構番号の一部に、上記原則から逸脱したものがある。これは、現地で遺構番号を付す際の調査員の調査区誤認によるものであり、本報告では当時のままの番号を用いている。当事者の不手際により、関係各位並びに読者にご迷惑をおかけすることをお詫び致します。

4．調査年度、調査区の都合で、多年度、２調査区以上にまたがって検出された遺構がある。これらは、その遺構の主体が含まれる調査年度、調査区の項で報告した。

5．挿図中の方位は、既成の地形図を用いたものは特記のないかぎり図上方が座標北、現場で作成した遺構図等は図中方位が磁北を表している。

6．表中の数値に付した記号で、（　）は推定値を、※は部分値・残存部値をそれぞれ表す。

7．遺構実測図中の点線は推定線を、一点鎖線は調査区境界をそれぞれ表す。

8．土器実測図の縮尺は、原則として1/4であるが、土器拓影など、同一図中で縮尺が異なるものについては、遺物報告番号に続きその縮尺を特記している。

9．土器実測図中のスクリーン部分は、赤色塗彩を表す。また、同図中ヘラ削り調整痕に付した「↑」印は、調整に用いたヘラ状工具の器面に対する相対的な移動方向を表している。

10．遺物実測図の遺物報告番号は、各調査年度毎に一連の番号を付した。また、遺物写真図版の遺物報告番号と一致する。

# 調査組織（発掘調査当時）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 調査事務局 | 総　括 | 松田末治 | 上峰町教育委員会 | 教育長（平成4年10月19日退任） |
| | | 野口國雄 | 上峰町教育委員会 | 教育長（平成4年10月20日就任） |
| | 事務主任 | 馬場英孝 | 〃 | 教育課長 |
| | 経費執行 | 吉田　忠 | 〃 | 社会教育係長 |
| | 〃 | 鶴田浩二 | 〃 | 社会教育係 |
| | 〃 | 原田大介 | 〃 | 〃 |
| 調査組織 | 調査員 | 鶴田浩二 | 上峰町教育委員会 | 社会教育係 |
| | 〃 | 原田大介 | 〃 | 〃 |

調査指導　　佐賀県教育委員会文化財課

# 発掘作業参加者

秋山　巖、秋山ユキエ、石橋テル、石丸富男、石丸ミチエ、犬丸道子、江越清太、江越光子、江越義信、江崎秋子、江崎オシノ、大石弘子、大坪光代、緒方ツタエ、川原ツヤ、川原　等、川原ミヨ、川原ヨシエ、北島八重子、最所和子、鳴山静江、執行一水、執行ミハル、篠原晴代、島　四郎、志波千津子、高島 昇、竹本行宏、田尻祐子、田中シズエ、堤　イシ、鶴田キヨコ、鶴田末友、鶴田竹次、鶴田逞宜、鶴田久子、鶴田八重子、中村初一、納富ヌイ子、桧枝　茂、藤戸道子、藤山義彦、松尾キミエ、松尾トシエ、三好スエ、森　スエ子、矢動丸喜三、矢動丸勅代、矢動丸信子、矢動丸ミツエ、柳　和義、山下保子、吉田英子、鷲崎照代

（発掘作業員）

# 整理作業参加者

岩下貴子、大隈弓子、坂本恵子、島美保子、田尻祐子、中尾美千恵、馬原喜美子、矢動丸洋子

（製図作業員）

# 目　　次

序
例言・凡例
調査組織・発掘作業参加者・整理作業参加者

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1
　1．遺跡の位置 …… 1
　2．歴史的環境 …… 1

Ⅱ．調査に至る経緯 …… 7

Ⅲ．遺跡の概要 …… 9

Ⅳ．平成3年度6・7区の調査 …… 12
　1．調査の経過 …… 12
　2．調査区の概要 …… 12
　3．遺　　構 …… 15
　　(1)竪穴式住居址 …… 16
　　(2)掘立柱建物址 …… 18
　　(3)土壙・貯蔵穴 …… 36
　　(4)火 葬 墓 …… 47
　　(5)溝　　跡 …… 47
　4．遺　　物 …… 48
　　(1)土　　器 …… 48
　　(2)土製品・石器・鉄器 …… 54

Ⅴ．平成4年度8・9区の調査 …… 63
　1．調査の経過 …… 63
　2．調査区の概要 …… 64
　3．遺　　構 …… 67
　　(1)竪穴式住居址 …… 67
　　(2)掘立柱建物址 …… 69
　　(3)土壙・貯蔵穴 …… 79
　　(4)溝　　跡 …… 92
　　(5)遺物包含層の調査 …… 92
　4．遺　　物 …… 97
　　(1)土　　器 …… 97
　　(2)石　　器 …… 101

Ⅵ．平成５年度10・11区の調査 ……112
1．調査の経過 ……112
2．調査区の概要 ……113
3．遺　　構 ……116
(1)竪穴式住居址 ……116
(2)掘立柱建物址 ……119
(3)土壙・貯蔵穴 ……127
4．遺　　物 ……135
(1)土　　器 ……135
(2)石　　器 ……136

Ⅶ．ま と め ……141

# 挿図目次

Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000） …… 2
Fig. 2　八藤遺跡の位置および周辺遺跡（1/50,000） …… 4
Fig. 3　八藤遺跡周辺地形図および調査区位置図（1/5,000） ……10
Fig. 4　６区・７区遺構配置図（1/800） ……13～14
Fig. 5　６区・７区出土竪穴式住居址実測図　SH-619・SH-625・SH-629・SH-631（1/80） ……17
Fig. 6　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(1)　SB-617・SB-638（1/80） ……23
Fig. 7　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(2)　SB-642（1/80） ……24
Fig. 8　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(3)　SB-646（1/80） ……25
Fig. 9　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(4)　SB-647（1/80） ……26
Fig.10　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(5)　SB-648・SB-649（1/80） ……27
Fig.11　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(6)　SB-651（1/80） ……28
Fig.12　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(7)　SB-652（1/80） ……29
Fig.13　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(8)　SB-653・SB-654（1/80） ……30
Fig.14　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(9)　SB-655・SB-656（1/80） ……31
Fig.15　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(10)　SB-658・SB-659（1/80） ……32
Fig.16　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(11)　SB-675・SB-682（1/80） ……33
Fig.17　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(12)　SB-689・SB-691（1/80） ……34
Fig.18　６区・７区出土掘立柱建物址実測図(13)　SB-708・SB-717（1/80） ……35
Fig.19　６区・７区出土土壙実測図(1)　SK-601・SK-602・SK-604・SK-605・SK-607・SK-612～SK-614・SK-616・SK-618・SK-620（1/60） ……39
Fig.20　６区・７区出土土壙実測図(2)　SK-621・SK-622・SK-624・SK-626～SK-628・SK-632（1/60） ……40
Fig.21　６区・７区出土土壙実測図(3)　SK-633～SK-637・SK-639・SK-640・SX-641（1/60） ……41
Fig.22　６区・７区出土土壙実測図(4)　SK-645・SK-650（1/60） ……42
Fig.23　６区・７区出土土壙実測図(5)　SK-657・SK-660～SK-670（1/60） ……43
Fig.24　６区・７区出土土壙実測図(6)　SK-671～SK-674・SK-676～SK-681・SK-683～SK-686（1/60） ……44

Fig.25　6区・7区出土土壙実測図(7)　SK-687・SK-688・SK-696・SK-701・SK-702・SK-704～SK-706 (1/60)……45
Fig.26　6区・7区出土土壙実測図(8)　SK-707・SK-709～SK-712・SK-714～SK-716 (1/60)……46
Fig.27　6区・7区出土火葬墓実測図　SX-644 (1/60)……47
Fig.28　6区・7区出土溝跡実測図　SD-608・SD-609・SD-643 (1/200)……49～50
Fig.29　6区・7区出土遺物実測図(1) (1/4)……55
Fig.30　6区・7区出土遺物実測図(2) (1/4)……56
Fig.31　6区・7区出土遺物実測図(3) (1/4)……57
Fig.32　6区・7区出土遺物実測図(4) (1/4)……58
Fig.33　6区・7区出土遺物実測図(5) (1/4)……59
Fig.34　6区・7区出土遺物実測図(6) (1/4)……60
Fig.35　6区・7区出土遺物実測図(7) (1/4)……61
Fig.36　6区・7区出土遺物実測図(8) (1/4)……62
Fig.37　8区・9区遺構配置図 (1/800)……65～66
Fig.38　8区・9区出土竪穴式住居址実測図　SH-953・SH-971・SH-975・SH-976 (1/80)……68
Fig.39　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(1)　SB-990・SB-991 (1/80)……71
Fig.40　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(2)　SB-992 (1/80)……72
Fig.41　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(3)　SB-993 (1/80)……73
Fig.42　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(4)　SB-994 (1/80)……74
Fig.43　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(5)　SB-995 (1/80)……75
Fig.44　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(6)　SB-996 (1/80)……76
Fig.45　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(7)　SB-997 (1/80)……77
Fig.46　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(8)　SB-998・SB-999 (1/80)……78
Fig.47　8区・9区出土土壙実測図(1)　SK-801～SK-913 (1/60)……83
Fig.48　8区・9区出土土壙実測図(2)　SK-914～SK-923 (1/60)……84
Fig.49　8区・9区出土土壙実測図(3)　SK-924～SK-934 (1/60)……85
Fig.50　8区・9区出土土壙実測図(4)　SK-935～SK-939 (1/60)……86
Fig.51　8区・9区出土土壙実測図(5)　SK-940～SK-942 (1/60)……87
Fig.52　8区・9区出土土壙実測図(6)　SK-943～SK-947 (1/60)……88
Fig.53　8区・9区出土土壙実測図(7)　SK-949～SK-952・SK-954・SK-958～SK-963 (1/60)……89
Fig.54　8区・9区出土土壙実測図(8)　SK-964～SK-969・SK-972～SK-974・SK-977 (1/60)……90
Fig.55　8区・9区出土土壙実測図(9)　SK-978～SK-989 (1/60)……91
Fig.56　8区・9区出土溝跡実測図　SD-957 (1/80)・SD-970 (1/600)……93
Fig.57　8区・9区遺物包含層調査グリッド図　H－9～11Gr.・I－8～10Gr.・J－7～9Gr. (1/125)……94
Fig.58　8区・9区遺物包含層中遺物分布図 (1/125)……95
Fig.59　8区・9区出土遺物実測図(1) (1/4)……103
Fig.60　8区・9区出土遺物実測図(2) (1/4)……104
Fig.61　8区・9区出土遺物実測図(3) (1/4)……105
Fig.62　8区・9区出土遺物実測図(4) (1/4)……106
Fig.63　8区・9区出土遺物実測図(5) (1/4)……107

Fig.64　8区・9区出土遺物実測図(6)（1/4）……108
Fig.65　8区・9区出土遺物実測図(7)（1/4）……109
Fig.66　8区・9区出土遺物実測図(8)（1/4）……110
Fig.67　8区・9区出土遺物実測図(9)（1/4）……111
Fig.68　10区・11区遺構配置図（1/800）……114
Fig.69　縄文時代包含層試掘溝配置図（1/400）……115
Fig.70　10区・11区出土竪穴式住居址実測図(1)　SH-1120・SH-1121（1/80）……117
Fig.71　10区・11区出土竪穴式住居址実測図(2)　SH-1136・SH-1137（1/80）……118
Fig.72　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(1)　SB-1005（1/80）……122
Fig.73　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(2)　SB-1007・SB-1105・SB-1135（1/80）……123
Fig.74　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(3)　SB-1140・SB-1142（1/80）……124
Fig.75　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(4)　SB-1143・SB-1144（1/80）……125
Fig.76　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(5)　SB-1150・SB-1154（1/80）……126
Fig.77　10区・11区出土土壙実測図(1)　SK-1001～SK-1004・SK-1010～SK-1018（1/60）……130
Fig.78　10区・11区出土土壙実測図(2)　SK-1101～SK-1104・SK-1107～SK-1116（1/60）……131
Fig.79　10区・11区出土土壙実測図(3)　SK-1117～SK-1119・SK-1122～SK-1125・SK-1127～SK-1134（1/60）……132
Fig.80　10区・11区出土土壙実測図(4)　SK-1138・SK-1139・SK-1141・SK-1145～SK-1149・SK-1151（1/60）……133
Fig.81　10区・11区出土土壙実測図(5)　SK-1152・SK-1153・SK-1155～SK-1162（1/60）……134
Fig.82　10区・11区出土遺物実測図(1)（1/4）……137
Fig.83　10区・11区出土遺物実測図(2)（1/4）……138
Fig.84　10区・11区出土遺物実測図(3)（1/4）……139
Fig.85　10区・11区出土遺物実測図(4)（1/4）……140

# 表　目　次

Tab. 1　6区・7区出土竪穴式住居址一覧表……16
2　6区・7区出土掘立柱建物址一覧表……21
3　6区・7区出土土壙一覧表……36
4　6区・7区出土石器等一覧表……62
5　8区・9区出土竪穴式住居址一覧表……69
6　8区・9区出土掘立柱建物址一覧表……79
7　8区・9区出土土壙一覧表……80～82
8　8区・9区遺物包含層小グリッド別遺物出土数……96
9　8区・9区出土石器一覧表……102
10　10区・11区出土竪穴式住居址一覧表……119
11　10区・11区出土掘立柱建物址一覧表……120
12　10区・11区出土土壙一覧表……127
報告書抄録……巻末

# 図版目次


巻頭図版

ＰＬ．1　八藤遺跡６区・７区　道路側溝状遺構と掘立柱建物群

2　八藤遺跡６区・７区　道路側溝状遺構

巻末図版

3　八藤遺跡６区・７区全景

4　八藤遺跡８区・９区全景

5　八藤遺跡10区・11区全景

6　八藤遺跡６区・７区　遺構(1)　SH-619・SH-625・SH-629

7　八藤遺跡６区・７区　遺構(2)　道路側溝状遺構と掘立柱建物群

8　八藤遺跡６区・７区　遺構(3)　SB-617・SB-638・SB-649・SB-691・SB-642・SB-646～SB-648・SB-675

9　八藤遺跡６区・７区　遺構(4)　SB-645・SB-651～SB-655・SB-682・SB-656・SB-657・SB-647

10　八藤遺跡６区・７区　遺構(5)　SB-658・SB-659・SB-686・ピット群・SB-708・SB-717・SB-647

11　八藤遺跡６区・７区　遺構(6)　SK-601・SK-602・SK-605・SK-614・SK-616・SK-618・SK-624・SK-626

12　八藤遺跡６区・７区　遺構(7)　SK-627・SK-628・SK-633～SK-637・SK-639

13　八藤遺跡６区・７区　遺構(8)　SK-640・SK-645・SK-657・SK-660～SK-663・SK-667

14　八藤遺跡６区・７区　遺構(9)　SK-668～SK-676

15　八藤遺跡６区・７区　遺構(10)　SK-677～SK-681・SK-683～SK-685

16　八藤遺跡６区・７区　遺構(11)　SK-686～SK-688・SX-696・SK-701・SK-702・SK-706・SK-707

17　八藤遺跡６区・７区　遺構(12)　SK-709・SK-710・SK-712・SK-714～SK-716・SX-644

18　八藤遺跡６区・７区　遺構(13)　SD-643

遺物(1)　SD-609・SK-614・SK-618

19　八藤遺跡６区・７区　遺物(2)　SH-625・SK-634・SK-637

20　八藤遺跡６区・７区　遺物(3)　SK-637・SX-641・SK-640・SD-643・SX-644

21　八藤遺跡６区・７区　遺物(4)　SK-645・SK-657・SB-648・SK-650

22　八藤遺跡６区・７区　遺物(5)　SK-650

23　八藤遺跡６区・７区　遺物(6)　SK-650

24　八藤遺跡６区・７区　遺物(7)　SK-650・SK-657

25　八藤遺跡６区・７区　遺物(8)　SK-657・SK-660・SK-662・SK-663・SK-670・SB-652

26　八藤遺跡６区・７区　遺物(9)　SK-698・SK-701・SK-702・SK-705

27　八藤遺跡６区・７区　遺物(10)　SK-705・SK-707・SK-711・SK-712

28　八藤遺跡６区・７区　遺物(11)　SK-716・SD-720・SK-612

29　八藤遺跡６区・７区　遺物(12)　石器等１

30　八藤遺跡６区・７区　遺物(13)　石器等２

31　八藤遺跡８区・９区　遺構(1)　SH-953・SH-971・SH-972・SH-969・SH-975

32　八藤遺跡８区・９区　遺構(2)　SH-976

33　八藤遺跡８区・９区　遺構(3)　掘立柱建物群・SB-990～SB-994

| | | | |
|---|---|---|---|
| 34 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(4) | SB-994～SB-999 |
| 35 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(5) | SK-801・SK-901・SK-912・SK-913・SK-915～SK-918 |
| 36 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(6) | SK-919～SK-921・SK-925・SK-927・SK-928・SK-932～SK-934 |
| 37 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(7) | SK-935～SK-938・SK-940～SK-945・SK-947 |
| 38 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(8) | SK-949・SK-951・SK-952・SK-954・SK-960・SK-961・SK-965・SK-966 |
| 39 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(9) | SK-967・SK-968・SK-977・SK-978・SK-981～SK-984 |
| 40 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(10) | SK-985・SK-986・SK-988・SK-989・SD-957 |
| 41 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺構(11) | SD-970・遺物包含層調査区 |
| 42 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(1) | SK-801・SD-903・SK-905・SK-906・SK-907 |
| 43 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(2) | SK-907・SD-909・SB-933・SK-912 |
| 44 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(3) | SK-907・SD-903・SK-914・SK-921・SK-922・SK-928・SK-930・SK-932・SK-933 |
| 45 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(4) | SK-934・SK-940 |
| 46 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(5) | SK-940・SD-970・SD-948 |
| 47 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(6) | SK-949・SK-951・SK-953 |
| 48 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(7) | SK-960・SK-964・SK-966 |
| 49 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(8) | SK-966・SK-968・SH-971・SH-975・SH-976 |
| 50 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(9) | SH-976・SK-981 |
| 51 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(10) | 石器１ |
| 52 | 八藤遺跡８区・９区 | 遺物(11) | 石器２ |
| 53 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(1) | SH-1120・SH-1121・SH-1136・SH-1137 |
| 54 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(2) | SB-1005・SB-1007・SB-1105 |
| 55 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(3) | SB-1135・SB-1140・SB-1142～SB-1145 |
| 56 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(4) | SB-1142～SB-1144 |
| 57 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(5) | SB-1150・SK-1010・SK-1011・SK-1013・SK-1014 |
| 58 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(6) | SK-1018・SK-1101・SK-1102・SK-1104・SK-1107～SK-1110 |
| 59 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(7) | SK-1111～SK-1113・SK-1115～SK-1117・SK-1124・SK-1127 |
| 60 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(8) | SK-1128～SK-1130・SK-1132～SK-1134・SK-1139 |
| 61 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(9) | SK-1141・SK-1145～SK-1149・SK-1151・SK-1152 |
| 62 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺構(10) | SK-1153・SK-1156・SK-1158～SK-1161 |
| | | 遺物(1) | SK-1001・SH-1120 |
| 63 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺物(2) | SH-1120・SK-1130・SK-1134・SH-1136 |
| 64 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺物(3) | SH-1136・SH-1137・SB-1143・SK-1145 |
| 65 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺物(4) | SK-1145 |
| 66 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺物(5) | SK-1145・SK-1149 |
| 67 | 八藤遺跡10区・11区 | 遺物(6) | SK-1152・SK-1155・石器 |

# Ⅰ．遺跡の位置と環境

## 1．遺跡の位置（Fig. 1）

八藤遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字八藤、迎原の洪積世段丘（標高20m～35m。「八藤丘陵」と呼称。）上に位置している。

遺跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡中原町・同郡北茂安町、南部は同郡三根町、西部は神埼郡東脊振村・同郡三田川町と境を接している。

鳥栖市から小城郡小城町に至る佐賀県東部には、北部の脊振山系、その南麓に発達する洪積世丘陵、さらに南部の有明海へと続く沖積平野と、変化に富んだ地形が展開している。なかでも山麓から沖積平野へと移行する部分に発達する洪積世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって開析され数多くの南北に延びる舌状を呈した段丘となっている。そしてこれらの丘陵上には各時代の遺跡が密集し、県内でも有数の遺跡の宝庫となっている。

三養基郡西端に位置する上峰町は、南北約12km、東西約３kmと南北に細長い町域をもち、北部から山麓部、丘陵部、沖積平野部へと続く、佐賀県東部の特徴的な地形を全て包含している。八藤遺跡が所在する町北部の大字堤地区には、中央を南流する切通川の本支流の開析作用で形成された谷底平野を境界として大小の南北に延びる舌状丘陵が発達している。八藤遺跡が立地する八藤丘陵もそのひとつで、堤地区北部の山麓から派生する洪積世低位丘陵であり、東方の船石丘陵、西方の二塚山丘陵とはそれぞれ切通川の支流である大谷川、切通川本流の開析谷によってそれぞれ分かたれている。

## 2．歴史的環境（Fig. 2）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のような洪積世段丘が古くから人々の生活の舞台となっており、各段丘上には遺跡の分布が知られ、県内でもとくに弥生時代遺跡を中心に遺跡の密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵のほとんどが、当時の集落あるいは墓域として占有され、縄文時代の遺跡と比較すると、量的にも質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]をはじめとする柚比丘陵遺跡群、約400基の甕棺墓が検出された中原町姫方遺跡[2]、12本の銅矛を埋納した北茂安町検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した東脊振村三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構・遺物が数多く検出され、国の史跡に指定された三田川・神埼・東脊振の２町１村にまたがる吉野ヶ里遺跡[5]など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ、弥生の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至っている。南北に細長い町域をもつ本町においても同様で、町の北部から中央部を占める洪積世段丘を中心に弥生時代の遺跡が分布している。

先土器時代の遺跡は、各段丘ごとに層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土にとどまっている。町内では、ここに報告する平成４年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃１点が発掘調査において検出されているのみで、周辺では三田川町との境界に位置する二塚山丘陵の三田川町側からナイフ形石器の採取が報告されている[6]。平成５年度の八藤遺跡下層における阿蘇４火砕流跡と埋没林に係る調査では、先土器時代の年代示標となっている姶良－Tn 火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査で遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最

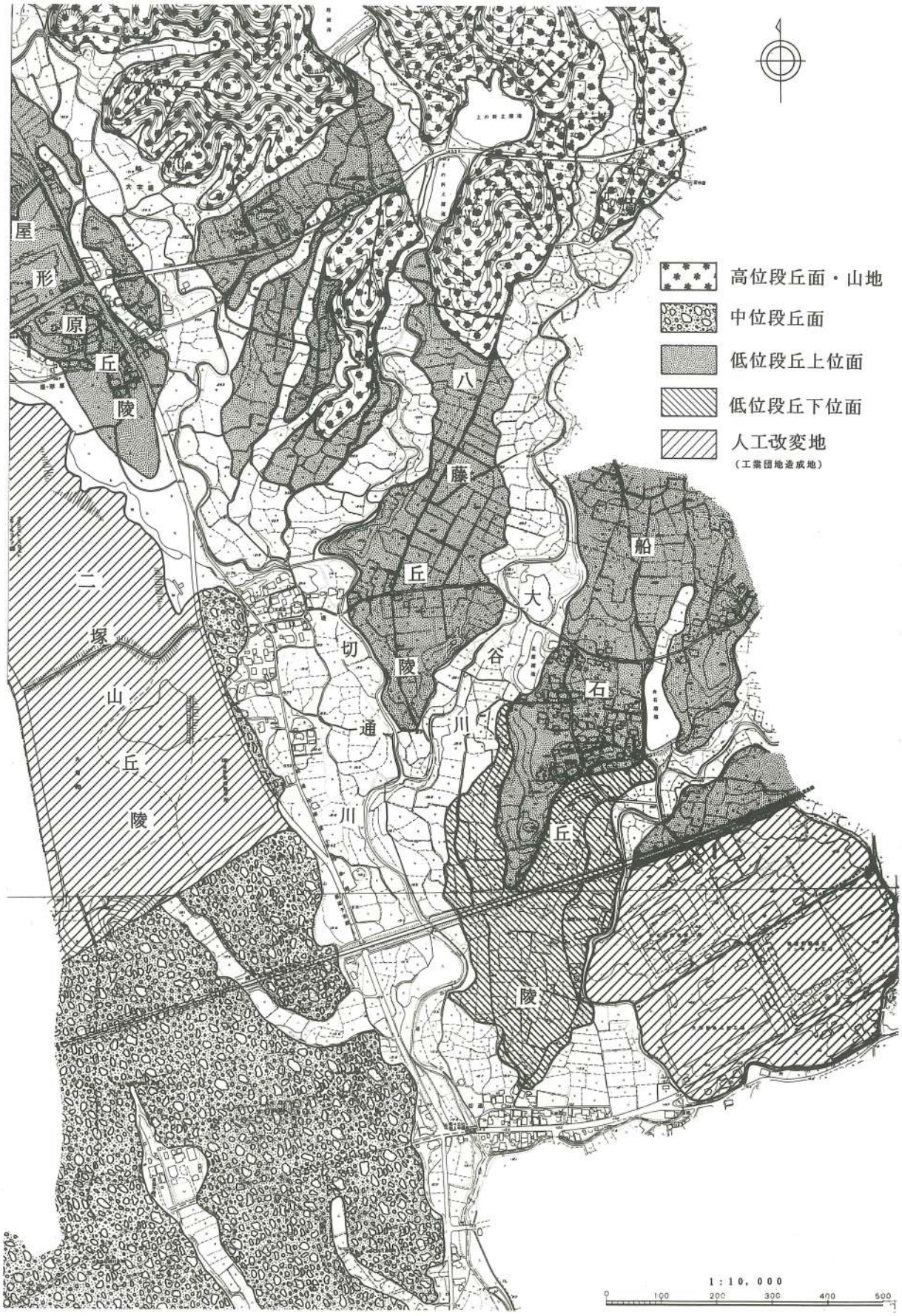



Fig. 1　上峰町北部地形概略図（1/10,000）

上部で検出されている[7]。

縄文時代になると中原町香田遺跡[8]や東脊振村戦場ケ谷遺跡[9]などが出現する。町内においても、これまでは町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者による遺跡の表面観察などで断片的に採取されていたが、今次の農業基盤整備事業に伴う調査の結果、今回の調査を含め、平成元年度の船石遺跡11区[10]、平成2年度の八藤遺跡4区・堤土塁跡2区[11]の調査で遺物・遺構がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。弥生時代になると、遺跡の数、規模、内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから魏志倭人伝の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし、町南地部の米多地区、坊所地区の丘陵部は、中近世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、その内容を詳細に把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の堤地区周辺は、近年の大型開発に伴い広範囲の遺跡が調査の対象となっており、当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的遺跡としては、甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡12)、神埼郡東脊振村・三田川町にまたがる佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土壙墓約300基が調査され舶載鏡、仿製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[13]・五本谷遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で5世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが知られている。またこの度の県営農業基盤整備事業に伴う調査においても船石南遺跡[17]・船石遺跡[18]八藤遺跡[19]から住居址や甕棺墓などが検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期には中原町姫方原遺跡[20]・五本谷遺跡などで方形周溝墓が営まれ、やがて中期にかけて鳥栖市から大和町にかけての山麓部や丘陵部に前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[21]、中原町姫方古墳[22]、上峰町から三田川町にまたがる目達原古墳群[23]、神埼町伊勢塚古墳[24]、佐賀市銚子塚古墳[25]、大和町船塚古墳など佐賀県東部の代表的古墳が築かれる。後期になると、現在長崎自動車道や、県道鳥栖－川久保線が通る山麓部から丘陵部にまたがる一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが古墳群を形成している。

後の『肥前風土記』に見える三根郡米多郷に属す当時の上峰町一帯は、『古事記』の記事によれば、応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南部の米多地区から三田川町の目達原一帯にあったと想定されている。町内の主要な古墳としては、都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（陵墓参考地「都紀女加王墓」宮内庁管轄）をはじめとする前方後円墳7基ほか円墳数基からなる目達原古墳群[26]、同じく5世紀代の古墳で蛇行状鉄剣、鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳[27]が知られている。

また、後期の群集墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部を中心に小円墳を主体とする古墳群が点在している。一方、この時期の集落は、三田川町下中杖遺跡[28]、東脊振村下石動遺跡[29]などが知られているが、弥生時代集落の調査例に比べると少なくいまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

上峰町
1 鎮西山南麓古墳群
2 屋形原古墳群
3 谷渡古墳群
4 堤土塁跡
5 **八藤遺跡**
6 五本谷遺跡
7 二塚山遺跡
8 船石遺跡
9 船石南遺跡
10 切通遺跡
11 一本谷遺跡
12 目達原古墳群
13 塔の塚廃寺跡
14 上米多貝塚
中原町
15 山田蔵骨器出土地
16 山田古墳群
17 大塚古墳
18 八幡社遺跡
19 蓑原遺跡
20 姫方遺跡
21 姫方前方後円墳
22 姫方原遺跡
23 上地遺跡
24 ドンドン落遺跡
25 町南遺跡
26 天神遺跡
27 西寒水遺跡
北茂安町
28 宝満谷遺跡
29 宝満宮前方後円墳
30 大塚古墳
31 東尾銅剣出土遺跡
三根町
32 本分貝塚
三田川町
33 吉野ヶ里丘陵遺跡
34 二本黒木遺跡
35 下中杖遺跡
36 下藤貝塚
神埼町
37 志波屋六本松遺跡
38 伊勢塚前方後円墳
39 志波屋開拓団地古墳群
40 馬郡遺跡
東脊振村
41 山田谷古墳
42 西石動古墳群
43 西石動銅戈鎔笵出土地
44 戦場ケ谷遺跡
45 三津永田遺跡
46 下三津前方後円墳
47 夕ケ里遺跡
48 西一本杉遺跡
49 西石動遺跡
50 下石動遺跡
51 松原遺跡
52 辛上廃寺跡
53 大塚遺跡
54 横田遺跡

Fig. 2　八藤遺跡の位置および周辺遺跡（1/50,000）

奈良・平安時代遺跡としては、三田川町下中杖遺跡、東脊振村辛上廃寺跡[30]、霊仙寺跡[31]などが著名であるが、まとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また、大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[32]や塔の塚廃寺跡[33]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、潅漑用水確保のための堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成２年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する側溝状の遺構が検出され[34]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代中期の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や町内の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡[35]の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世になると、北部の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現する。町内の中世城館址としては、北部の鎮西山山城、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一の橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[36]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状が失われてしまった。そのようななかで、町の公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また、坊所城跡では16世紀後半代の青花がそれぞれ出土している[37]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

**註**


1）藤瀬禎博・石橋新次 『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書』 鳥栖市文化財調査報告書第30集 鳥栖市教育委員会 1980
2）木下巧・天本洋一 『姫方遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974
3）七田忠昭 『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第２集 北茂安町教育委員会 1986
4）金関丈夫・坪井清足・金関恕 「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961
5）七田忠昭他 『吉野ヶ里』佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992
6）七田忠志 「原始」『上峰村史』 上峰村 1979
7）下山正一・西田民雄 「Ⅱ．佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇４火砕流と埋没林』上 峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994
8）高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋 「香田遺跡」『香田遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981
9）七田忠志 「佐賀県戦場ケ谷遺跡」『史前学雑誌』 ６－２・４ 1934
10）原田大介 『船石遺跡Ⅴ』 上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995
11）原田大介 『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』 上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
12）金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961
13）高島忠平・七田忠昭他 「二塚山遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
14）木下 巧・七田忠昭 「五本谷遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979
15）七田忠昭 『一本谷遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983

16) 七田忠昭 『船石遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983
17) 昭和60、62年度、上峰村教育委員会調査、整理中
18) 鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ図録編』 上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ本文編』 上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
19) 原田大介 『八藤遺跡Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997
20) 木下巧他 『姫方原遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976
21) 石橋新次 『剣塚前方後円墳墳』 鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984
22) 前出（2）
23) 松尾禎作 『目達原古墳群調査報告佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第9輯 佐賀県教育委員会 1950
24) 木下之治 「古代国家の形成」『佐賀県史』 佐賀県 1968
25) 木下之治編 『銚子塚』 佐賀市教育委員会 1976
26) 前出（23）
27) 前出（16）
28) 七田忠昭・高山久美子・西田和己 『下中杖遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980
29) 高瀬哲郎他 「下石動遺跡」『下石動遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987
30) 松尾禎作 「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第5輯 佐賀県 1936
31) 田平徳栄他 『霊仙寺跡』東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980
32) 高島忠平・杠一義 『堤土塁跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978
33) 松尾禎作 「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第7輯 佐賀県 1940
34) 前出(11)
35) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中
36) 米倉二郎 「中世」『上峰村史』 上峰村 1979
37) 原田大介 『坊所城跡』 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

# II．調査に至る経緯

上峰町は、昭和30年代までは純農村として、近世以来の水田耕作を主とした農業経営が連綿として行われてきた。しかし、戦後の激変する社会・産業の構造は、労働力の都市部への流出などを招き、旧来の農業経営による農家経済を圧迫する事態となった。この農家経済の行き詰まりを打開するためには、近代的な大型圃場と農地の集団化を併せ行い、高度の農業生産技術と大型機械の一貫作業体系の導入により、労働生産性の向上と農業経営の合理化による農家所得の増大を図る必要があった。

佐賀県では、昭和38年度より県営農業基盤整備事業の計画が策定され、昭和41年度より事業が開始された。上峰町においても、昭和42年度にモデル事業として町南部の碇地区を対象に事業が実施され、昭和46年度以降、町の中央部を東西に横断する国道34号線以南の沖積平野に広がる町南部の圃場を対象に昭和58年度まで事業が実施された。

一方、国道34号線以北の大字堤地区の耕地は、洪積世丘陵と切通川本支流の開析谷底平野からなっており、地区の１戸当たりの平均耕地面積は約0.6haと県平均を下回り、用水源には河川、溜池があてられていたが、いずれも用水確保が不十分であり、慢性的な用水不足を来していた。また、圃場は不整形で散在し、道路は狭く未整備で機械導入も困難で圃場条件は極めて悪かった。このため、昭和58年度より、堤地区を対象とした上峰北部土農業基盤整備事業の実施に向けた調査計画が開始され、昭和60年度より事業が実施されるに至った。

しかし、地形的制約の上に成り立ってきた従来の耕地の集団化、道路・用排水路の整備を目的とした農業基盤整備事業の実施は、一方では土地の大規模な改変を必要とし、ひいては地下の埋蔵文化財に工事の影響を及ぼすことが予想され、今日的要求と埋蔵文化財の保護との調整という問題が文化財保護行政の大きな課題となった。この課題の解決策として、佐賀県においては、農業基盤整備事業とこれに伴う埋蔵文化財の保護との調整について、県農林部と県教育委員会との間で「農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する確認事項」（昭和53年４月締結、昭和59年４月一部改正。）という覚書を交わし、現在この確認事項に基づき、県農林部、県教育委員会、市町村土地改良担当課、市町村教育委員会の関係機関四者による協議が行われ、事業の実施面積の調整、工事の設計変更などによる埋蔵文化財発掘調査面積の縮小など、文化財の保護に関する調整が行われている。

この調整は、「農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する協議会」にて実施されており、具体的には、以下の手続きを踏んでいる。

(1) 「第１回協議会」（毎年10月中旬）

次年度の農業基盤整備事業実施計画地区が提示され、当該区域内の埋蔵文化財の取扱いについて協議を行い、埋蔵文化財確認調査の要不要を確認する。

(2) 確認調査（10月中旬～12月上旬）

次年度の農業基盤整備事業実施計画地区内について遺構の有無・密度・内容、遺構面までの深度等を把握する。

(3) 「第２回協議会」（毎年12月中旬）

確認調査の結果を基に、事業計画の設計変更など本調査面積の縮小につとめ、必要最小限の部分を次年度埋蔵文化財本調査区域とする。

上峰町における上峰北部農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財の保護に関する協議調整は、昭和59年９月に、県農業基盤整備事業担当部局から県教育委員会に昭和60年度農業基盤整備事業施工計画が提出され、国道34号線以北ＪＲ長崎本線以南の耕地について農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱について協議されたたことに始まる。以後毎年この協議を経て農業基盤整備事業と埋蔵文化財の保護との調整を行っている。

今回報告する八藤遺跡６区から11区を含む地域について最初の協議がもたれたのは平成元年度のことであった。

平成元年10月17日、「平成２年農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が開催された。その席上、平成２年度農業基盤整備事業として、堤地区北部一帯の事業計画が提示された。事業計画区域は、西は県道富士・中原停車場線以東の堤集落北部一帯から、東は中原町との境界までの広大な区域にわたり、当時周知の埋蔵文化財包蔵地外であった字迎原地区の八藤丘陵も含まれていた。協議の結果、堤地区一帯におよぶ事業計画区域内について埋蔵文化財の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、農業基盤整備事業施工予定地内の町道堤・船石線の北部一帯の田面、耕地を対象に、稲刈り終了をまって実施した。調査は、２ｍ×２ｍの試掘溝を約20m間隔で設定し、実施した。その結果、試掘溝136カ所による調査で約40,000㎡におよぶ遺跡の広がりを確認した。それまでは、字八藤地区に位置する八藤丘陵の先端部のみが八藤遺跡として県遺跡地図に登録されていたが、周知の埋蔵文化財包蔵地外であった字迎原地区の八藤丘陵上でも遺構が検出され、丘陵全体が八藤遺跡として登録されることとなった。

平成元年12月26日、確認調査の結果に基づいて「第２回協議会」が開催された。本席上では、約40,000㎡に及ぶ遺跡の取扱について協議が行われ、事業の設計変更による調査面積の縮小など文化財の保護に関する調整を進めていった。その後個別協議を繰り返し、最終的に、堤集落北方に位置し堤土塁跡の後背地にあたる堤六本谷遺跡8,000㎡、字迎原所在の八藤遺跡、堤土塁跡14,000㎡、合計３遺跡、22,000㎡について平成２年度事業として水田基盤造成工事、水路掘削工事などで地下の埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を事前の記録保存を目的とした埋蔵文化財発掘調査を実施することになり、今回報告する八藤遺跡６区～11区部分については平成３年度以降に本調査を実施することとなった。

「平成３年度農業基盤整備事業に係る文化財の保護に関する第１回協議会」が開催されたのは、平成２年10月26日であった。以下、八藤遺跡６区から11区の発掘調査に係る各年度ごとの協議日程等を記し、調査に至る経緯としたい。

平成３年度調査　第１回協議会 平成２年10月26日 → 第２回協議会　平成２年12月19日
農業基盤整備事業施工面積　7.6ha
調査区及び調査面積　６区　11,250㎡
　　７区　3,750㎡

平成４年度調査　第１回協議会　平成３年10月17日 → 第２回協議会　平成３年12月20日
農業基盤整備事業施工面積　7.9ha
調査区及び調査面積　８区　4,250㎡
　　９区　12,750㎡

平成５年度調査　第１回協議会　平成４年10月14日 → 第２回協議会　平成４年12月18日
農業基盤整備事業施工面積　5.3ha
調査区及び調査面積　10区　1,250㎡
　　11区　3,750㎡

# Ⅲ．遺跡の概要

八藤遺跡は、佐賀県三養基郡上峰町大字堤字八藤、迎原の標高20m～35mの洪積世段丘（「八藤丘陵」と呼称する。）上に位置している。遺跡が立地する八藤丘陵は、東を切通川の支流である大谷川に、西を切通川本流および支流の大鳥居川にそれぞれ開析され、南北に延びる舌状の丘陵となっている。（Fig. 3）

遺跡は、これまでは、『上峰村史』[1]の縄文時代の項に、「堤東遺跡」、「堤東丘陵」出土遺物として、曽畑式土器、阿高式土器、石斧や石匙の採取が紹介されている程度で学術的調査の前例がなく、大字堤字八藤地区に位置する丘陵先端部のみが「八藤遺跡・縄文時代・散布地」として『佐賀県遺跡地図』[2]に周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていた。

しかし、昭和63年度以降に実施した、農業基盤整備事業施工予定地区内を対象とした文化財確認調査によって、縄文時代から奈良・平安期までの遺構・遺物が検出され、北方の新立古墳群が立地する高位段丘面までの字迎原地区の低位丘陵面全域に遺跡の広がりが確認され、これまで農業基盤整備事業に伴い調査を実施してきた船石遺跡と同様、大規模な複合遺跡であることが判明した。[3]

八藤遺跡は、今回の農業基盤整備事業に伴って、これまでに２年次にわたり５地区の調査が実施されている。以下、調査年度ごとにその概要を記す。

**(1)　平成元年度　佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査[4]**

調査地区・調査面積・調査区名：大字堤字八藤の低位段丘面（標高20m～24m）の畑地の調査、3,800m²、１区～３区

遺構：弥生時代中期、古墳時代後期の竪穴式住居址各１軒、奈良時代以降の掘立柱建物址１棟、弥生中期の甕棺墓28基、各時代の土壙など49基、溝跡２条が検出された。

遺物：縄文式土器片（晩期）・石匙、石鏃、甕棺墓として使用された弥生式土器、古墳時代後期の土師器坏、須恵器坏など。

**(2)　平成２年度　佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う調査[5]**

調査地区・調査面積・調査区名：大字堤字迎原の低位段丘面（４区；標高27m～30m・５区；標高30m～35m）の畑地の調査、10,650m²、４区・５区

遺構：縄文時代後期の土壙、遺物包含層、弥生時代中期後半から後期初頭の竪穴式住居址３軒、円形土壙など、奈良時代後期の掘立柱建物址４棟、道路側溝状の溝跡２条、土壙などが検出された。

遺物：縄文式土器片・石匙、石鏃、石剣、石斧、叩き石、包含層出土チップ類、弥生式土器、奈良時代後期の土師器、須恵器、ふいご羽口、鉄滓など。

次に本遺跡周辺の遺跡を概観すると、大字堤地区一帯には、各段丘上に著名な遺跡が分布している。西方の二塚山丘陵との谷部には八藤丘陵から西に派生する支丘が成形利用された版築土塁が、谷を遮断する形で築かれており、「小水城」堤土塁跡[6]として古くから研究者の注目を集めていた。

八藤丘陵の南東には、前述のように大谷川の谷水田を挟んだ船石丘陵上に、昭和60年度から農業基盤整備事業に伴い調査が実施された船石遺跡[7]・船石南遺跡[8]が広がり、弥生時代の一大集落・墓域を形成している。また、

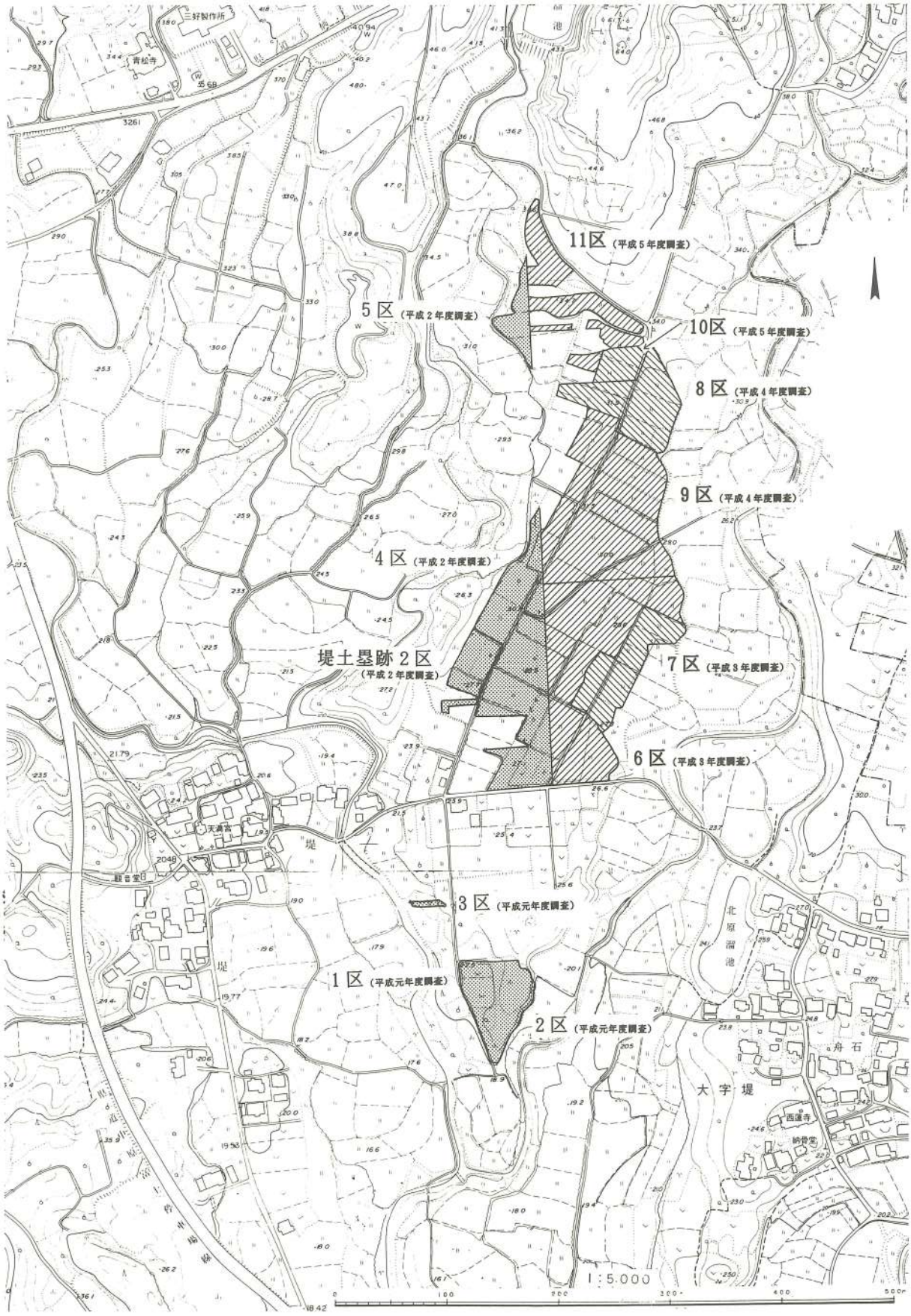



Fig. 3　八藤遺跡周辺地形図および調査区位置図（1/5,000）

切通川の西方には屋形原遺跡[9]、さらに西方の二塚山丘陵上には佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い調査が行われた二塚山、五本谷などの二塚山遺跡群[10]の墓域が展開しており、これらの墳墓からは副葬品として漢式鏡・小形仿製鏡・鉄剣・鉄刀・璧類が多数出土している。二塚山丘陵の南部には甕棺墓から鉄剣を出土した切通遺跡[11]、住宅供給公社による大規模な宅地造成に伴い調査が実施された一本谷遺跡[12]など弥生時代遺跡を中心に縄文時代から奈良・平安期の遺跡群が展開している。

**註**

1）七田忠志 「二　原始社会の発展（縄文時代）」 『上峰村史』　上峰村　1979
2）『佐賀県遺跡地図』 佐賀県教育委員会　1986
3）樋口秀信・徳永貞紹 「昭和63年度文化財確認調査の内容」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書８』 佐賀県文化財調査報告書第98集　佐賀県教育委員会　1990ほか
4）原田大介 『八藤遺跡Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第13集　上峰町教育委員会　1997
5）原田大介 『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』 上峰町文化財調査報告書第14集　上峰町教育委員会　1998
6）高島忠平・杠一義 『堤土塁跡』 上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1978
原田大介 『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』 上峰町文化財調査報告書第14集　上峰町教育委員会　1998
7）七田忠昭 『船石遺跡』 上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983
鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ　図録編』 上峰村文化財調査報告書第６集　上峰村教育委員会　1988
鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ　本文編』 上峰村文化財調査報告書第７集　上峰村教育委員会　1989
原田大介 「２．船石遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７」　佐賀県文化財調査報告書第94集　佐賀県教育委員会　1989
原田大介 「６．船石遺跡８・９・10区」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書８」　佐賀県文化財調査報告書第98集　佐賀県教育委員会　1990
原田大介 『船石遺跡Ⅴ』 上峰町文化財調査報告書第12集　上峰町教育委員会　1995
8）鶴田浩二 「１．船石南遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書５」　佐賀県文化財調査報告書第85集　佐賀県教育委員会　1987
原田大介 「２．船石南遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書７」　佐賀県文化財調査報告書第94集　佐賀県教育委員会　1989
9）杠一義 『屋形原遺跡』 上峰村文化財調査報告書第二集　上峰村教育委員会　1979
樋口秀信・徳永貞紹 「昭和63年度文化財確認調査の内容」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書８』 佐賀県文化財調査報告書第98集　佐賀県教育委員会　1990
10）高島忠平・七田忠昭他 『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集　佐賀県教育委員会
11）金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」 『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会　1961
12）七田忠昭 『一本谷遺跡』 上峰村文化財調査報告書　上峰村教育委員会　1983

# Ⅳ．平成３年度６・７区の調査

## １．調査の経過

平成３年度の佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、水田基盤造成工事により面的に削平が予定される部分15,000㎡を便宜的に６区・７区の２区に分割し、実施した。調査は、平成３年７月26日に着手し、翌平成４年３月４日まで現地での作業を行った。以下、簡略に調査経過を記す。

７月26日、梅雨明けを待って調査対象地区の６区北西部分より、重機による表土剝ぎを開始、平成３年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査に着手した。

８月６日、現場において簡単な調査の安全祈願を行い、引き続き表土剝ぎ作業の進捗に伴い作業スペースが確保できた部分から作業員による遺構検出作業を開始した。

以後、表土剝ぎが終了した部分より、逐次作業員による遺構検出作業を行い、検出された遺構についても順次掘り下げ作業を進めていった。重機による表土剝ぎ作業は９月19日まで行った。

８月14日より18日まで、お盆のため作業休み。

お盆明けも、引き続き遺構の検出作業、掘り下げ作業を進める一方で、全体図など記録作成のために、磁北を基準としたグリッドを設定し、測量杭打ち作業を始めた。

９月14日、27日、台風17号、19号が相次ぎ佐賀県内を直撃。17号により、船石文化財整理事務所のプレハブが傾き事務所内での整理作業が不可能となった。そのために旧村時代の庁舎跡に緊急避難作業のため18日午前中まで現場での作業を中止した。その後27日夜から28日未明に再び19号直撃を受け事務所は全壊してしまった。

台風禍がおさまった10月７日より、全体の遺構配置図の作成に着手した。10月以後は天候にも恵まれ、調査区南部へ順調に作業の範囲を広げていった。この遺構検出作業は平成４年２月７日まで、掘り下げ作業は２月21日までを要している。

平成３年12月27日より平成４年１月５日まで年末年始のため作業休み。

年が改まり、引き続き調査を進めていたが、遺構の詳細実測作業が期間的に難しい状況となったため、初めての試みとして航空写真撮影による測量を委託することとした。

２月に入り、まだグリッド杭が未設定部分の杭打ち作業を行い。全体図の作成に併せて出土遺物の取り上げ作業を開始した。

全ての遺構の掘り下げが終了した２月22日、写真測量のための航空写真撮影。

２月24日より、気球による全体写真撮影のための清掃作業を開始。個別の遺構写真撮影も行った。

２月28日、気球による全体写真撮影。

３月２日、発掘機材、テント等の撤収。４日、残っていた遺物を取り上げ、現場での作業を全て終了した。

## ２．調査区の概要（Fig.３、４）

大字堤字迎原地区から八藤地区へ延びる八藤丘陵は、東西両側をそれぞれ切通川の支流である大谷川、大鳥居川に開析された馬の背状の舌状丘陵で、北方の新立古墳群が位置する高位段丘面から南南西へ向かって延びている。先端の八藤地区で標高約20m、基部で約35mを測る。丘陵の尾根上には、堤集落から北の塚原集落方面へ農道が縦断しており、『佐賀県遺跡地図』ではこの農道の一部が西の堤土塁跡と八藤遺跡の境界となっている。

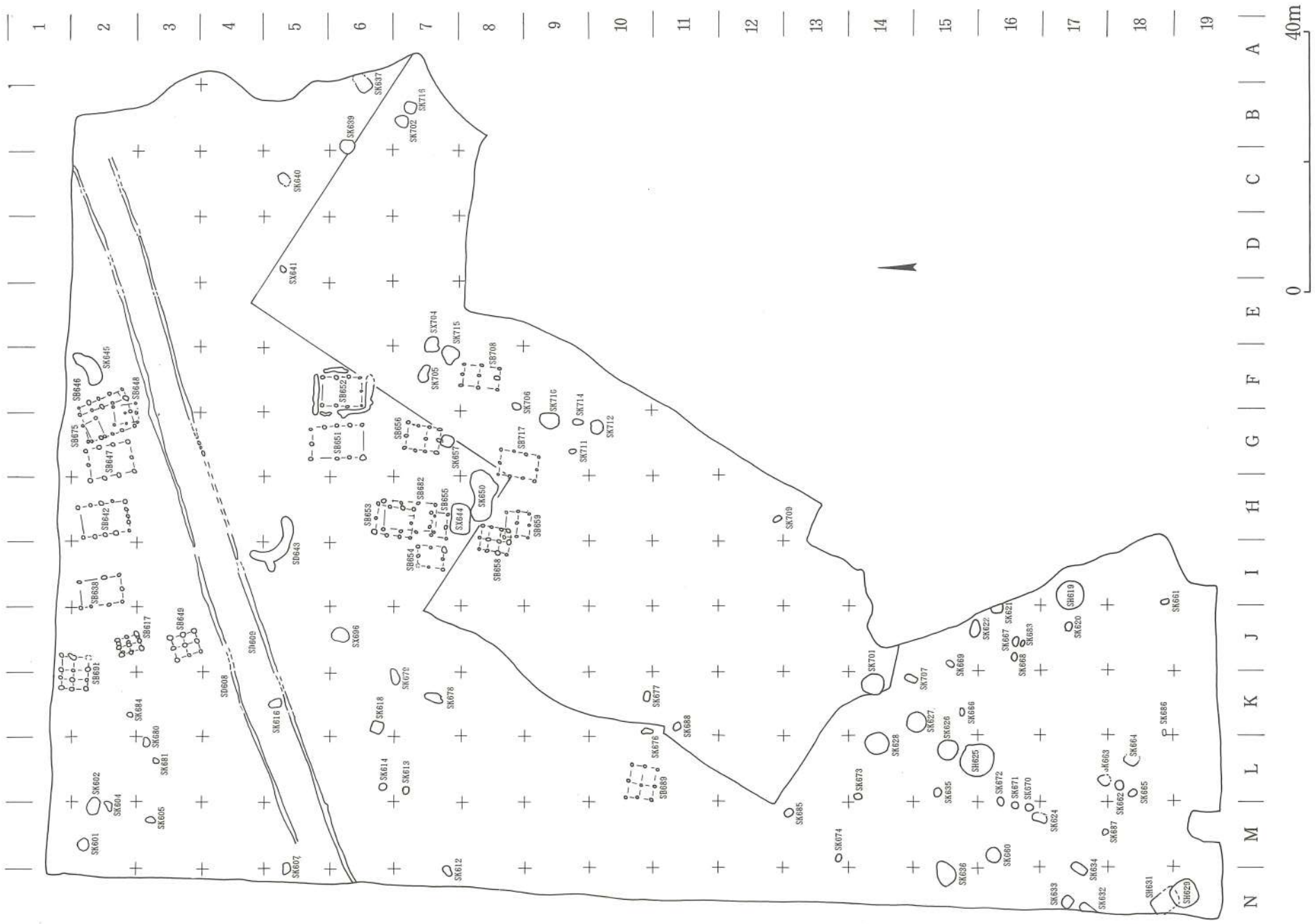



Fig. 4　6 区・7 区遺構配置図（1/800）

八藤丘陵上の耕地は、大正年間に当時としては大規模な人力による耕地整理事業が行われており、地元では一帯を「耕地整理」と呼称している。地目は田であるが、水掛かりが悪く、現在は主に畑地として利用されている。

平成３年度県営農業基盤整備事業施工区域のうち、今年度の埋蔵文化財発掘調査の対象となった地区は、平成２年度調査区域の東側に隣接する15,000㎡に及ぶ区域で、上峰町大字堤字迎原の標高27m～30m付近の低位段丘の中央尾根部分から東斜面部分を占めている。

今回の調査は、この15,000㎡を便宜的に６区11,250㎡と７区　3,750㎡に分けて実施した。調査対象区域全域に磁北を基準とする10m×10mグリッドを設定した（このグリッドは平成２年度調査で設定した八藤遺跡４区のグリッドと連続しており、今回の調査グリッドのN－１Gr.・N－19Gr.がそれぞれ平成２年度調査グリッドのA－７Gr.・A－25Gr.に相当する）。グリッドは、南北列北から１～19の19列、東西列東からA～Nの14列を設定し、調査を実施した。

調査区域の土層は、後世の耕作、耕地整理事業などによって各時代の遺物包含層はほとんど失われ、耕作土あるいは表土直下が洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

この八藤遺跡６区・７区調査では、弥生時代中期前半の竪穴式住居址４軒、円形大型土壙４基、奈良時代の掘建柱建物址20棟、道路側溝状の溝跡、火葬墓、そのほか、各時代の所産と考えられる土壙、ピットなどが検出された。さらに調査区西部のJ～N列の８～10Gr.付近では多数のピットが検出されている。このピット群の中には、建物址、柵列などの存在の可能性が高いが、特定できなかった。

遺物は、各遺構から縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、中世土器が出土しているが、量的にはあまり多くない。これら土器類とともに、石槍、石匙、石斧、紡錘車、砥石、鉄斧などの石器・鉄器類が出土している。

今回の調査では、平成２年度の調査で検出された堤土塁跡東側土塁東部に端を発し、幅約６mの間隔で並行して延びる２条の溝跡からなる道路側溝状遺構が断続的に丘陵を横断していることが確認された。この遺構の東方延長線上にあたる、中原町高柳地区には古い切り通しが存在し、近傍の発掘調査では、八藤丘陵で検出された溝跡と酷似した遺構も検出されるなど[1]、古代道の存在が確実視されるに至っている。

またこの道路状遺構の南北には、それぞれ12棟、９棟からなる建物群が検出されたが、道路と切り合った建物址が皆無であることから、道路と併存した施設である可能性が高く、「駅」的な機能をもった施設であったと推測される。

**註**

1）中原町教育委員会、太田　睦氏のご教示による。

## ３．遺　　構

今回の八藤遺跡６区・７区の調査において、遺構番号を付して調査を行った遺構は、６区95遺構、７区21遺構、合計116遺構に及んだ。これらのなかで調査を進めるに従い、近世以降の耕作に伴う用排水路跡、掘り込みなど明らかに比較的新しい時期の所産になるものと判明した遺構については、欠番として処理した。

その結果、遺構として取り扱ったものは、竪穴式住居址４、掘立柱建物址21棟、火葬墓１基、貯蔵穴などの土壙70基、溝跡３条などの98遺構とピットである。

時期的に見ると、前述のように、縄文時代から中世におよぶ遺構が検出されているが、ここでは上記98遺構について報告したい。

(1) **竪穴式住居址** (Fig. 5 ・PL. 6 ・Tab. 1)

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、調査区の南部に集中している。Ⅰ－17Gr.のSH-619、L－15・16Gr.のSH-625、N－19Gr.のSH-629、N－18Gr.のSH-631の4軒である。いずれも弥生時代中期前半までに営まれたものである。出土遺物は、SH-625、SH-631より弥生前期末から中期前半の甕などが出土しているほかは、ほとんど無い。

**SH-619** (Fig. 5 ・PL. 6)

SH-619は、6区Ⅰ－17Gr.で検出された直径約4.4mの円形プランの竪穴式住居址、床面までの深さは30cm弱を測る。主柱穴は、4本。主柱穴の間に炉跡と考えられる掘り込みをもつ。

**SH-625** (Fig. 5 ・PL. 6)

SH-625は、6区L－15・16Gr.で検出された直径約5.3mの円形プランの竪穴式住居址、床面までの深さは20cm弱を測る。主柱穴は、4本でそれぞれに支柱を配したと思われる浅いピットが付随している。主柱穴の間には炉跡と考えられる掘り込みをもつ。また、壁の一部に入口的な施設とも思われる幅約1mの突出した部分が認められる。

**SH-629** (Fig. 5 ・PL. 6)

SH-629は、6区N－19Gr.で検出された竪穴式住居址で、プランは長辺約4.1m、短辺約4.0mの円形に近い胴部が大きく張る隅丸方形を呈す。床面までの深さは、約20cmを測る。主柱穴はじめ、炉跡、周溝などは検出されなかった。主軸は、N－31°－Wである。

**SH-631** (Fig. 5)

SH-631は、6区N－18Gr.で検出された竪穴式住居址で、南半部を後世の削平及びSH-629により失っている。本住居址は、平成2年度に実施した八藤遺跡4区の調査においてA－24Gr.でコーナー部分が一部検出されたSH-559に続くものである。プランは長辺約3.6m以上、短辺約3.0mの方形を呈す。床面までの深さは、10cm強を測る。主柱穴はじめ、炉跡、周溝などは検出されなかった。主軸は、N－34°－Wである。

Tab. 1　6区・7区出土住居址一覧表

| 住居址番号 | 平面形態 | 規模 (m・m²) 長さ | 幅 | 深さ | 床面積 | 棟方向 | 屋内施設 主柱穴 | 溝 | 炉・焼土など | その他 | 出土遺物 上) 土器・土製品 下) 石製品・その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SH-619 | 円形 | 4.24 | 4.24 | 0.28 | 12.0 | — | 4本 | | 炉状土壙 | | 石鋲 | |
| SH-625 | 円形 | 5.32 | 4.79 | 0.19 | 18.2 | — | 4本 | | 炉状土壙 | 入り口? | 甕・蓋 | |
| SH-629 | 胴張隅丸方形 | 4.13 | 4.04 | 0.20 | 13.1 | N－31°－W | | | | | | SH-631を切る |

Tab. 1　6区・7区出土住居址一覧表（続き）

| 住居址番号 | 平面形態 | 規模（m・m²） | | | | 棟方向 | 屋内施設 | | | | 出土遺物<br>上）土器・土製品<br>下）石製品・その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 深さ | 床面積 | | 主柱穴 | 溝 | 炉・焼土など | その他 | | |
| SH-631 | 方形 | ※3.6 | 3.00 | 0.12 | ※9.2 | N−34°−W | | | | | 甕 | SH-629に切られる |

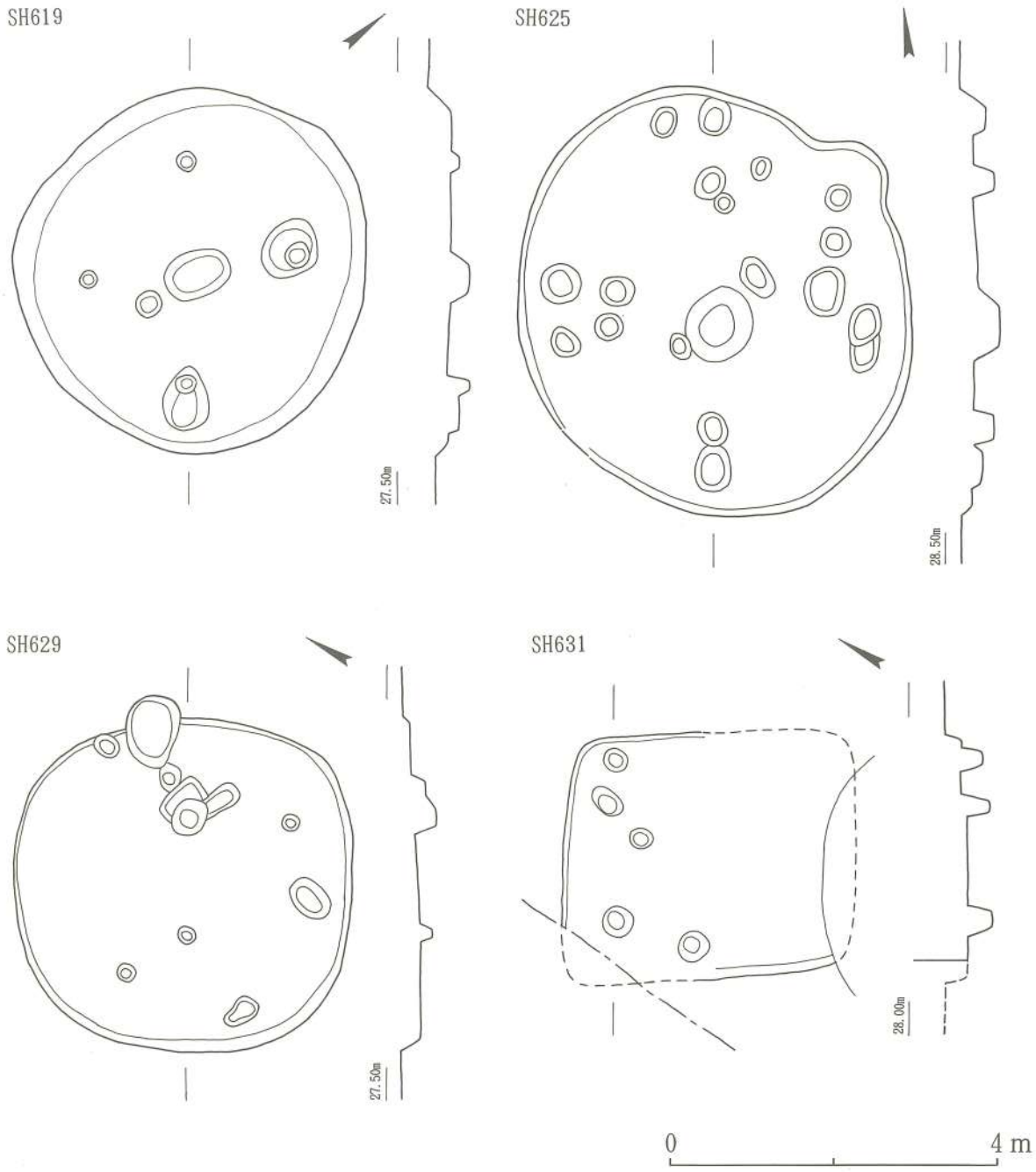



Fig. 5　6区・7区出土竪穴式住居址実測図　SH-619・SH-625・SH-629・SH-631（1/80）

(2) **掘立柱建物址**（Fig. 6～18・PL. 1、7～10・Tab. 2）

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、竪穴式住居址の分布とは対照的に、調査区の北半部分に集中して分布している。この区域には後述の道路側溝様の溝跡2条が幅約6mの間隔で並行に走っているが、建物址は、この道路状遺構の南北にそれぞれ12棟と9棟、合計21棟が検出されている（Fig. 4参照）。さらに、この道路状遺構と切り合った建物址が皆無であることから、これらの建物群は道路と併存した「駅」的施設である可能性が高い。

また、調査区西部のJ～N列の8～10Gr.付近では夥しい数のピットが検出されており（PL. 1、10－2参照）、これらのピット全てが、個々に掘られた単独のピットとは考えがたい。むしろ、このピット群の中にも、単独のピットに混じり建物址や柵列に伴う柱穴が存在している可能性が高いが、特定できなかったことを付記しておく。

以下、個々の建物址について簡単に報告する。

**SB-617**（Fig. 6・PL. 8）

SB-617は、6区J－2 Gr.で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、後に梁行に中間の柱穴が追加されている。柱穴は直径60cm～80cm、深さ30cm～40cm程度の円形あるいは隅丸方形の掘り込み。桁行の柱間は1.3m、梁行の柱間は1.2m。規模は、桁行2.6m、梁行2.4m、床面積6.2m²を測る。主軸はN－17°Wである。

**SB-638**（Fig. 6・PL. 8）

SB-638は、6区I－2 Gr.で検出された3間×2間の掘立柱建物址で、柱穴は直径30cm～60cm、深さ30cm程度の円形の掘り込み。東辺の柱穴のうち北から2本目の柱穴が失われている。柱間は、桁行、梁行ともに2.1m。規模は、桁行6.3m、梁行4.2m、床面積26.5m²を測る。主軸はN－7°－Wである。柱穴より土師器の甕、須恵器坏が出土している。

**SB-642**（Fig. 7・PL. 8）

SB-642は、6区H－2 Gr.で検出され4間×4間の掘立柱建物址で、梁行南辺は5本の柱穴がみられるが、北辺には中間の柱穴は設けられていない。柱穴は直径40cm～70cm、深さ20cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は1.2m。規模は、桁行7.4m、梁行4.8m、床面積35.5m²を測る。主軸はN－14°－Wである。

**SB-646**（Fig. 8・PL. 8）

SB-646は、6区G－2 Gr.で検出された4間×2間の掘立柱建物址で、SB-648、SB-675と重複している。梁行北辺の中間の柱穴は検出されなかった。建物東に1間、幅約1.3mの庇をもつ。柱穴は、直径40cm～60cm、深さ10cm～40cm程度の円形の掘り込みで、一部の柱穴には根固め石と思われる自然石が見える。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は2.3m。規模は、桁行7.6m、梁行4.6m、床面積35.0m²、庇部分を含めると7.6m×5.9mで全体面積は44.8m²を測る。主軸はN－22°－Wである。

**SB-647**（Fig. 9・PL. 8）

SB-647は、6区G－2 Gr.で検出された3間×2間の掘立柱建物址で、柱穴は直径60cm～70cm、深さ20cm～30

cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は2.3m、梁行の柱間は2.4m。規模は、桁行6.8m、梁行4.8m、床面積32.6㎡を測る。主軸はN—12°—Wである。

**SB-648** (Fig.10・PL.8)

SB-648は、6区G—2 Gr.で検出された2間×2間の掘立柱建物址で、SB-646と重複している。道路側溝状遺構の北に位置する建物のなかでは規模も特異で、直接柱穴が切り合っていないため前後関係は不明であるが、他の建物とは時期を異にするものと推測される。北の梁行には中間の柱穴は見えない。柱穴は直径30cm～50cm、深さ10cm～20cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は1.5m。規模は、桁行3.7m、梁行3.0m、床面積11.1㎡を測る。主軸はN—8°—Wである。

**SB-649** (Fig.10・PL.8)

SB-649は、6区J—3 Gr.で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、柱穴は直径50cm～90cm、深さ30cm～40cm程度の円形あるいは隅丸方形の掘り込み。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は1.5m。規模は、桁行3.8m、梁行3.1m、床面積11.8㎡を測る。主軸はN—20°—Wである。

**SB-651** (Fig.11・PL.9)

SB-651は、6区G—6 Gr.で検出された4間×2間の掘立柱建物址で、梁行北辺中央には柱穴がみられるが、南辺には中間の柱穴はない。また桁行西辺の北から3本目の柱穴もみえない。柱穴は直径40cm～60cm、深さ30cm～50cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は2.0m、梁行の柱間は2.4m。規模は、桁行8.0m、梁行4.8m、床面積38.4㎡を測る。主軸はN—3°—Wである。

**SB-652** (Fig.12・PL.9)

SB-652は、6区G—6 Gr.で検出された4間×2間の掘立柱建物址で、建物の周囲には雨落ち溝と考えられる幅30cm～120cm、深さ10cm～20cmの溝が、外壁の柱から約1mの間隔をもって断続的にめぐっている。柱穴は直径30cm～60cm、深さ30cm～70cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は2.0m、梁行の柱間は2.2m。規模は、桁行6.0m、梁行4.4m、床面積26.4㎡を測る。主軸はN—2°—Wである。建物周囲の溝から、土師器の坏、皿、甕などが出土している。

**SB-653** (Fig.13・PL.9)

SB-653は、6区H—6 Gr.で検出された3間×2間の掘立柱建物址で、SB-682と重複している。柱穴は直径30cm～100cm、深さ10cm～50cm程度の不整な円形の掘り込み。桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は2.2m。規模は、桁行5.4m、梁行4.4m、床面積23.8㎡を測る。主軸はN—8°—Eである。

**SB-654** (Fig.13・PL.9)

SB-654は、6区I—7 Gr.で検出された2間×2間の掘立柱建物址で、北西隅の柱穴を欠く。柱穴は直径30cm～50cm、深さ10cm～30cm程度の不整な円形の掘り込み。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は1.6m。規模は、桁行3.8m、梁行3.2m、床面積12.2㎡を測る。主軸はN—4°—Eである。

**SB-655** (Fig.14・PL. 9)

SB-655は、6区H－7 Gr.で検出された2間×1間の掘立柱建物址で、SB-682と重複している。柱穴は直径30cm～70cm、深さ10cm～30cm程度の不整な円形の掘り込み。桁行の柱間は2.1m、梁行の柱間は2.5m。規模は、桁行4.2m、梁行2.5m、床面積10.5m²を測る。主軸はN－88°－Wである。

**SB-656** (Fig.14・PL. 9)

SB-656は、6区G－7 Gr.で検出された4間×2間の掘立柱建物址で、総柱の建物かとも考えられるが、中間の柱穴を1本欠いている。柱穴は直径30cm～80cm、深さ10cm～30cm程度の不整な円形あるいは長円形の掘り込み。桁行の柱間は1.7m、梁行の柱間は1.8m。規模は、桁行5.1m、梁行3.6m、床面積18.4m²を測る。主軸はN－8°－Eである。

**SB-658** (Fig.15・PL.10)

SB-658は、7区H－8 Gr.で検出された3間×2間の総柱の掘立柱建物址で、SB-659と重複している。柱穴は直径50cm～90cm前後、深さ20cm～50cm程度の不整な円形の掘り込み。桁行の柱間は1.5m、梁行の柱間は1.9m。規模は、桁行4.4m、梁行3.7m、床面積16.3m²を測る。主軸はN－11°－Eである。

**SB-659** (Fig.15・PL.10)

SB-659は、7区H－8 Gr.で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、桁行北辺の中間の柱穴が見えない。SB-658と重複している。柱穴は直径30cm前後、深さ20cm～40cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は1.9m弱。規模は、桁行3.8m、梁行3.7m、床面積14.1m²を測る。主軸はN－3°－Eである。

**SB-675** (Fig.16・PL. 8)

SB-675は、6区G－2 Gr.で検出された1間×1間の掘立柱建物址で、SB-646と重複している。SB-648と同様に道路側溝状遺構の北に位置する建物のなかでは規模も特異で、他の建物とは時期を異にするものと推測される。柱穴は直径40cm～70cm程度、深さ20cm～30cm程度の円形あるいは長円形の掘り込み。規模は、桁行2.8m、梁行2.4m、床面積6.7m²を測る。主軸はN－59°－Eである。

**SB-682** (Fig.16・PL. 9)

SB-682は、6区H－8 Gr.で検出された3間×2間の総柱の掘立柱建物址で、SB-653、SB-655と重複している。柱穴は直径30cm～50cm、深さ20cm～40cm程度の不整な円形の掘り込み。桁行の柱間は2.6m、梁行の柱間は2.2m。規模は、桁行7.7m、梁行4.4m、床面積33.9m²を測る。主軸はN－3°－Eである。

**SB-689** (Fig.17・PL.10)

SB-689は、6区L－10Gr.で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、今回の調査で検出された建物址のうち最も南西に位置している。他の建物は比較的にまとまって分布しているが、本建物は単独で検出されている。柱穴は直径30cm前後、深さ10cm～20cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は2.5m、梁行の柱間は2.1m。規模は、桁行5.0m、梁行4.2m、床面積21.0m²を測る。主軸はN－10°－Eである。

**SB-691** (Fig.17・PL.8)

SB-691は、6区J－1 Gr.で検出された3間×2間の総柱の掘立柱建物址で、耕地の段差によって南東隅の柱穴を失っている。柱穴は直径60cm前後、深さ40cm前後の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は2.1m。規模は、桁行5.4m、梁行4.1m、床面積22.1m²を測る。主軸はN－88°－Wである。

**SB-708** (Fig.18・PL.10)

SB-708は、7区F－8 Gr.で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、柱穴は直径50cm～60cm程度、深さ20cm～30cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は2.8m、梁行の柱間は1.7m。規模は、桁行5.6m、梁行3.3m、床面積18.5m²を測る。主軸はN－8°－Eである。

**SB-717** (Fig.18・PL.10)

SB-717は、7区G－8 Gr.で検出された3間×2間の掘立柱建物址で、建物南端から西に1間×1間の突出部をもつ。柱穴は直径30cm～70cm程度、深さ20cm～30cm程度の円形或いは長円形の掘り込み。桁行の柱間は2.0m、梁行の柱間は1.9m。規模は、桁行5.9m、梁行3.8m、床面積22.4m²を測る。主軸はN－5°－Eである。

Tab.2　6区・7区出土掘立柱建物址一覧表

| 建物址番号 | 平面形態 | 規模（m・m²） | | | | 棟方向 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行柱間 | 梁行柱間 | 長さ×幅 | 床面積 | | |
| SB-617 | 2×2 | 1.3 | 1.2 | 2.6×2.4 | 6.2 | N－17°－W | 梁行に柱を追加 |
| SB-638 | 3×2 | 2.1 | 2.1 | 6.3×4.2 | 26.5 | N－7°－W | |
| SB-642 | 4×4 | 1.9 | 1.2 | 7.4×4.8 | 35.5 | N－14°－W | |
| SB-646 | 4×2 | 1.9 | 2.3 | 7.6×4.6<br>7.6×5.9 | 34.9<br>44.8 | N－22°－W | 東庇1間、幅1.3m<br>SB-648、675と重複 |
| SB-647 | 3×2 | 2.3 | 2.4 | 6.8×4.8 | 32.6 | N－12°－W | |
| SB-648 | 2×1 | 1.9 | 3.0 | 3.7×3.0 | 11.1 | N－8°－W | SB-646と重複 |
| SB-649 | 2×2 | 1.9 | 1.5 | 3.8×3.1 | 11.8 | N－20°－W | |
| SB-651 | 4×2 | 2.0 | 2.4 | 8.0×4.8 | 38.4 | N－3°－W | |
| SB-652 | 3×2 | 2.0 | 2.2 | 6.0×4.4 | 26.4 | N－2°－W | 建物外周に雨落ち溝 |
| SB-653 | 3×2 | 1.8 | 2.2 | 5.4×4.4 | 23.8 | N－8°－E | SB-682と重複 |

Tab. 2　6区・7区出土掘立柱建物址一覧表（続き）

| 建物址番号 | 平面形態 | 規模（m・m²） | | | | 棟方向 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行柱間 | 梁行柱間 | 長さ×幅 | 床面積 | | |
| SB-654 | 2×2 | 1.9 | 1.6 | 3.8×3.2 | 12.2 | N－4°－E | |
| SB-655 | 2×1 | 2.1 | 2.5 | 4.2×2.5 | 10.5 | N－88°－W | SB-682と重複 |
| SB-656 | 3×2 | 1.7 | 1.8 | 5.1×3.6 | 18.4 | N－8°－E | |
| SB-658 | 3×2 | 1.5 | 1.9 | 4.4×3.7 | 16.3 | N－11°－E | SB-659と重複 |
| SB-659 | 2×2 | 1.9 | 1.9 | 3.8×3.7 | 14.1 | N－43°－E | SB-658と重複 |
| SB-675 | 1×1 | 2.4 | 2.8 | 2.8×2.4 | 6.7 | N－59°－E | SB-646と重複 |
| SB-682 | 3×2 | 2.6 | 2.2 | 7.7×4.4 | 33.9 | N－3°－E | SB-653,655と重複 |
| SB-689 | 2×2 | 2.5 | 2.1 | 5.0×4.2 | 21.0 | N－10°－E | |
| SB-691 | 3×2 | 1.8 | 2.1 | 5.4×4.1 | 22.1 | N－88°－W | |
| SB-708 | 2×2 | 2.8 | 1.7 | 5.6×3.3 | 18.5 | N－8°－E | |
| SB-717 | 3×2 | 2.0 | 1.9 | 5.9×3.8<br>5.9×6.0 | 22.4<br>26.8 | N－5°－E | 南西隅に1間×1間の突出部 |

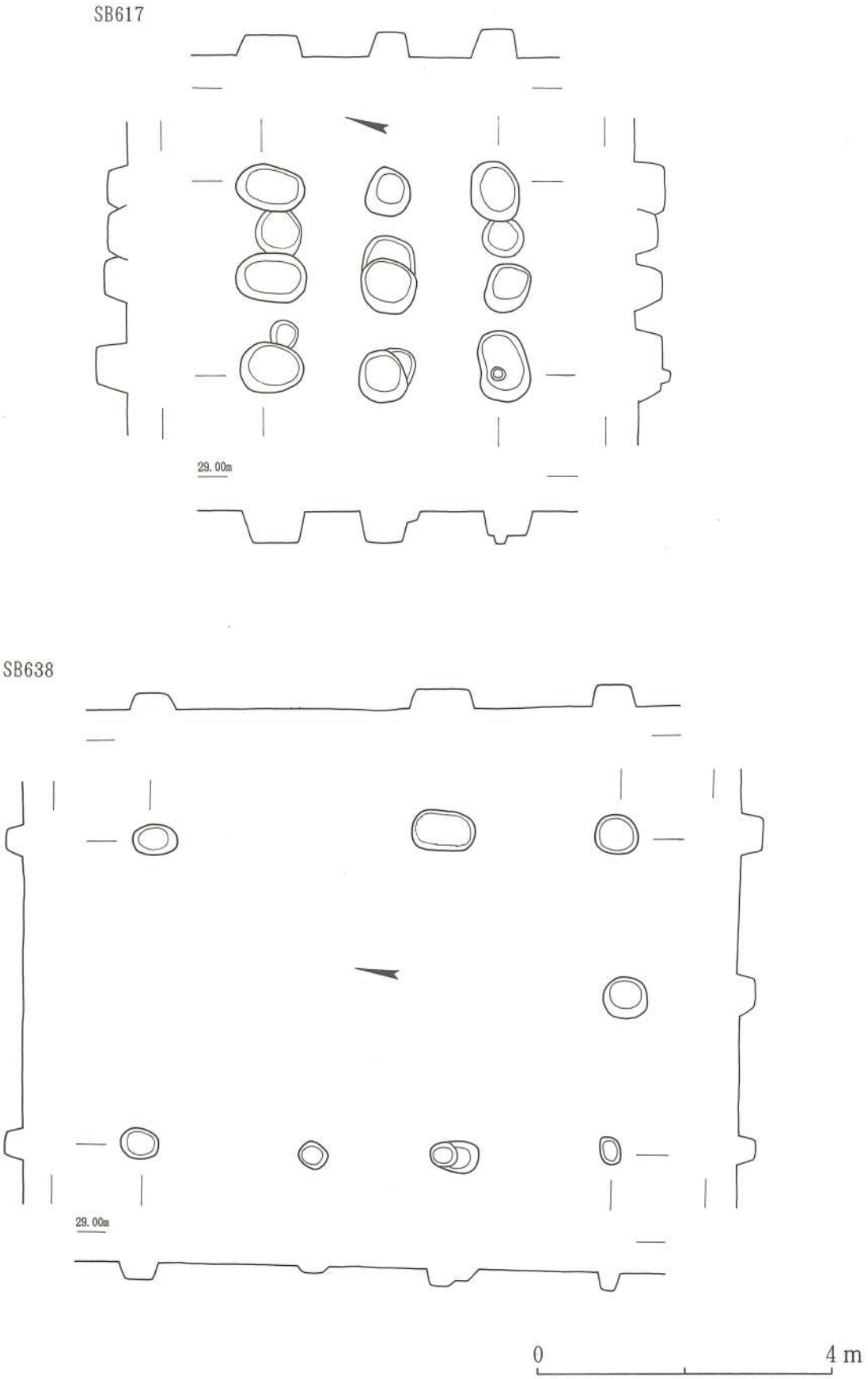



Fig. 6　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(1)　SB-617・SB-638（1/80）

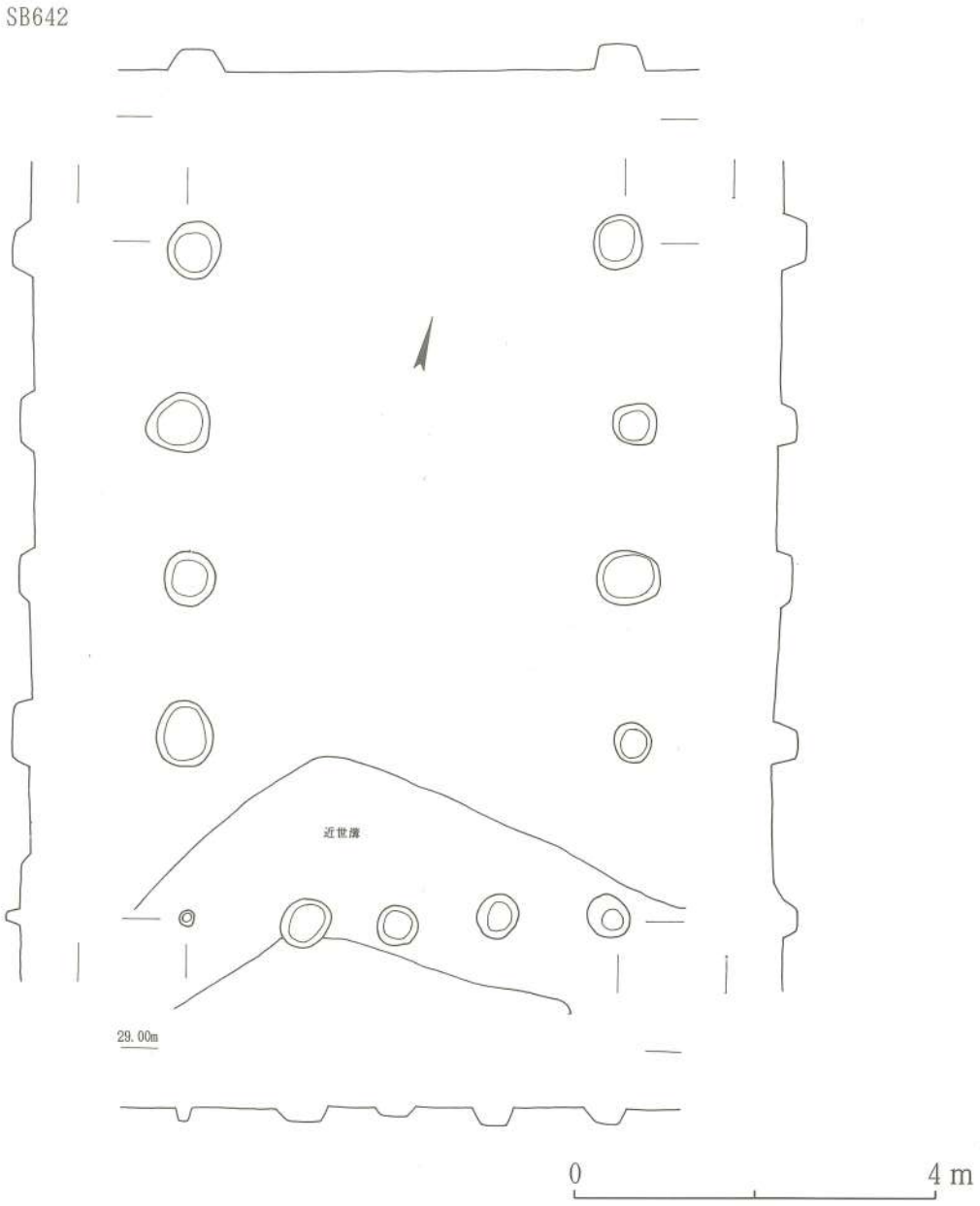



Fig. 7　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(2)　SB-642 (1/80)

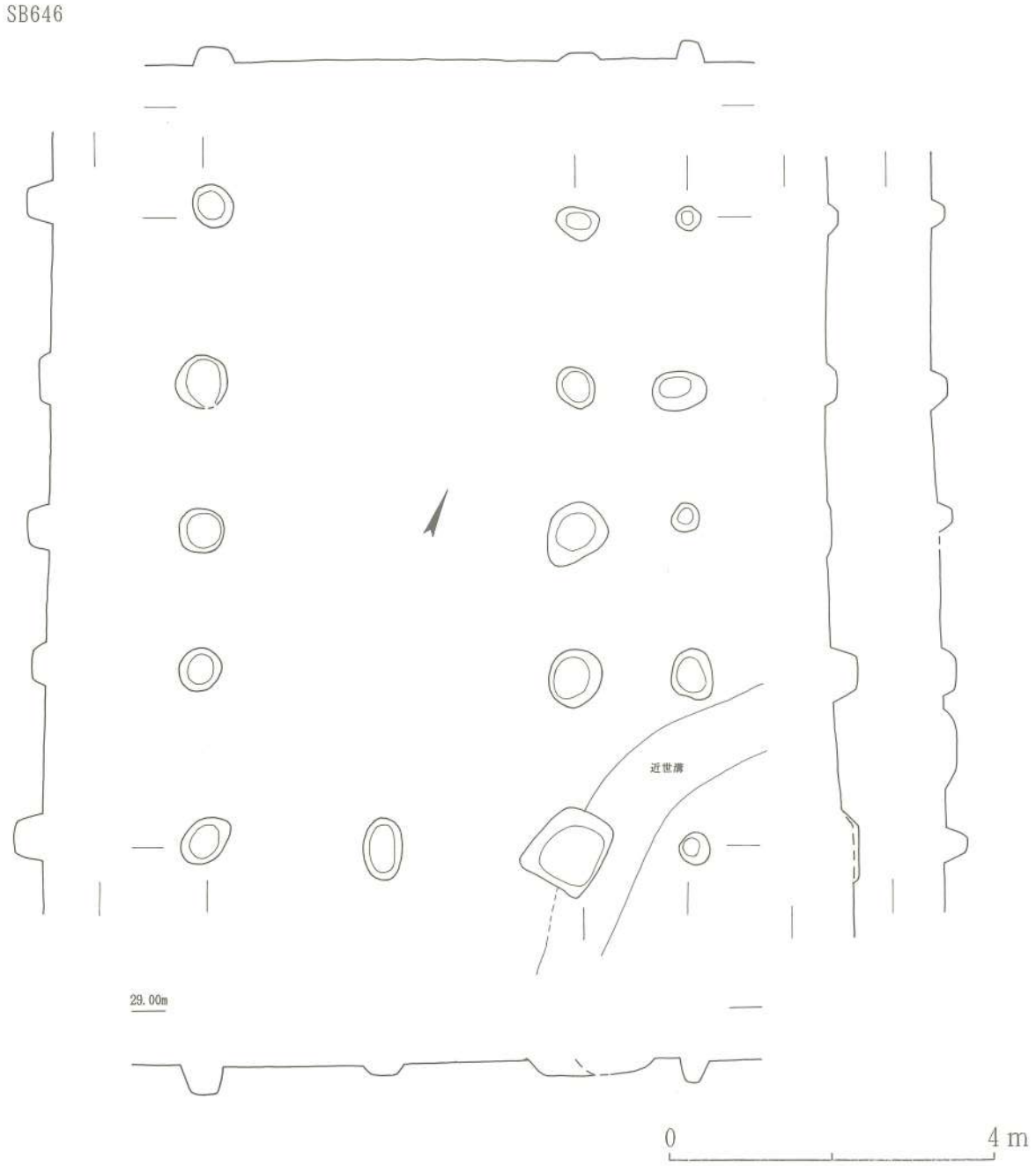



Fig. 8　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(3)　SB-646（1/80）

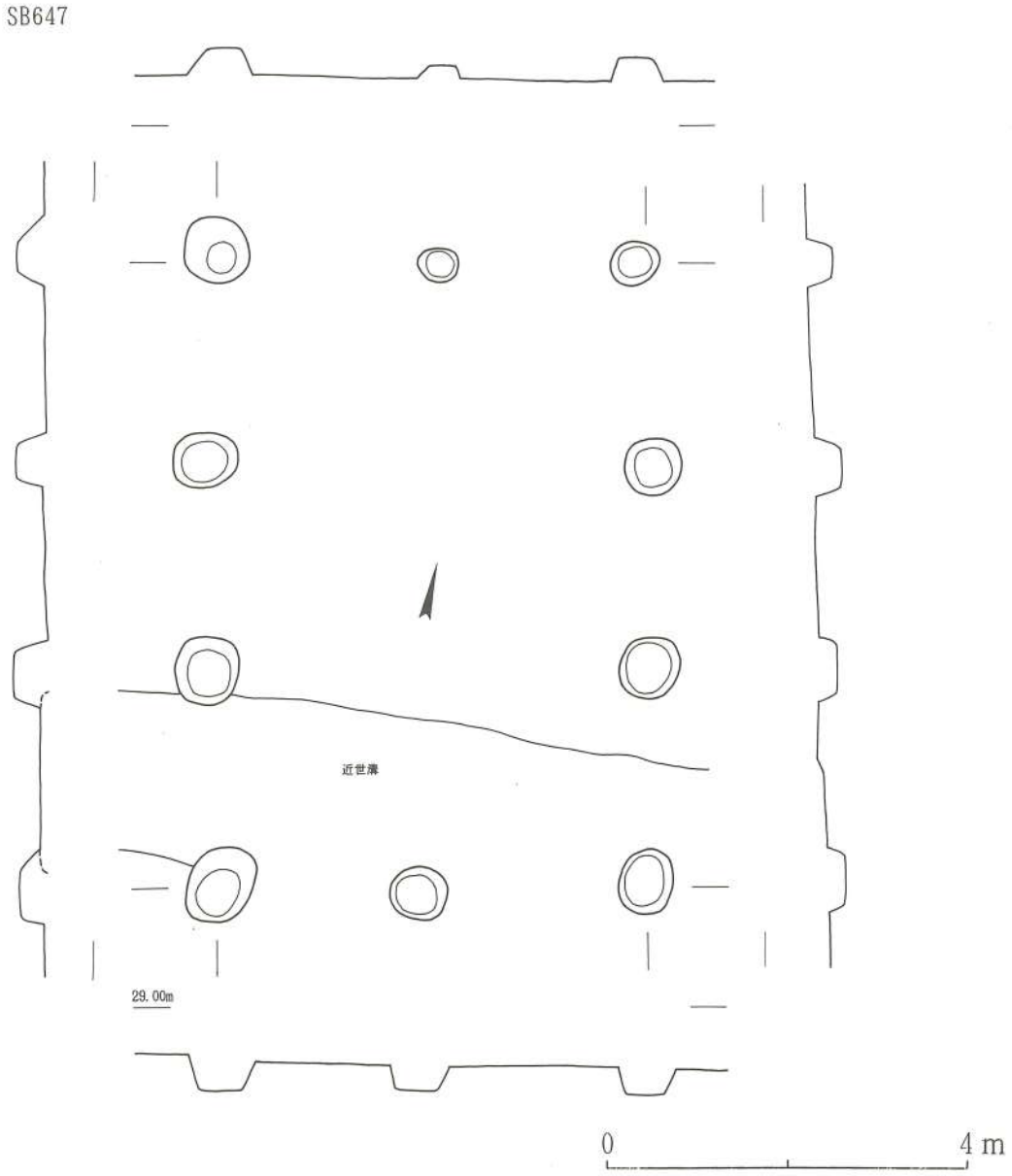
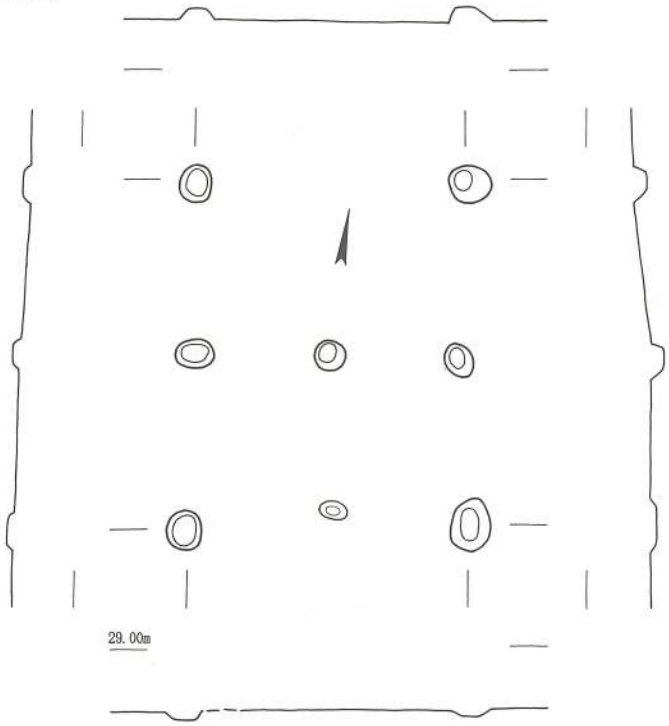



Fig. 9　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(4)　SB-647 (1/80)

SB648




SB649

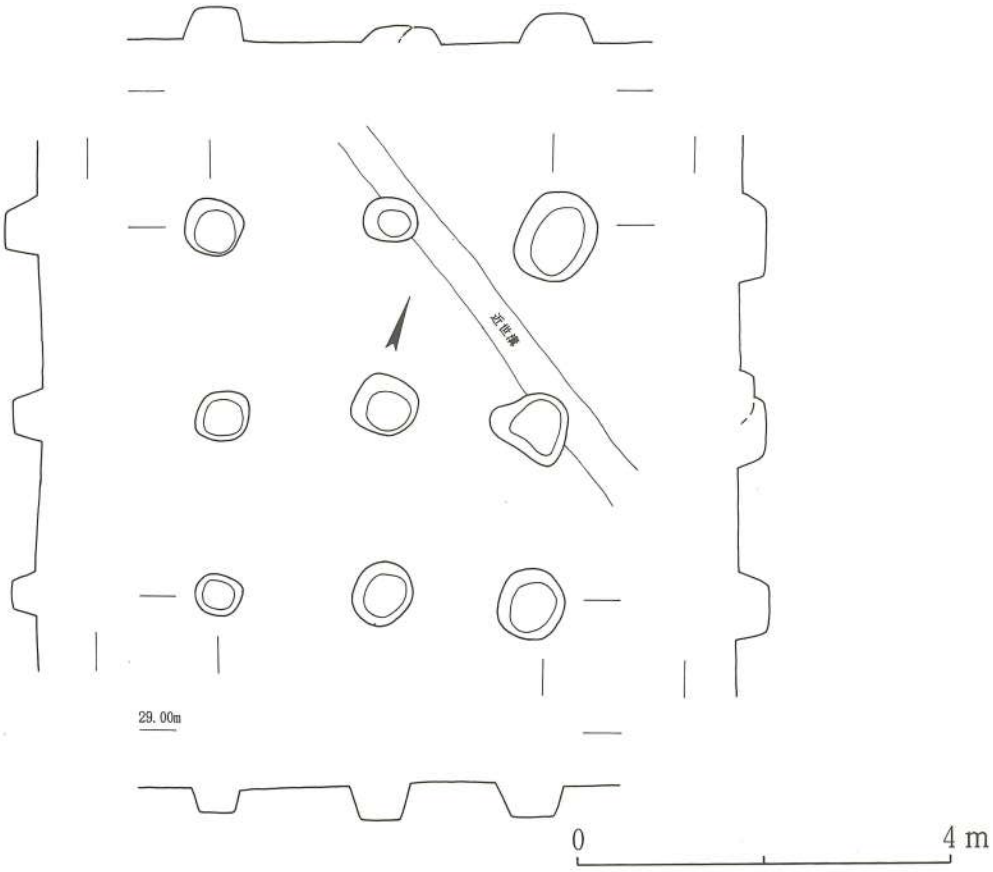



Fig.10　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(5)　SB-648・SB-649（1/80）

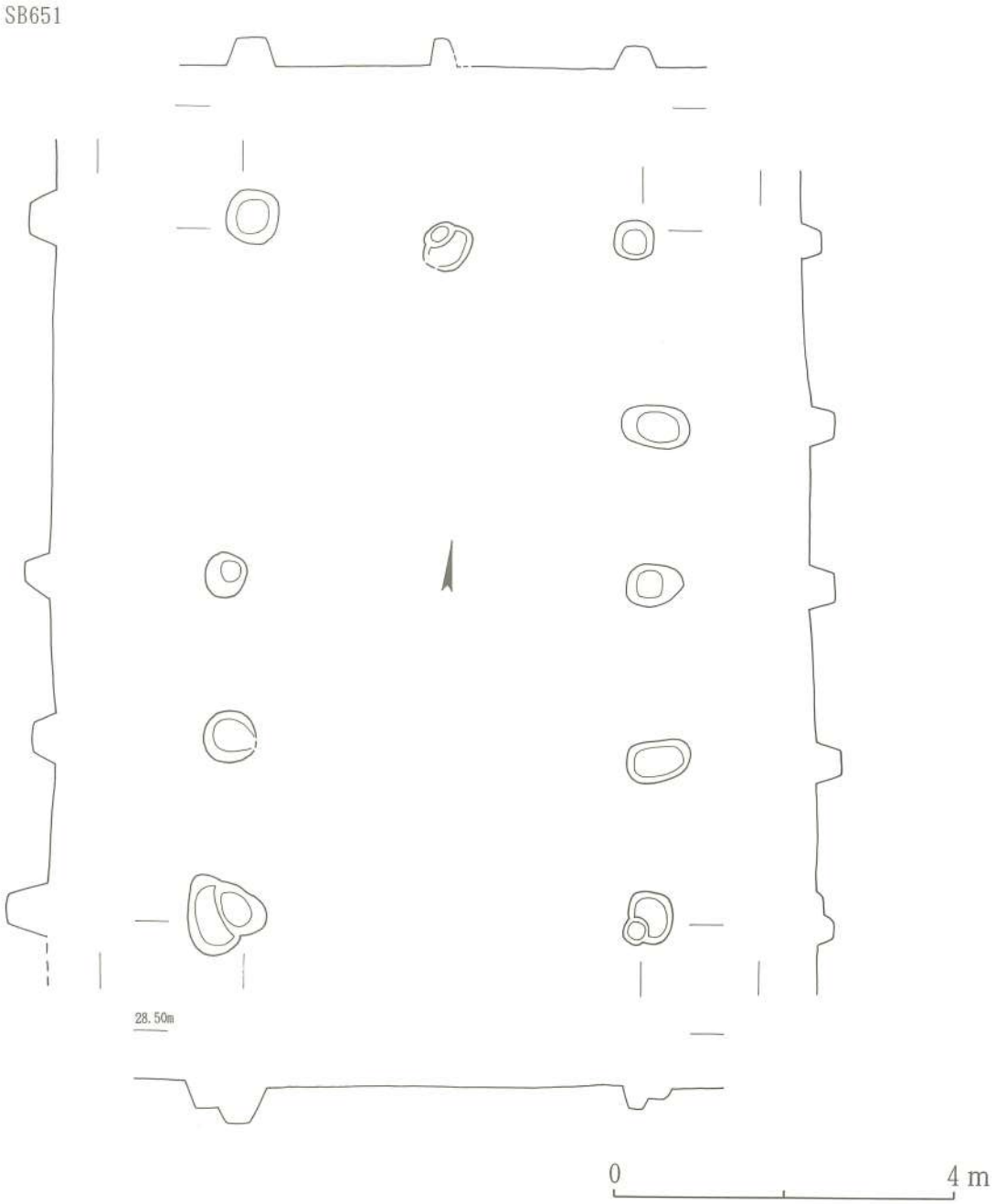



Fig.11　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(6)　SB-651 (1/80)

SB652

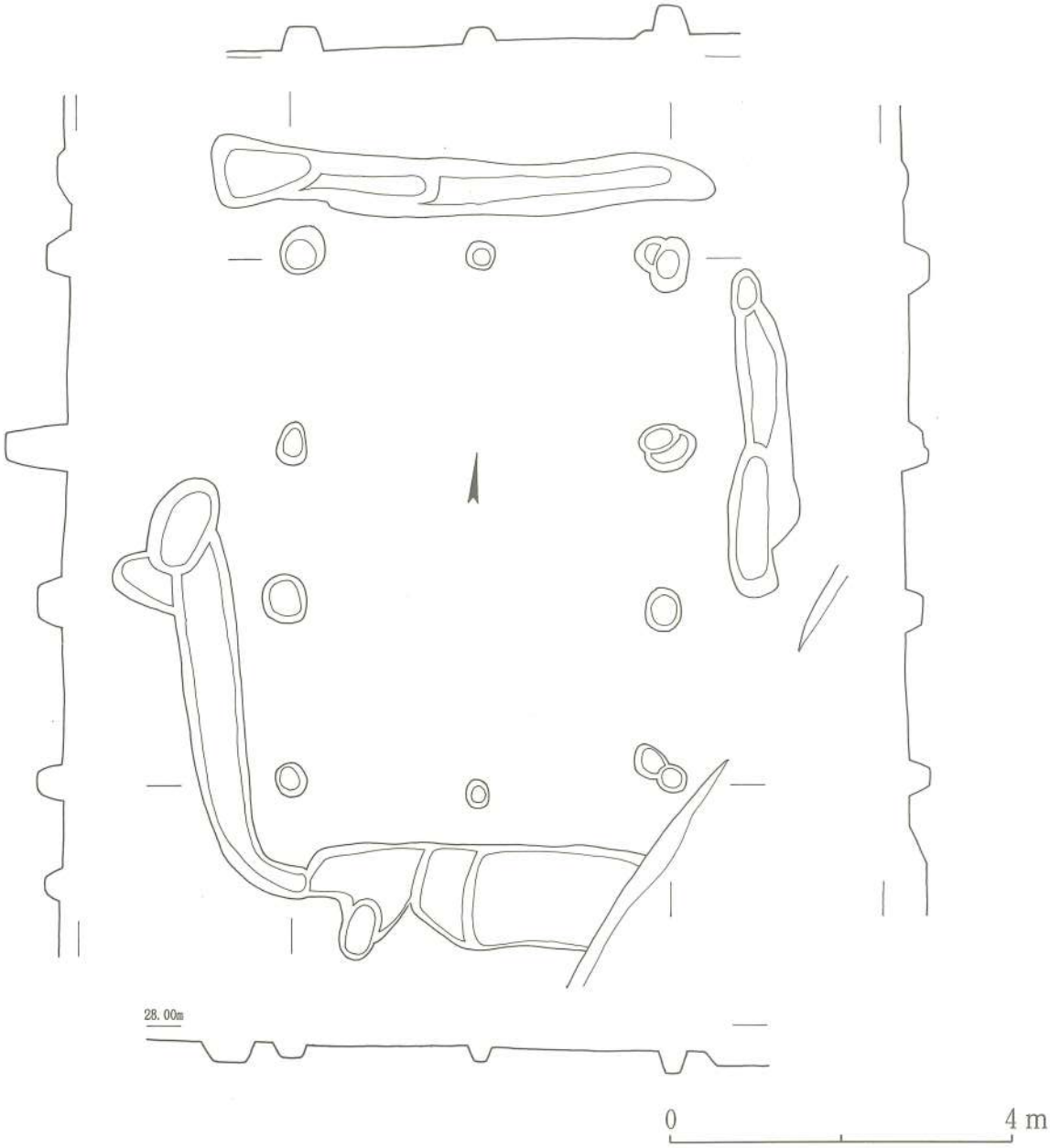



Fig.12　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(7)　SB-652（1/80）

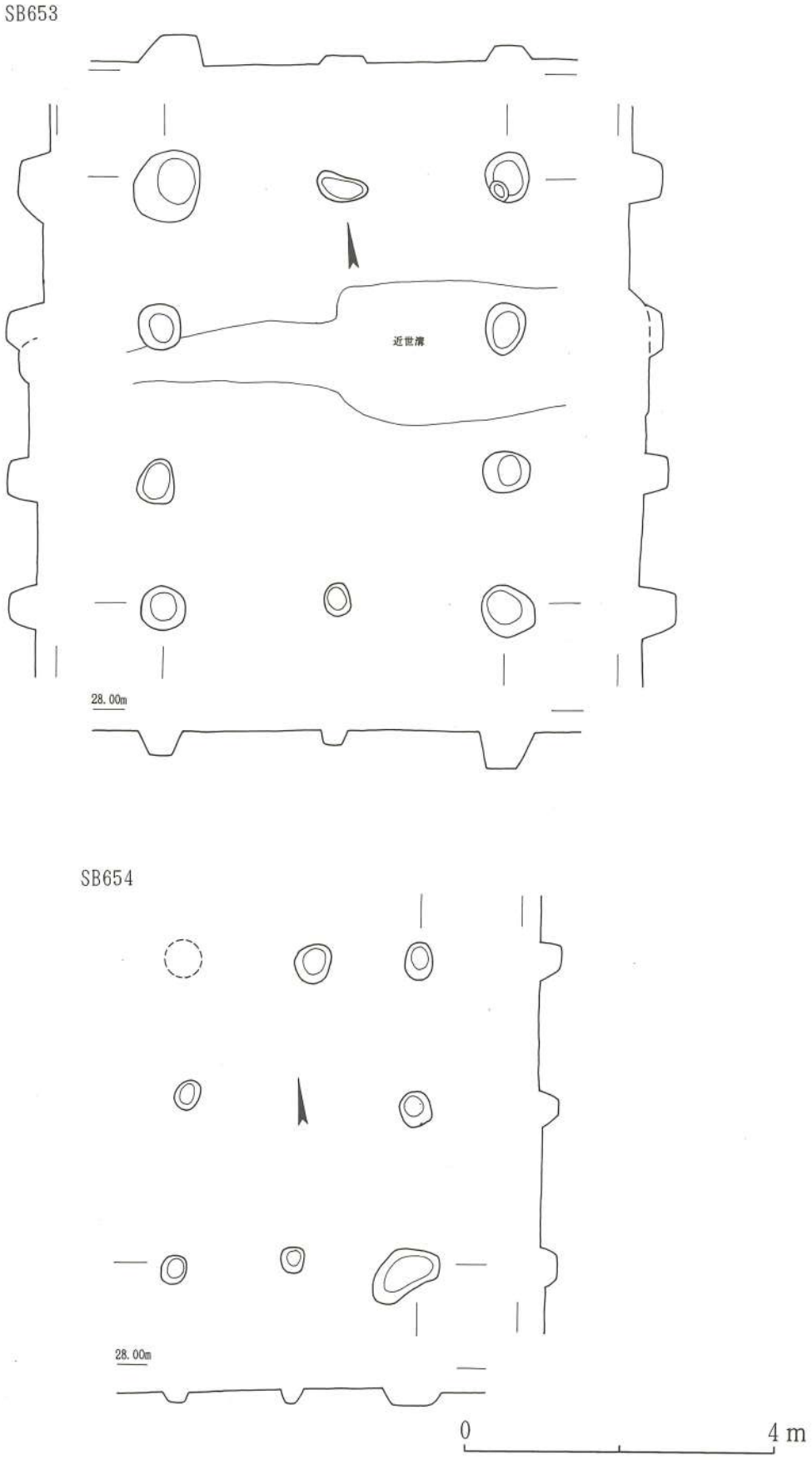



Fig.13　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(8)　SB-653・SB-654（1/80）

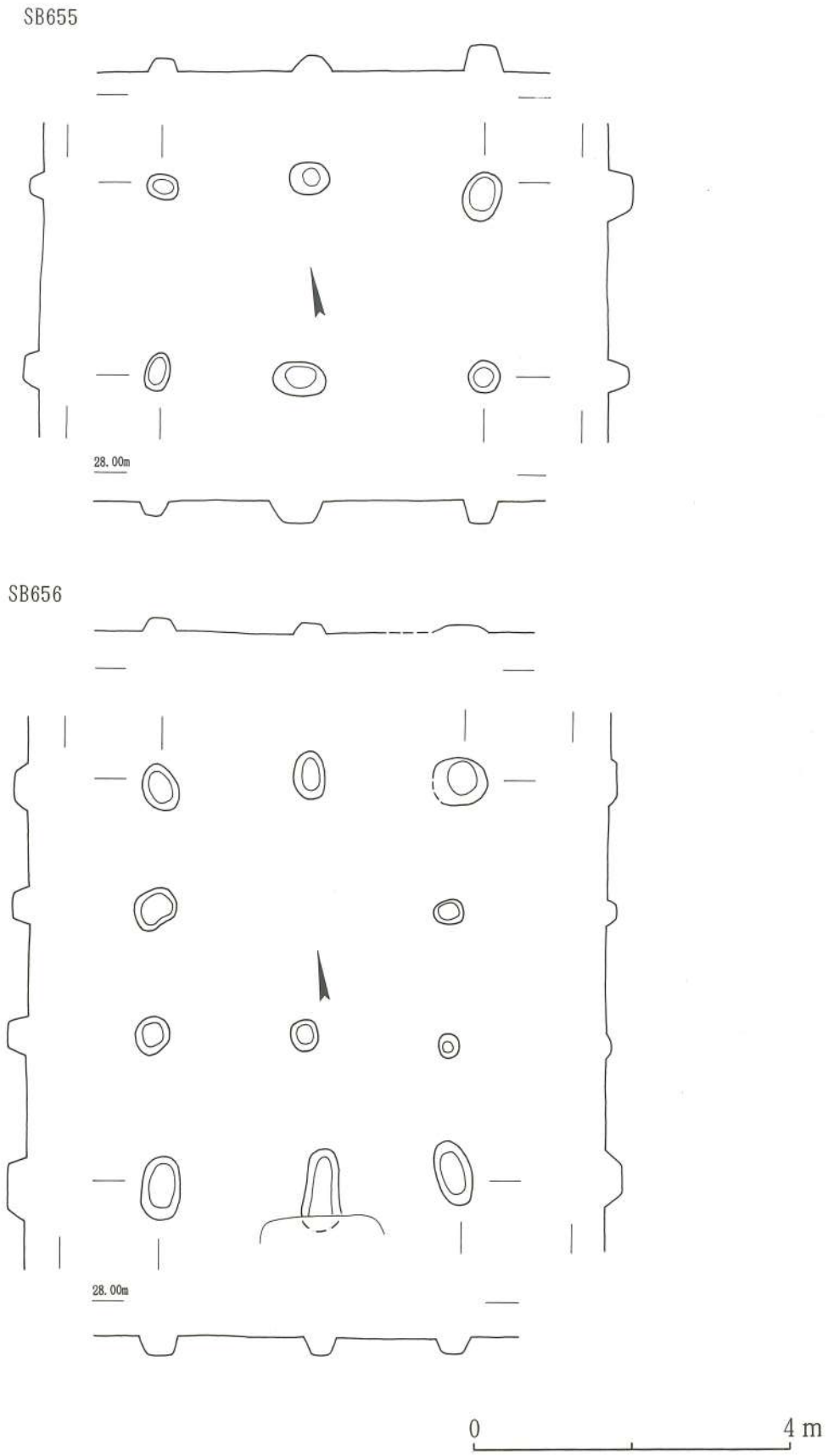



Fig.14　6 区・7 区出土掘立柱建物址実測図(9)　SB-655・SB-656（1/80）

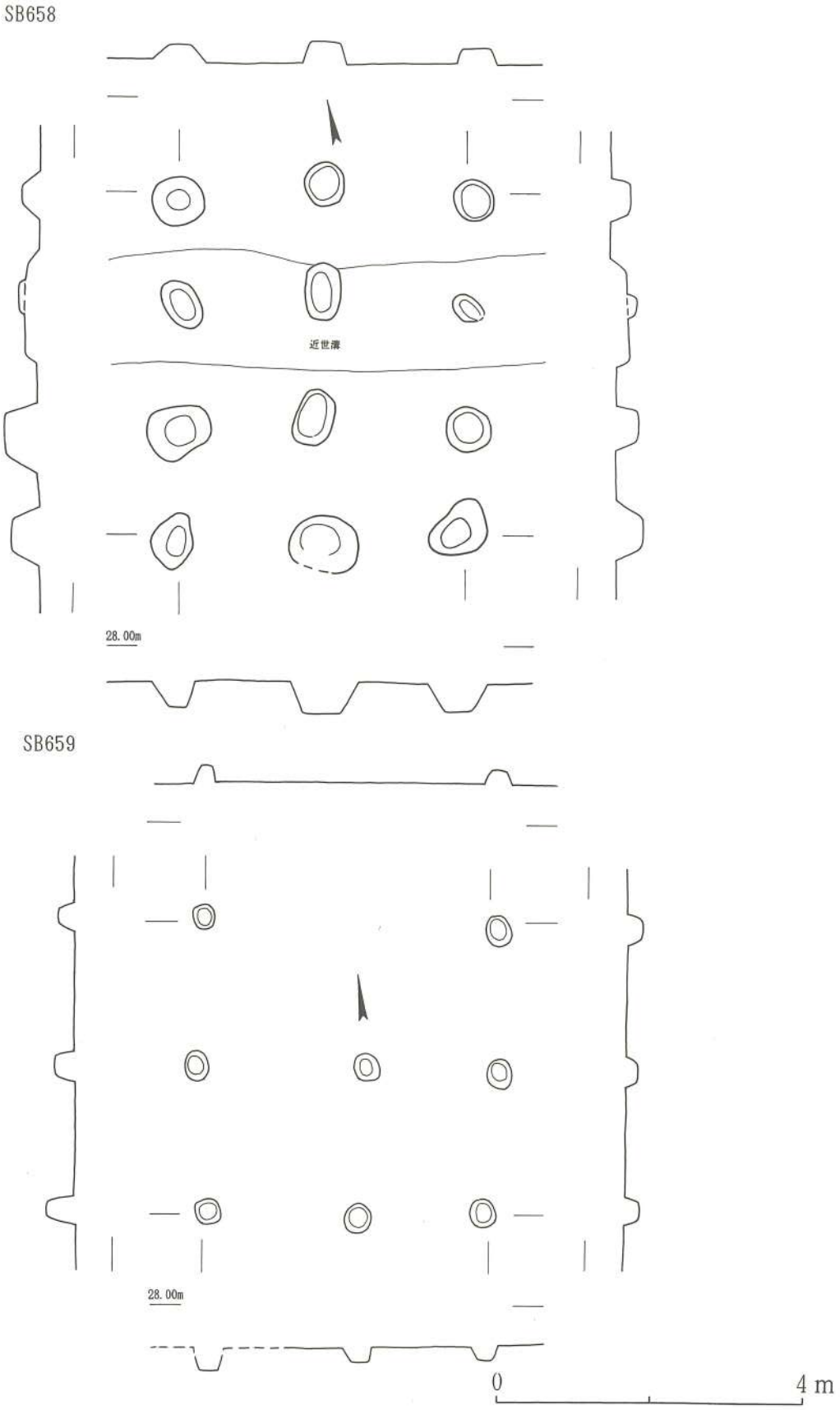



Fig.15　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(10)　SB-658・SB-659（1/80）

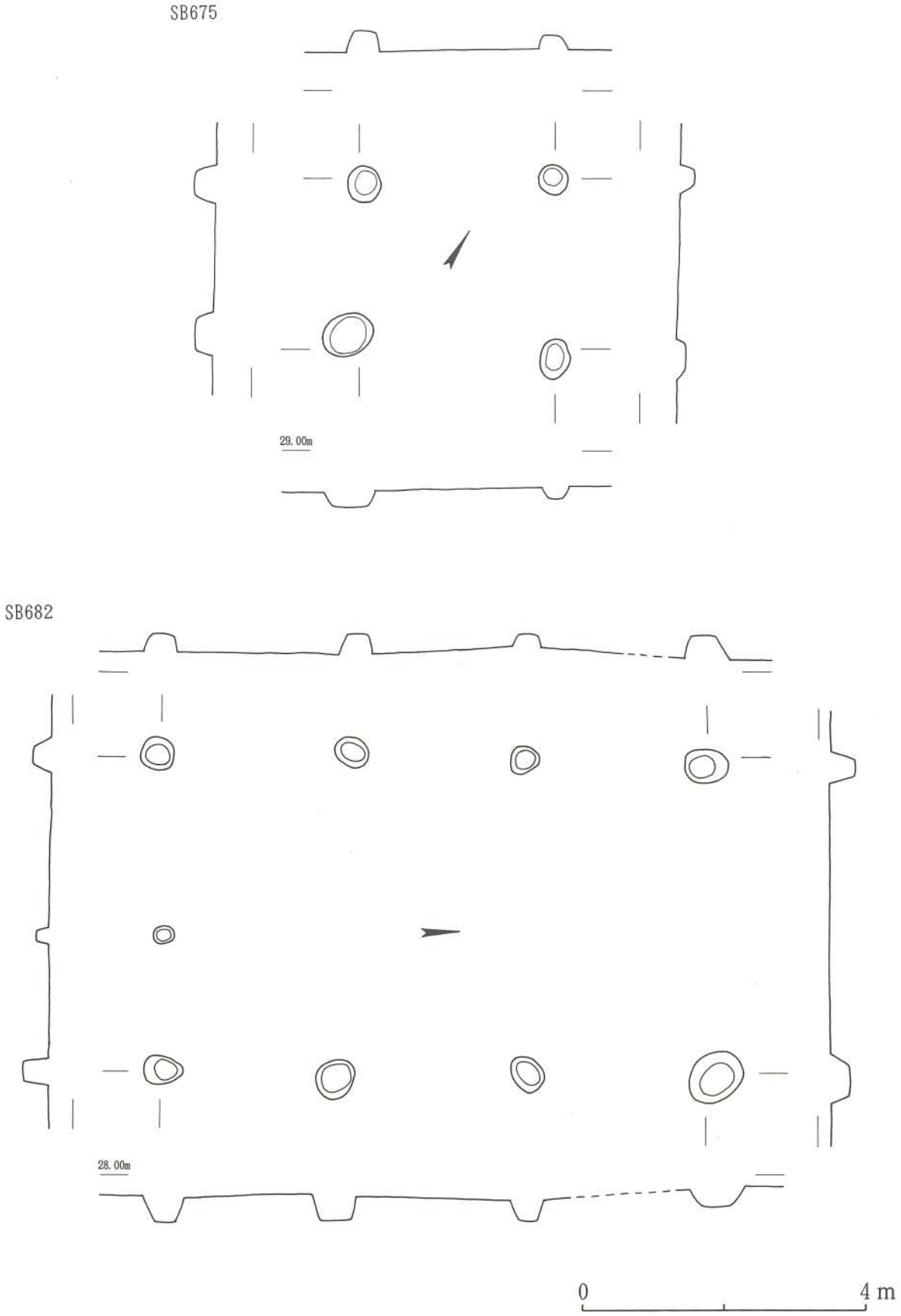
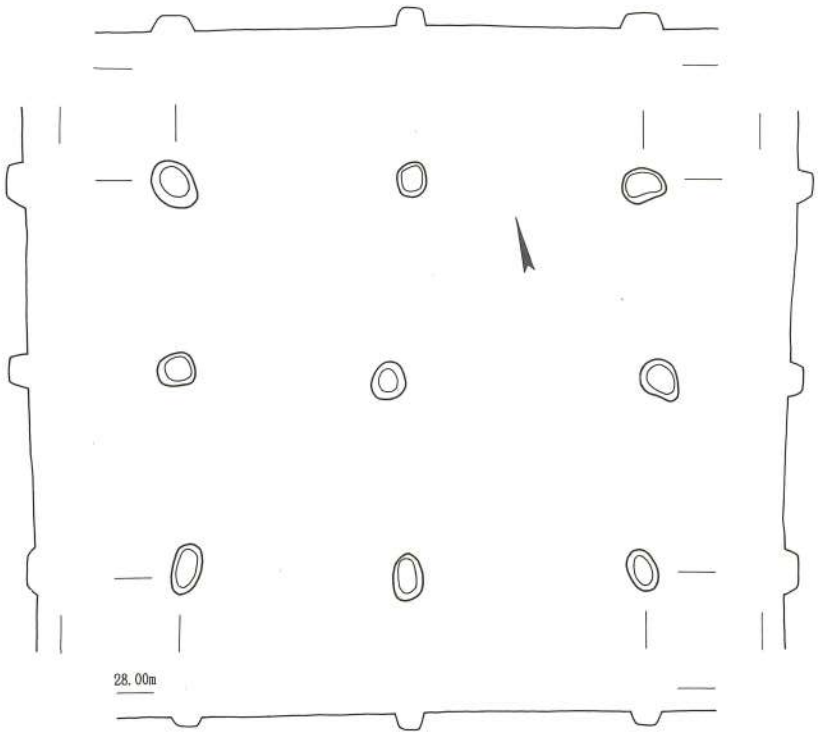
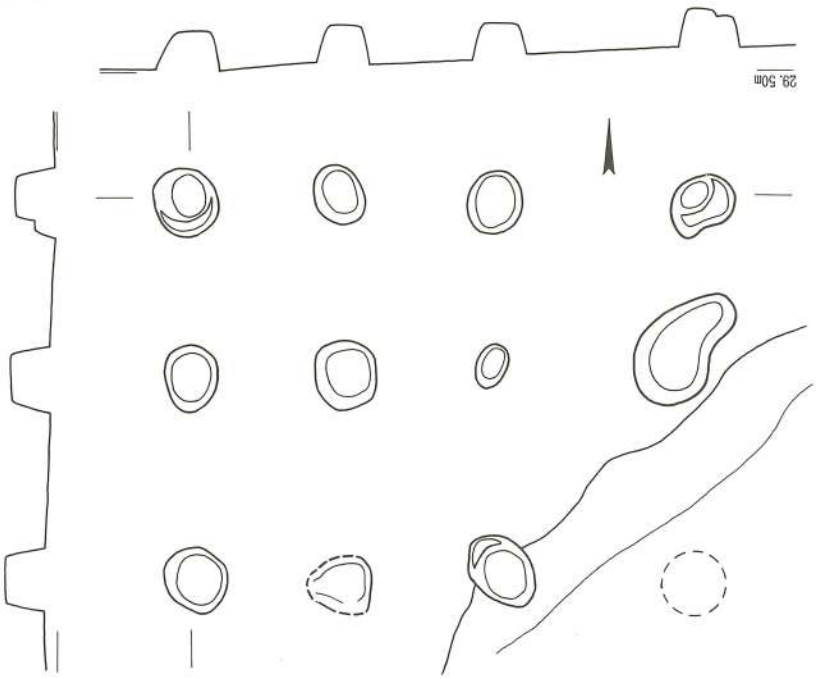



Fig.16　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(11)　SB-675・SB-682（1/80）

SB689




SB691




0 4 m

Fig.17　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(12)　SB-689・SB-691（1/80）

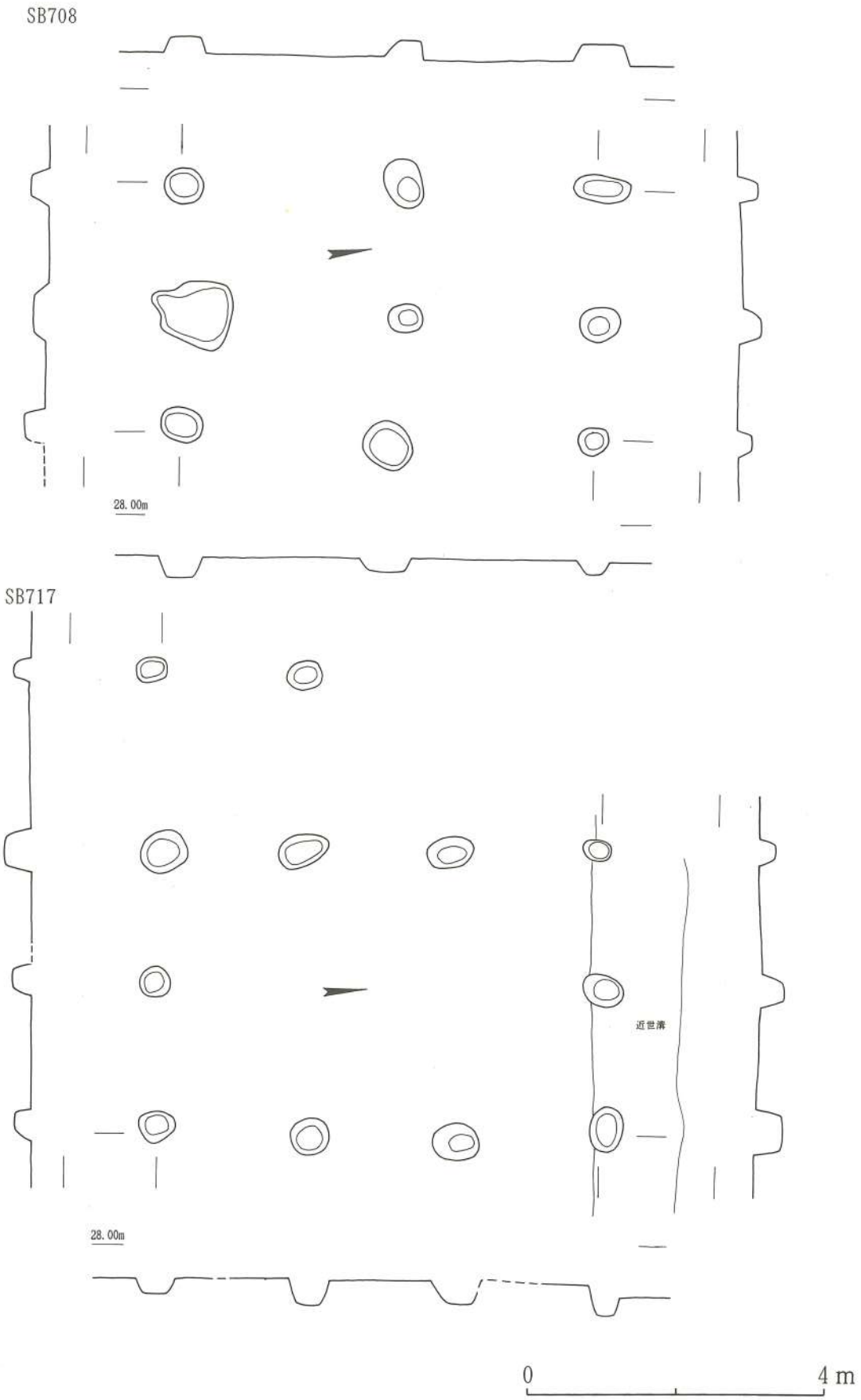



Fig.18　6区・7区出土掘立柱建物址実測図(13)　SB-708・SB-717（1/80）

### (3) 土壙・貯蔵穴（Fig.19～26・PL.11～17・Tab. 3）

今回の調査で検出された土壙は、69基であった。これらは、平面形態により、

円形を基調としたプランのもの：

SK-601、SK-613、SK-614、SK-620、SK-626、SK-627、SK-628、SK-635、SK-640、SK-660、SK-662、SK-668、SK-670、SK-671、SK-672、SK-674、SK-681、SK-683、SK-684、SK-687、SK-688、SK-701、SK-706、SK-710、SK-712、SK-715など

方形を基調としたプランのもの：

SK-618、SK-621、SK-632、SK-633、SK-634、SK-637、SK-639、SK-657、SK-661、SK-663、SK-664、SK-665、SK-666、SK-673、SK-677、SK-680、SK-685、SK-686、SK-707、SK-711、SK-716など

不整形のプランを呈し掘り方も不規則なもの：

SK-602、SK-604、SK-605、SK-607、SK-612、SK-616、SK-622、SK-624、SK-636、SX-641、SK-645、SK-650、SK-667、SK-668、SK-669、SK-678、SK-679、SX-696、SK-702、SX-704、SK-705、SK-709、SK-714などが認められる。

また、SK-618、SK-635、SK-669、SK-670、SK-673、SK-674、SK-680、SK-681、SK-684、SK-716などは、土壙の床面にピットをもち「落とし穴」的土壙と考えられる。

これらの土壙のうち、石匙などの石器類を出土しているSK-645などが、縄文時代の土壙と考えられるが、遺物をもたない土壙についても、掘り方が不規則で不整形の土壙のほとんどが縄文期のものと考えられる。そのほか、出土遺物などより時期が特定できるものとしては、刻み目凸帯文土器が出土しているSK-614などが縄文時代晩期。6区南部で検出された大型円形土壙SK-626、SK-627、SK-628、SK-701は、弥生前期末から中期前半の土器を出土し、周辺の住居址に伴う貯蔵穴。同じくSK-637、SK-660、SK-662、SK-663が弥生時代前期末から中期前半。土師器・須恵器などを出土しているSK-612、SK-618、SK-634、SK-639、SK-640、SX-641、SK-645、SK-650、SK-657、SK-670、SK-702、SX-704、SK-705、SK-707、SK-711、SK-712、SK-716などが奈良・平安時代の所産と考えられる。

検出された各土壙の規模・深さ等の法量、及び出土遺物は下記一覧表にまとめた。

Tab. 3　6区・7区出土土壙一覧表

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模(上段…上面、下段…底面、単位：m・㎡) 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-601 | 不整円形 | 2.04<br>0.92 | 1.54<br>0.95 | 0.30 | 0.7 | | | |
| SK-602 | 楕円形 | 2.94<br>1.80 | 2.02<br>0.48 | 0.65 | 4.0 | | | |
| SK-604 | 不整形 | 1.87<br>1.72 | 0.82<br>0.68 | 0.06 | 1.0 | | | |
| SK-605 | 不整形 | 1.41<br>1.27 | 1.06<br>0.90 | 0.19 | 0.9 | | | |
| SK-607 | 不整形 | 1.74<br>1.47 | 1.33<br>1.14 | 0.31 | 1.2 | | | |
| SK-612 | 不整形 | 1.87<br>1.28 | 1.18<br>0.86 | 0.18 | 1.0 | | 須恵器坏、<br>ふいご羽口 | |
| SK-613 | 不整円形 | 1.24<br>0.94 | 1.03<br>0.73 | 0.15 | (0.5) | | | |
| SK-614 | 不整円形 | 1.34<br>1.06 | 1.20<br>0.87 | 0.21 | 0.7 | | 縄文式土器 | |
| SK-616 | 不整楕円形 | 2.15<br>1.18 | 1.60<br>0.80 | 0.82 | 1.4 | | | |

Tab. 3　6区・7区出土土壙一覧表（続き）

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模(上段…上面、下段…底面、単位：m・㎡) 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-618 | 方形 | 1.57<br>1.32 | 1.67<br>1.40 | 0.36 | 1.8 | 床面にピット | 須恵器坏、土師器坏・甕 | |
| SK-620 | 円形 | 1.37<br>0.87 | 1.22<br>0.80 | 0.52 | 0.6 | | | |
| SK-621 | 不整方形？ | ※1.3<br>※0.9 | 1.92<br>1.30 | 0.66 | ※2.2 | | | |
| SK-622 | 不整楕円形 | 2.56<br>2.05 | 1.42<br>0.77 | 0.34 | 1.4 | | | |
| SK-624 | 不整形 | 2.21<br>1.94 | 1.20<br>0.70 | 0.10 | (1.6) | | | |
| SK-626 | 不整円形 | 3.22<br>2.22 | 2.88<br>1.46 | 1.42 | 6.9 | | | |
| SK-627 | 円形 | 3.10<br>2.00 | 3.00<br>1.16 | 1.72 | 5.3 | | | |
| SK-628 | 不整円形 | 3.50<br>2.37 | 3.32<br>1.94 | 1.20 | 3.5 | | | |
| SK-632 | 隅丸長方形 | (3.1)<br>(2.8) | 1.22<br>1.00 | 0.20 | (2.7) | | | |
| SK-633 | 不整方形 | 1.94<br>1.40 | 1.32<br>1.06 | 0.49 | 1.4 | | | |
| SK-634 | 長方形 | 2.34<br>2.11 | 1.18<br>0.84 | 0.12 | 1.7 | | 須恵器坏 | |
| SK-635 | 円形 | 1.23<br>0.90 | 1.14<br>0.87 | 0.70 | 0.7 | 床面にピット | | |
| SK-636 | 不整形 | 3.85<br>3.60 | 2.93<br>2.73 | 0.17 | 7.6 | | | |
| SK-637 | 方形 | (2.2)<br>(2.1) | 1.86<br>1.68 | 0.12 | (3.4) | | 弥生式土器 | |
| SK-639 | 隅丸方形 | 2.10<br>1.68 | 2.06<br>1.70 | 0.46 | 2.5 | | 須恵器坏、土師器坏 | |
| SK-640 | 楕円形 | (2.1)<br>(1.5) | 1.46<br>1.28 | 0.27 | (2.2) | | 長頸壷 | |
| SX-641 | 不整形 | 1.46<br>1.17 | 1.05<br>0.68 | 0.10 | 0.6 | | 須恵器甕 | |
| SK-645 | 不整形 | 5.85<br>5.00 | 2.10<br>1.55 | 0.48 | 6.7 | | 須恵器坏蓋、土師器甕、石匙 | |
| SK-650 | 不整形 | 7.68<br>6.80 | 4.16<br>3.68 | 0.46 | 16.5 | | 須恵器坏・坏蓋・高坏・提瓶、土師器坏・高坏・甕、砥石、鉄斧 | |
| SK-657 | 隅丸方形 | 1.85<br>1.42 | 1.64<br>1.32 | 0.57 | 1.8 | | 須恵器坏・坏蓋、土師器、鉢・甕 | |
| SK-660 | 不整円形 | 2.20<br>1.74 | 2.14<br>1.72 | 0.39 | 2.4 | | 弥生式土器 | |
| SK-661 | 不整長方形 | 1.44<br>1.06 | 0.84<br>0.53 | 0.42 | 2.7 | | | |
| SK-662 | 不整円形 | 1.28<br>0.98 | 1.21<br>0.94 | 0.68 | 0.8 | | 弥生式土器 | |
| SK-663 | 不整方形 | 1.82<br>1.59 | (1.5)<br>(1.0) | 0.16 | (1.8) | | 弥生式土器 | |
| SK-664 | 隅丸方形？ | 2.21<br>1.84 | ※1.0<br>※0.8 | 0.30 | ※3.0 | | 尖頭器？ | |
| SK-665 | 隅丸長方形 | 0.72<br>0.62 | 0.41<br>0.27 | 0.59 | 0.6 | | 弥生式土器 | |
| SK-666 | 隅丸長方形 | (1.3)<br>(0.8) | 0.82<br>0.62 | 0.41 | (0.5) | | | |
| SK-667 | 不整形 | 1.48<br>1.11 | 0.95<br>0.68 | 0.35 | 0.6 | | | |
| SK-668 | 不整形 | 1.32<br>0.78 | 0.96<br>0.62 | 0.39 | 0.4 | | | |
| SK-669 | 不整形 | 1.33<br>1.16 | 0.94<br>0.74 | 0.12 | 3.1 | 床面にピット | | |
| SK-670 | 不整円形 | 0.68<br>0.54 | 0.64<br>0.51 | 0.36 | 3.4 | 床面にピット | | |

Tab. 3　6区・7区出土土壙一覧表（続き）

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模(上段…上面、下段…底面、単位：m・㎡) 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-671 | 不整円形 | 1.10<br>0.70 | 1.10<br>0.69 | 0.37 | 2.2 | | | |
| SK-672 | 不整円形 | 1.30<br>0.94 | 1.04<br>0.71 | 0.32 | 2.6 | | | |
| SK-673 | 隅丸方形 | 1.00<br>0.74 | 0.90<br>0.70 | 0.24 | 2.5 | 床面にピット | | |
| SK-674 | 不整楕円形 | 1.14<br>0.77 | 0.74<br>0.48 | 0.32 | 0.3 | 床面にピット | | |
| SK-676 | 不整形 | 1.80<br>1.47 | 0.86<br>0.50 | 0.29 | 0.6 | | | |
| SK-677 | 隅丸長方形 | 1.50<br>1.20 | 0.88<br>0.66 | 0.28 | 0.7 | | | |
| SK-678 | 不整形 | 2.96<br>1.43 | 1.24<br>0.52 | 0.48 | 0.6 | | | |
| SK-679 | 不整形 | 2.72<br>1.81 | 1.24<br>0.72 | 0.55 | 1.0 | | | |
| SK-680 | 隅丸方形 | 1.28<br>1.10 | 0.98<br>0.84 | 0.11 | 0.8 | 床面にピット | | |
| SK-681 | 不整円形 | 1.00<br>0.86 | 0.92<br>0.65 | 0.33 | 0.4 | 床面にピット | | |
| SK-683 | 不整形 | 0.98<br>0.62 | 0.66<br>0.37 | 0.22 | 0.2 | | | |
| SK-684 | 楕円形 | 1.02<br>0.89 | 0.74<br>0.60 | 0.13 | 0.5 | 床面にピット | | |
| SK-685 | 隅丸方形 | 1.34<br>1.00 | 0.89<br>0.56 | 0.28 | 0.5 | | | |
| SK-686 | 隅丸方形 | 0.92<br>0.71 | 0.58<br>0.41 | 0.41 | 0.3 | | | |
| SK-687 | 不整円形 | 0.78<br>0.54 | 0.77<br>0.48 | 0.24 | 0.2 | | | |
| SK-688 | 不整楕円形 | 1.36<br>1.11 | 1.06<br>0.80 | 0.46 | 0.7 | | | |
| SX-696 | 不整形 | 1.58<br>0.80 | 1.12<br>0.57 | 0.72 | 0.3 | | | |
| SK-701 | 不整円形 | 3.28<br>3.07 | 3.20<br>2.56 | 1.11 | 6.5 | | 須恵器坏・坏蓋 | |
| SK-702 | 不整形 | 2.04<br>1.69 | 1.80<br>1.10 | 0.40 | 1.5 | | 須恵器坏・坏蓋 | |
| SX-704 | 不整形 | 2.10<br>1.92 | 1.97<br>1.78 | 0.18 | 2.7 | | 須恵器坏 | |
| SK-705 | 不整形 | 2.70<br>2.44 | 1.70<br>1.15 | 0.10 | (2.7) | | 須恵器坏・坏蓋、土師器鉢 | |
| SK-706 | 不整円形 | 1.30<br>1.09 | 1.24<br>1.07 | 0.21 | 1.0 | | | |
| SK-707 | 不整長方形 | 2.08<br>1.92 | 1.13<br>0.93 | 0.05 | 1.6 | | 須恵器坏・坏蓋・壷、土師器坏・高坏 | |
| SK-709 | 不整楕円形 | 1.09<br>0.93 | 0.56<br>0.32 | 0.51 | 0.3 | | | |
| SK-710 | 不整円形 | 2.82<br>2.40 | 2.34<br>1.82 | 0.56 | 3.5 | | | |
| SK-711 | 不整方形 | 1.34<br>1.21 | 0.83<br>0.66 | 0.15 | 0.7 | 床面にピット | 須恵器坏・坏蓋、土師器甕 | |
| SK-712 | 不整形 | 2.04<br>1.24 | 2.12<br>0.86 | 0.54 | 0.8 | | 須恵器坏蓋・甕、土師器鉢・甕 | |
| SK-714 | 不整形 | 1.72<br>1.42 | 0.74<br>0.40 | 0.34 | 0.5 | | | |
| SK-715 | 不整円形 | 2.82<br>1.43 | 2.53<br>1.45 | 0.61 | 1.6 | | | |
| SK-716 | 隅丸方形 | 1.82<br>1.47 | 1.57<br>1.12 | 0.31 | 1.6 | 床面にピット | 須恵器坏、土師器甕 | |

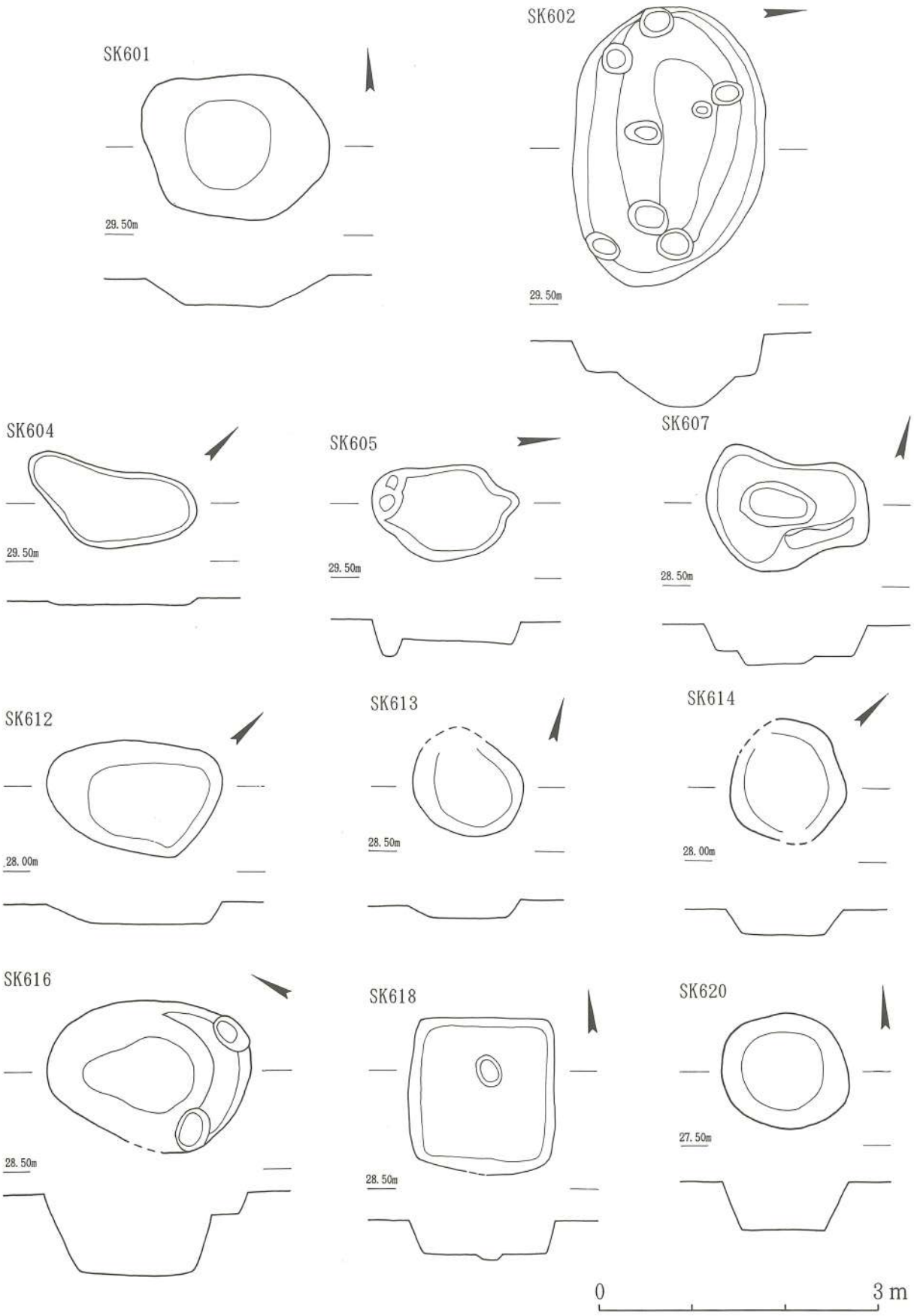



Fig.19　6区・7区出土土壙実測図(1)　SK-601・SK-602・SK-604・SK-605・SK-607・SK-612～SK-614・SK-616・SK-618・SK-620（1/60）

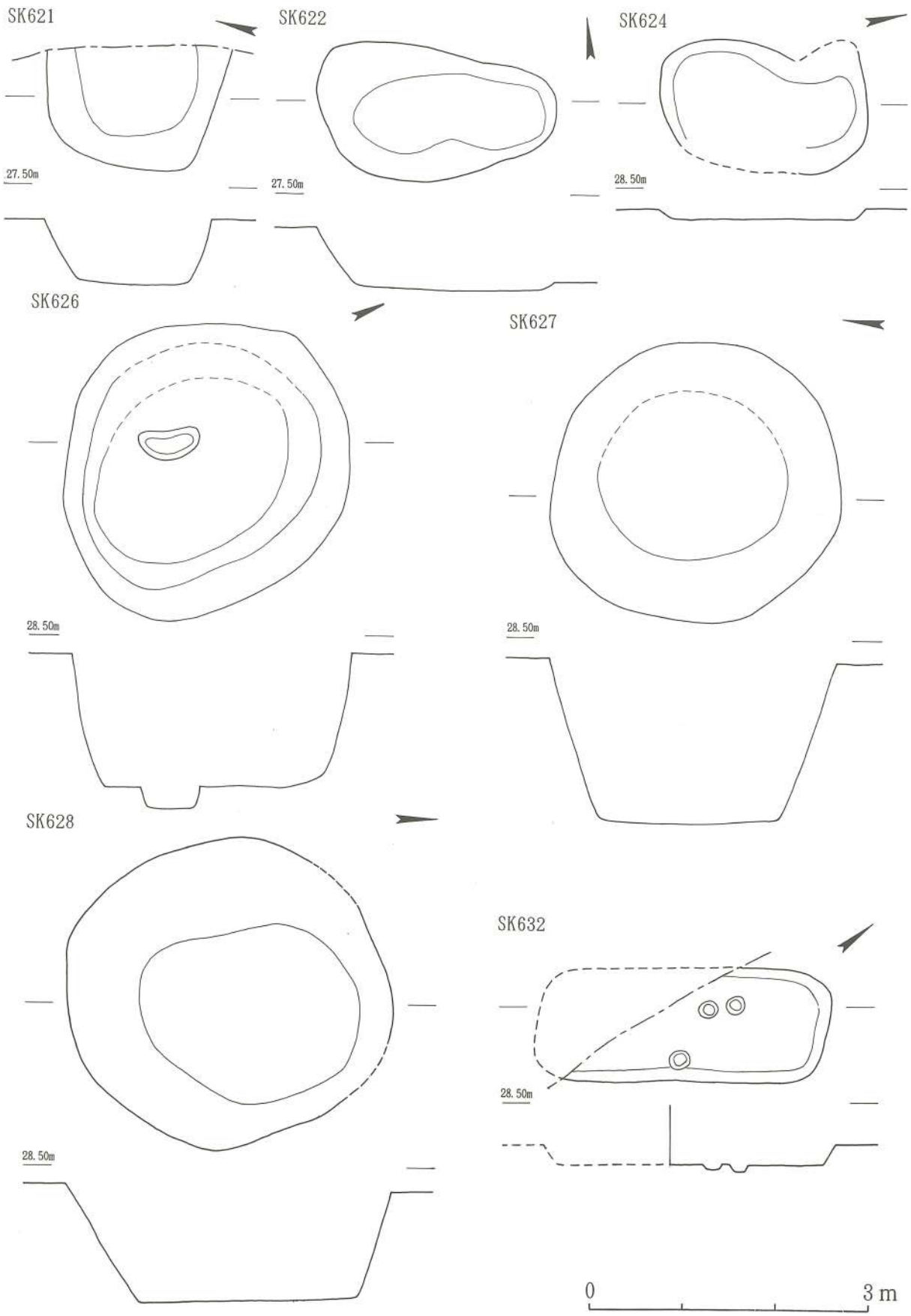



Fig.20　6区・7区出土土壙実測図(2)　SK-621・SK-622・SK-624・SK-626～SK-628・SK-632 (1/60)

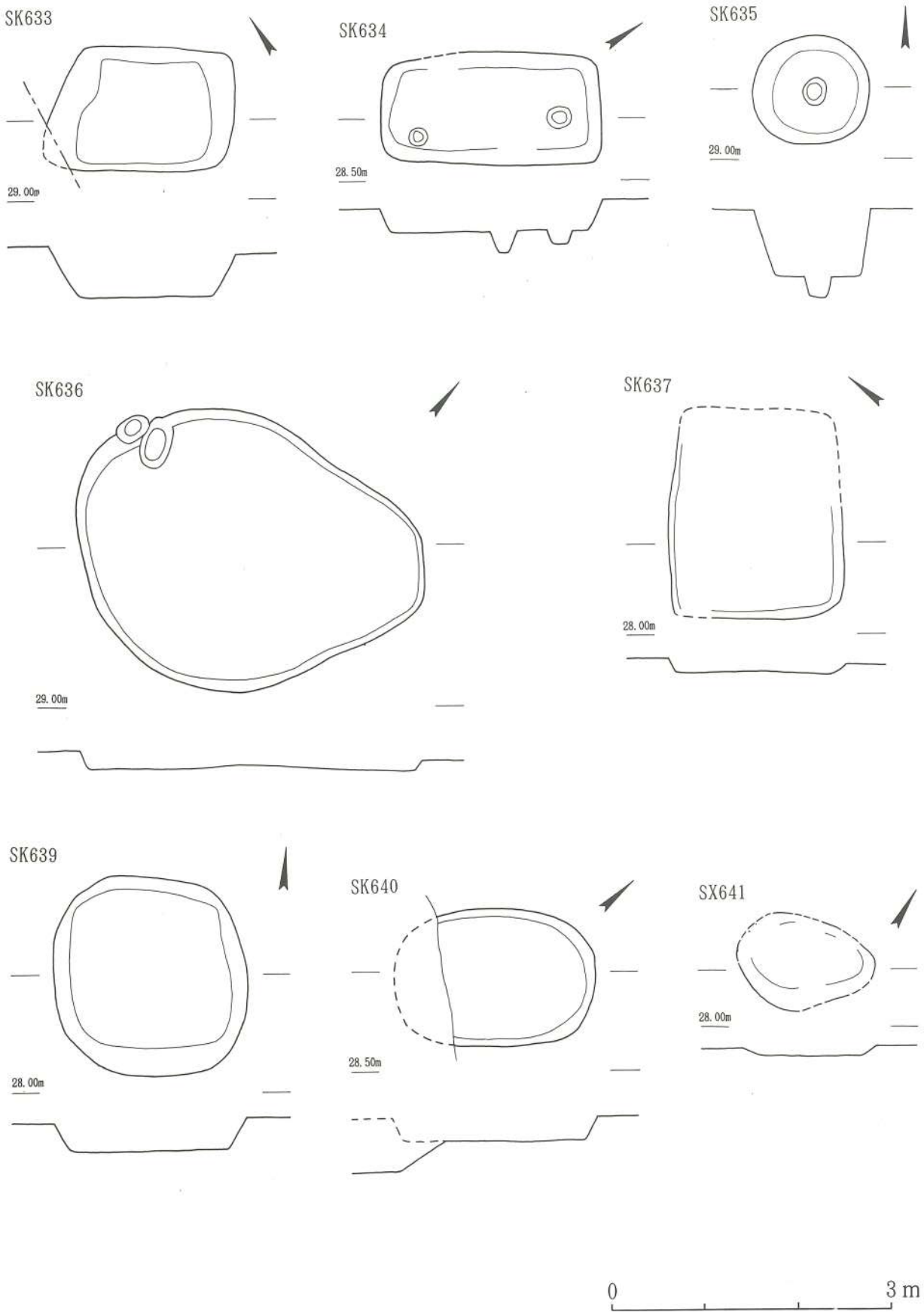



Fig.21　6 区・7 区出土土壙実測図(3)　SK-633～SK-637・SK-639・SK-640・SX-641（1/60）

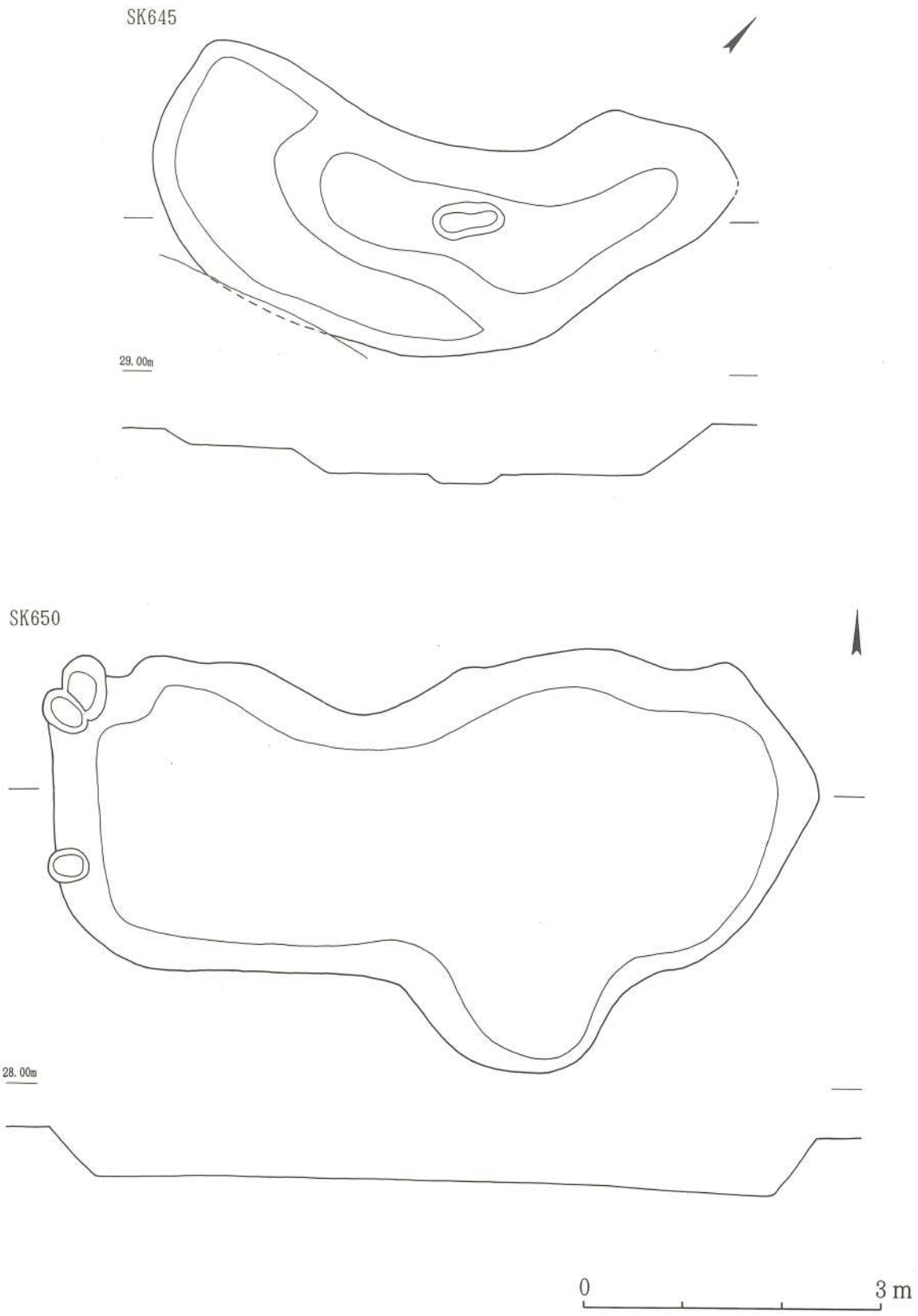



Fig.22　6 区・7 区出土土壙実測図(4)　SK-645・SK-650 (1/60)

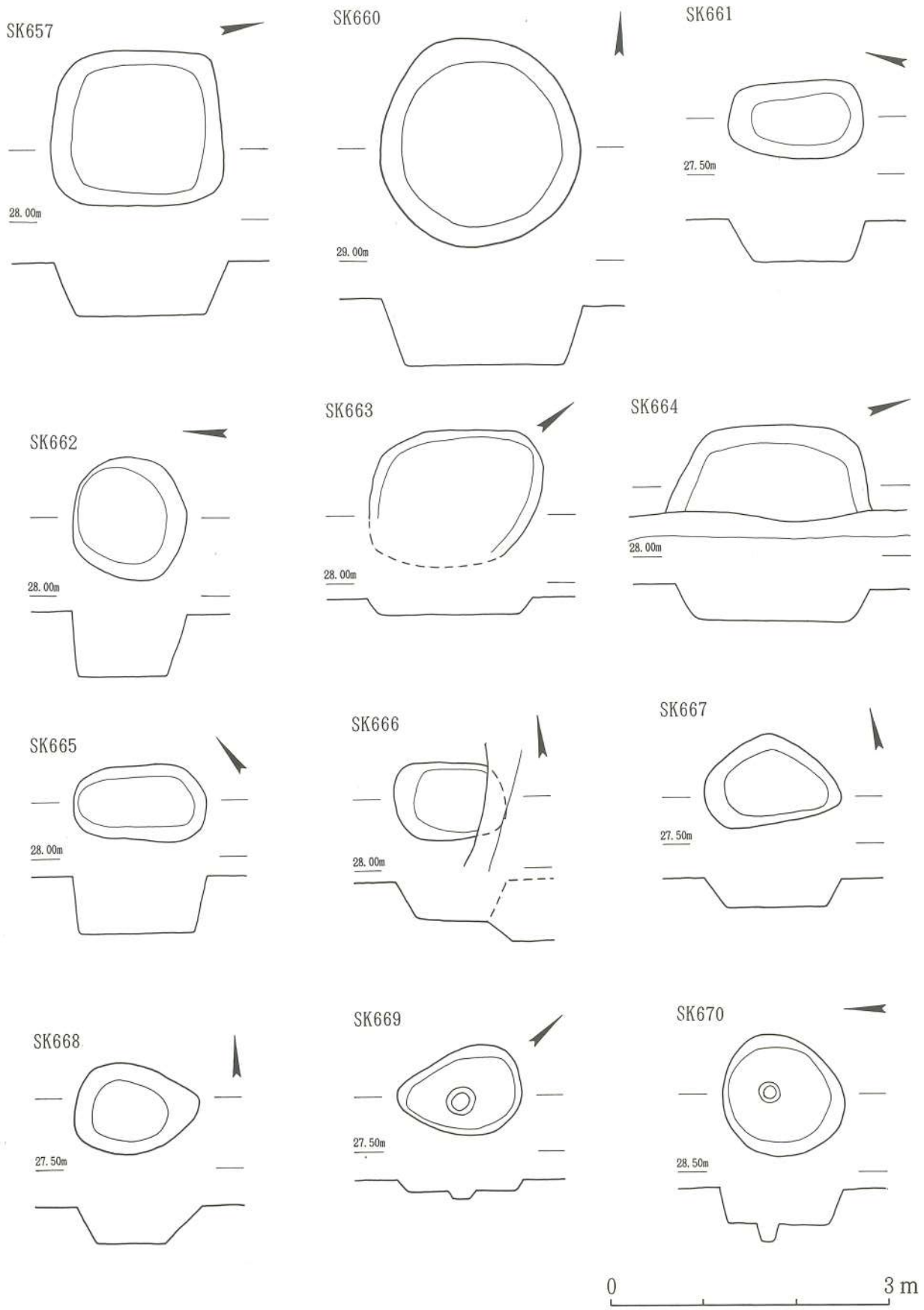



Fig.23　6区・7区出土土壙実測図(5)　SK-657・SK-660～SK-670（1/60）

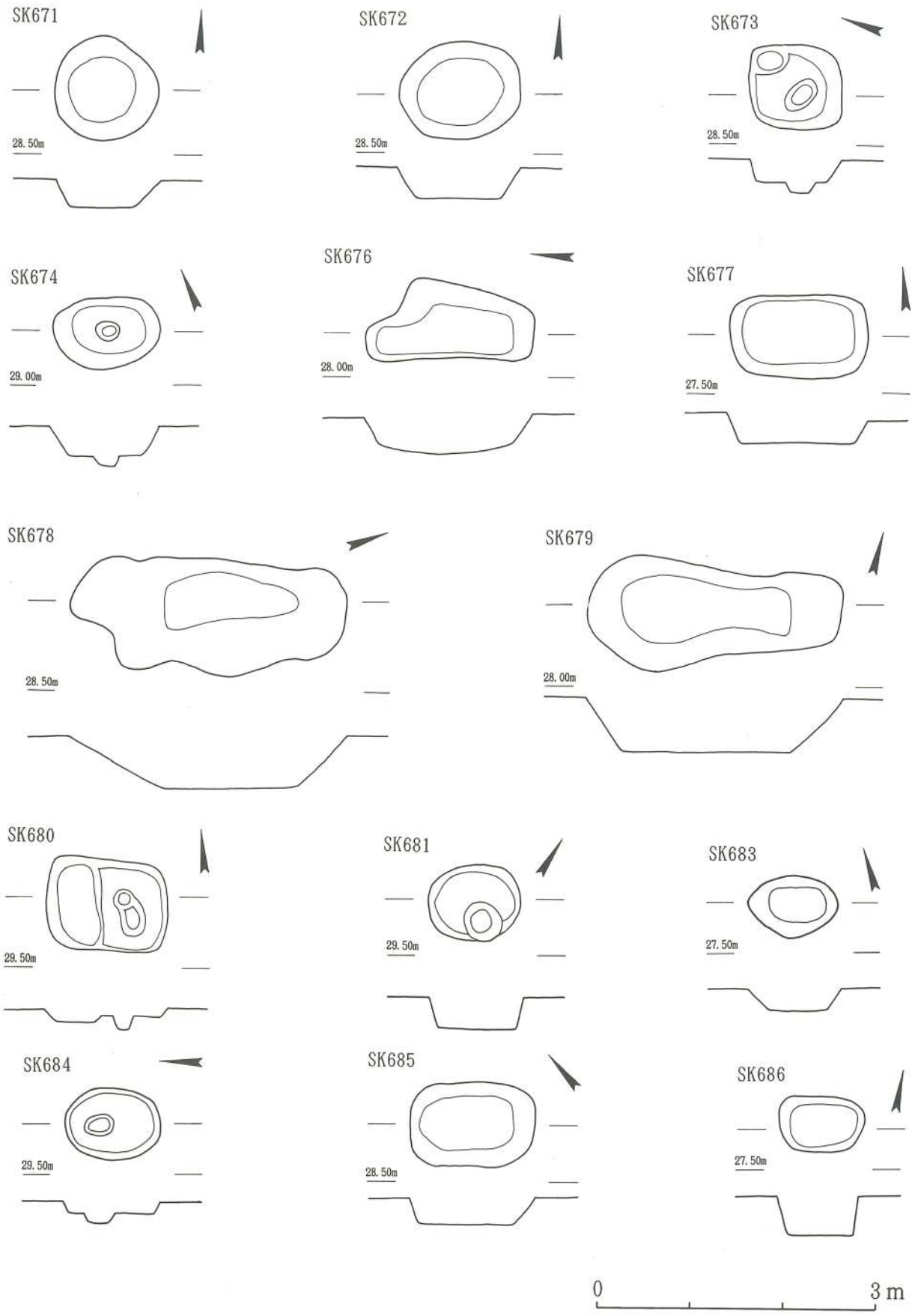



Fig.24　6区・7区出土土壙実測図(6)　SK-671～SK-674・SK-676～SK-681・SK-683～SK-686 (1/60)

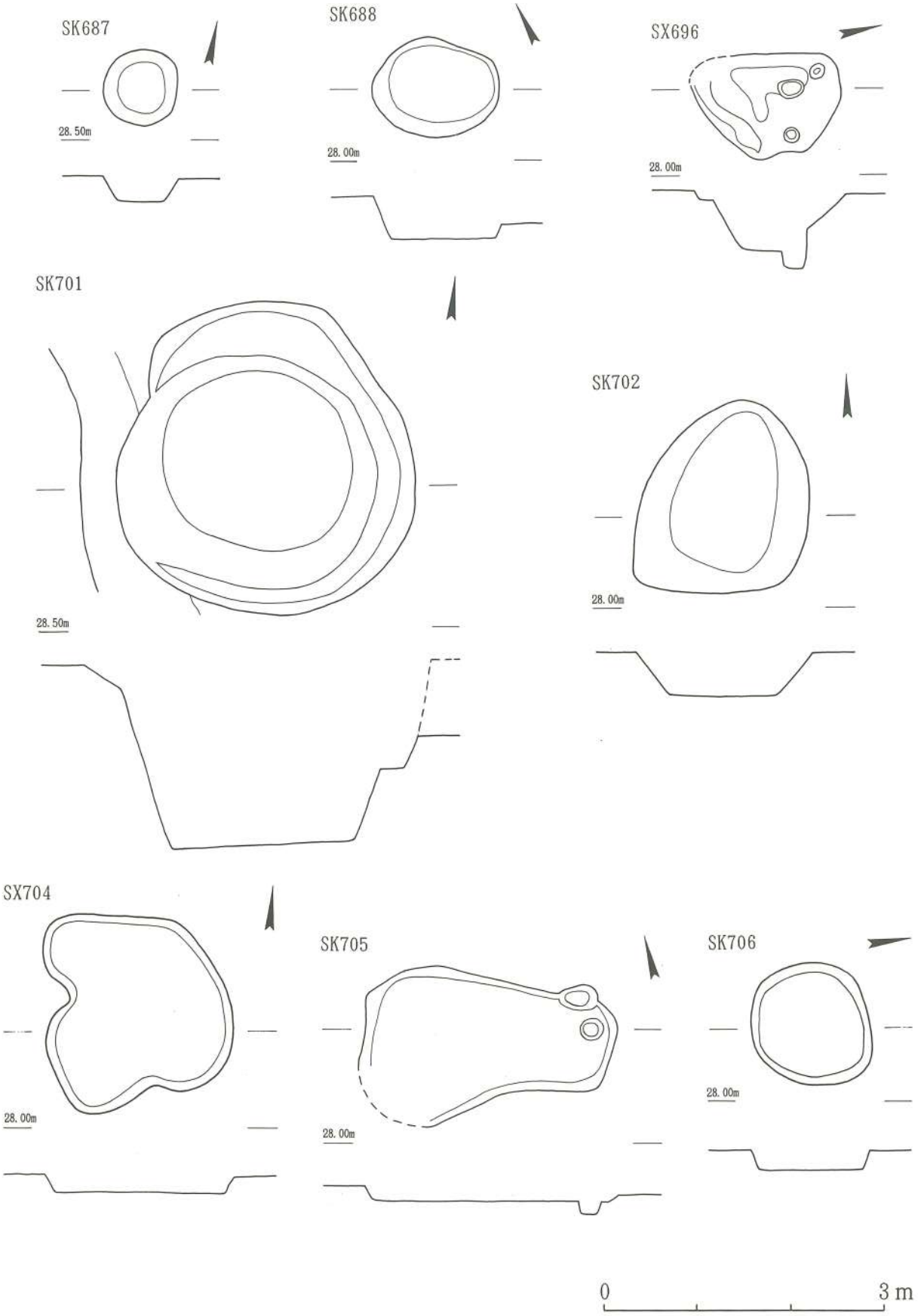



Fig.25　6区・7区出土土壙実測図(7)　SK-687・SK-688・SK-696・SK-701・SK-702・SK-704～SK-706（1/60）

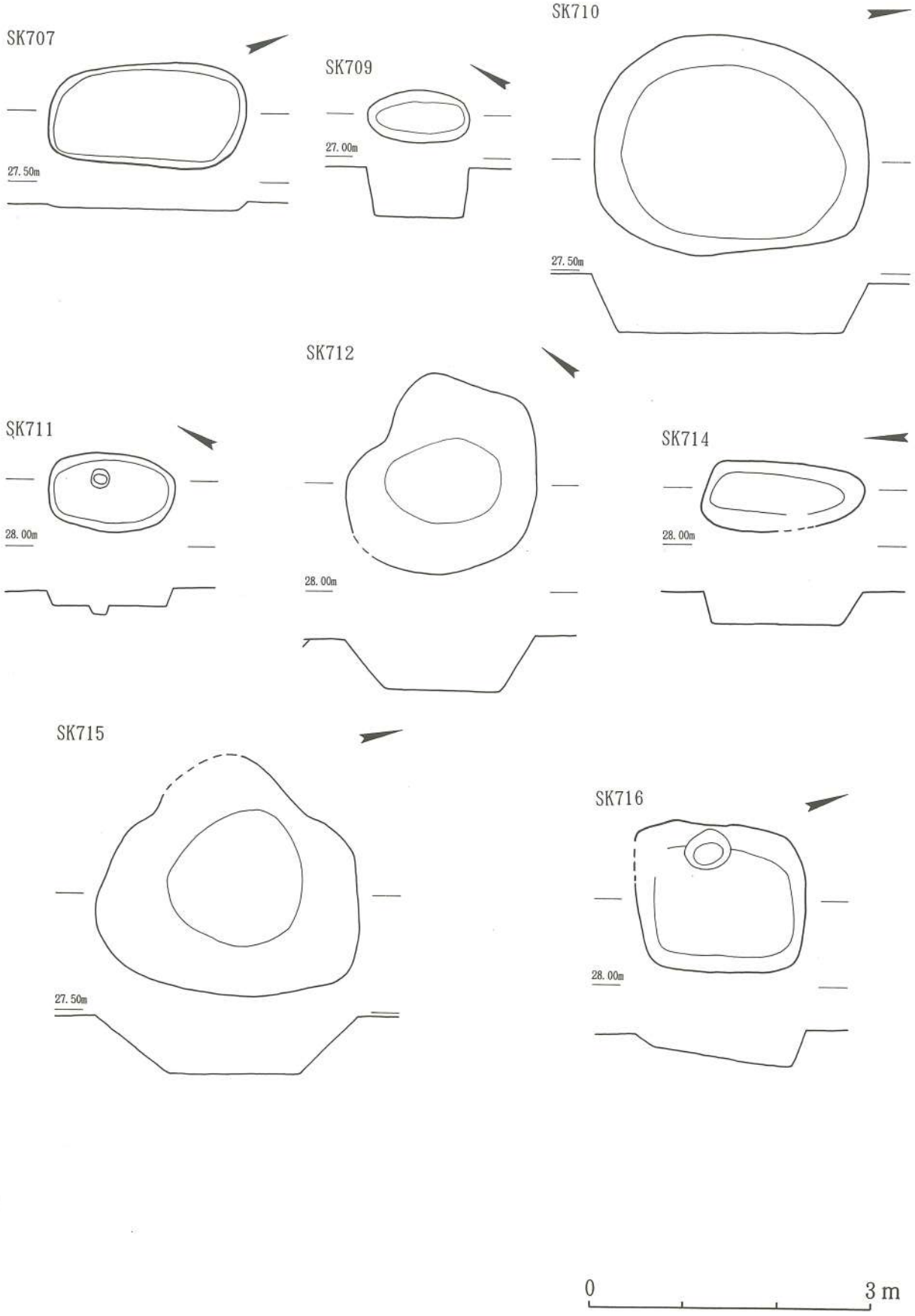



Fig.26　6区・7区出土土壙実測図(8)　SK-707・SK-709～SK-712・SK-714～SK-716 (1/60)

(4) **火 葬 墓** SX-644 (Fig.27、30・PL.17)

SX-644は、6区H－7、8 Gr.で検出された火葬墓で、今回の調査での唯一の検出例である。一次墓壙は、長辺4.45m、短辺3.82m、深さ0.25mの北東隅が丸みを帯びた不正な長方形を呈す。一次墓壙の中央やや西に寄った部分に、一次墓壙とほぼ直交する、長辺2.24m、短辺1.16m、深さ0.16mのやや不正な隅丸長方形の二次墓壙が掘り込まれている。埋葬主体部は、倒置した須恵器の短頸壷(Fig.30—35)が用いられ、これを自然礫で周囲から固定したものと考えられるが、後世の破壊によって原位置を失っている。このほかに、墓壙からは、主体に用いられている壷とは別個体の須恵器壷の底部破片、須恵器坏2固体が出土している (Fig.30—33・34・36)。

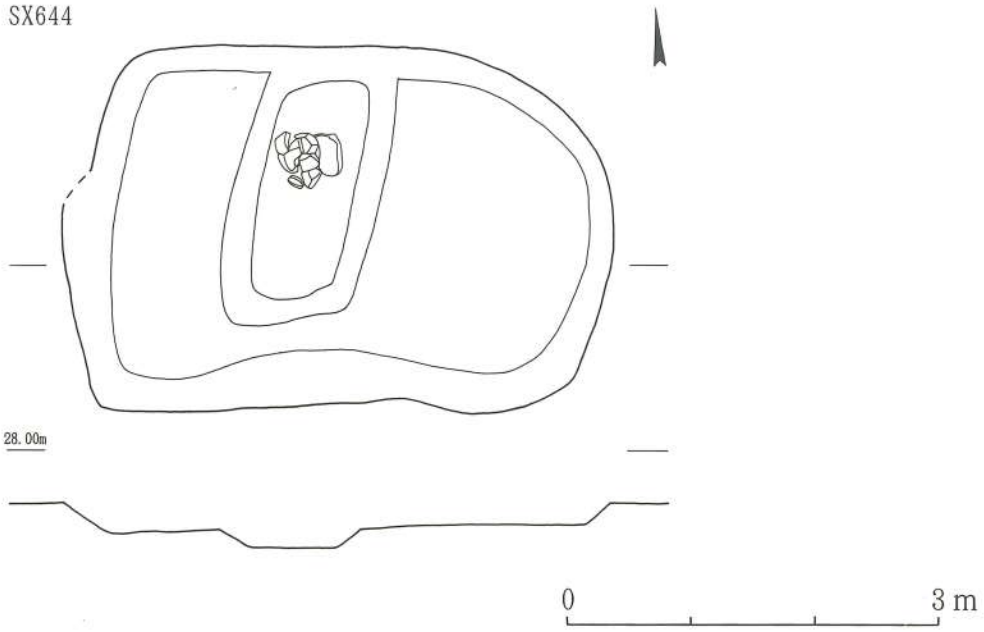



Fig.27　6区・7区出土火葬墓実測図　SX-644 (1/60)

(5) **溝　　跡** (Fig.28・PL.1、2、18)

溝跡は、後世の耕作に伴う用排水路と考えられるものは多数検出されたが、覆土の様子や出土遺物などからある程度古い時期のものと考えられるものについて報告する。

今回の調査において検出された溝跡は、平成2年度の農業基盤整備事業に係る堤土塁跡2区及び八藤遺跡4区の調査において堤土塁東側土塁の東端部から八藤遺跡4区にかけて丘陵をほぼ東西に横断する形で断続的に検出された道路側溝状遺構の延長部分とH、I－5 Gr.付近で検出された正確不明の溝状遺構SD-643の2遺構のみである。

**SD-608、SD-609、SD-910** (Fig.28・PL.1、2)

6区北部で検出されたSD-608、SD-609は、平成2年度の農業基盤整備事業に係る堤土塁跡2区及び八藤遺跡4区の調査において堤土塁東側土塁の東端部から八藤遺跡4区にかけて丘陵をほぼ東西に横断する形で断続的に検出された道路側溝状遺構に続く道路側溝状遺構で、平成2年度当時、堤土塁跡2区部分で北側溝SD-238、南側溝SD-239、八藤遺跡4区部分で南側溝SD-478、北側溝SD-488として調査を行った遺構の延長部分にあたる。

今回の調査においても、約６ｍの間隔で並行して延びる南北２条の溝が、調査区西限のＮ－５、６ Gr.から丘陵東端のＣ－２ Gr.まで、Ｎ－72°－Ｅの方向でほぼ直線的に断続的に延びており、その延長は116mに及んでいる。さらに、北側溝は、今回の調査区北限を越え、平成４年度調査区の９区の南端においても検出されており、３ヶ年で検出された総延長は216mとなっている。また、丘陵東端のＣ－２ Gr.(北側溝は９区のＣ－１ Gr.)の溝東端部は、丘陵東を流れる大谷川の侵蝕による段丘崖によって切られている。

南北の溝は、各々幅20cm～40cm、深さは深い部分で約30cm、平均では15cm程度の堀り込みが残るＵ字溝で、溝の中にはさらにピット状の落ち込みが見られるが、その間隔、規模などは様々で一定しておらず、その性格は不明である。南北の溝の間には、道路面と考えられるような硬化面や敷石などの施設は見られないことからも、後世の削平を受けているものと考えられる。

この溝跡からは、SD-609部分で、須恵器の坏、蓋などが出土している。

**SD-643** (Fig.28・PL.18)

SD-643は、Ｈ、Ｉ－５ Gr.付近で検出された円弧状の溝で、幅1.2m～1.9m、深さ0.4m～0.6m、円弧部分の延長約12mを測る。また、円弧の外周の一部に幅約１ｍ、長さ約２ｍ、深さ0.5mの突出した部分をもっている。この溝跡からは、須恵器の甕、支脚などが出土しているが、溝の性格は不明である。

## ４．遺　　物

今回の調査では、各遺構などから縄文時代、弥生時代、奈良時代及び中世の各時代の土器や石器などが出土している。なお、近世以降の遺物も少なからず出土しているが、紙面の都合で割愛した。

出土遺物の量は、遺構数からすると決して多くなく、むしろ少ないと言えよう。ここでは、土器の代表的なものを遺構ごとに、その他の土製品、石器類、鉄器などは器種ごとに報告する。

なお、実測図中の土器拓影、断面は、縮尺1/3であり、遺物番号のあとに「1/3」と表記した。特記のないものはすべて縮尺1/4である。また、実測図、写真図版に付した遺物番号は一致する。

### (1) 土　　器 (Fig.29～40・PL.18～28)

**SD-609出土土器** (Fig.29・PL.18)

１は、須恵器蓋、つまみは失われており、口縁部が小さく下方に摘まれている。２、３は須恵器皿、口縁部はやや内湾しながら開く。

**SK-612出土土器** (Fig.29)

４は、須恵器坏 底部は失われており 外面にはロクロ目を明瞭に残す。体部は直線的に外傾し、口唇部が小さく外反する。

**SK-614出土土器** (Fig.29・PL.18)

５は、胴部上位の屈曲部に刻み目凸帯をもつ深鉢。刻み目は小さく間隔が広い。

**SK-618出土土器** (Fig.29・PL.18)

６は、土師器坏。底部は平底で切り離し後粗いナデ、体部は外反しながら開き口縁部に至る。底面に「森」かと思われる墨書をもつ。７、８は、土師器甕。７は、胴部内面ヘラ削り。９は、土師器坏、口縁部が小さく外反して開き、浅い半球系の体部をもつものと思われる。10は、須恵器皿、口縁部は外反しながら開く。

Fig.28　6 区・7 区出土溝跡実測図　SD-608・SD-609・SD-910・SD-643（1/200）

**SD-623出土土器**（Fig.29）

11は、SD-623として調査を行った近世溝から出土した中世土器で、口縁部は内湾しながら立ち上がり口唇端部は平坦面をもつ。底面には同心円状のカキ目が施されており、土鍋あるいは焙烙様の器と考えられる。

**SH-625出土土器**（Fig.29・PL.19）

12、14、15は、いずれも甕。12は、台状に裾部が開く上げ底の甕の底部。14は、口縁部に凸帯もち、逆L字形口縁に近い形態を呈す。15は、口縁部と胴部上位に断面三角形の凸帯がめぐる。13は蓋、つまみ上部にくぼみをもち、体部は笠状に外反しながら開く。16は、甕棺墓に用いられる大型甕の口縁部で、如意形に開く口縁部内側に断面三角形の凸帯がめぐる。

**SD-628出土土器**（Fig.29）

11は、土師質の偏平な鍋。やや上げ底の底部に内湾しながら立ち上がる短い口縁がつく。底部内面には同心円状のカキ目をもつ。SD-623として調査した近世以降の耕作溝から出土した。

**SH-631出土土器**（Fig.29）

17～19は、口縁または胴部上位に凸帯をもつ甕。17、18は刻み目が施されている。17の刻み目はシャープで深く、先端の鋭いヘラ状工具により施文されている。18は口縁部破片、刻み目はにぶく、指頭の押圧によるものと思われる。19には刻み目はみえない。

**SK-634出土土器**（Fig.29・PL.19）

20は、須恵器皿、底部はやや丸底気味で、体部は外傾し、口縁部が外反する。底面は、切り離し後粗くなでられ、一文字状の記号がヘラ描きされている。

**SK-637出土土器**（Fig.29、30・PL.19、20）

21～23は、口縁と胴部上位に断面三角形の突帯をもつ甕。21は同一固体であるが、口縁部と胴部下位は直接接合できなかった。22はそれぞれの凸帯にヘラ状工具の先端による細かな刻み目が施されている。23は、口縁部の凸帯には刻み目は見えず、胴部上位の凸帯に爪先を押しつけたような刻み目が施されている。

**SB-638出土土器**（Fig.30）

24は、須恵器高台坏、坏部底面より内側に設けられた小さい高台は外へ開き、体部はやや外反しながら開く。25は、口縁が外反しながら大きく開く土師器甕。

**SK-639出土土器**（Fig.30）

26は、須恵器高台坏、坏部底面より内側に設けられた高台はやや外へ開き、体部は内湾しながら開く。27は、盤で、「ハ」の字形に開く高台をもつ。

**SK-640出土土器**（Fig.30・PL.20）

29は、須恵器長頸壷、「ハ」の字形に開く高台をもち、胴部は直線的に開きながら立ち上がる。肩部と胴部の境界は強く屈曲し明瞭な稜をもつ。肩部は内湾しながら頸部へ到る。頸部には粘土を絞った際のたわみが残る。

**SX-641出土土器**（Fig.30・PL.20）

28は、須恵器甕、頸部は短くくびれ、口縁は大きく外反しながら開く。肩部外面には格子目の叩き目を残す。

**SD-643出土土器**（Fig.30・PL.20）

30、31は、須恵器甕の口縁部。30は、口縁部がやや外反しながら開き、口唇部は折り返されている。肩部には内面同心円、外面格子目の叩き目を残す。31は、短く厚い口縁部が外反しながら開く。32は、中空の土製支脚で、直径約2cmの穴が上下に貫通している。体部中位がゆるやかにくびれ、受け部と裾部がそれぞれ広がっている。

また、外面は縦に面取りが施されている。

**SX-644出土土器**（Fig.30・PL.20）

33～36は、火葬墓出土土器。33、34は須恵器高台坏。33は、「ハ」の字形に開く高台をもち、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は小さく外反し肥厚する。34は、坏部底面より内側に設けられた高台がやや外へ開き、体部は直線的に立ち上がり開く。35は、内部主体の蔵骨器として使用された須恵器壷で短頸壷と考えられる。胴部外面下半部には回転ヘラ削り痕を残す。36も須恵器の壷の底部と考えられる破片で胴部以上は意図的にうち欠かれている。高台はなくやや上げ底気味の底面には、焼成時に融着した別固体の破片が付着している。

**SK-645出土土器**（Fig.30・PL.21）

37、38は、須恵器蓋。37は、口縁部が一旦外反し、端部がやや内側に屈曲する。38は、天井部から内湾しながら口縁部に至り、口縁端部が下方へ屈曲する。39は、土師器甕。外反しながら大きく開く口縁部をもつ。内面ヘラ削り、外面ハケ目調整。

**SK-650出土土器**（Fig.31、32・PL.21～24）

42～56は坏類。45のみが土師器で、他はすべて須恵器である。42～44、46～49は平底の坏、50～56は高台坏である。42、44、47、48は、体部がやや外反しながら開くもの。43、46、49は、体部がほぼ直線的に開くもの。45は、浅い半球径の体部に小さく外反する口縁がつく。50は、坏部底面外周に小さく外反する高台をもち、体部は直線的に開く。51は、坏部底面より内側に「ハ」の字形に開く高台をもち、体部はやや内湾しながら開く。52は、坏部底面より内側に「ハ」の字形に開く高台をもち、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は小さく外反し肥厚する。53、56は、「ハ」の字形に開く高台をもち、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は肥厚する。50は、底面に「三長」と思われる墨書をもつ。53、54は、見込みに「×」字状の記号がヘラ描きされている。
57～61は須恵器皿。いずれも平底で、口縁が直線的に開く59をのぞくと口唇部が小さく外反している。63～70は、須恵器蓋類。62、63は、口縁端が下方に屈曲している。64は、大型の蓋で口縁端部は肥厚し玉縁状を呈す。65～70は、天井部は平坦に近く、断面が四角形あるいは逆台形のつまみをもつ。口縁端部は小さくつままれている。71は須恵器短頸壷で短い口縁がほぼ直立する。72、74は、須恵器の甕の口縁部。いずれも大きく開く口縁の端部を内側に屈曲させている。口縁下部には、72は棒状工具の先端による波状文が、74は櫛状工具による波状文がめぐっている。73は、須恵器鉢で、体部上位で内湾し口縁に到る。75は須恵器提瓶。胴部の屈曲部から天井部、把手の一部が遺存している。76、77は、須恵器高坏。76は脚部の一部。77は太く短い脚部で、裾端部は小さくつままれている。78は、土師質の釜？胴部中位に外耳をもつ。79は、土師器の鉢。やや内湾しながら大きく開く体部に分厚い口縁がさらに開く。内面ヘラ削り、外面ナデ調製。80は、土師器甑。胴部上位が開き口縁部に至る。内面横位のハケ目調製。81～86は土師器甕。81、83は胴部上位が開き直接口縁部に至るもの。81、83は外面ハケ目、内面ヘラ削り調整。82、84～87は胴部上位が一旦くびれ、口縁部が大きく外反するもの。82、84、86は、口縁内面に横位のハケ目がみられ、外面は縦位のハケ目調整。85は、内面ヘラ削り、外面ハケ目調整。87は、外面ハケ目調整。

**SB-652出土土器**（Fig.33・PL.25）

建物周辺をめぐる雨落ち溝と考えられる溝跡から出土した。110は、土師器坏。平底で体部は直線的に開き、口唇部が小さく外反する。111は、須恵器皿。平底でやや外反する口縁をもつ。112は、土師器甑。胴部上位が開き直接口縁部に至る。

**SK-657出土土器**（Fig.30、32・PL.21、24～25）

40は、坏を大きくしたような形態を呈す土師器の鉢。体部は直線的に開く。41は、土師器の甕。頸部がくびれ、口縁は小さく外反し開く。88は、土師器の鉢。丸底気味の平底から曲線的に体部が立ち上がり、口縁部は外反し外へ開く。内面ナデ、外面にはハケ目を残している。89は、やや大振りの須恵器高台坏。坏部底面外周に短い高台をもち、体部は内湾しながら開き、口縁がやや外反する。90は、須恵器高台坏。坏部底面内側に外へ開く高台をもち、体部は直線的に開く。91は、須恵器坏。体部は直線的に開き口縁端部が小さく開く。92は、須恵器皿。口縁はやや外反しながら開く。93は、須恵器蓋体部はやや内湾しながら開きそのまま口縁に至る。

**SK-660出土土器**（Fig.32、33・PL.25）

94は、口縁部と胴部上位に刻み目凸帯をもつ甕。ヘラ状工具の先端による細かな刻み目が施されている。95、97は、胴部の凸帯指頭の押圧により太く鈍い刻み目が施されている。96は如意形口縁の甕で、口縁下端にヘラ状工具の先端による細かな刻み目が施されている。98は、甕の上げ底の台状底部。99は、鉢。半球径の体部で、口縁部に断面四角形の外へ垂れた凸帯がつく。

**SK-662出土土器**（Fig.33・PL.25）

100～103は、口縁部と胴部上位に刻み目が施された凸帯がめぐる甕。刻み目は、いずれも細かく、ヘラ状工具の先端によって施文されている。

**SK-663出土土器**（Fig.33・PL.25）

104は、広口壷。同一固体ではあるが、直接接合はできなかった。内外面および底面が刷毛調整。外面と口縁内面は赤色塗彩されている。105、106はともに壷の底部。105の内面には指頭圧痕が残る。

**SK-665出土土器**（Fig.33）

107は、甕の底部。外面ハケ目調整。108は逆L字形口縁の甕。

**SK-670出土土器**（Fig.33・PL.25）

109は、須恵器蓋。天井部は落ち込み、断面四角形に近い低いつまみをもつ。口縁は下方に屈曲している。

**SD-698出土土器**（Fig.33・PL.26）

113は、縄文土器の深鉢の円盤状底部。114は、土師器坏あるいは中世のかわらけ。底部のみが残り、底面に「向」の墨書。SD-698として調査した近世以降の耕作溝から出土した。

**SK-701出土土器**（Fig.34・PL.26）

115は、須恵器皿。短い口縁がやや外反しながら開く。116、117は、須恵器蓋。116は、口縁部外面が玉縁状に肥厚する。177は、口唇端部が小さく下方につままれている。

**SK-702出土土器**（Fig.34・PL.26）

118は、須恵器高台坏。坏部底面の内側に小さく低い高台をもち、体部はやや外反しながら開く。底面から高台にかけて数条の直線がヘラ描きされている。119は、須恵器蓋。口縁部は下方に鈍く屈曲し、断面は「コ」の字に近い形状を呈す。

**SX-704出土土器**（Fig.34）

120は、やや丸底気味の須恵器皿、短い口縁がやや外反しながら開く。

**SK-705出土土器**（Fig.34・PL.26、27）

121は、土師器鉢。88と同様の形態を呈す。122は、須恵器蓋。つまみは断面逆台形を呈し、天井部は平坦。口縁は一旦跳ねて内側に折られている。123は、須恵器の浅い皿。口縁部がやや外反しながら開く。底面中央に6状

の線がヘラ描きされている。124～126は、須恵器坏。124、125は、平底の坏で体部は直線的に開く。124は、口縁が肥厚している。126は、浅い丸底の坏で、体部は直線的に開き口唇端部が小さく開いている。127は、須恵器高台坏。「ハ」の字形に開く径が広い高台をもち、体部はやや内湾しながら立ち上がる。口縁部は小さく外反する。

**SK-707出土土器**（Fig.34・PL.27）

128、129は、丸底気味の須恵器坏。体部は直線的に開く。128は、口唇端部が小さく外へつままれている。130は、須恵器高台坏。坏部底面より内側に短い高台がつく。体部は直線的に開く。131、132は、土師器高坏。131は、口縁部が丸みを帯びて立ち上がる。132は、口縁部が「く」の字形に屈曲し開く。131は、須恵器蓋。つまみは断面逆台形を呈す偏平な蓋。134は、須恵器蓋。疑宝珠様のつまみをもち体部は深い。壷などの蓋と考えられる。135は、須恵器長頸壷の胴部。肩部に張りをもつ。

**SK-711出土土器**（Fig.34・PL.27）

136は、須恵器皿。体部は内湾しながら開き、口縁部は外反する。137は、須恵器蓋。口縁端部は鈍く下方に折り曲げられている。138は、土師器甕。内外面ともにハケ目調整。

**SK-712出土土器**（Fig.35・PL.27）

139は、須恵器蓋口縁部は一旦外反し、下方に小さく屈曲する。140は、土師器鉢。丸底様の底部から体部が大きく外反しながら開き、口唇部は玉縁状を呈す。141は、土師器甕。丸底で下ぶくらみの胴部をもち、口縁部は外反しながらやや開く。142は、須恵器甕。大きく開く口縁の端部を内側に屈曲させている。口縁下部には、先端を割ったようなヘラ状工具による２条の平行する波状文がめぐる。

**SK-716出土土器**（Fig.35・PL.28）

143は、平底の須恵器坏。体部は直線的に開き、口唇端部は小さく外反する。144は、須恵器高台坏。坏部底面より内側に「ハ」の字形に開く高台がつき、体部は直線的に、口縁部が小さく外反する。145、146、148は、土師器甕。内面ヘラ削り、外面ハケ目調整。147は、土師器甑。胴部上位が開き口縁部に至る。内面ヘラ削り調整。

**SK-717出土土器**（Fig.35）

149は、須恵器皿。体部は外反しながら立ち上がり、口縁部が大きく開く。

**SD-720出土土器**（Fig.35・PL.28）

150、151は、土師器甕。外面ハケ目調整。152は、須恵器の壷の口縁部。朝顔状に開く口縁で、口唇端部は玉縁状に肥厚する。153は、須恵器の長頸壷。SD-720として調査した近世以降の耕作溝から出土した。

### (2) 土製品・石器・鉄器（Fig.36・PL.28～30・Tab. 4）

今回の６区・７区の調査では、土器のほかに、土製品、石器、鉄器が出土している。ここでは、それらについて器種ごとに簡単に報告する。なお、個々の遺物の出土地点、法量などは、Tab. 4 にまとめたのでそちらを参照されたい。

**ふいご羽口**（Fig.36・PL.28）

154は、素焼のふいご羽口。円錐台形を呈し、直径４cm程の穴が上下に貫通している。端部は、基部、先端部ともに失われ不明であるが、火に近い先端部分は還元炎を受けて灰色を呈す。SK-612出土。

**石　　鋲**（PL.29）

155は、涙滴形を呈す石鋲あるいは石槍。凸レンズ状の断面をもつ横長の剥片を縦位に使用し、側縁部と基部に細かい調整を加えている。表裏ともに主剥離面を残している。サヌカイト製。SH-619出土。

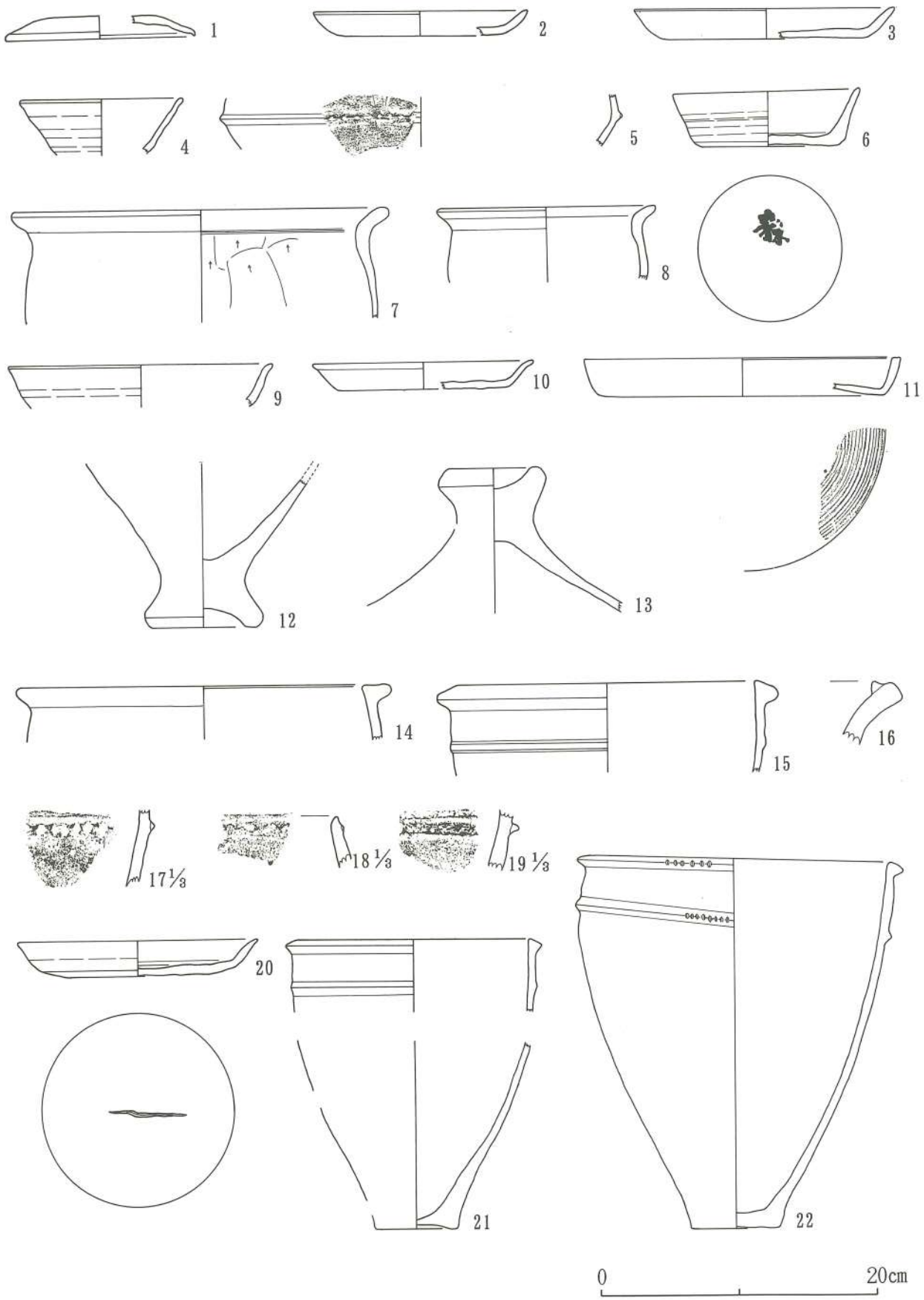



Fig.29　6 区・7 区出土遺物実測図(1)（1/4）

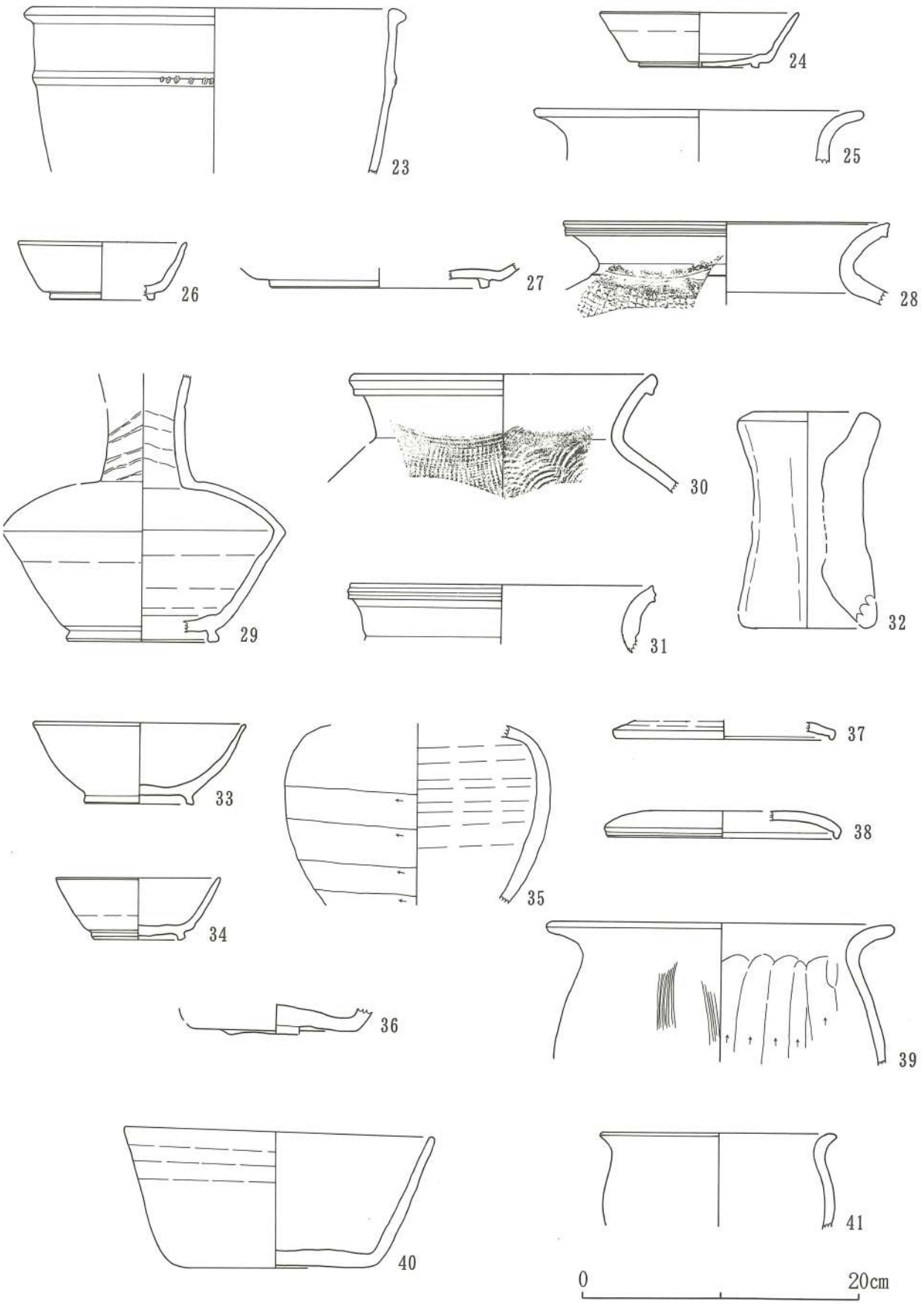



Fig.30　6区・7区出土遺物実測図(2)（1/4）

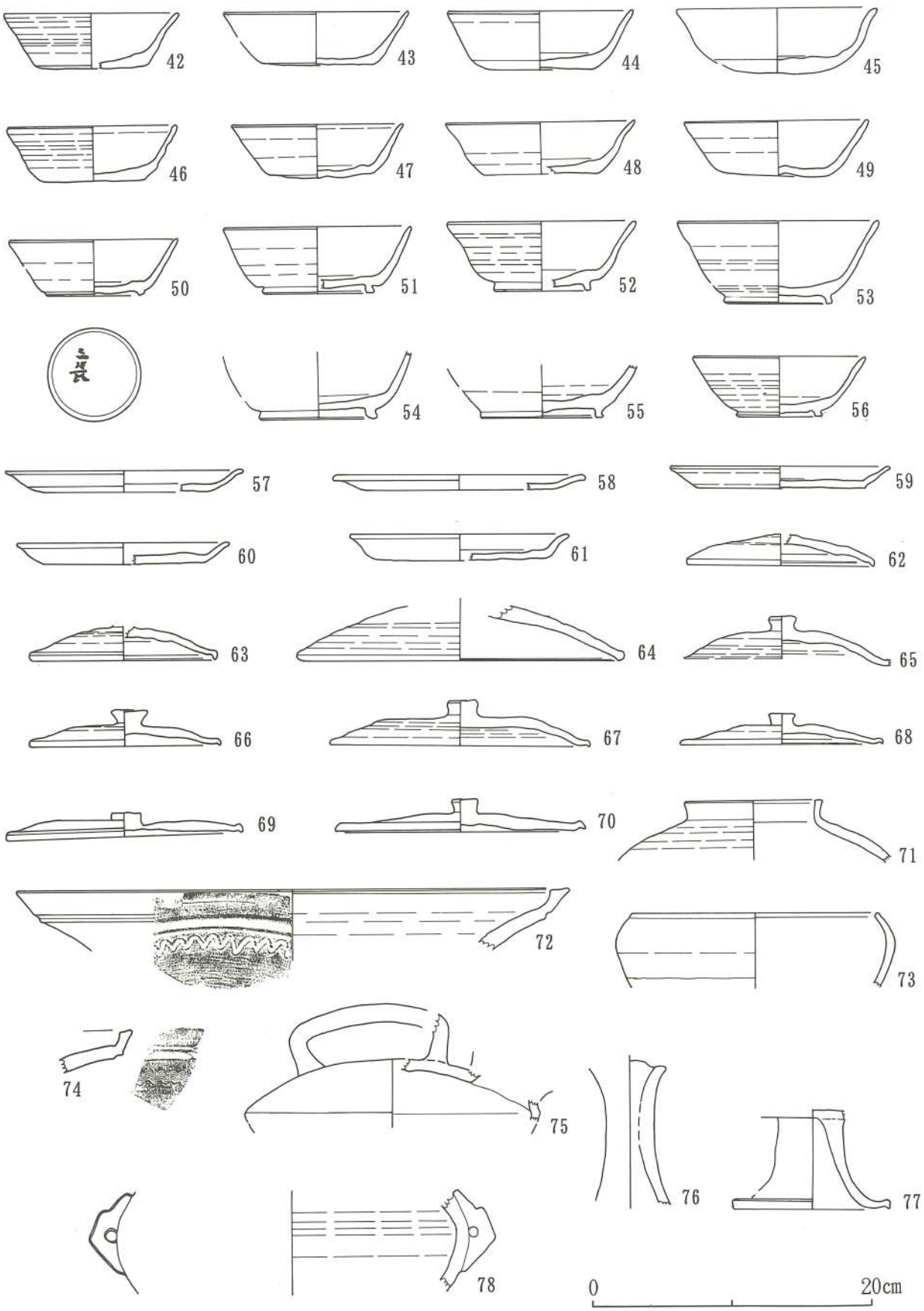



Fig.31　6区・7区出土遺物実測図(3)（1/4）

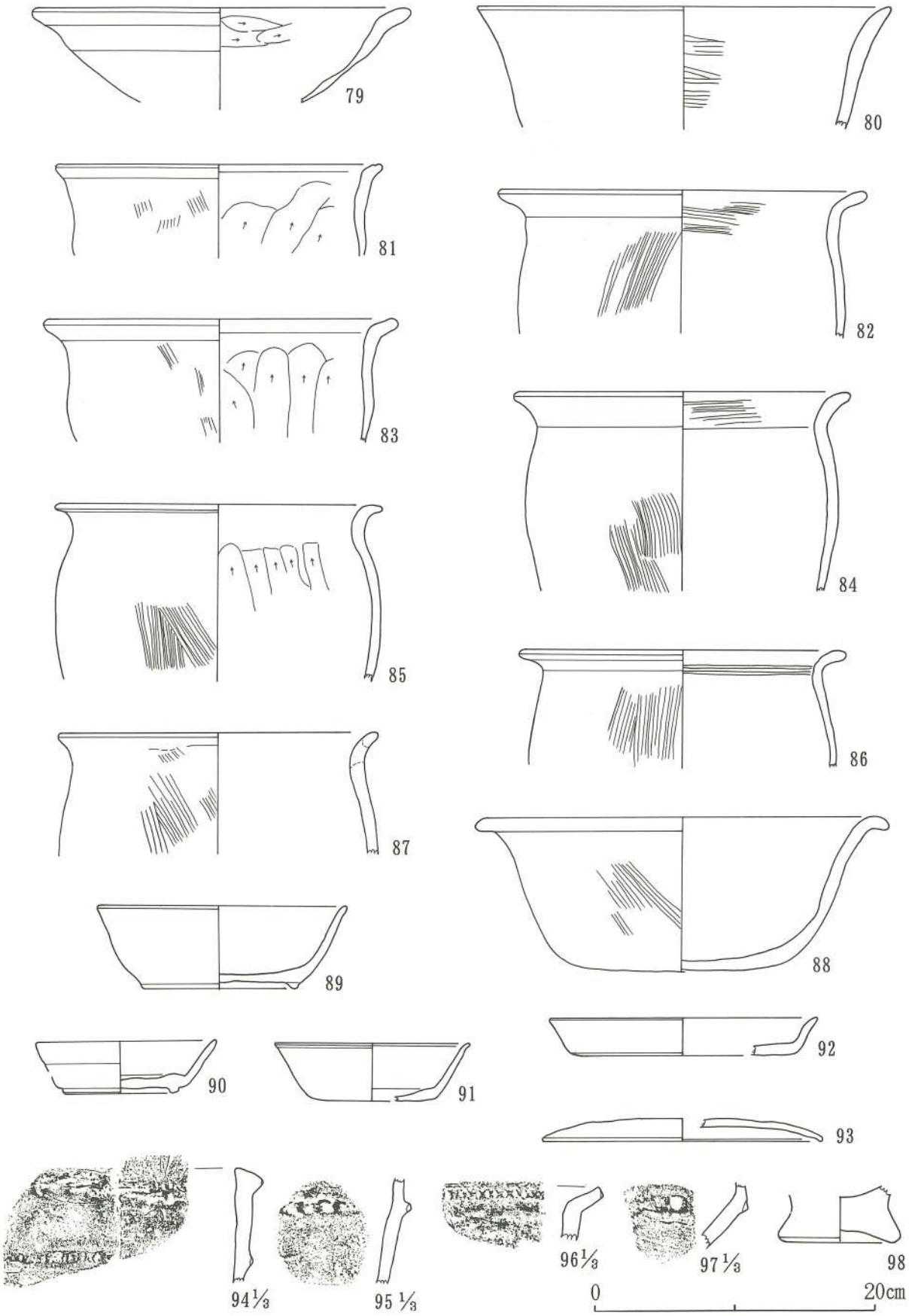



Fig.32　6区・7区出土遺物実測図(4)（1/4）

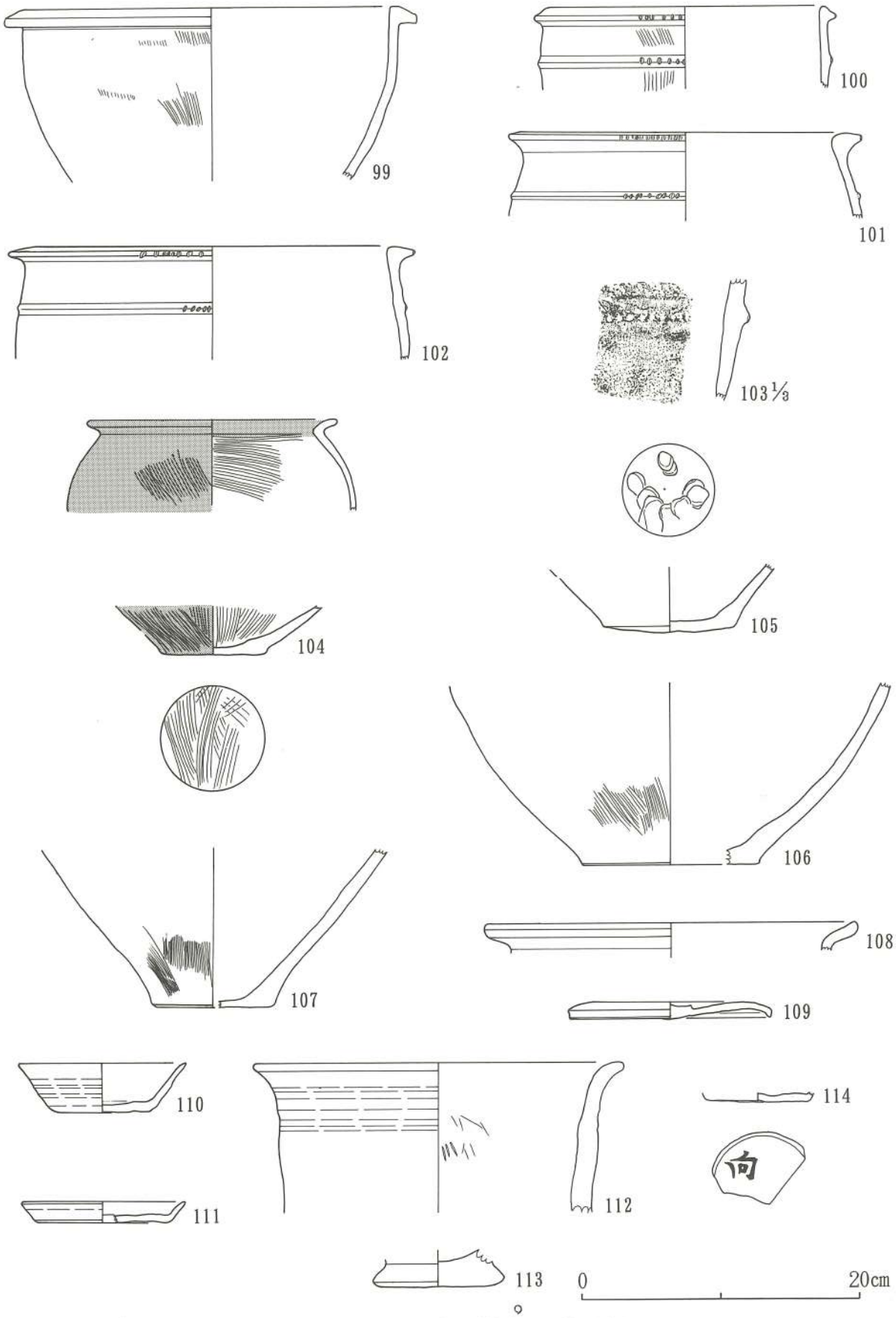



Fig.33　6区・7区出土遺物実測図(5)（1/4）

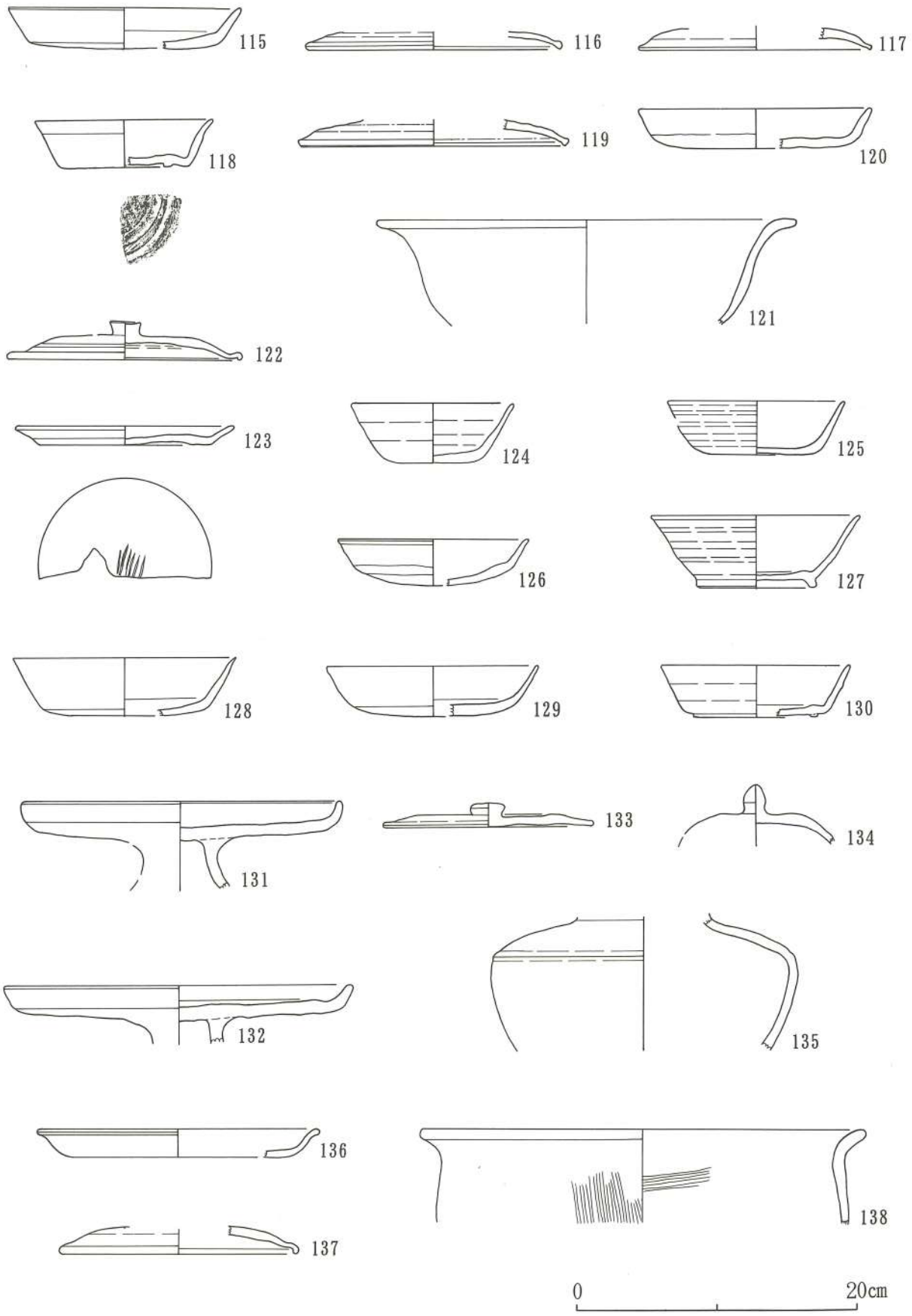



Fig.34　6区・7区出土遺物実測図(6)（1/4）

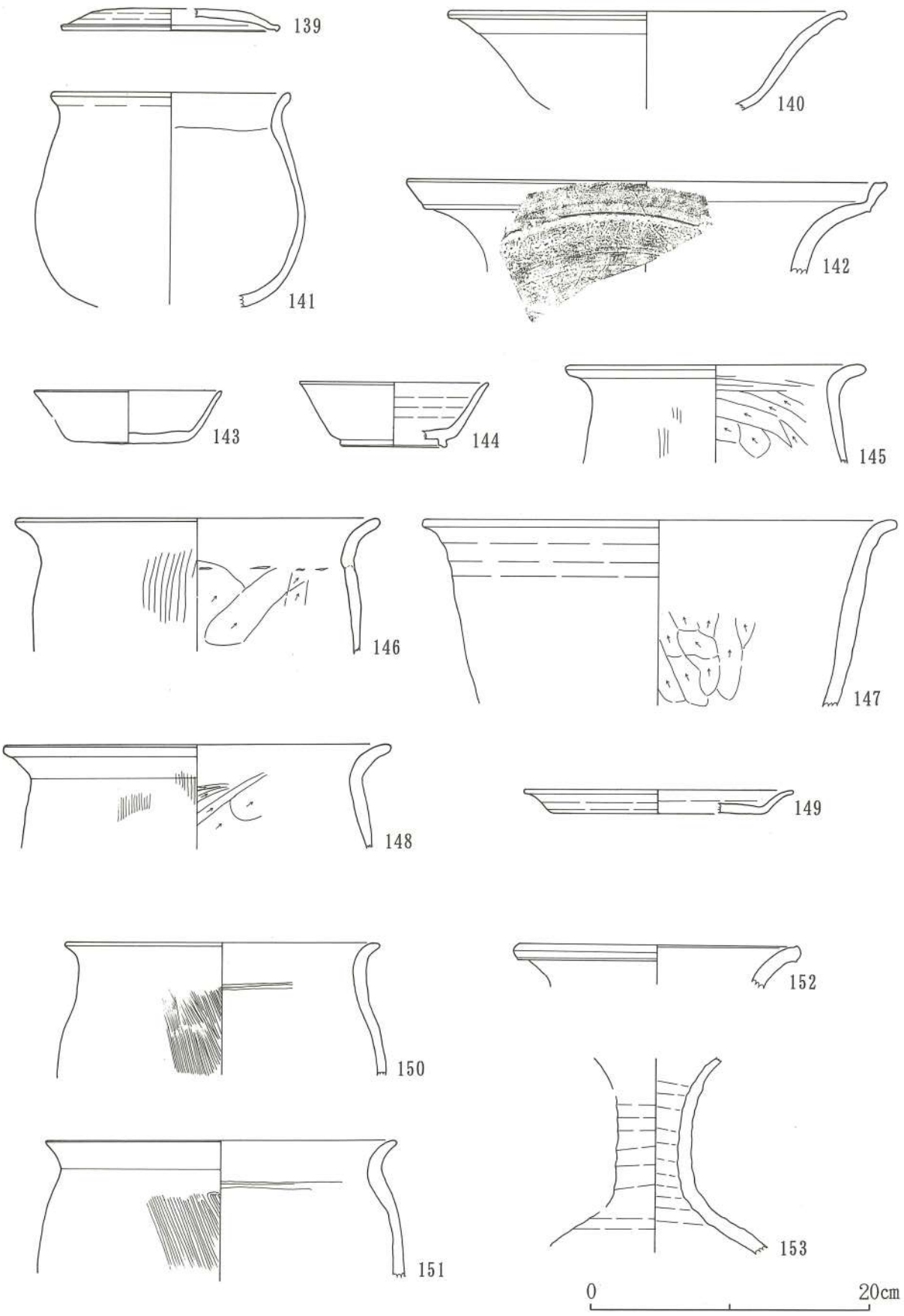



Fig.35　6区・7区出土遺物実測図(7)（1/4）

**尖 頭 器**（PL.29）

156は、分厚い縦長の剝片を用いた先土器時代の尖頭器。側縁部および基部に調整を加えている。サヌカイト製。SK-664出土。

**石匙・掻器**（PL.29）

石匙または掻器と考えられるものは、7点出土している。使用されている石材はすべてサヌカイトである。157、158は、縦長の剝片を利用した縦型で、両側縁上部に抉りをいれ、つまみ部分としている。158は、SK-645出土。159、160、161は、横長の剝片を利用したもの。159は細身、160は幅広で、湾曲した刃部をもつ。161は、体部の両端を失っている。162は、横長の剝片を利用した掻器。上辺は中央が高い山形を呈すものと考えられ、下辺は細かい調整が加えられ刃部が作り出されている。163は、石匙あるいは掻器の端部。上辺は無調整で湾曲する下辺には刃部が作りだされている。

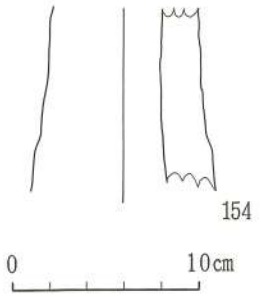



Fig.36　6区・7区出土遺物実測図(8)（1/4）

**砥　　石**（PL.30）

164は、砂岩製の砥石で、断面は長方形を呈し、3面が使用されている。SK-650出土。

**紡 錘 車**（PL.30）

165は、砂岩製の紡錘車で、平面観は円の四隅が張ったような隅丸方形を呈す。断面は長方形を呈し、中央に7㎜程の穴が穿たれている。

**石　　斧**（PL.30）

166は、凝灰岩製の磨製石斧で、基部のみが遺存している。断面は厚みのある楕円形を呈す。

**鉄　　斧**（PL.30）

167は、鍛造の鉄斧の基部で、断面は3.6cm×2.8cmの隅丸方形を呈す。SK-650出土。

Tab. 4　6区・7区出土石器等一覧表

（数値は、全て遺存部の値）

| 遺物番号 | 種　類 | 出　土<br>遺　構 | 法量（cm・g） | | | | 材　質 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 長　さ | 幅 | 厚　さ | 重　量 | | |
| 154 | ふいご羽口 | SK-612 | —— | —— | —— | —— | 土製品 | 法量は、Fig.36参照 |
| 155 | 石銛 | SH-619 | 6.4 | 4.2 | 1.1 | 30.3 | サヌカイト | |
| 156 | 尖頭器 | SK-664 | 10.2 | 5.1 | 2.1 | 131.7 | サヌカイト | |
| 157 | 石匙 | N-9Gr. | 8.7 | 5.0 | 1.2 | 60.4 | サヌカイト | ピット出土 |
| 158 | 〃 | SK-645 | 6.4 | 3.2 | 0.6 | 12.2 | サヌカイト | |
| 159 | 〃 | 表採 | 9.7 | 4.2 | 1.0 | 26.9 | サヌカイト | |
| 160 | 〃 | J-10Gr. | 10.5 | 6.2 | 0.9 | 50.5 | サヌカイト | ピット出土 |
| 161 | 〃 | B-6Gr. | 6.3 | 4.7 | 1.0 | 26.5 | サヌカイト | ピット出土 |
| 162 | 掻器 | 近世溝 | 13.3 | 6.0 | 1.4 | 99.1 | サヌカイト | |
| 163 | 石匙 or 掻器 | 近世溝 | 4.6 | 4.0 | 0.6 | 13.3 | サヌカイト | |
| 164 | 砥石 | SK-650 | 6.1 | 3.3 | 2.4 | 86.1 | 砂岩 | |
| 165 | 紡錘車 | L-6Gr. | 5.1 | 5.1 | 1.4 | 49.4 | 砂岩 | ピット出土 |
| 166 | 石斧 | C-8Gr. | 5.8 | 6.1 | 4.1 | 208.7 | 凝灰岩 | ピット出土 |
| 167 | 鉄斧 | SK-650 | 9.4 | 5.6 | 2.8 | 137.1 | 鉄製品 | |

# Ⅴ．平成４年度８・９区の調査

## １．調査の経過

平成４年度の佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、水田基盤造成工事により面的に削平が予定される部分17,000㎡を便宜的に８区・９区の２区に分割し、実施した。調査は、平成４年６月25日に着手し、翌平成５年２月９日まで現地での作業を行った。以下、簡略に調査経過を記す。

６月25日、調査対象地区の８区北部より、重機による表土剝ぎを開始、平成４年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査に着手した。

７月６日、現場において簡単な調査の安全祈願の後、発掘器材類の搬入、休憩用のテント設営などを行い、引き続き表土剝ぎ作業の進捗に伴い作業スペースが確保できた部分から作業員による遺構検出作業を開始した。

以後、表土剝ぎが終了した部分より、逐次作業員による遺構検出作業を行い、検出された遺構についても順次掘り下げ作業を進めていった。

８月13日より16日まで、お盆のため作業休み。

８月17日、お盆明け、引き続き重機による表土剝ぎ作業を再開した。表土剝ぎ作業は９月11日まで実施している。一方、作業員による遺構の検出、掘り下げ作業は、当時町内において並行して実施していた旧村時代の役場跡地再開発に伴う樫寺遺跡発掘調査の応援に作業員をあてることとなり、９月末まで、作業を休止した。

10月１日、応援先の樫寺遺跡調査現場より発掘器材類の搬入、テントの再設営など調査再開準備を行い、翌２日から、遺構検出、掘り下げ作業を再開した。以後、遺構の個別写真撮影、出土遺物の取り上げなどの記録作業と合わせ、遺構検出作業は12月７日まで、掘り下げ作業は平成４年１月25日まで実施した。

10月21日、調査区南部より遺構詳細実測業務に着手。

11月26日、１回目の気球による空中写真撮影。

12月25日、第一次として、遺構実測が完全に終了した調査区南端よりグリッドの１列～６列の幅60m部分を工事サイドへ引き渡し、年内の作業を終わった。

12月26日より平成４年１月４日まで年末年始のため作業休み。

年明けより、H～J列の７～11Gr．付近の遺物包含層の調査に着手。Ⅰ－８ Gr．では地山表層の風積土層から細石刃が検出された。遺物包含層の調査は29日まで実施した。

１月26日、２回目の気球による空中写真撮影。

１月29日、遺物取り上げ、包含層の調査、遺構の個別写真撮影などを終え、遺構実測作業を残し、現場作業を終了。発掘器材類の搬出、テントの撤収作業を行った。また、遺構実測作業の進捗に伴い、第二次としてさらにグリッドの７列～10列の幅40m部分を工事サイドに引き渡した。２月２日、この引き渡し部分の地下約３mの洪積層から、阿蘇４火砕流堆積層と埋没林の調査の契機となる倒木が工事中に発見されている。

２月１日より、船石文化財整理事務所にて出土遺物の水洗い作業を行う。

２月９日、遺構の実測作業が終了し、現場での作業を全て終了した。

## 2．調査区の概要（Fig. 3、37）

大字堤字迎原地区から八藤地区へ延びる八藤丘陵は、東西両側をそれぞれ切通川の支流である大谷川、大鳥居川に開析された馬の背状の舌状丘陵で、北方の新立古墳群が位置する高位段丘面から南南西へ向かって延びている。先端の八藤地区で標高約20m、北部の高位段丘へ移行する最高部で約35mを測る。丘陵の尾根上には、堤集落から北の塚原集落方面へ農道が縦断しており、『佐賀県遺跡地図』ではこの農道の一部が西の堤土塁跡と八藤遺跡の境界となっている。

八藤丘陵上の耕地は、大正年間に当時としては大規模な人力による耕地整理事業が行われており、地元では一帯を「耕地整理」と呼称している。地目は田であるが、水掛かりが悪く、現在は主に畑地として利用されている。

平成4年度県営農業基盤整備事業施工区域のうち、今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった地区は、平成3年度調査区域の北側に隣接する17,000㎡に及ぶ区域で、上峰町大字堤字迎原の標高29m～32m付近の低位段丘面を占めている。調査区域の北部は、新立古墳群が立地する高位段丘に続いており、8区と9区の北半部分は、遺構密度が低いが、これは後世の耕作や耕地整理事業により削平を受けているものと考えられる。

今回の調査は、この17,000㎡を便宜的に8区4,250㎡と9区12,750㎡に分けて実施した。調査対象区域全域に磁北を基準とする10m×10mグリッドを設定した（このグリッドは平成2年度及び3年度調査で設定したグリッドと連続しており、今回の調査グリッドのA－1 Gr.、M－1 Gr. がそれぞれ平成3年度調査グリッドのA－1 Gr.、M－1 Gr. に相当する）。グリッドは、南北列南から1～21の21列、東西列東からA～Mの13列を設定し、調査を実施した。

調査区の土層は、後世の耕作、耕地整理事業などによって各時代の遺物包含層はほとんど失われ、耕作土あるいは表土直下が洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

この八藤遺跡8区・9区調査では、弥生時代中期の竪穴式住居址3軒、奈良時代の竪穴式住居址1軒、奈良時代の掘建柱建物址10棟、道路側溝状の溝跡はじめ中世の大溝、周溝状溝跡、そのほか、各時代の所産と考えられる土壙、ピットなどが検出された。さらに調査区西部の丘陵西斜面にあたるH～J列の7～11Gr. 付近では縄文時代以前の遺物包含層が遺存しており、縄文式土器片、チップ類に混じり、細石刃・石剣が出土した。

遺物は、各遺構から縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、中世土器が出土しているが、量的にはあまり多くない。これら土器類ほかには、細石刃、掻器、握斧、石核、石鏃、石剣、石匙、石斧、片刃石斧、石包丁、砥石などの先土器時代から弥生時代の石器類が出土している。

今回の調査においても注目される遺構や遺物が検出されている。奈良時代の遺構では、平成3年度の調査で検出された道路側溝状遺構を挟んで南北に配置された建物群のうち、北側の建物群に続く建物10棟が9区南部に集中して検出され、建物群の全体を明らかにすることができた。中世の遺構としては、8区・9区の境界部分の9区側に、丘陵を横断する形で全長約70m、幅10m前後、深さ3mの中世の大溝が検出されているが、その開削目的は全く不明である。一方、出土遺物では、町内において初めて先土器時代の石器が出土した。遺物包含層から出土した細石刃をのぞくと、いずれも後の時期の遺構内から出土している。しかし、町内ではこれまで先土器時代の遺物の発見例は、不時発見を含めても皆無であり、比較的この時代の遺物の出土例が少ない県東部におけるこの時代の動向を明らかにしていく上で貴重な資料といえる。また、H～J列、7～11Gr. 付近での遺物包含層の調査において、I－8 Gr. で地山表層の風積土層から細石刃が検出されたが、調査終了後、圃場基盤造成工事中に阿蘇4火砕流に焼かれ、なぎ倒された倒木が、I～K列－6 Gr. 下層から発見された際、この細石刃が、倒木の年代判定に果たした役割が大きかったことを付記しておく。

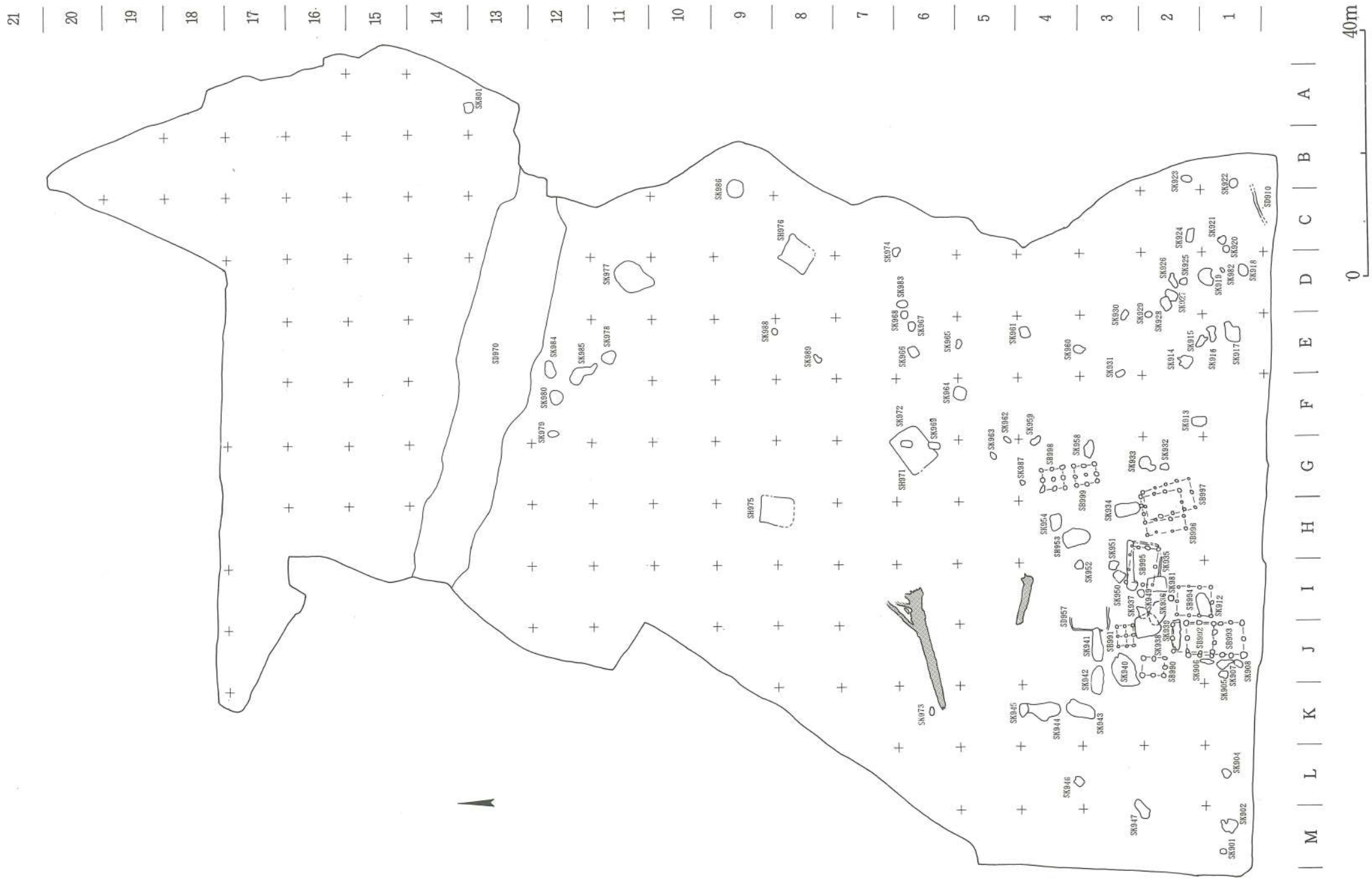



Fig.37　8 区・9 区遺構配置図（1/800）

## 3．遺　構

今回の八藤遺跡８区・９区の調査において、遺構番号を付して調査を行った遺構は、８区11遺構、９区121遺構、合計132遺構に及んだ。これらのなかで調査を進めるに従い、近世以降の耕作に伴う用排水路跡、掘り込みなど明らかに比較的新しい時期の所産になるものと判明した遺構については、欠番として処理した。

その結果、遺構として取り扱ったものは、竪穴式住居址４軒、掘立柱建物址10棟、貯蔵穴などの土壙77基、溝跡３条などの94遺構とピットである。

時期的に見ると、前述のように、縄文時代から中世におよぶ遺構が検出されているが、ここでは上記94遺構について報告したい。

### (1)竪穴式住居址（Fig.38・PL.31、32・Tab.５）

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、H－４ Gr. のSH-953、G－６ Gr. のSH-971、H－９ Gr. のSH-975、C－８ Gr. のSH-976の４軒で、いずれも９区で検出された。９区南部の建物群の北部で検出されたSH-953が、須恵器の坏や土師器の碗、甕などを出土しており、奈良時代の所産である。他のSH-971，SH-975，SH-976は、いずれも弥生時代中期の方形プランの住居址で、９区の中央部に散在している。それぞれの住居址からは弥生時代中期の甕、壺などが出土している。

**SH-953**（Fig.38・PL.31）

SH-953は、９区H－４ Gr. で検出された竪穴式住居址で、プランは長辺約3.0m、短辺約1.7mの不正小判形を呈す。床面までの深さは20cm強を測る。本遺構は、調査時は規模などから土壙として調査を行ったが、須恵器坏、土師器碗、甕などの出土遺物の内容及び主軸上に５本の柱穴をもち切妻状の上屋が想定できることなどから、住居址として取り扱った。主軸はN－10°－Wである。

**SH-971**（Fig.38・PL.31）

SH-971は、９区G－６ Gr. で検出された竪穴式住居址で、プランは長辺約7.2m、短辺約5.3mの短辺がやや張りをもつ長方形を呈す。床面までの深さは10cm弱でかなりの深度で後世の削平をうけている。主柱穴は、不明。床面中央に炉跡と思われる土壙を、また長辺の壁際には貯蔵穴状の土壙をもつ。主軸はN－53°－Eである。後にSK-972が掘り込まれている。

**SH-975**（Fig.38・PL.31）

SH-975は、９区H－９ Gr. で検出された竪穴式住居址で、後世の削平により住居の南西部分は壁の立ち上がりを失っている。プランは、長辺5.4m以上、短辺4.7m以上のやや南が広がる不正な方形を呈すものと推定される。主柱穴はじめ、炉跡、周溝などは検出されなかった。主軸はN－７°－Eである。

**SH-976**（Fig.38・PL.32）

SH-976は、９区C－８ Gr. で検出された竪穴式住居址で、住居の南東部を後世の削平より失っている。プランは長辺約5.0m、短辺約4.2mの方形を呈す。床面までの深さは、10cm弱を測る。床面及び壁際に多くの掘り込みが見られるが、主柱穴は２本、東壁際に貯蔵穴状の土壙をもち、東壁際をのぞき、遺存部には幅20cm～50cm、深

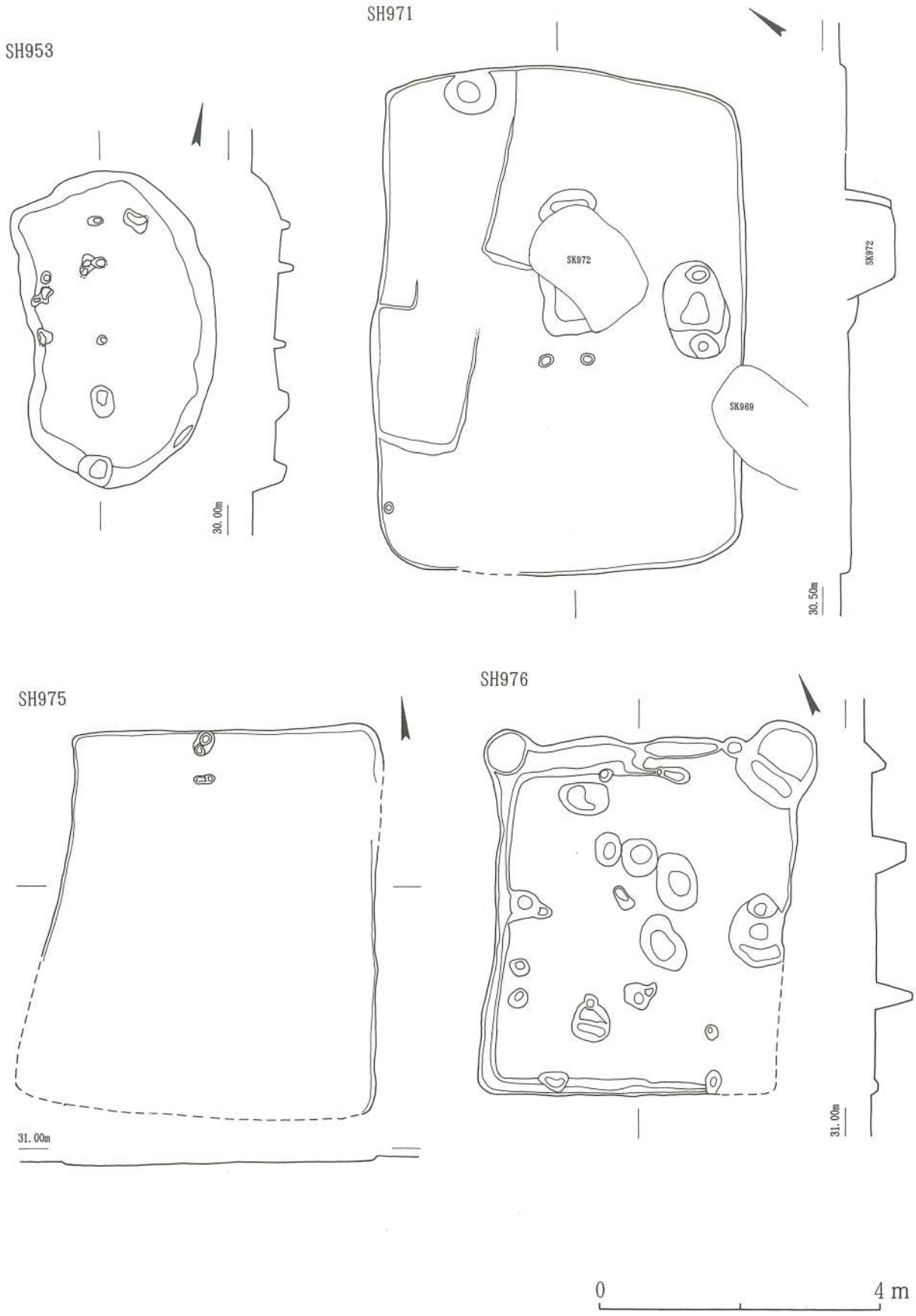



Fig.38　8区・9区出土竪穴式住居址実測図　SH-953・SH-971・SH-975・SH-976 (1/80)

さ10cm～20cmの周溝がめぐっている。主軸は、N－28°－Eである。

Tab. 5　8区・9区出土竪穴式住居址一覧表

| 住居址番号 | 平面形態 | 規模（m・m²） | | | | 棟方向 | 屋内施設 | | | | 出土遺物<br>上）土器・土製品<br>下）石製品・その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 深さ | 床面積 | | 主柱穴 | 溝 | 炉・焼土など | その他 | | |
| SH-953 | 不整小判形 | 4.40 | 2.72 | 0.33 | 7.8 | N－10°－W | 2本 | | | | 須恵器坏・蓋・土師器甕 | |
| SH-971 | 隅丸長方形 | 7.15 | 5.31 | 0.08 | 34.4 | N－53°－E | | | 炉状土壙 | 貯蔵穴 | 器台・甕 | |
| SH-975 | 不整方形 | ※5.4 | 4.37 | 0.06 | (23.9) | N－7°－E | | | | | 甕 | |
| SH-976 | 方形 | 5.04 | 4.22 | 0.09 | (19.3) | N－28°－E | 2本 | ○ | | 貯蔵穴 | 壺・甕・鉢・甑 | |

**(2)掘立柱建物址**（Fig.39～46・ＰＬ.33、34・Tab. 6）

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、10棟で、9区の南部に集中して分布している。今回の調査で検出された建物址は、平成3年度の調査で6区北部において検出された、道路側溝状遺構の南北に分布する建物群のうち、道路北側の建物群9棟に続くもので、全体で道路南側に12棟、北側に19棟が検出されたこととなった（Fig. 4、37参照）。これらの建物群は道路と併存した「駅」的施設である可能性が高い。

以下、個々の建物址について簡単に報告する。

**SB-990**（Fig.39・PL.33）

SB-990は、9区Ｊ－2 Gr. で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、柱穴は直径50cm～80cm、深さ60cm～90cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は1.4m。規模は、桁行3.5m、梁行2.7m、床面積9.5m²を測る。主軸はN－7°－Eである。

**SB-991**（Fig.39・PL.33）

SB-991は、9区Ｊ－3 Gr. で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、柱穴は直径50cm～60cm、深さ60cm～80cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.6m、梁行の柱間は1.3m。規模は、桁行3.2m、梁行2.5m、床面積8.0m²を測る。主軸はN－87°－Eである。

**SB-992**（Fig.40・PL.33）

SB-992は、9区Ｊ－2 Gr. で検出された3間×2間の掘立柱建物址で、SB-993と重複し、桁行東辺の北から2本目の柱穴は、SB-993の北東隅の柱穴と完全に重なっている。また、梁行南辺には4本の柱穴がみられるが、入り口的施設であろうか、中間の2本の柱が両サイドの柱よりやや南側に張り出している。柱穴は直径60cm～70cm、深さ50cm～70cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は2.2m、梁行の柱間は2.3m。規模は、桁行6.5m、梁行

4.5m、床面積29.3m²を測る。主軸は磁北を指す。

**SB-993** (Fig.41・PL.33)

SB-993は、9区J－1 Gr.で検出された5間×2間の掘立柱建物址で、SB-992と重複しており北東隅の柱穴がSB-992の柱穴と完全に重なっている。柱穴は直径60cm～100cm、深さ50cm～100cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は2.7m。規模は、桁行9.2m、梁行5.3m、床面積48.8m²。主軸はN－3°－Wである。道路の南北に位置する建物群の中では最も規模が大きい。柱穴より、須恵器壺、高坏、土師器壺などが出土している。

**SB-994** (Fig.42・PL.33、34)

SB-994は、9区I－2 Gr.で検出された3間×2間の掘立柱建物址で、柱穴は直径30cm～60cm、深さ30cm～70cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は2.4m。規模は、桁行5.5m、梁行4.6m、床面積25.3m²を測る。主軸は磁北を指す。

**SB-995** (Fig.43・PL.34)

SB-995は、9区H－2 Gr.で検出された3間×3間の掘立柱建物址で、建物の東辺と南辺には雨落ち溝と考えられる幅20cm～30cm、深さ10cm～20cmの溝が、外壁の柱から約0.8mの間隔をもってめぐっている。柱穴は直径50cm～70cm、深さ60cm～80cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.9m、梁行の柱間は1.4m。規模は、桁行5.8m、梁行4.3m、床面積24.9m²を測る。主軸N－82°－Wである。

**SB-996** (Fig.44・PL.34)

SB-996は、9区H－2 Gr.で検出された3間×2間の掘立柱建物址で、SB-997と重複している。建物西に1間、幅約2.1mの庇をもつ。梁行北辺には中間の柱穴が2本設けられている。柱穴は直径60cm～70cm、深さ30cm～70cm程度の円形あるいは隅丸方形の掘り込み。柱間は桁行、梁行ともに2.1m。規模は、桁行6.3m、梁行4.2m、床面積26.5m²、庇部分を含めると6.3m×6.3mの方形を呈し、全体面積は39.7m²を測る。主軸はN－10°－Wである。

**SB-997** (Fig.45・PL.34)

SB-997は、9区H－2 Gr.で検出された4間×2間の掘立柱建物址で、SB-996と重複している。柱穴は直径60cm～80cm、深さ30cm～80cm程度の不整円形の掘り込み。桁行の柱間は2.0m、梁行の柱間は2.4m。規模は、桁行7.8m、梁行4.8m、床面積37.4m²を測る。主軸はN－15°－Wである。

**SB-998** (Fig.46・PL.34)

SB-998は、9区G－4 Gr.で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、SB-999の北に隣接している。柱穴は直径60cm～80cm、深さ40cm～80cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は1.6m。規模は、桁行3.6m、梁行3.1m、床面積11.2m²を測る。主軸はN－6°－Wである。

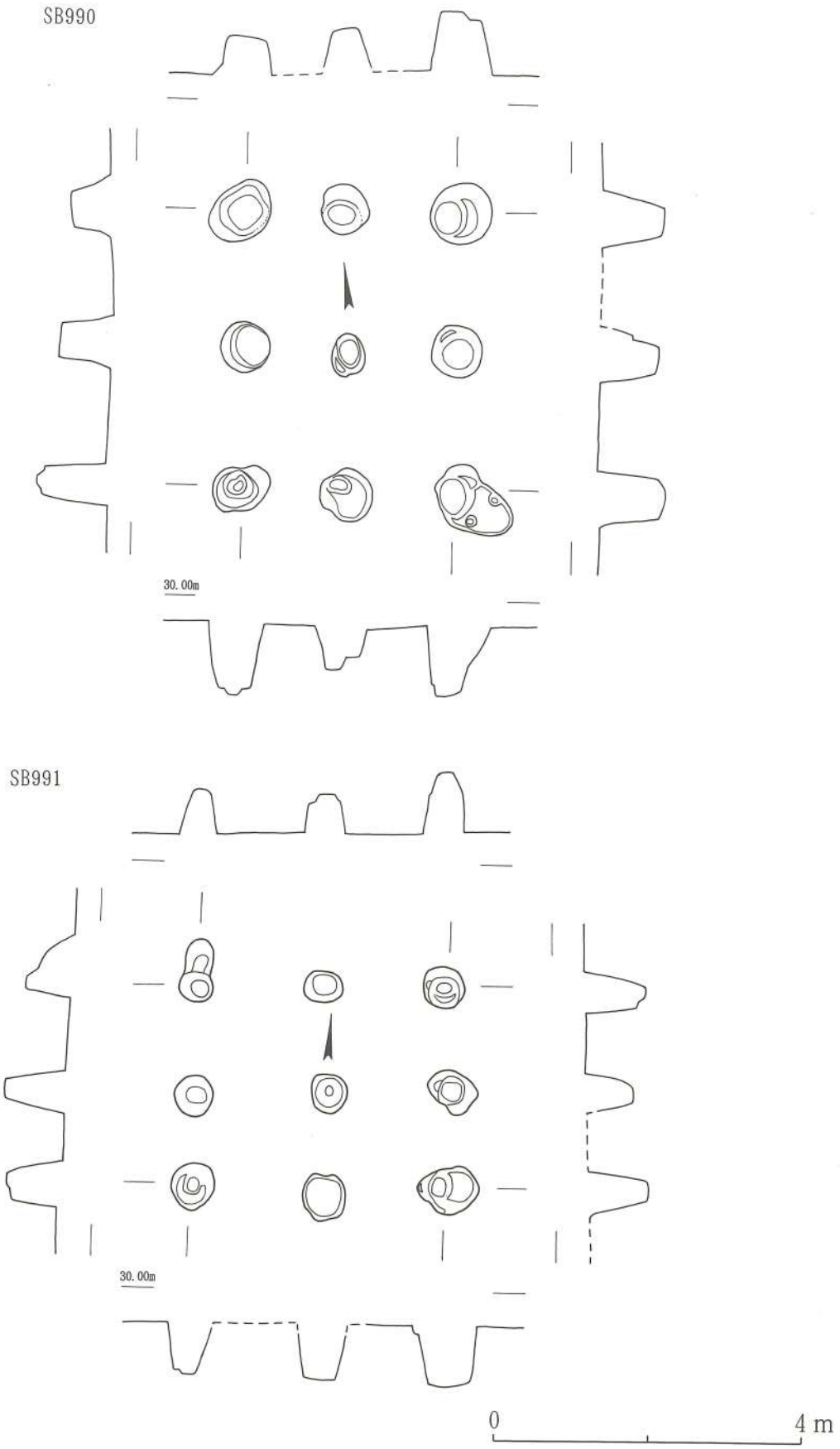



Fig.39　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(1)　SB-990・SB-991（1/80）

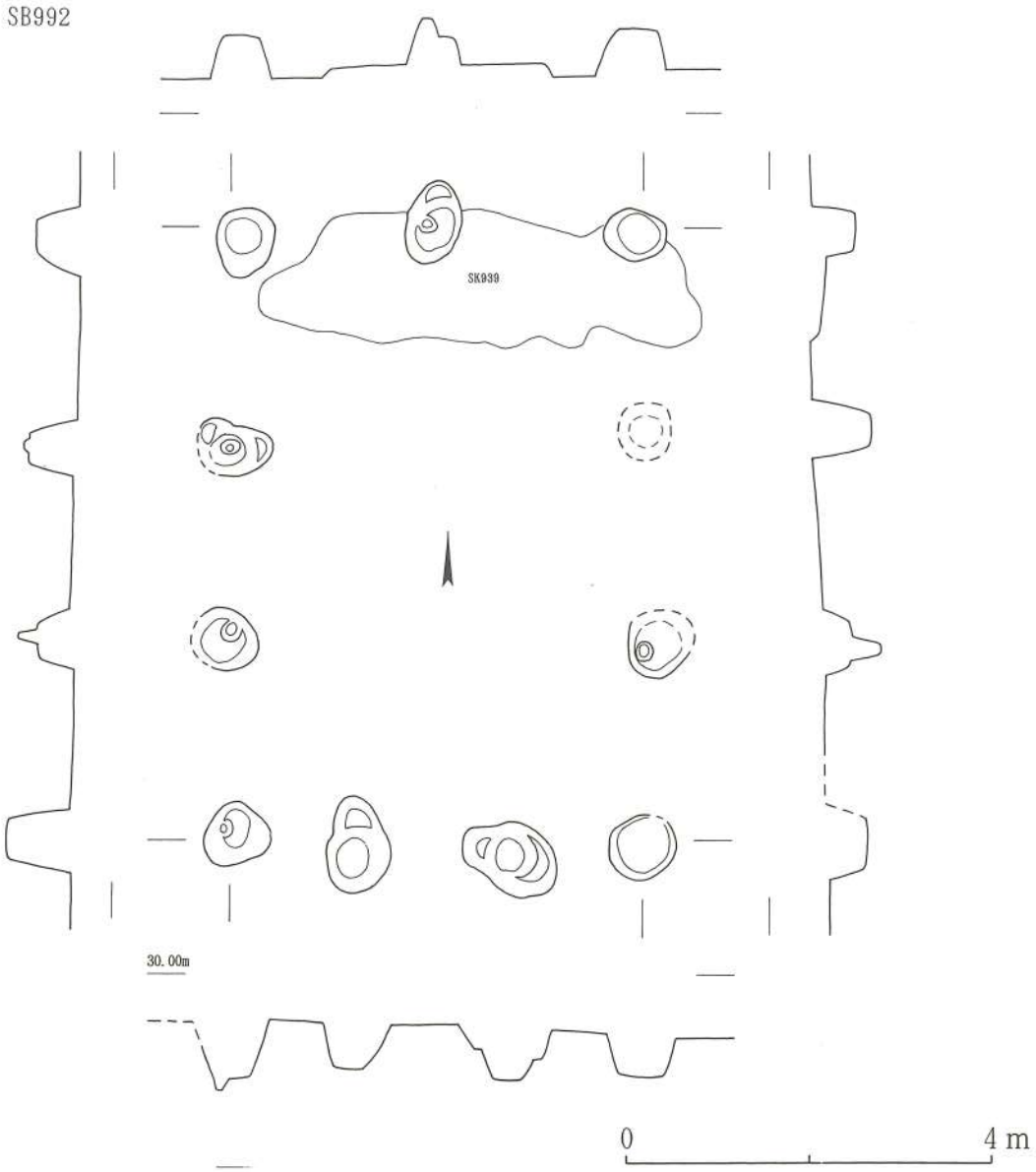



Fig.40　8 区・9 区出土掘立柱建物址実測図(2)　SB-992（1/80）

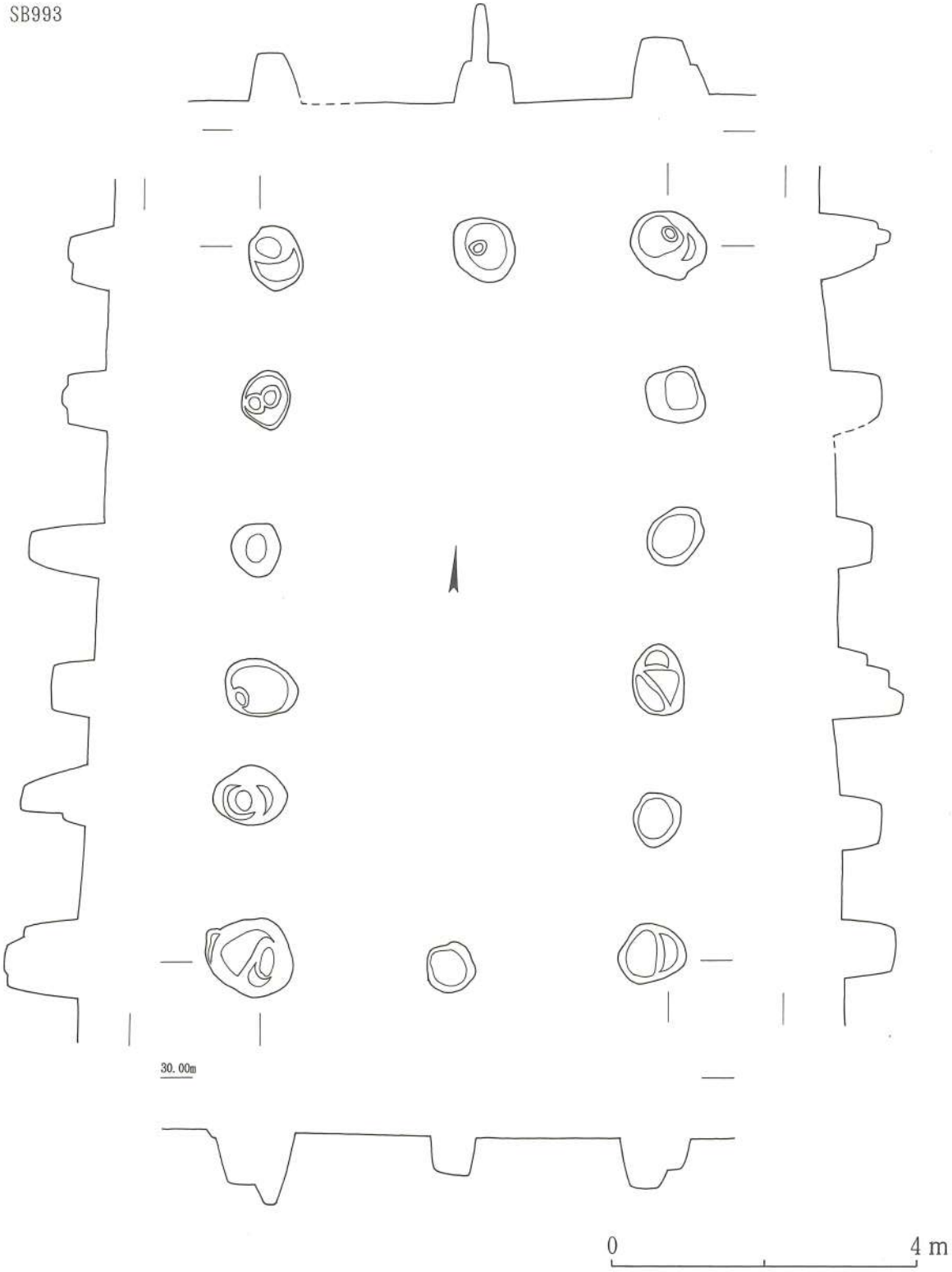



Fig.41　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(3)　SB-993（1/80）

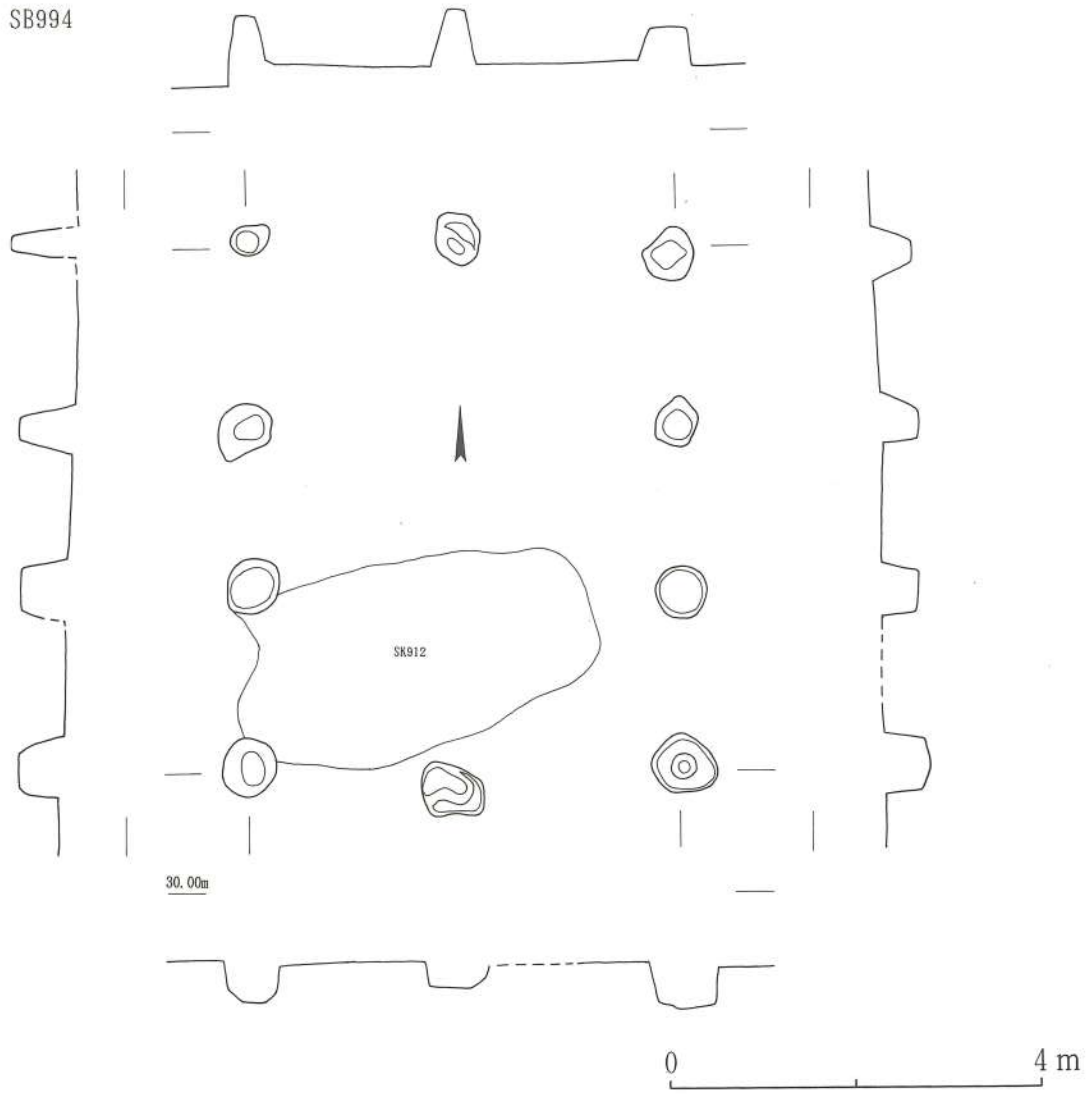



Fig.42　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(4)　SB-994（1/80）

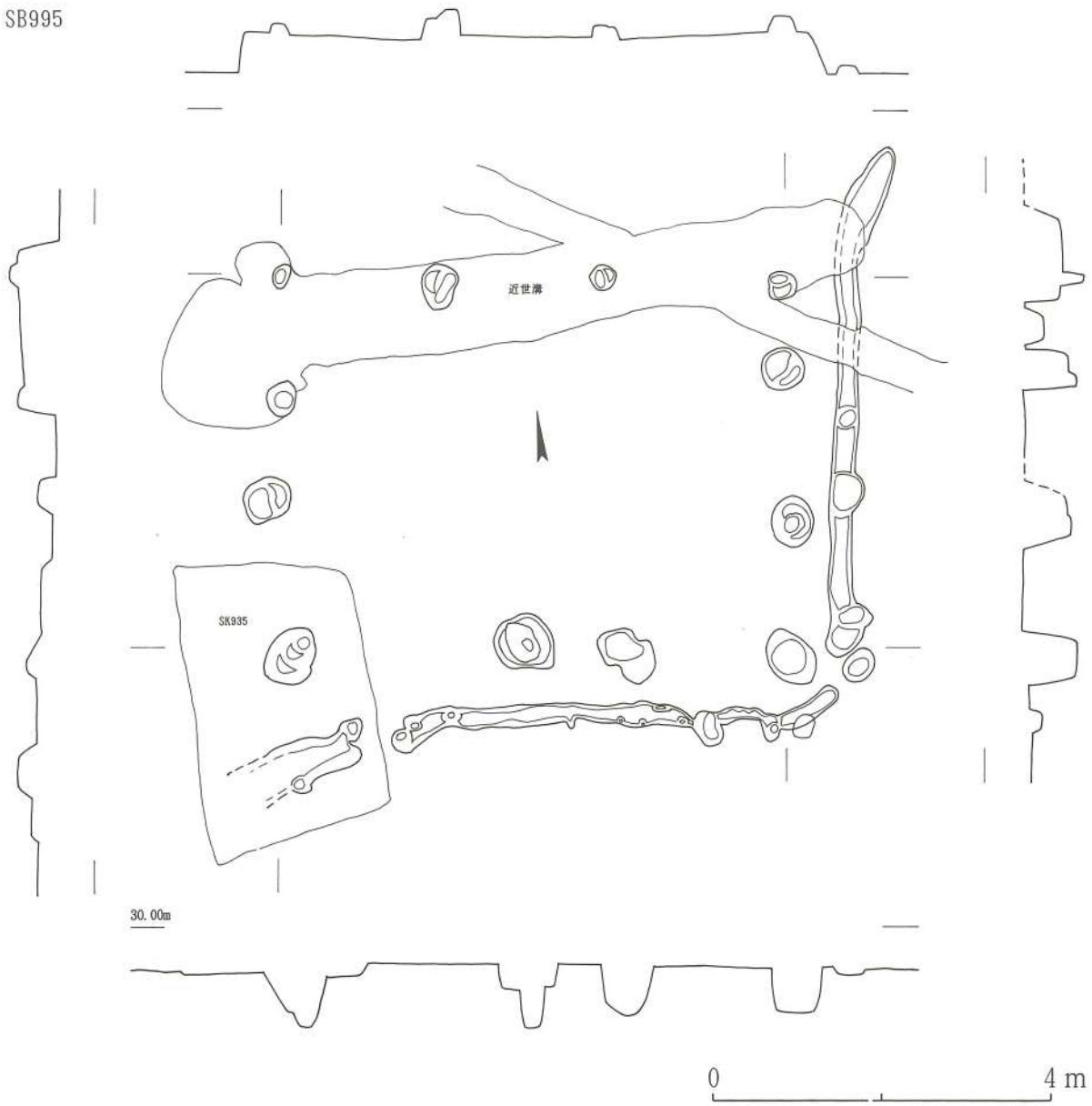



Fig.43　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(5)　SB-995（1/80）

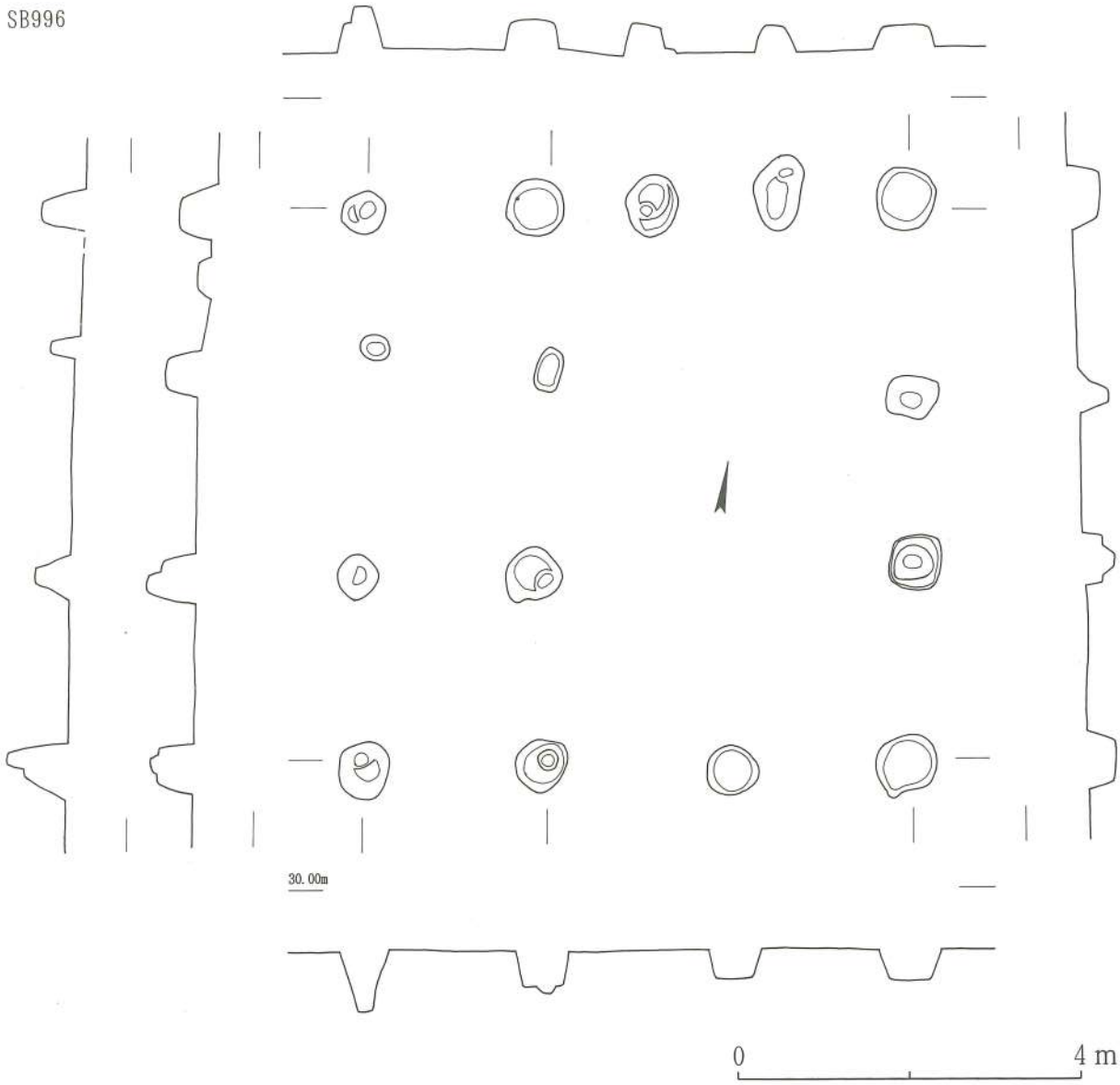



Fig.44　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(6)　SB-996（1/80）

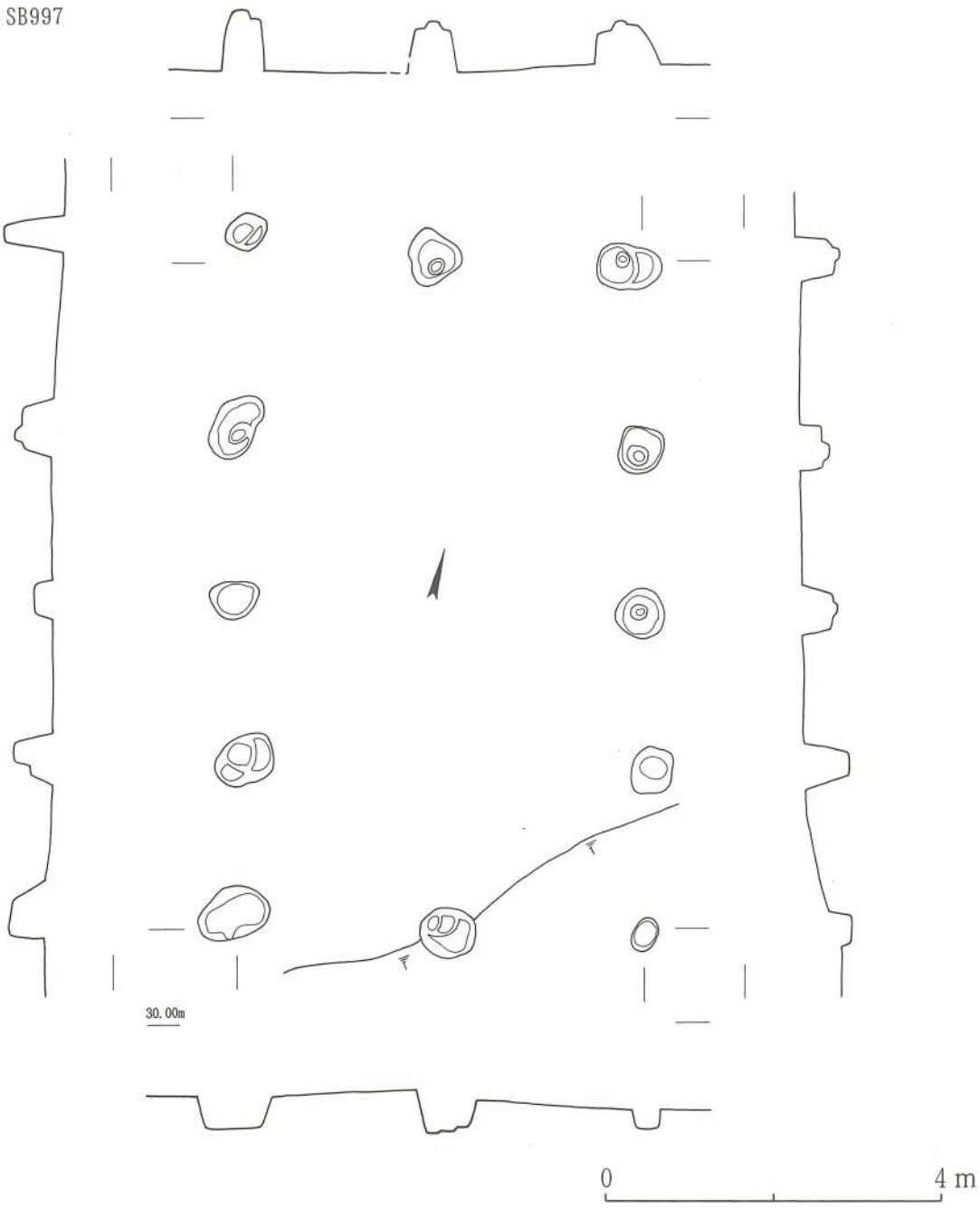



Fig.45　8 区・9 区出土掘立柱建物址実測図(7)　SB-997（1/80）

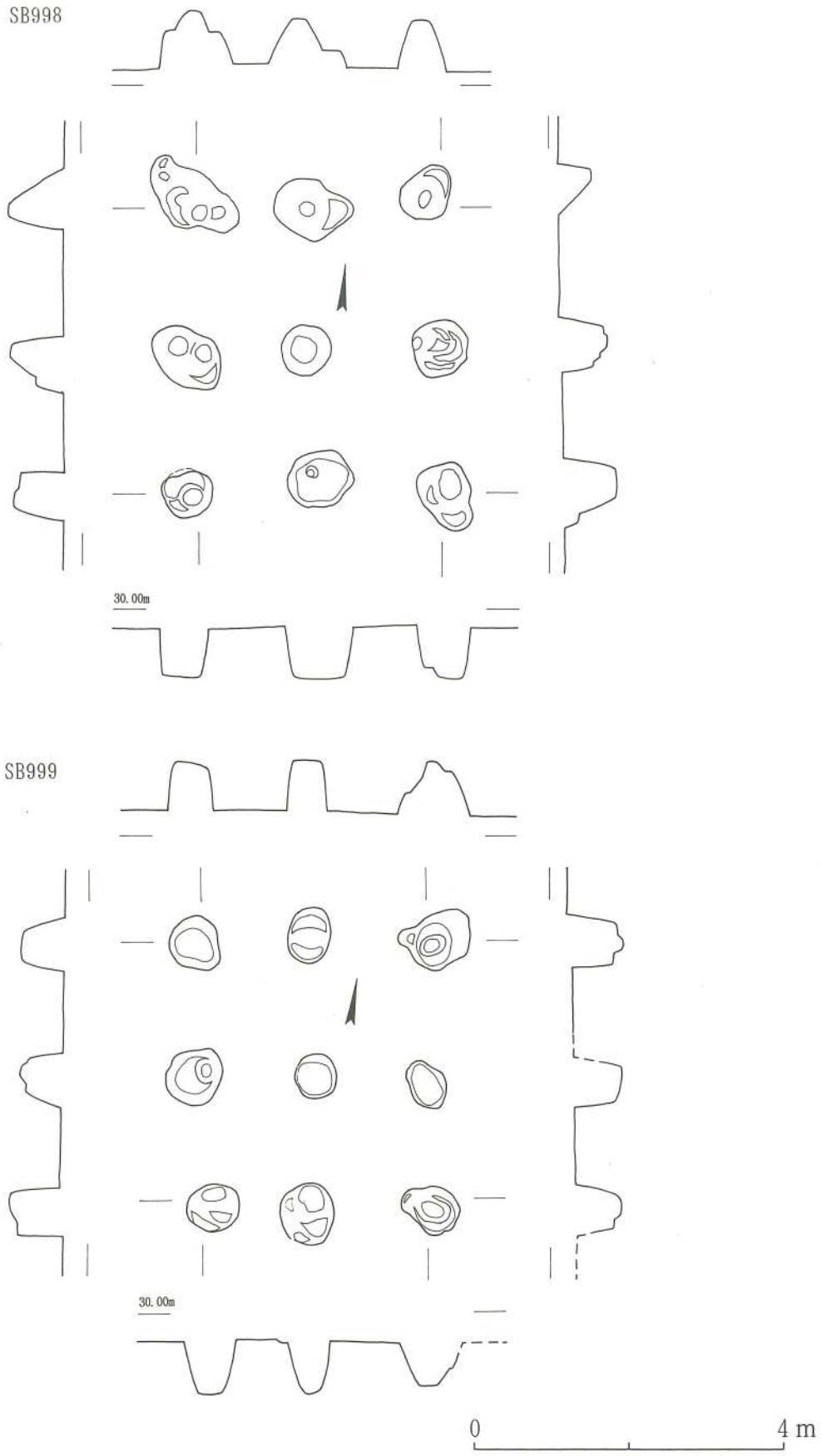



Fig.46　8区・9区出土掘立柱建物址実測図(8)　SB-998・SB-999（1/80）

**SB-999** (Fig.46・PL.34)

SB-999は、9区G－3 Gr. で検出された2間×2間の総柱の掘立柱建物址で、SB-998の南に隣接している。柱穴は直径60cm～80cm、深さ70cm程度の円形の掘り込み。桁行の柱間は1.6m、梁行の柱間は1.5m。規模は、桁行3.2m、梁行2.9m、床面積9.3m²を測る。主軸はN－9°－Wである。

Tab. 6　8区・9区出土掘立柱建物址一覧表

| 建物址番号 | 平面形態 | 規模（m・m²） | | | | 棟方向 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行柱間 | 梁行柱間 | 長さ×幅 | 床面積 | | |
| SB-990 | 2×2 | 1.8 | 1.4 | 3.5×2.7 | 9.5 | N－7°－E | |
| SB-991 | 2×2 | 1.6 | 1.3 | 3.2×2.5 | 8.0 | N－87°－E | |
| SB-992 | 3×2 | 2.2 | 2.3 | 6.5×4.5 | 29.3 | 磁　北 | SB-993と重複 |
| SB-993 | 5×2 | 1.8 | 2.7 | 9.2×5.3 | 48.8 | N－3°－W | SB-992と重複 |
| SB-994 | 3×2 | 1.8 | 2.4 | 5.5×4.6 | 25.3 | 磁　北 | |
| SB-995 | 3×3 | 1.9 | 1.4 | 5.8×4.3 | 24.9 | N－82°－W | 建物東辺、南辺に雨落ち溝 |
| SB-996 | 3×2 | 2.1 | 2.1 | 6.3×4.2<br>6.3×6.3 | 26.5<br>39.7 | N－10°－W | SB-997と重複 |
| SB-997 | 4×2 | 2.0 | 2.4 | 7.8×4.8 | 37.4 | N－15°－W | SB-996と重複 |
| SB-998 | 2×2 | 1.8 | 1.6 | 3.6×3.1 | 11.2 | N－6°－W | |
| SB-999 | 2×2 | 1.6 | 1.5 | 3.2×2.9 | 9.3 | N－9°－W | |

**(3)土壙・貯蔵穴** (Fig.47～55・PL.35～40・Tab. 7)

今回の調査で検出された土壙は、77基であった。これらは、平面形態により、

円形を基調としたプランのもの：

SK-918、SK-920、SK-921、SK-922、SK-925、SK-929、SK-933、SK-936、SK-949、SK-951、SK-963、SK-967、SK-978、SK-980、SK-981、SK-982、SK-983、SK-988など

方形を基調としたプランのもの：

SK-801、SK-910、SK-912、SK-913、SK-923、SK-924、SK-930、SK-931、SK-934、SK-935、SK-945、SK-946、SK-954、SK-959、SK-960、SK-964、SK-966、SK-968、SK-969、SK-972、SK-986など

不整形のプランを呈し掘り方も不規則なもの：

SK-902、SK-904、SK-905、SK-906、SK-907、SK-908、SK-914、SK-915、SK-916、SK-917、SK-919、SK-926、SK-927、SK-928、SK-932、SK-937、SK-938、SK-939、SK-940、SK-941、SK-942、SK-943、SK-944、SK-947、SK-950、SK-952、SK-958、SK-961、SK-962、SK-965、SK-973、SK-974、SK-977、SK-979、SK-984、SK-985、SK-987、SK-989など

が認められる。

また、SK-901、SK-960、SK-988などは、土壙の床面にピットをもち「落とし穴」的土壙と考えられる。

これらの土壙のうち、縄文式土器や石鏃、石匙、石斧などを出土しているSK-901、SK-908、SK-914、SK-920、SK-921、SK-922、SK-928、SK-930、SK-936、SK-944、SK-947などが縄文時代の土壙と考えられるが、遺物をもたない土壙についても、掘り方が不規則で不整形の土壙のほとんどが縄文期のものと考えられる。そのほか出土遺物などから時期が特定できる土壙としては、SK-960、SK-964、SK-965、SK-966、SK-968、SK-977、SK-978などが弥生時代中期。土師器、須恵器などを出土しているSK-801、SK-905、SK-906、SK-907、SK-912、SK-918、SK-932、SK-933、SK-934、SK-935、SK-939、SK-940、SK-949、SK-951、SK-981などが奈良・平安時代の所産と考えられる。

検出された各土壙の規模・深さなどの法量および出土遺物は、下記一覧表にまとめた。

Tab. 7　8区・9区出土土壙一覧表

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²） | | | | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | | | |
| SK-801 | 隅丸方形 | 1.68<br>1.20 | 1.44<br>1.10 | 0.36 | 1.2 | | 須恵器坏、土師器甑 | |
| SK-901 | 不整長方形 | 1.02<br>0.68 | 0.78<br>0.58 | 0.79 | 0.4 | | | |
| SK-902 | 不整形 | 2.53<br>2.42 | 2.07<br>1.95 | 0.30 | 3.6 | | | |
| SK-904 | 不整形 | 1.63<br>1.44 | 1.44<br>1.19 | 0.36 | 1.2 | | | |
| SK-905 | 不整形 | 1.56<br>1.42 | 1.45<br>1.33 | 0.14 | 1.1 | | 土師器坏、鉢 | |
| SK-906 | 不整形 | 2.50<br>2.14 | 0.85<br>0.71 | 0.18 | 1.1 | | 須恵器坏、蓋 | |
| SK-907 | 不整形 | 3.00<br>2.85 | 1.65<br>1.50 | 0.27 | 2.4 | | 須恵器坏、蓋、壺、土師器坏、甕 | |
| SK-908 | 不整形 | 1.73<br>1.52 | 0.93<br>0.69 | 0.25 | 0.8 | | | |
| SK-912 | 不整長方形 | 3.62<br>3.28 | 2.08<br>1.81 | 0.60 | 4.8 | | 土師器坏、甕、用途不明土器 | |
| SK-913 | 不整長方形 | 3.74<br>3.61 | 1.68<br>1.53 | 0.37 | 6.8 | | | |
| SK-914 | 不整形 | 1.67<br>1.22 | 1.47<br>1.31 | 0.16 | 1.8 | | 縄文式土器 | |
| SK-915 | 不整形 | 2.36<br>2.20 | 1.11<br>0.81 | 0.32 | 1.5 | | | |
| SK-916 | 不整形 | 2.58<br>2.34 | 0.99<br>0.67 | 0.19 | 1.9 | | | |
| SK-917 | 不整形 | 3.16<br>3.10 | 2.33<br>2.09 | 0.38 | 5.0 | | | |
| SK-918 | 不整円形 | 1.19<br>0.65 | 1.12<br>0.65 | 0.25 | 2.0 | | 須恵器坏、土師器甕 | |
| SK-919 | 不整形 | 2.83<br>2.57 | 2.21<br>1.62 | 0.37 | 3.5 | | | |
| SK-920 | 不整円形 | 1.15<br>1.01 | 1.04<br>0.94 | 0.19 | 0.8 | | | |

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²） | | | | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | | | |
| SK-921 | 不整円形 | 1.44<br>1.05 | 1.09<br>0.87 | 0.30 | 0.8 | | 縄文式土器 | |
| SK-922 | 不整円形 | 1.64<br>0.91 | 1.34<br>1.13 | 0.56 | 1.2 | | 縄文式土器 | |
| SK-923 | 不整方形 | 1.68<br>1.57 | 1.13<br>0.99 | 0.14 | 1.3 | | | |
| SK-924 | 不整方形 | 2.39<br>2.29 | 1.08<br>0.96 | 0.14 | 2.1 | | | |
| SK-925 | 不整円形 | 1.38<br>1.10 | 1.15<br>0.86 | 0.26 | 0.8 | | | |
| SK-926 | 不整形 | 2.43<br>2.38 | 0.87<br>0.73 | 0.37 | 1.5 | | | |
| SK-927 | 不整形 | 2.02<br>1.85 | 1.76<br>1.58 | 0.44 | 2.6 | | | |
| SK-928 | 不整形 | 2.17<br>1.87 | 1.47<br>1.21 | 0.42 | 1.5 | | 縄文式土器 | |
| SK-929 | 不整円形 | 1.11<br>0.85 | 0.98<br>0.70 | 0.35 | 0.5 | | | |
| SK-930 | 不整長方形 | 1.70<br>1.51 | 0.86<br>0.48 | 0.26 | 0.7 | | 縄文式土器 | |
| SK-931 | 隅丸長方形 | 1.48<br>1.38 | 0.89<br>0.69 | 0.20 | 0.8 | | | |
| SK-932 | 不整形 | 1.51<br>1.23 | 1.33<br>1.19 | 0.20 | 0.9 | | 土師器坏、甕 | |
| SK-933 | 不整円形 | 2.34<br>1.80 | 2.11<br>1.58 | 0.54 | 1.9 | | 土師器甕 | |
| SK-934 | 不整長方形 | 3.98<br>3.62 | 2.17<br>1.73 | 0.28 | 5.4 | | 土師器坏、甕 | |
| SK-935 | 不整長方形 | 3.48<br>3.38 | 2.20<br>2.14 | 0.10 | 6.8 | | 土師器甑 | |
| SK-936 | 不整円形 | (3.3)<br>(2.7) | 2.40<br>1.45 | 0.28 | (2.7) | | | |
| SK-937 | 不整形 | (1.5)<br>(1.2) | 1.46<br>1.26 | 0.18 | (0.8) | | | |
| SK-938 | 不整形 | 4.42<br>3.74 | 4.00<br>3.04 | 0.23 | 5.8 | | | |
| SK-939 | 不整形 | 4.86<br>4.70 | 1.41<br>1.21 | 0.13 | 4.7 | | 須恵器蓋、土師器坏 | |
| SK-940 | 不整形 | 5.74<br>5.57 | 3.86<br>3.61 | 0.64 | 15.1 | | 須恵器坏、蓋、壺、土師器坏、甕、古式 | |
| SK-941 | 不整形 | 5.40<br>5.32 | 1.82<br>1.79 | 0.27 | 6.5 | 中央にピット | | |
| SK-942 | 不整楕円形 | 4.54<br>4.34 | 2.03<br>1.83 | 0.27 | 5.8 | 中央にピット | | |
| SK-943 | 不整形 | 4.87<br>4.50 | 2.19<br>1.96 | 0.23 | 7.8 | | | |
| SK-944 | 不整形 | 6.59<br>6.42 | 2.92<br>2.80 | 0.16 | 10.9 | | | |
| SK-945 | 不整方形 | 0.90<br>0.65 | 0.75<br>0.55 | 0.58 | 0.4 | | | |
| SK-946 | 不整方形 | 1.55<br>1.37 | 1.52<br>1.35 | 0.21 | 1.7 | | | |
| SK-947 | 不整形 | 3.24<br>2.98 | 1.37<br>1.11 | 0.67 | 3.2 | | | |
| SK-949 | 不整円形 | 1.09<br>0.85 | 1.08<br>0.86 | 0.42 | 0.6 | | 須恵器蓋、土師器鉢、甕 | |
| SK-950 | 不整形 | 1.96<br>1.90 | 1.75<br>1.68 | 0.07 | 2.7 | | 中央にピット | |
| SK-951 | 不整円形 | 1.20<br>0.49 | 0.92<br>0.53 | 0.52 | 0.4 | | 須恵器坏、土師器鉢 | |

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模（上段…上面、下段…底面、単位：m・m²） | | | | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | | | |
| SK-952 | 不整形 | 1.57<br>1.32 | 1.40<br>1.18 | 0.40 | 1.2 | | | |
| SK-954 | 不整長方形 | 2.60<br>2.43 | 1.83<br>1.51 | 0.21 | 3.5 | | | |
| SK-958 | 不整形 | 2.79<br>1.45 | 1.59<br>0.81 | 0.09 | 3.1 | | | |
| SK-959 | 不整形 | 1.93<br>1.64 | 1.22<br>0.74 | 0.50 | 1.0 | | | |
| SK-960 | 不整長方形 | 1.84<br>1.48 | 1.27<br>0.96 | 0.57 | 1.2 | 中央にピット | 弥生式土器甕、甕棺用大型甕 | |
| SK-961 | 不整形 | 1.87<br>1.69 | 1.58<br>1.31 | 0.32 | 1.9 | | | |
| SK-962 | 不整形 | 1.57<br>1.46 | 0.68<br>0.47 | 0.60 | 0.5 | | | |
| SK-963 | 楕円形 | 1.28<br>0.98 | 0.79<br>0.63 | 0.63 | 0.4 | | | |
| SK-964 | 不整方形 | 2.06<br>0.80 | 2.00<br>0.79 | 0.30 | 3.1 | | 弥生式土器甕、高杯 | |
| SK-965 | 不整方形 | 1.50<br>1.30 | 0.78<br>0.52 | 0.28 | 0.5 | | 弥生式土器甕 | |
| SK-966 | 不整方形 | 1.82<br>1.57 | 1.52<br>1.25 | 0.36 | 1.6 | | 弥生式土器甕、壺、支脚 | |
| SK-967 | 不整円形 | 1.54<br>0.99 | 1.24<br>0.77 | 0.34 | 0.6 | | | |
| SK-968 | 不整方形 | 1.27<br>1.04 | 0.93<br>0.68 | 0.37 | 0.5 | | 弥生式土器甕、壺 | |
| SK-969 | 不整長方形 | 1.89<br>1.68 | 1.11<br>0.79 | 0.69 | 1.3 | | | |
| SK-972 | 不整長方形 | 1.76<br>1.25 | 1.17<br>0.74 | 0.68 | 0.9 | | | |
| SK-973 | 不整形 | 1.64<br>1.46 | 0.78<br>0.68 | 0.49 | 0.7 | | | |
| SK-974 | 不整形 | 1.56<br>1.12 | 1.30<br>0.95 | 0.27 | 0.6 | | | |
| SK-977 | 不整形 | 6.85<br>6.74 | 4.80<br>4.66 | 0.30 | 21.1 | | 弥生式土器甕、壺 | |
| SK-978 | 不整円形 | 2.36<br>2.10 | 2.07<br>1.90 | 0.07 | 3.1 | | | |
| SK-979 | 不整形 | 1.85<br>1.55 | 1.07<br>0.76 | 0.31 | 0.9 | | | |
| SK-980 | 不整円形 | 2.45<br>2.25 | 2.40<br>2.21 | 0.05 | 3.8 | | | |
| SK-981 | 不整円形 | 0.97<br>0.86 | 0.87<br>0.53 | 0.34 | 0.3 | | 土師器坏、甕 | |
| SK-982 | 不整円形 | 0.71<br>0.61 | 0.65<br>0.59 | 0.24 | 1.2 | | | |
| SK-983 | 不整楕円形 | 1.76<br>1.52 | 0.84<br>0.71 | 0.25 | 1.2 | | | |
| SK-984 | 不整形 | 2.95<br>2.71 | 1.81<br>1.63 | 0.08 | 3.3 | | | |
| SK-985 | 不整形 | 5.00<br>4.84 | 1.86<br>1.58 | 0.06 | 5.8 | | | |
| SK-986 | 隅丸方形 | 2.97<br>2.68 | 2.62<br>2.35 | 0.18 | 5.4 | | | |
| SK-987 | 不整形 | 21.02<br>0.74 | 0.88<br>0.72 | 0.16 | 0.5 | | | |
| SK-988 | 不整円形 | 1.15<br>0.92 | 1.12<br>0.93 | 0.18 | 0.7 | | | |
| SK-989 | 不整形 | 1.31<br>1.14 | 0.64<br>0.51 | 0.20 | 0.4 | | | |

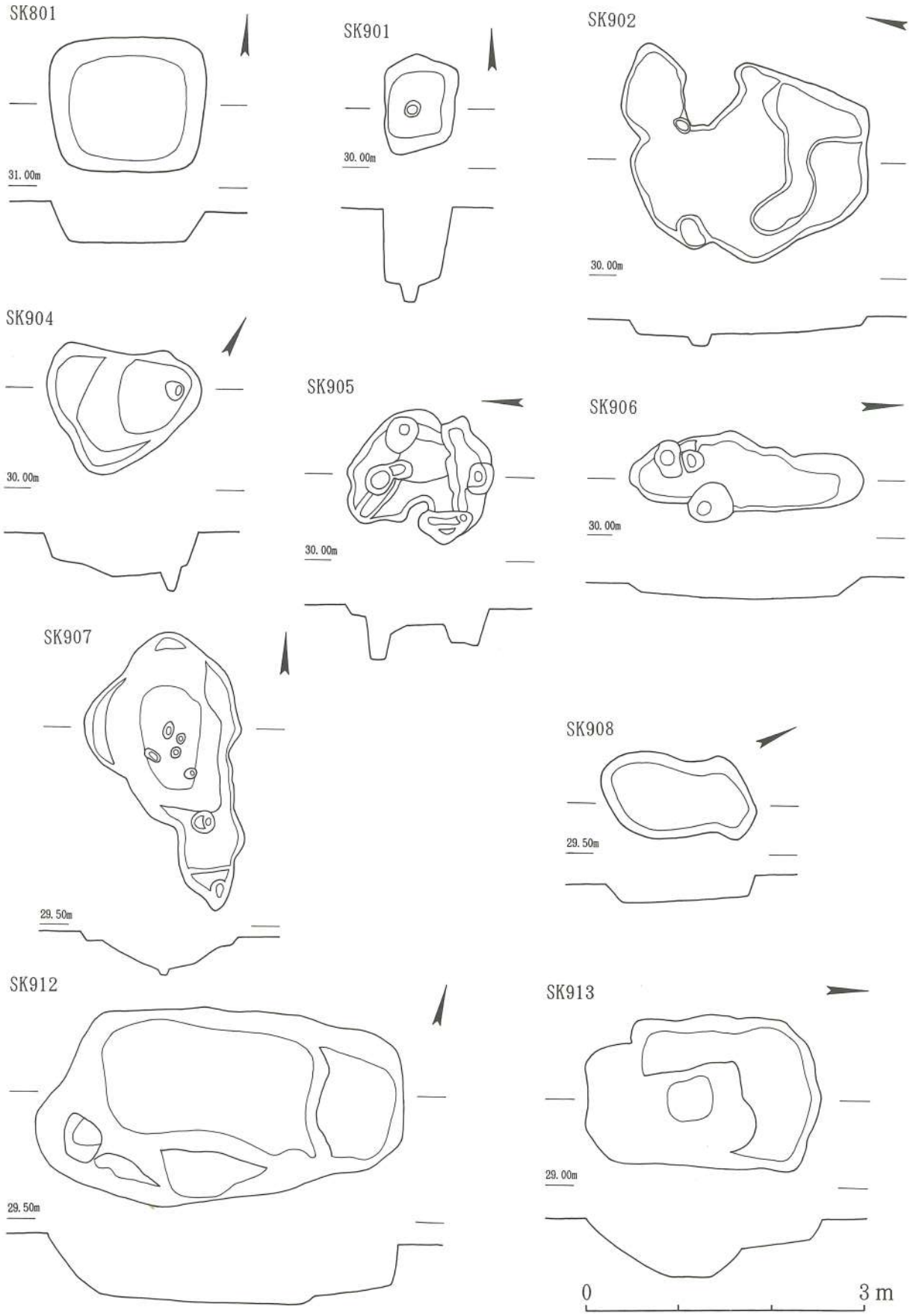



Fig.47　8区・9区出土土壙実測図(1)　SK-801・SK-901・SK-902・SK-904～SK-908・SK-912～SK-913（1/60）

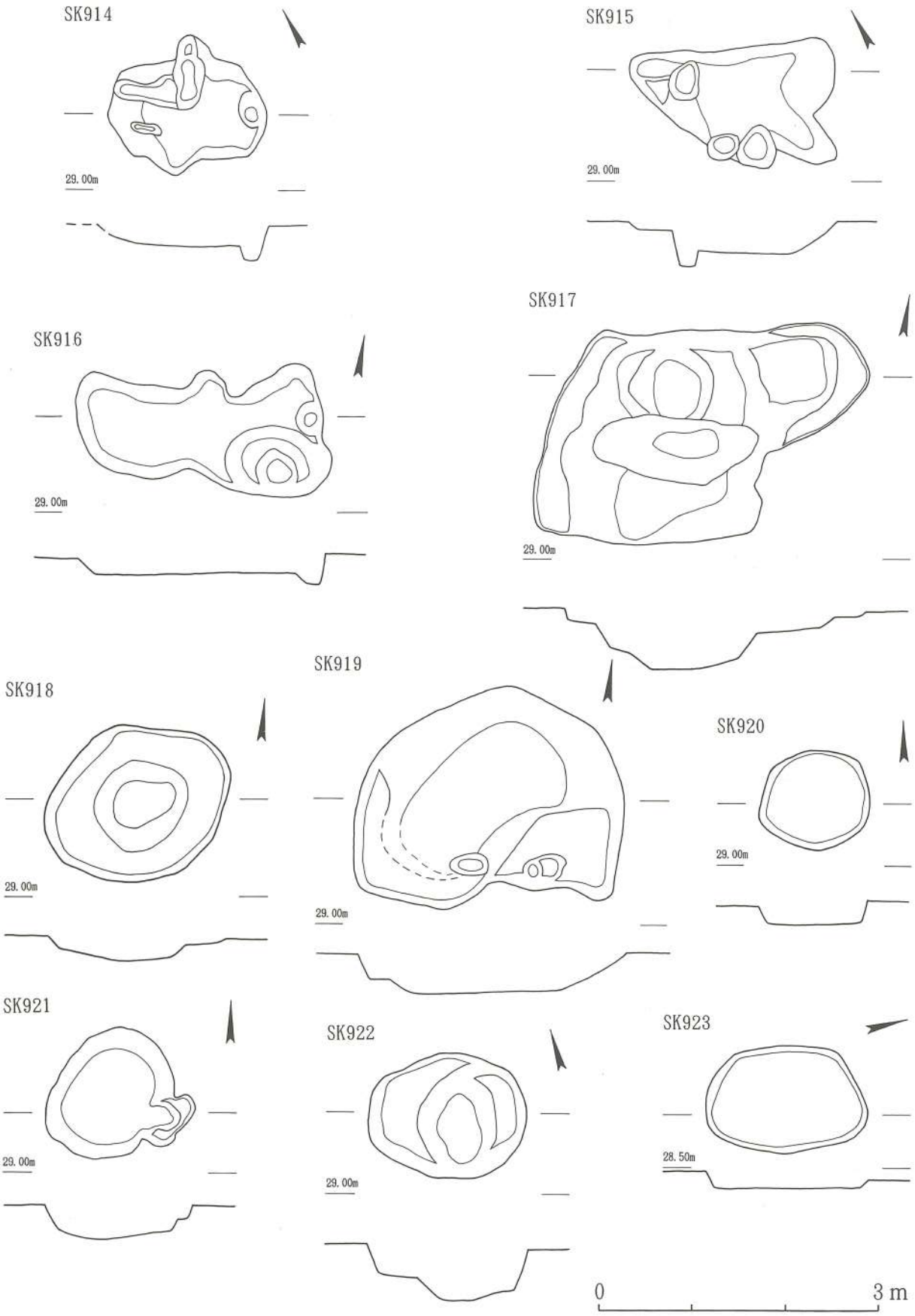



Fig.48　8区・9区出土土壙実測図(2)　SK-914～SK-923 (1/60)

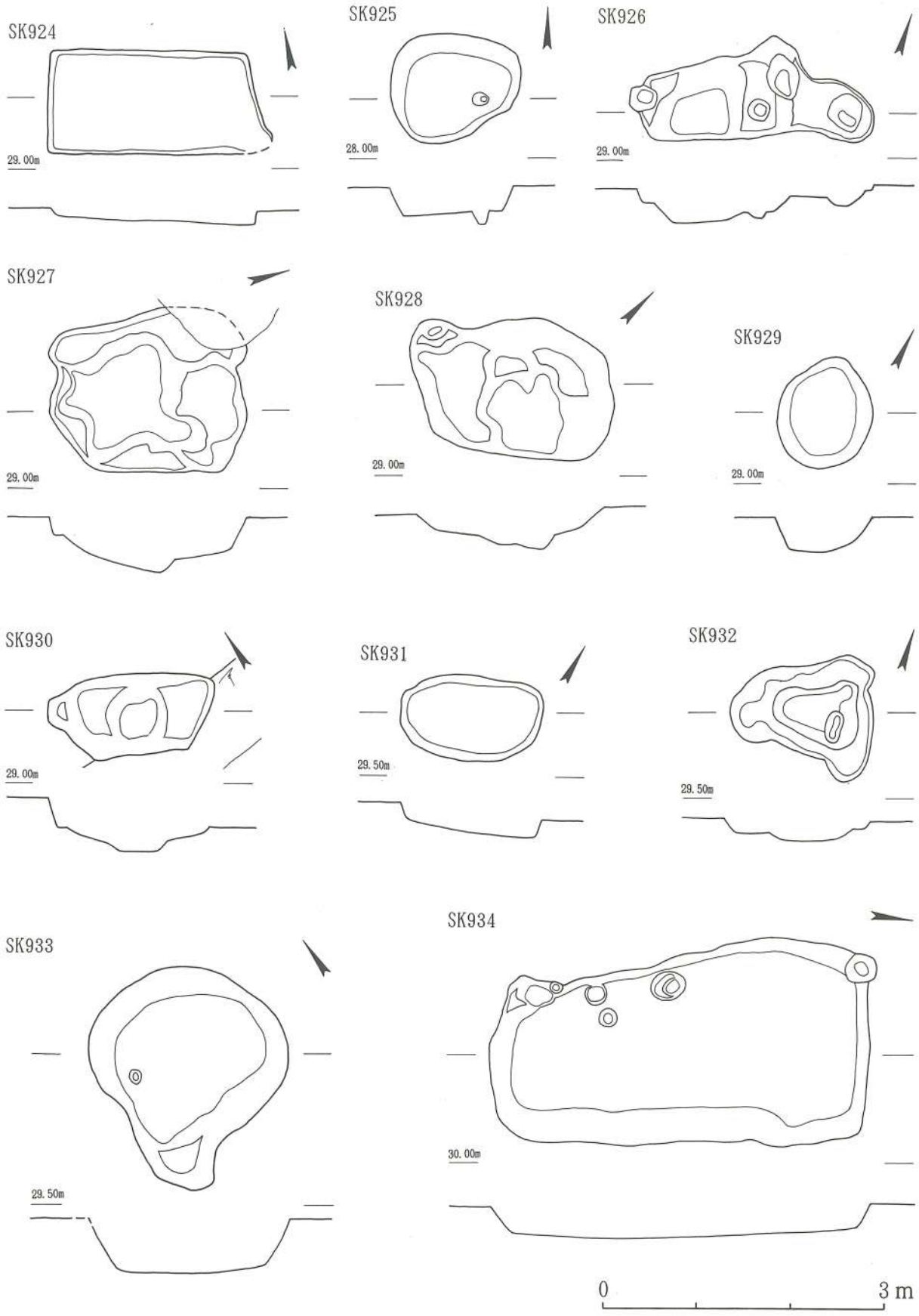



Fig.49　8区・9区出土土壙実測図(3)　SK-924～SK-934（1/60）

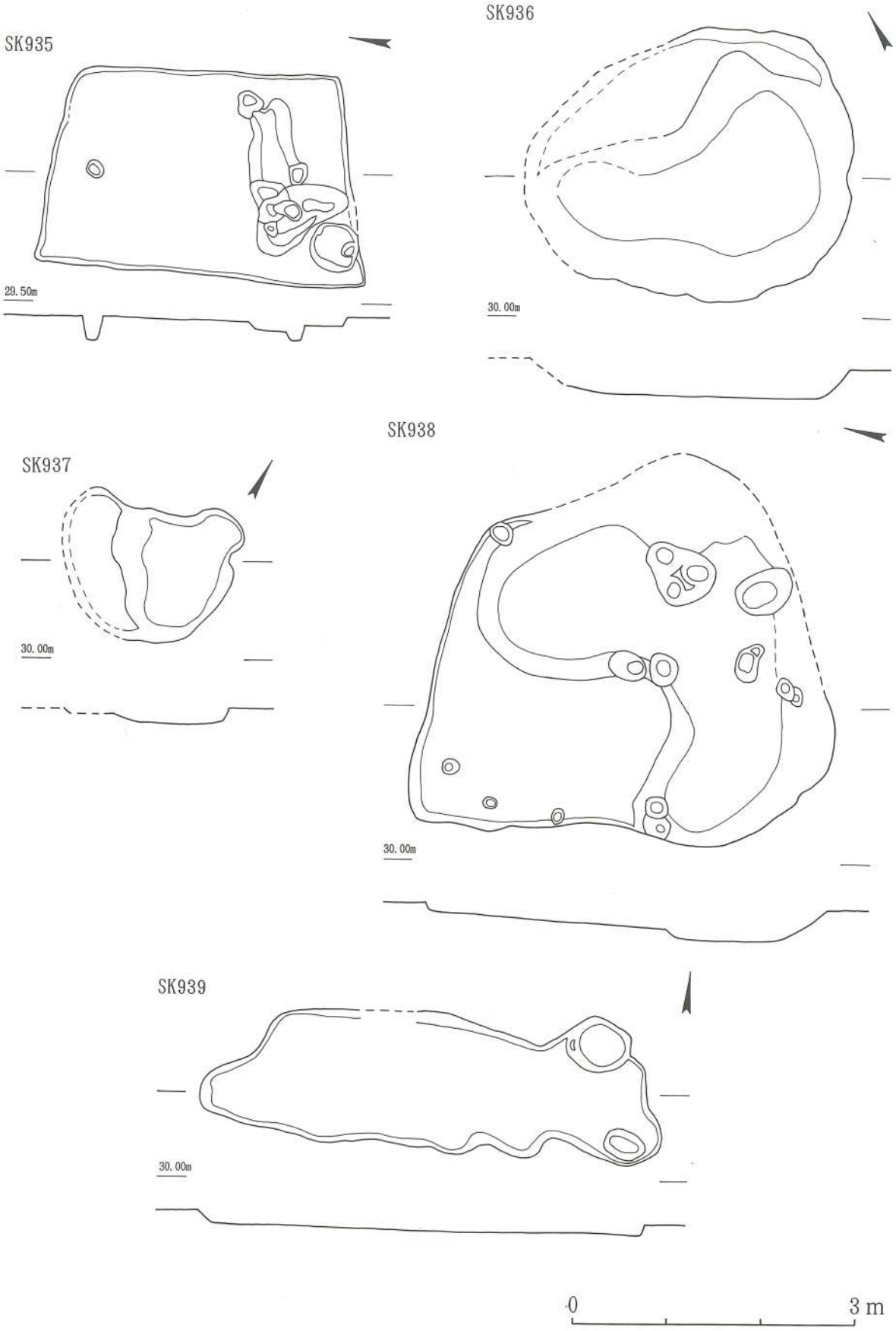



Fig.50　8区・9区出土土壙実測図(4)　SK-935～SK-939 (1/60)

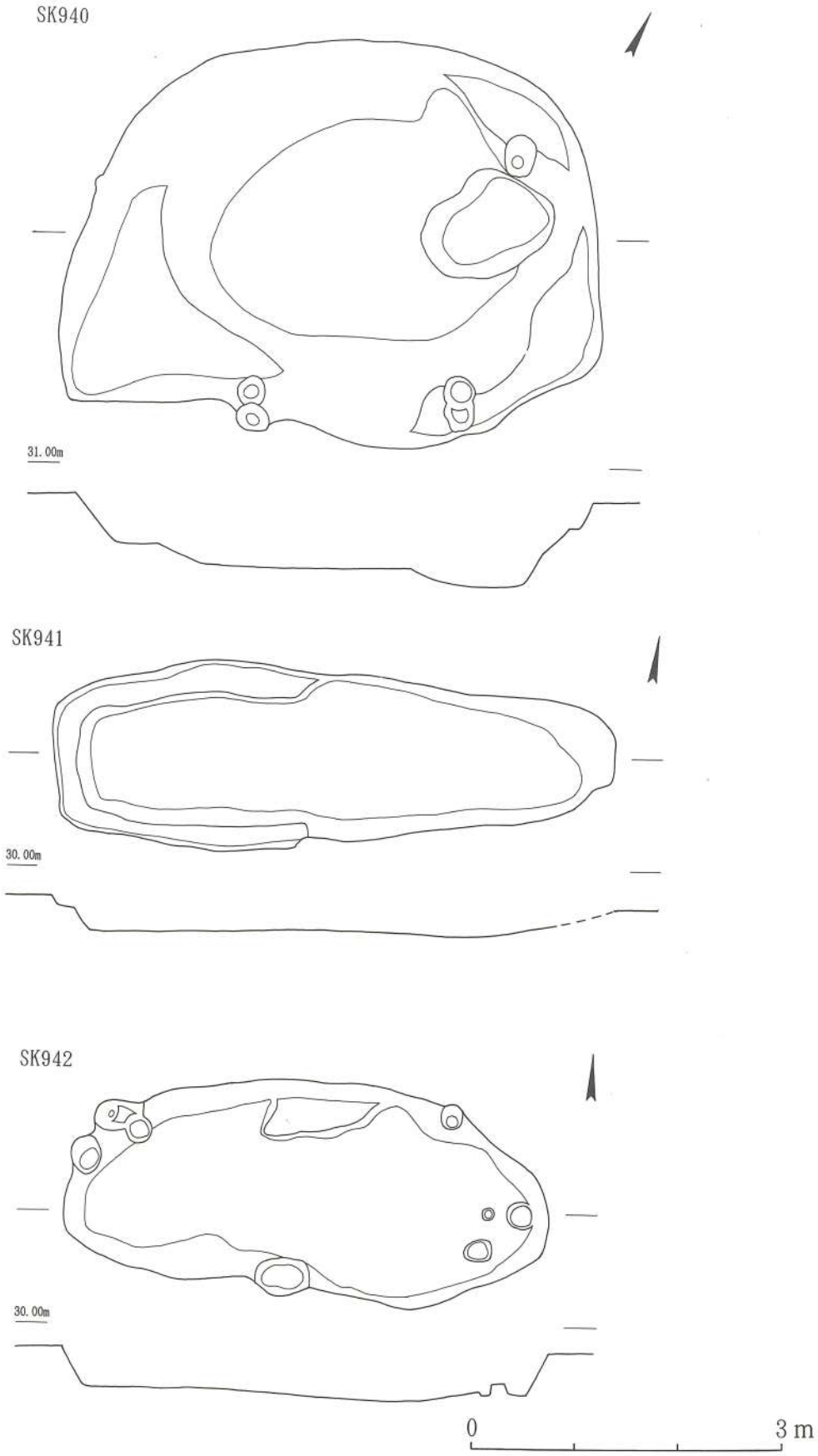



Fig.51　8 区・9 区出土土壙実測図(5)　SK-940～SK-942（1/60）

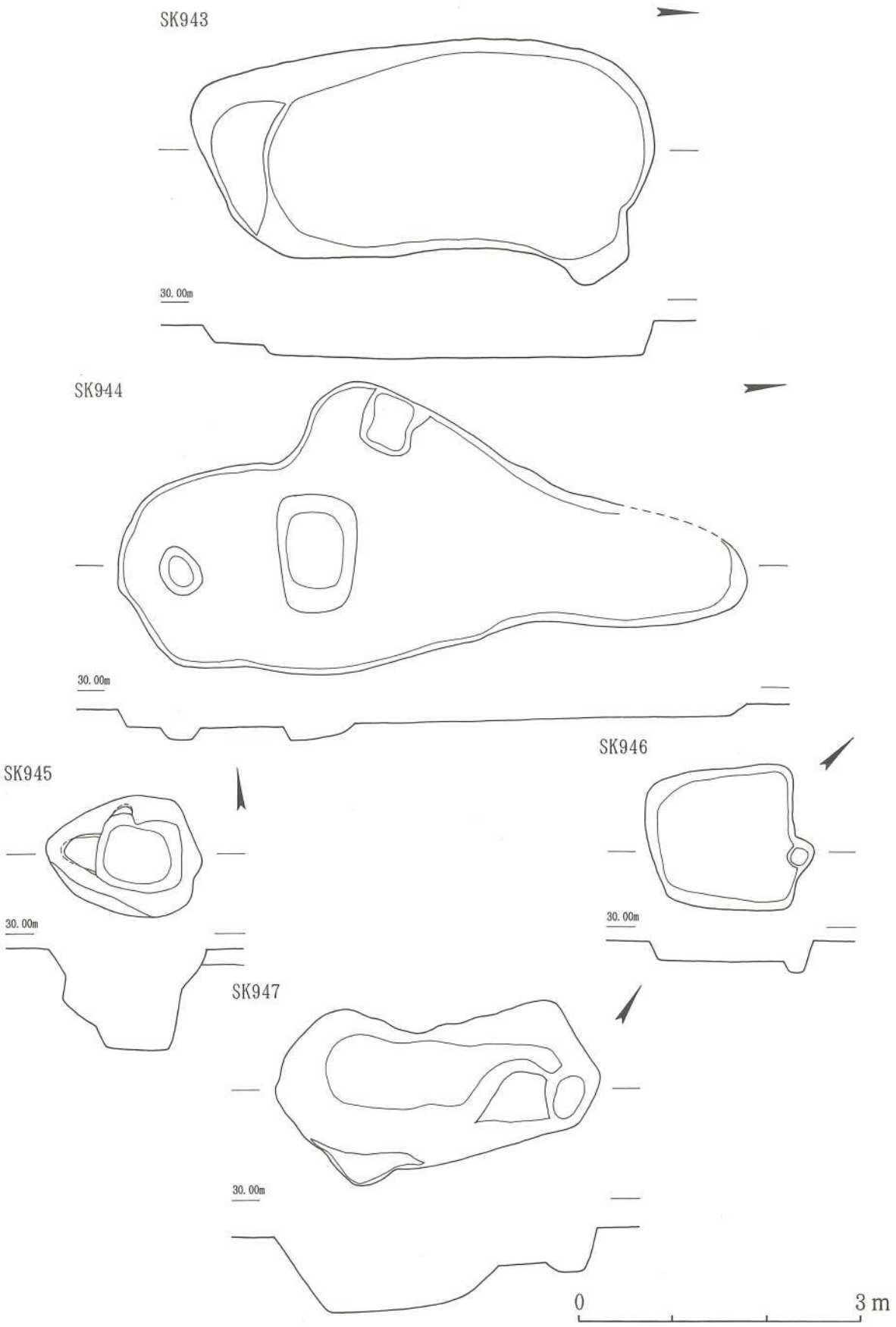



Fig.52　8区・9区出土土壙実測図(6)　SK-943～SK-947（1/60）

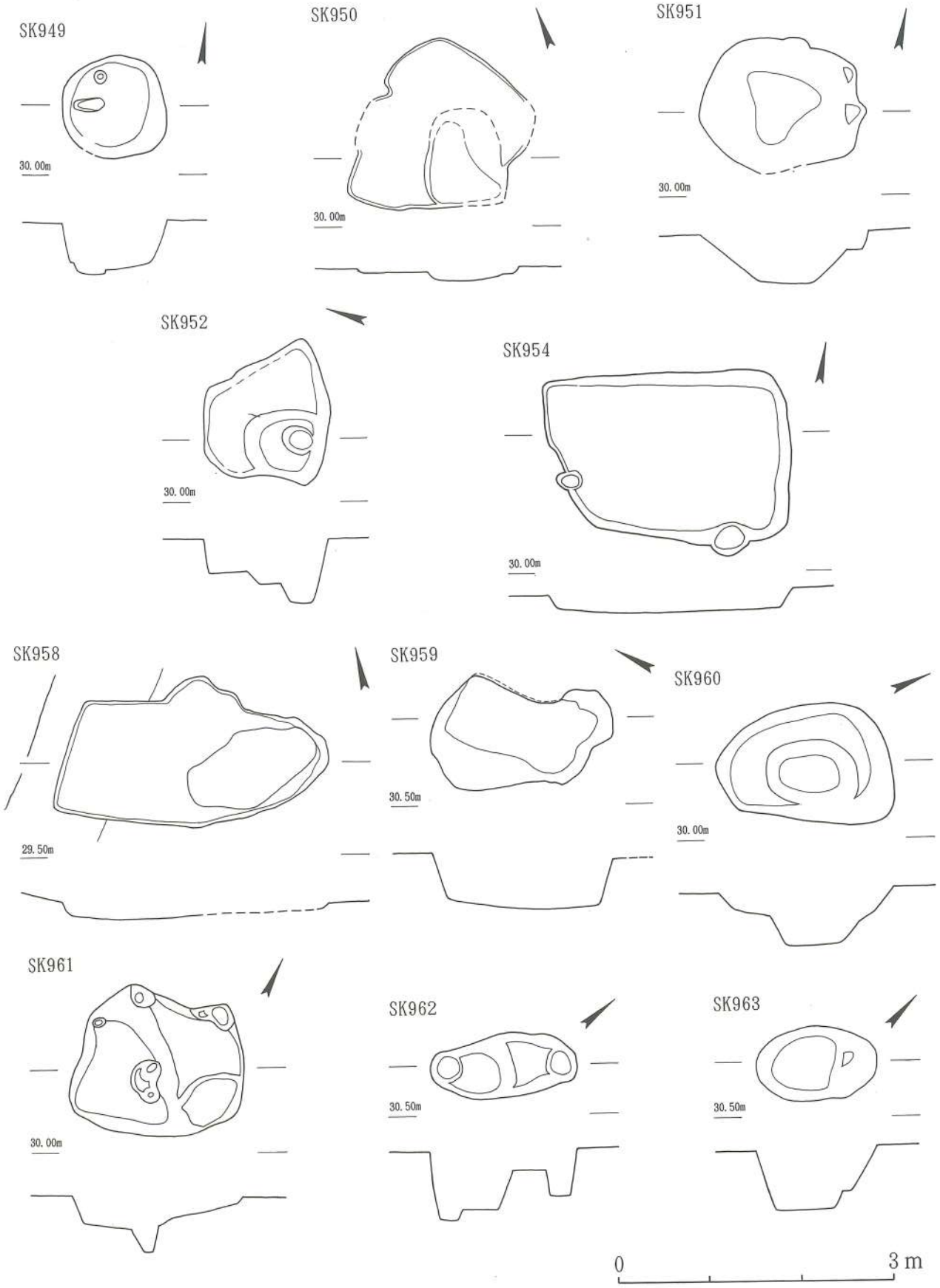



Fig.53　8 区・9 区出土土壙実測図(7)　SK-949～SK-952・SK-954・SK-958～SK-963 (1/60)

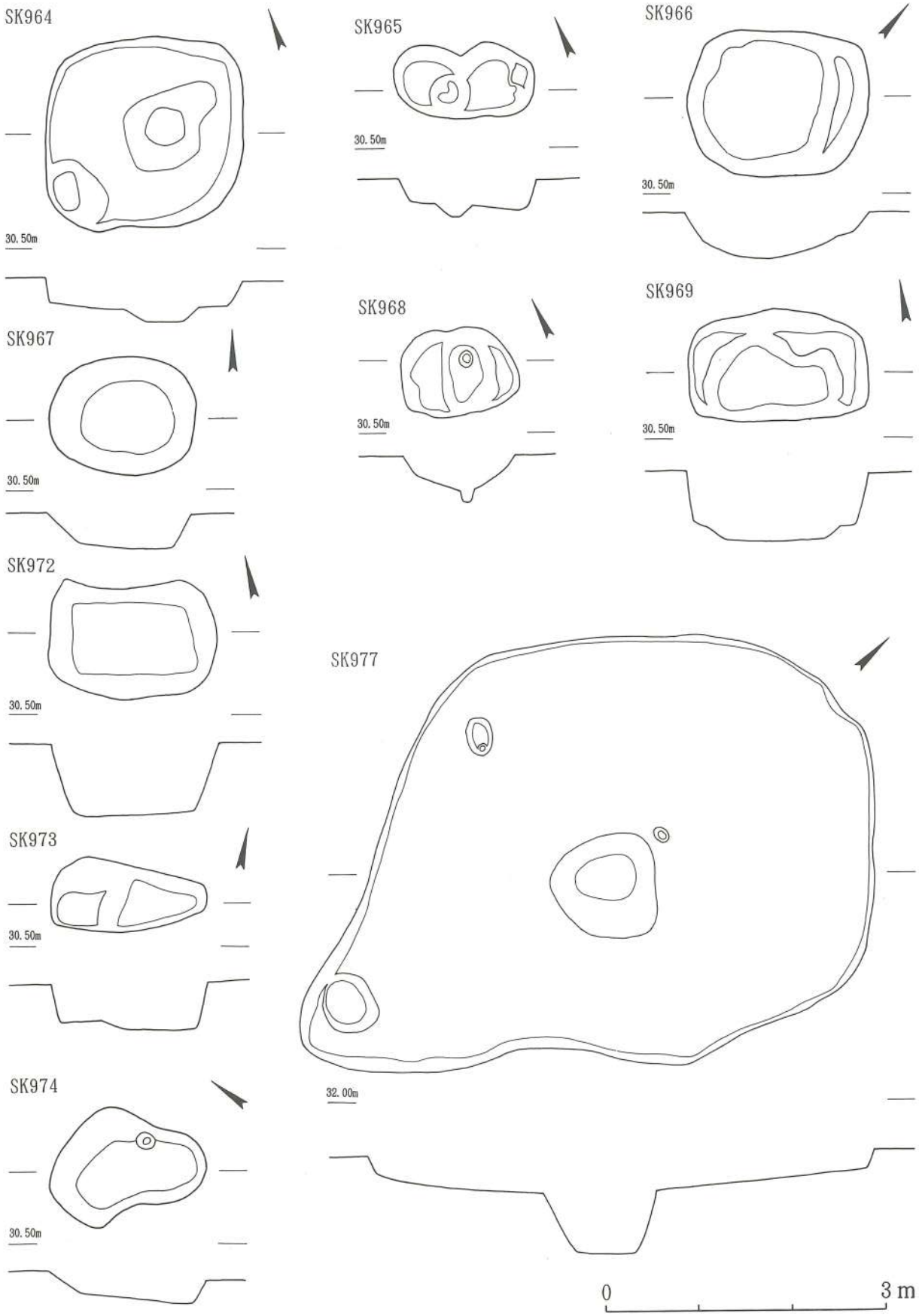



Fig.54　8区・9区出土土壙実測図(8)　SK-964～SK-969・SK-972～SK-974・SK-977（1/60）

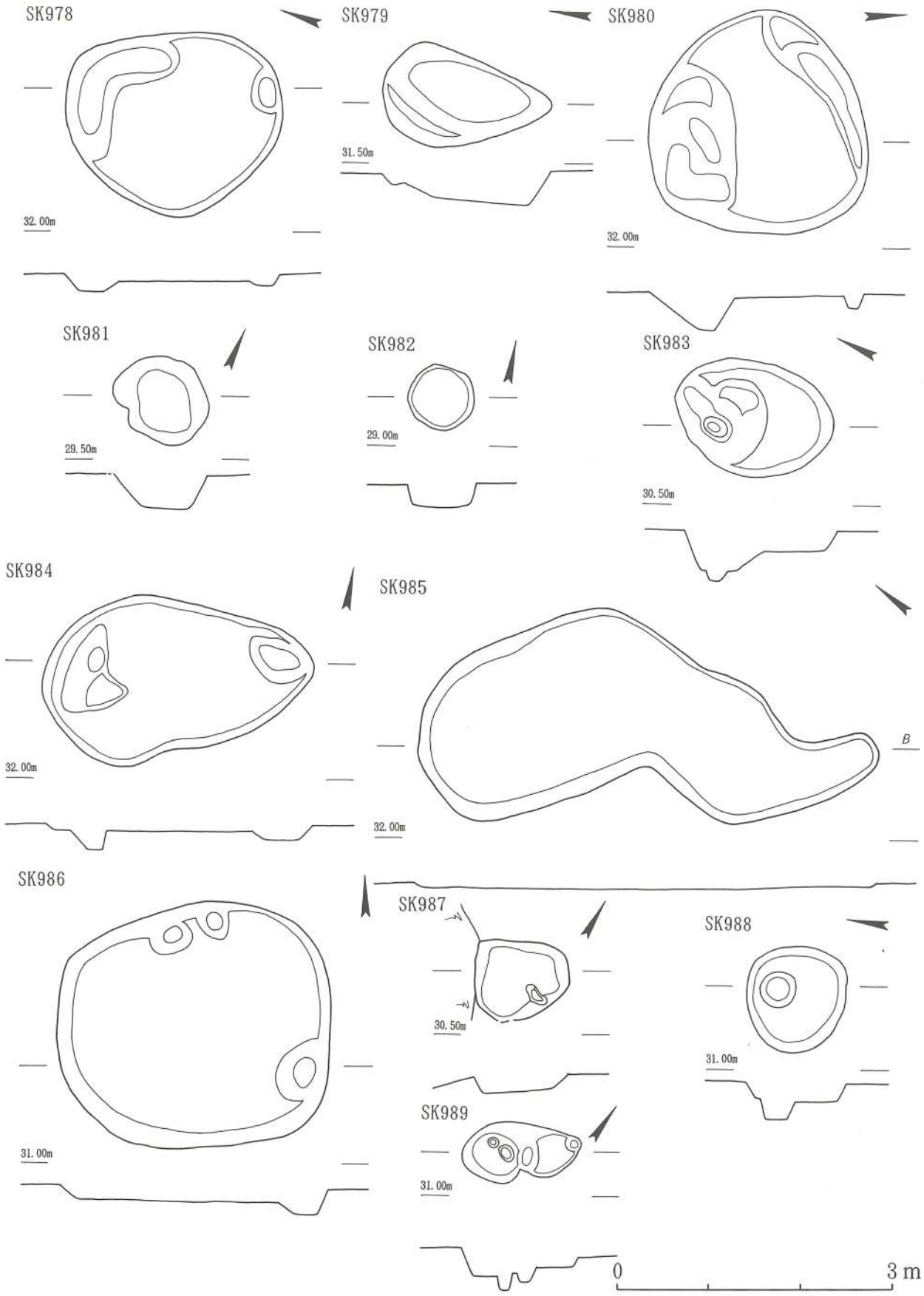



Fig.55　8区・9区出土土壙実測図(9)　SK-978～SK-989（1/60）

### (4)溝　跡（Fig.56・PL.40、41）

溝跡は、後世の耕作に伴う用排水路と考えられるものは多数検出されたが、覆土の様子や出土遺物などからある程度古い時期のものと考えられるものについて、ここで報告する。

8区・9区の調査で検出された溝跡は、平成2年度および3年度の農業基盤整備事業に係る堤土塁跡2区、八藤遺跡4区・6区の調査において、堤土塁跡東側土塁の東端部から八藤遺跡6区の北部にかけて丘陵をほぼ東西に横断する形で断続的に検出された道路側溝状遺構のうち北側側溝の最東端部にあたるSD-910が、延長約4m確認された(詳細は、本書P47、Ⅳ章5溝跡の項参照)。そのほかには、9区建物群の北部Ⅰ－3 Gr. 付近で検出された建物の雨落ち溝あるいは区画溝と考えられるSD-957、8区・9区の境界部分で検出された中世の大溝SD-970の3遺構である。

**SD-957**（Fig.56・PL.40）

SD-957は、9区建物群の北部Ⅰ－3 Gr. 付近で検出された溝跡。北辺、南辺のそれぞれ一部と西辺が「コ」の字形にめぐる、幅20cm～40cm、深さ5cm～15cmの周溝状の遺構。全体の規模は、西辺長が約6m。建物の雨落ち溝あるいは区画溝と考えられるが、溝の内側には柱穴などの施設は検出されなかった。

**SD-970**（Fig.56・PL.41）

SD-970は、8区・9区の境界部分、B～J列、12～14Gr. にまたがり検出された中世の大溝。幅は上面で10m前後、底面で1m～3m、深さ2m程のU字溝で、丘陵の尾根筋に直交する形で、東南東から西北西へ一直線にN－73－Wの方向で延長69mが検出された。底面のレベルは、丘陵の傾斜に沿って中央部やや東よりで標高24.5mと最も高く、東西端部が低くなっている。このようなことから、東西の一方へ水を流すための水路または、区画などの目的で掘られたものと推定される。

### (5)遺物包含層の調査（Fig.57、58・PL.41・Tab.8）

今回の調査区域では、丘陵西側斜面にあたる9区の西部、H～J列、9～11Gr.付近にアジア大陸起源の黄砂(レス）を主体とする風積土層（『佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林』上峰町文化財調査報告書第11集　1994年　上峰町教育委員会）が堆積していた。平成2年度の八藤遺跡4区の調査においても、丘陵西側斜面に同様の風積土層が堆積しており、同層よりチップを主に土器小片、石鏃など4,000余点を出土した遺物包含層が検出されている(『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』上峰町文化財調査報告書第14集1998年上峰町教育委員会)。

そこで、今回の調査においても、遺物包含層検出を目的に調査を実施した。調査は、平成2年度の調査と同様に、10m×10mのグリッドを1～25の2m×2mの小グリッドに分けて、風積土層がみえる部分についてのみ小グリッドごとに一間隔をおいて掘り下げを行った(Fig.57中スクリーンを施した部分)。各小グリッドを面的に10cm掘り下げた時点で、遺物がまとまって検出されなかった小グリッドは掘り下げを中止した。しかし、一部では遺物が検出された場合は、隣接する小グリッドにも調査を広げた。出土した遺物は、一点ごとに位置・深さを記録して取り上げを行った（Fig.58)。

結果的に66の小グリッドの掘り下げを行ったが、前回のようなチップなどの集中部分や土壙状の落ち込みなどは検出できなかったため、いずれの小グリッドにおいても1回の（10cm）の掘り下げで調査を終了した。検出できた遺物は、縄文式土器細片、小片16点、細石刃1点（Ⅰ－8－19Gr.出土)、石剣1点（H－9－25Gr.出土）の

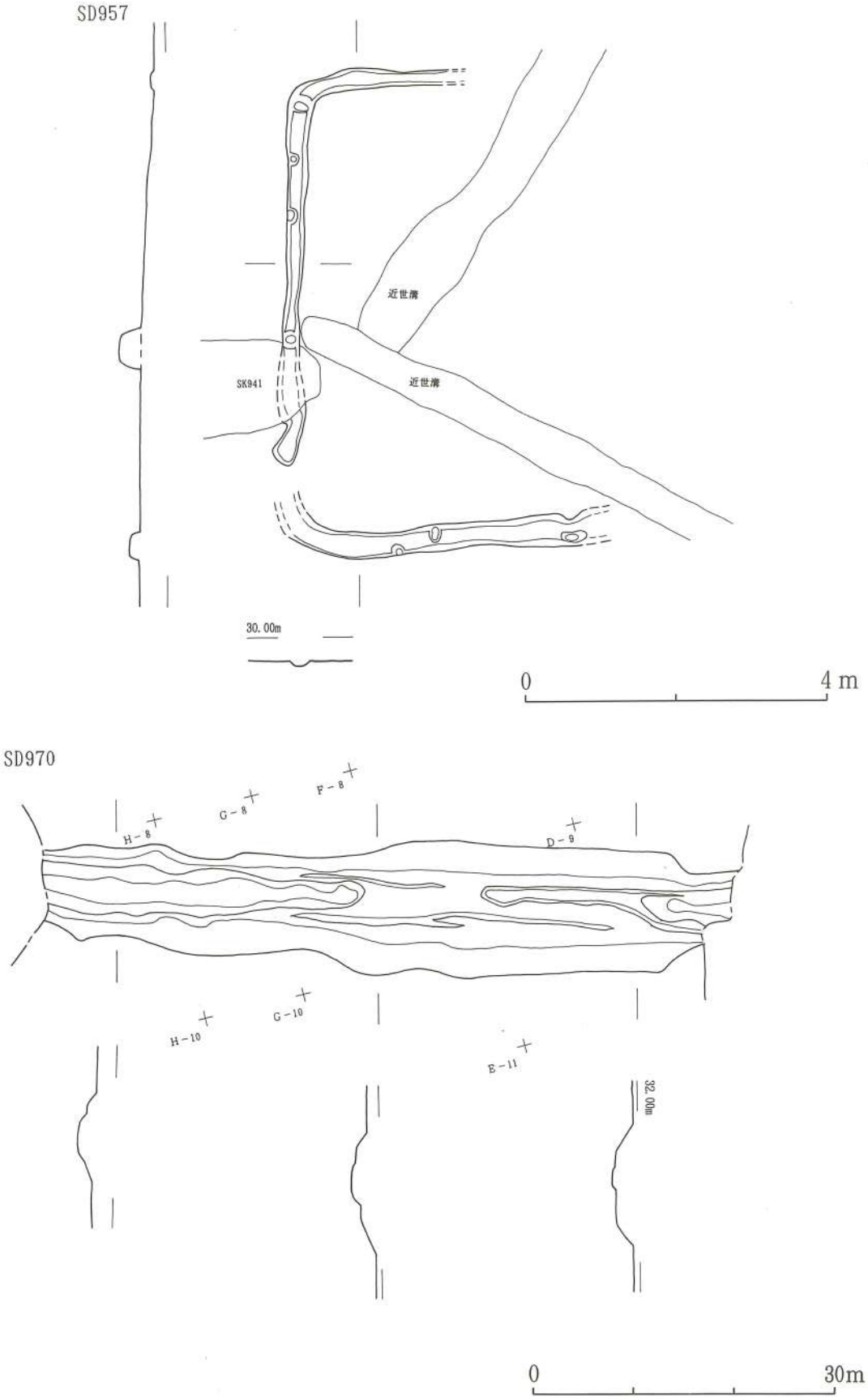



Fig.56　8区・9区出土溝跡実測図　SD-957（1/80）・SD-970（1/600）

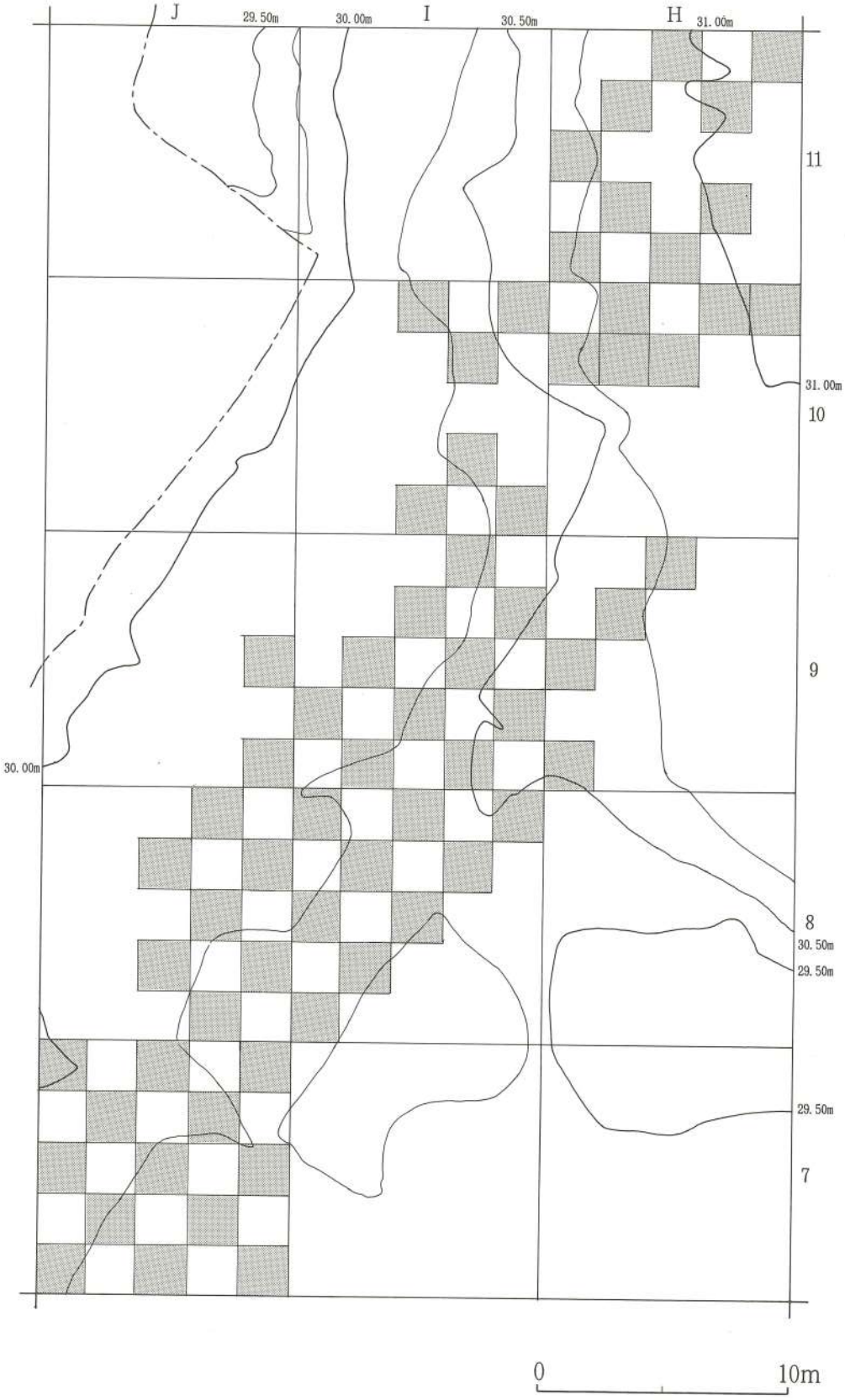



Fig.57　8区・9区遺物包含層調査グリッド図　H－9～11Gr.・I－8～10Gr.・J－7～9Gr.（1/125）

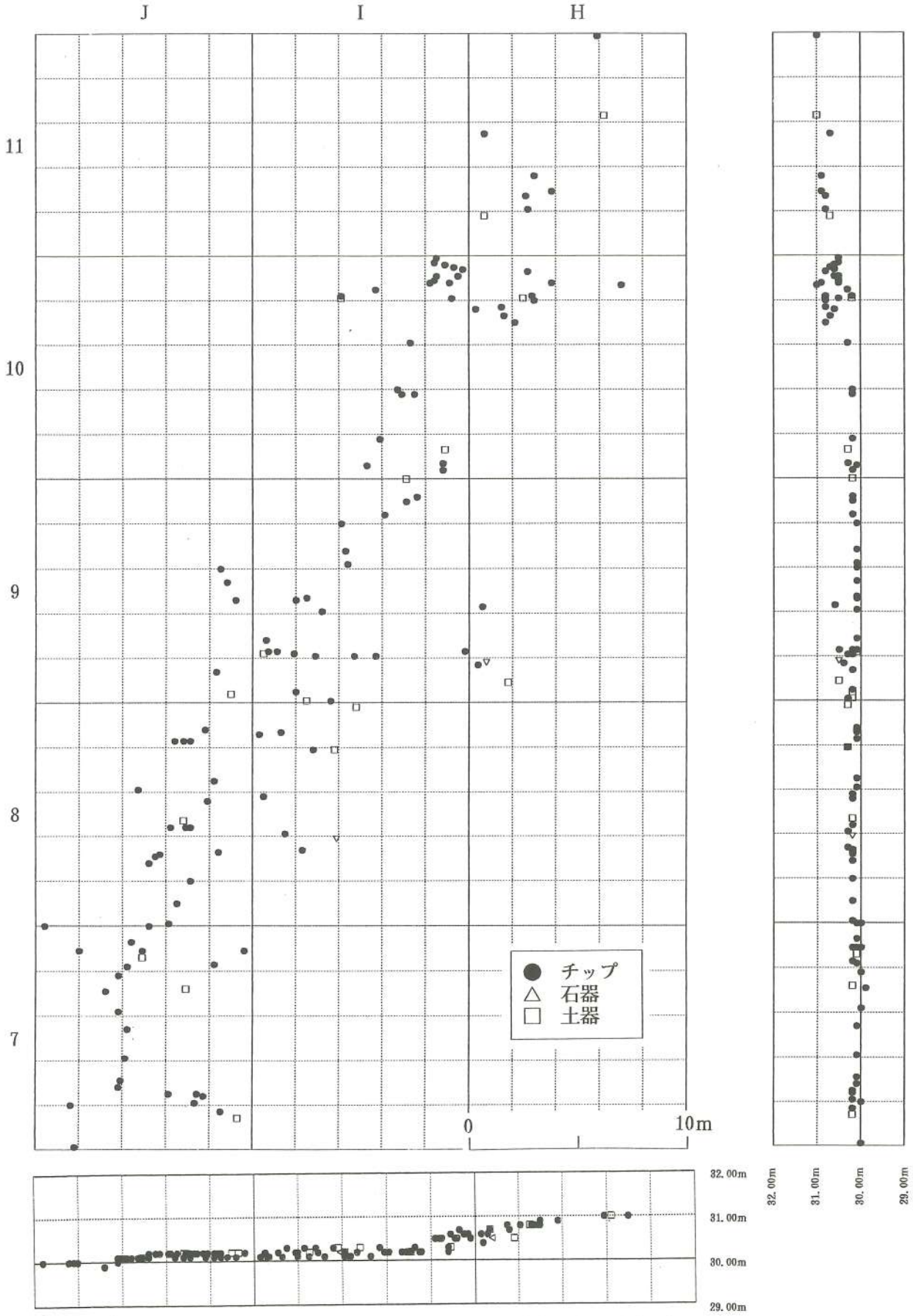



Fig.58　8区・9区遺物包含層中遺物分布図（1/125）

他はチップ類で、予想をはるかに下回る総数で124点であった。しかし、調査終了後の水田基盤造成工事中に、丘陵の地下約3.5mの深さから長さ22m、幹の直径1.5mの巨大な倒木が、I～K列－6 Gr. の下層から発見された際、この包含層の調査において検出された細石刃が、倒木の年代判定に果たした役割は大きく、その後の阿蘇4火砕流の堆積層とこの火砕流に焼かれ、なぎ倒された埋没古森林の調査の一契機となったことは前述のとおりである。

各小グリッド毎の出土遺物数は、Tab. 8 にまとめた。

Tab. 8　8区・9区遺物包含層小グリッド別遺物出土数

| グリッドNo. | チップ | 石器 | 土器 | 合計 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| H－11－1 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －7 | 0 | 0 | 1 | 1 | |
| －9 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －11 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －15 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －17 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －19 | 4 | 0 | 0 | 4 | |
| －23 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －25 | 0 | 0 | 1 | 1 | |
| H－10－1 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －6 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －12 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －16 | 3 | 0 | 1 | 4 | |
| －17 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －22 | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| H－9－11 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －17 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －23 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －25 | 1 | 1 | 1 | 3 | 石剣1点 |
| I－10－1 | 11 | 0 | 0 | 11 | |
| －5 | 2 | 0 | 1 | 3 | |
| －7 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －9 | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| －11 | 2 | 0 | 1 | 3 | |
| －15 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| I－9－2 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －4 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －6 | 3 | 0 | 1 | 4 | |
| －8 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －10 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －12 | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| －14 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －18 | 3 | 0 | 0 | 3 | |

| グリッドNo. | チップ | 石器 | 土器 | 合計 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| I－9－20 | 3 | 0 | 1 | 4 | |
| －24 | 4 | 0 | 1 | 5 | |
| I－8－1 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －7 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －11 | 0 | 0 | 1 | 1 | |
| －13 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －17 | 1 | 0 | 1 | 2 | |
| －19 | 1 | 1 | 0 | 2 | 細石刃1点 |
| －21 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －23 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －25 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| J－9－3 | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| －5 | 1 | 0 | 1 | 2 | |
| J－8－2 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －4 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －6 | 4 | 0 | 0 | 4 | |
| －8 | 4 | 0 | 1 | 5 | |
| －10 | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| －12 | 1 | 0 | 0 | 1 | |
| －14 | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| J－7－1 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －3 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －5 | 1 | 0 | 1 | 2 | |
| －7 | 0 | 0 | 1 | 1 | |
| －9 | 4 | 0 | 0 | 4 | |
| －11 | 4 | 0 | 1 | 5 | |
| －13 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －15 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －17 | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| －19 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －21 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| －23 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| －25 | 2 | 0 | 0 | 2 | |
| 合　計 | 106 | 2 | 16 | 124 | |

## 4．遺　　物

今回の調査では、各遺構などから縄文時代、弥生時代、奈良時代及び中世の各時代の土器や石器などが出土している。なお、近世以降の遺物も少なからず出土しているが、紙面の都合で割愛した。

出土遺物の量は、遺構数からすると決して多くなく、むしろ少ないと言えよう。ここでは、土器の代表的なものを遺構ごとに、その他の土製品、石器類などは器種ごとに報告する。

なお、実測図中の土器拓影、断面は、縮尺1/3であり、遺物番号のあとに「1/3」と表記した。特記のないものはすべて縮尺1/4である。また、実測図、写真図版に付した遺物番号は一致する。

### (1) 土　　器（Fig.59～67・PL.42～50）

**SK-801出土土器**（Fig.59・PL.42）

1は、須恵器高台坏、坏部底面に設けられた高台は外へ開き、体部はやや内反しながら立ち上がり口縁が小さく外反する。2は土師器の甑、丸底で胴部はやや開きながら口縁部に至る。底部には焼成前に穿孔された直径6㎜程の穴が4ヶ所、菱形に配されている。内外面ともにナデ。

**SD-803出土土器**（Fig.59）

3は、須恵器皿、平底の底部で、短い口縁は外反しながら大きく開く。4は、弥生式土器の甕の口縁。いずれもSD-803として調査を行った近世溝出土。

**SD-903出土土器**（Fig.59・PL.42、43）

5は、土師器の小形の甕。6は、土師器の甕と考えられる土器で張りをもつ胴部に短い口縁が直立する。7は、縄文式土器で粗製の深鉢の破片と考えられ、内外面ともに粗い条痕をもつ。いずれもSD-903として調査を行った近世溝出土。

**SK-905出土土器**（Fig.59・PL.42）

8は、土師器坏、浅い半球系の体部をもつものと思われ、口縁部は内傾しながら立ち上がる。9は、土師器鉢、口縁部は屈曲し外へ開き、肥厚する。

**SK-906出土土器**（Fig.59・PL.42）

10は、須恵器高台坏、底部外周に太く短い高台をもち、体部は直線的に立ち上がり口縁部に至る。11は、須恵器蓋、天井部は平坦で、口縁は肥厚し、断面三角形に近い形状を呈す。

**SK-907出土土器**（Fig.59・PL.42、43）

12は、土師器坏、体部は浅い丸底を呈し、口縁部は直線的に立ち上がる。13～15は、いずれも須恵器高台坏。13は底面外周に太く短い高台が付き、14は底面よりやや内側に「ハ」の字形に開く小さい高台が付き、口縁部はやや外反する。15は底面よりやや内側に「ハ」の字形に開く太い高台をもつ。16は、須恵器蓋、天井部は平坦でつまみは無く、口縁部は下方に屈曲している。小形の短頸壺などの蓋であろう。17、18は、須恵器坏蓋。17は天井部が垂れ下がり、口縁端部はやや肥厚している。18は、天井部がやや下がり口縁端部が玉縁状に肥厚する。19、20、23は、土師器甕。20は外面にハケ目を残す。23は胴部に把手がつく。21は、須恵器壺、長頸壺の胴部と考えられ、胴部下位から底面にかけてヘラ削り痕を残す。22は須恵器大甕の胴部。内面には同心円、外面には格子目の叩き目を残す。

**SB-993出土土器**（Fig.59、60、67・PL.43）

24は、須恵器の壺あるいは瑞胴部。胴部上位から肩部にかけて3条の沈線がめぐり、同部下位にはヘラ削り痕

を残す。底面にはヘラ描きによる2本の線による「二」の字状の記号をもつ。26は、須恵器高坏。浅い坏部に台状の脚部がつくもので、「腰高」様の形態を呈す。27は、須恵器壺の口縁。28は、須恵器の壺あるいは瑞胴部。胴部中位に2条の沈線がめぐる。171は、須恵器壺の口縁。

**SD-910出土土器**（Fig.59・PL.43）

25は、須恵器平瓶。天井部を粘土塊で閉塞した胴部を成形した後で口縁を中央よりやや偏った位置に取り付けており、胴部外面上部にはカキ目、胴部下位はナデ、内面にはロクロ目を残す。

**SK-912出土土器**（Fig.60・PL.43）

29～35は、土師器坏。29～31、34、35は浅い丸底を呈すもので、直立する口縁がつく。32、33は、平底の坏で、32は体部が開きながら口縁に至る。33は体部がほぼ直立する。35は浅い丸底の坏で体部は内湾しながら口縁に至り口唇部が肥厚する。36は、須恵器壺の口縁部。37は土師器の小形甕、内外面にハケ目を残す。38は、土師質の土器で、内定する胴部はそのまま口縁に至り、外面に把手状の突起をもつ。胴部下部は粘土の接合部分で下位が失われているが、接合部の形状からさらに下方へ延びるのではなく、内側に屈曲し底部を形作るものと推定される。遺存部の上面観も正円ではなく、ややひずんだ円弧を呈す。小形の移動式の竈かとも考えられるが、遺存部には焚口等などはみられず、内面も度々火を受けた痕跡もない。内外面ともにナデ。

**SK-914出土土器**（Fig.60・PL.44）

39は、縄文式土器片。口縁下部に横位の貝殻腹縁の連続押圧による波状文が3列目まで確認できる。

**SK-918出土土器**（Fig.60）

40は、須恵器蓋。偏平な蓋で、口縁端部が肥厚し下方に小さく摘まれている。41は、土師器広口壺。

**SK-921出土土器**（Fig.60・PL.44）

42は縄文式土器深鉢。口縁下部に横位の貝殻腹縁の連続押圧文が3段施文されている。胴部は内面横位の条痕、外面は縦位の条痕を施した後ナデ調整。

**SK-922出土土器**（Fig.60・PL.44）

44、45は、縄文式土器。いずれも深鉢の胴部破片で、44は内外面ともに粗い条痕。45は外面に細い横位の沈線がめぐり、内面はナデ。

**SK-928出土土器**（Fig.60、61・PL.44）

46～54は、縄文式土器。いずれも深鉢の胴部破片で、内外面ともに横位の条痕が施されている。46、47は、口縁下部に横位の連続押圧文を持つ。48は粘土の接合痕を表裏面に残す。49は刻み目凸帯をもつ。

**SK-930出土土器**（Fig.61・PL.44）

55は、縄文式土器。深鉢の胴部破片で、内外面ともに条痕が施されている。

**SK-932出土土器**（Fig.61・PL.44）

56、57は、土師器坏。いずれも平底で腰の張りが強く、体部はやや外反しながら開き口縁に至る。

**SK-933出土土器**（Fig.61・PL.44）

58は、須恵器坏。平底で体部は内湾しながら立ち上がり口縁部は外反する。59は、土師器の甑。口縁部は朝顔状に大きく開く。内面縦位のヘラ削り、外面ハケ目。

**SK-934出土土器**（Fig.61・PL.45）

60は、土師器坏。浅い丸底の体部で、口縁端部が外へ小さく摘まれている。61は、土師器甕。頸部が強く屈曲し直線的に開く口縁がつく。内面ヘラ削り。

**SK-935出土土器**（Fig.61）

62は、土師器甑。胴部下位が遺存し、端部がやや肥厚する。

**SK-939出土土器**（Fig.61）

63は、土師器鉢。半球形の深い体部に外に小さく開く口縁をもつ。64、65は、須恵器蓋。いずれも天井部は平坦で、64は口縁端部が丸みを帯び、65は下方へ小さく摘まれている。

**SK-940出土土器**（Fig.61，62・PL.45、46）

66～71、73は、土師器坏。66～68、70、71は平底または平底に近いもの。68は腰の張りが強い。71は底面に線の細い「×」の字形の記号がヘラ描きされている。69は半球形の体部をもち、口唇端部が内側に小さい玉縁状を呈す。73は浅い丸底で直線的にやや外傾する口縁がつく。72は須恵器坏。丸底気味の平底で口縁は直線的に開く。74は、土師器皿。平底に近い底部に大きく開く口縁がつく。75、78は、土師器高台坏。75は底面外周よりやや内側に「ハ」の字形に開く太い高台をもち、体部は外反しながら口縁に至る。78はやや大振りの坏で底面外周に小さい高台がつく。76、77は、須恵器高台坏。76は底面外周に太い高台がつく。77は底面外周より内側に太く短い高台がつく。79は、壺の底部。80、82、83は、須恵器蓋。80はやや深めの体部をもち、断面四角形に近いつまみをもつ。口縁端部は下方に小さく屈曲している。82は天井部が偏平で口縁端部が小さく下方に摘まれている。81は、土師器蓋。偏平な天井部に断面四角形のつまみをもつ。84～90は、土師器の甕。84～88は胴部がくびれることなく朝顔状に開く口縁に至る。84は外面ハケ目。85、87は内面ヘラ削り、外面ハケ目。89は丸みをもつ胴部が内湾し、外反する口縁部との間に頸部をもつ。90は口縁が外に摘まれ玉縁状を呈す。91は土師器の小形土器。平底の底部、体部は外傾しながら開き、直立する口縁をもつ。内面にはヘラ削り痕を残す。92は、土師器甑、内面ヘラ削り。

**SD-970出土土器**（Fig.62・PL.46）

93は、須恵器坏。底面外周に「ハ」の字形に広がる小さい高台をもつ。94は陶器壺。外面には灰釉が施釉されている。95は、瓦器碗。部分的に黒色あるいは灰色を呈す軟質の土器で、外面は粗いミガキが施されているもののロクロ目の凹凸が残る。

**SD-948出土土器**（Fig.62・PL.46）

96～98は、弥生式土器。いずれも甕で、96、98は逆L字形口縁をもつ。いずれもSD-948として調査を行った近世溝出土。

**SK-949出土土器**（Fig.62、63・PL.47）

99は、須恵器蓋。やや深めの体部に断面四角形のつまみがつく。口縁端部は下方に小さく摘みだされた受けをもつ。100は、土師器鉢。半球形の体部で口縁部は肥厚し大きく開く。丸底に近い底部をもつものと思われる。101は土師器壺。やや上げ底気味の底部に球形の胴部をもち口縁部は内湾しながらやや開く。

**SK-951出土土器**（Fig.63・PL.47）

102、103は、土師器鉢。半球形の体部で口縁部は大きく開く。丸底に近い底部をもつものと思われる。104は、須恵器坏。底面外周に鈍く短い高台がつく。

**SH-953出土土器**（Fig.63・PL.47）

105、110は、土師器坏。105は浅い丸底の体部に内湾しながらやや開く口縁をもつ。110はやや深めの丸底の体部をもち、口縁は肥厚し外反する。106は、須恵器坏。平底で体部は直線的に開きながら立ち上がる。107～109は、須恵器高台坏。107は底面外周に鈍く太い高台がつく。体部は直線的に開く。108は底面外周よりやや内側に

太い高台がつく。口縁はやや外反して開く。109は底面外周にやや開く太い高台がつく。体部は内湾しながら開き口縁に至る。111、112、114～119は、土師器の甕あるいは甑。111は口縁がわずかに開く。外面ハケ目。112は胴部は張りをもち口縁部は肥厚しやや開く。114は胴部に張りがなく口縁が「く」の字に開く。外面ハケ目。115は胴部は張りをもち口縁が「く」の字に開く。外面ハケ目。116は胴部に張りがなく口縁が外反しながらやや開く。外面ハケ目、内面ヘラ削り。117は胴部は張りをもち口縁が「く」の字に屈曲し開く。外面ハケ目。118は胴部に張りがなく口縁が「く」の字に屈曲し開く。119は胴部に把手をもつ。113は、土師器鉢。半球形の体部で口縁部は大きく開く。丸底に近い底部をもつものと思われる。外面ハケ目。

**SK-960出土土器**（Fig.64・PL.48）

120～123は、弥生式土器の甕。120は体部の張りが強く逆L字形口縁をもつ。122も逆L字形口縁をもつ甕で、外面ハケ目、内面ナデ。121、123は甕棺に用いられると思われる大型甕。121は外側に大きく張り出すT字形口縁をもち、口縁下部に断面三角形の凸帯が1条めぐる。胴部は強く張りだし截頭卵形の器形を呈すものと考えられる。123は胴部破片で、断面四角形の凸帯2条がめぐる。

**SK-964出土土器**（Fig.64・PL.48）

124～126は、いずれも弥生式土器。124、125は、逆L字形口縁の甕。126は、高坏の脚部で外面は赤色塗彩、内面裾部にハケ目。

**SK-965出土土器**（Fig.64・PL.48）

127、128は、弥生式土器の壺。同一個体かとも思われるが直接接合できなかった。朝顔状に開く鋤形口縁をもち、頸部と肩部の境界には断面三角形の凸帯がめぐる。外面には赤色塗彩が施されている。

**SK-966出土土器**（Fig.64、65・PL.48、49）

129～135は、弥生式土器。129～132、134は甕。129は口縁端部が断面「コ」の字形を呈す逆L字形口縁の甕。131も逆L字形口縁をもつが口縁端部は丸みをもち、張りのある胴部をもつ。130、132は逆L字形口縁をもつ平底の甕。129、131より器高が低く鉢に近い形態を呈す。134は口縁端部が断面「コ」の字形を呈す逆L字形口縁の甕。口縁端部には、ヘラ状工具の先端による鋭い刻み目が施され、口縁下部に1条及び胴部下位に2条の断面「M」字型の凸帯がめぐる。外面には赤色塗彩が施されている。133は、広口壺。口縁部は外へ大きく開き、内外面ともにナデ。外面には赤色塗彩が施されている。135は、土製支脚。円錐台形を呈し、上面から底面へ直径1.5cm～2cmの穴が中心を貫通している。

**SK-968出土土器**（Fig.65・PL.49）

136～139は、弥生式土器。136は逆L字形口縁の甕、外面ハケ目。137は袋状の胴部の壺で、外面はていねいなナデの後赤色塗彩が施される。138、139はそれぞれ壺、甕の底部破片。

**SH-971出土土器**（Fig.65・PL.49）

140～143は、弥生式土器。140は逆L字形口縁の甕。141、142は広口壺。141は球形の胴部に外反しながら開く短い口縁をもつ。内外面ともにナデ。142はやや肩に張りのある胴部をもつ。口縁は意識的に打ち欠かれている。内外面ともにナデ、外面は底面を除き赤色塗彩。143は支脚あるいは器台と考えられる土製品。断面は鼓形を呈し、体部中位がしぼられ受部と脚部にくぼみをもつ。粗製で指頭圧痕が残る。

**SH-975出土土器**（Fig.65・PL.49）

144は逆L字形口縁をもつ弥生式土器の甕。

**SH-976出土土器**（Fig.65、66・PL.49、50）

145～160は、弥生式土器。145～150は甕。145、146、149、150は口縁が「く」の字形に外反しながら開く。149、150は外面にハケ目を残す。147は口縁が逆L字形にほぼ水平に開く。148は口縁がやや内湾しながら開く甕で、外面にはハケ目を残す。器形は截頭卵形を呈すものと考えられる。151は鉢。半球形の体部にやや内湾しながら水平に開く逆L字形口縁をもつ。152～154は碗。152は口縁が大きく内湾し袋状を呈す。155、156は胴部中位が張りをもつ広口壺。155は口縁が「く」の字形に開く。内面に一部にハケ目を残し外面はナデ。外面は底面を除き赤色塗彩。156は口縁が内反しながらほぼ水平に開く。内外面ともにナデ、口縁外面に赤色塗彩。157～160はいずれも甕の底部。160は甑に転用されたものか底面が打ち欠かれている。

**SK-977出土土器**（Fig.66）

162、163は、弥生式土器の壺。162は底部片、163は口縁が水平に開く広口壺。

**SK-978出土土器**（Fig.66）

161は弥生式土器で、逆L字形口縁の甕。

**SK-981出土土器**（Fig.66・PL.50）

164～170は、いずれも土師器。164、165は坏。いずれも平底で、体部は直線的に開きながら立ち上がり、口縁に至る。166～168は甕。166、167は外面ハケ目、内面ヘラ削り。169は胴部が球形を呈す壺、内外面ともにナデ。170は朝顔状に大きく開く口縁もち口唇部は外につままれ玉縁状を呈す器で、甑かと思われる。内面横位のヘラ削り。

**SD-983出土土器**（Fig.66）

171は須恵器で、長頸壺類の口縁と思われる。SD-983として調査を行った近世溝出土。

**SK-984出土土器**（Fig.66）

172、173は、弥生式土器。172は袋状口縁の壺。173はやや外反しながら開く逆L字形口縁の甕。

### (2) 石　　器（PL.51、52・Tab. 9）

今回の8区・9区の調査では、土器のほかに、石器類も出土している。ここではそれらのうち代表的なもの19点について簡単に報告する。なお個々の石器の出土地点、法量などはTab. 9にまとめたのでそちらを参照されたい。

**細石刃**（PL.51）

174は、黒曜石製の細石刃で、上面に2条の稜をもち断面は扁平な台形を呈す。

**石　鏃**（PL.51）

175、176は石鏃。いずれもサヌカイト製の凹基式。

**石　剣**（PL.51）

177はサヌカイト製の石剣。舌状の基部はそのまま身へ移行し切先に向かって細く仕上げられている。断面は明瞭な稜をもたないものの基部、刃部ともに扁平な菱形を呈す。

**石　匙**（PL.51）

178はサヌカイト製の石匙。縦長の剝片を横に利用したもので、中央よりやや偏った位置につまみをもつ。体部は、細身の作りで上辺はやや湾曲し、下辺に直線的な刃部が作り出されている。

**石　斧**（PL.51）

179～181、183は、磨製石斧。179はサヌカイト岩製で、断面は、基部でほぼ円形を呈し、欠損部分でやや楕円形を呈す。180はサヌカイト製で、断面は欠損部分で扁平な楕円形を呈す。181はサヌカイト製の肉薄な石斧で、断面は凸レンズ状を呈す。183は凝灰岩質の肉厚の石斧で断面は楕円形を呈す。182は打製石斧。玄武岩質の石材を使用したもので、断面は方形を呈し先端に向かって扁平となる。

**片刃石斧**（PL.52）

184、185はいずれも磨製の片刃石斧。184は粘板岩質の石材を使用したもので、断面は長方形を呈す。185は安山岩製で、断面は写真上面が扁平な「D」の字形を呈す。

**石包丁**（PL.52）

186は粘板岩製の半月形の石包丁で、上辺中央部２ヶ所に穿孔が見られる。

**砥　石**（PL.52）

187は砂岩製の砥石。断面は長方形を呈し、両端部を除く４面が使用されている。

**掻　器**（PL.52）

188は横長の剝片の下辺に調整を加え刃部としている。191は縦長の剝片の写真右辺に粗い調整を加え刃部としている。いずれもサヌカイト製。

**石　斧**（PL.52）

189はサヌカイト製の打製石斧。洋梨形を呈す。左右両辺に調整を加え成形し、下辺を刃部としている。

**尖頭器**（PL.52）

190は尖頭器の基部と思われるもので、サヌカイト製。

**石　核**（PL.52）

192はサヌカイト製の石核。

Tab. 9　8区・9区出土石器一覧表　　（数値は、全て遺存部の値）

| 遺物番号 | 種　類 | 出　土<br>遺　構 | 法量（cm・g）<br>長　さ | 幅 | 厚　さ | 重　量 | 材　質 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 174 | 細　石　刃 | I-8-19Gr. | 1.5 | 0.5 | 0.1 | 0.2 | 黒曜石 | 遺物包含層出土 |
| 175 | 石　　鏃 | SK-901 | 1.9 | 1.6 | 0.2 | 0.7 | サヌカイト | |
| 176 | 〃 | E－5Gr. | 2.0 | 1.8 | 0.4 | 0.9 | サヌカイト | ピット出土 |
| 177 | 石　　剣 | H-9-25Gr. | 16.0 | 3.7 | 0.8 | 50.2 | サヌカイト | 遺物包含層出土 |
| 178 | 石　　匙 | SK-947 | 10.1 | 3.2 | 0.8 | 19.7 | サヌカイト | |
| 179 | 石　　斧 | 近世溝 | 11.6 | 4.8 | 4.0 | 265.2 | サヌカイト | |
| 180 | 〃 | G－2Gr. | 6.7 | 5.7 | 2.0 | 98.7 | サヌカイト | ピット出土 |
| 181 | 〃 | D－5Gr. | 5.0 | 5.4 | 1.3 | 61.6 | サヌカイト | 表採 |
| 182 | 〃 | SK-921 | 17.0 | 5.8 | 3.6 | 379.6 | 玄武岩 | |
| 183 | 〃 | 近世溝 | 8.5 | 5.6 | 5.5 | 358.9 | 凝灰岩 | |
| 184 | 片刃石斧 | I－1Gr. | 6.6 | 2.0 | 1.1 | 27.5 | 粘板岩 | ピット出土 |
| 185 | 〃 | SB-989 | 8.0 | 2.5 | 1.3 | 41.9 | 安山岩 | |
| 186 | 石　包　丁 | SH-976 | 15.0 | 4.8 | 0.7 | 50.3 | 粘板岩 | |
| 187 | 砥　　石 | SK-968 | 10.2 | 6.3 | 2.9 | 179.8 | 砂岩 | |
| 188 | 掻　　器 | SK-920 | 8.9 | 6.4 | 1.4 | 81.8 | サヌカイト | |
| 189 | 石　　斧 | K－3Gr. | 11.9 | 8.2 | 3.2 | 295.3 | サヌカイト | ピット出土 |
| 190 | 尖　頭　器 | D－3Gr. | 4.0 | 4.9 | 1.7 | 31.9 | サヌカイト | ピット出土 |
| 191 | 掻　　器 | SK-918 | 7.4 | 3.3 | 1.4 | 38.1 | サヌカイト | |
| 192 | 石　　核 | SK-921 | 12.6 | 9.6 | 5.1 | 499.0 | サヌカイト | |

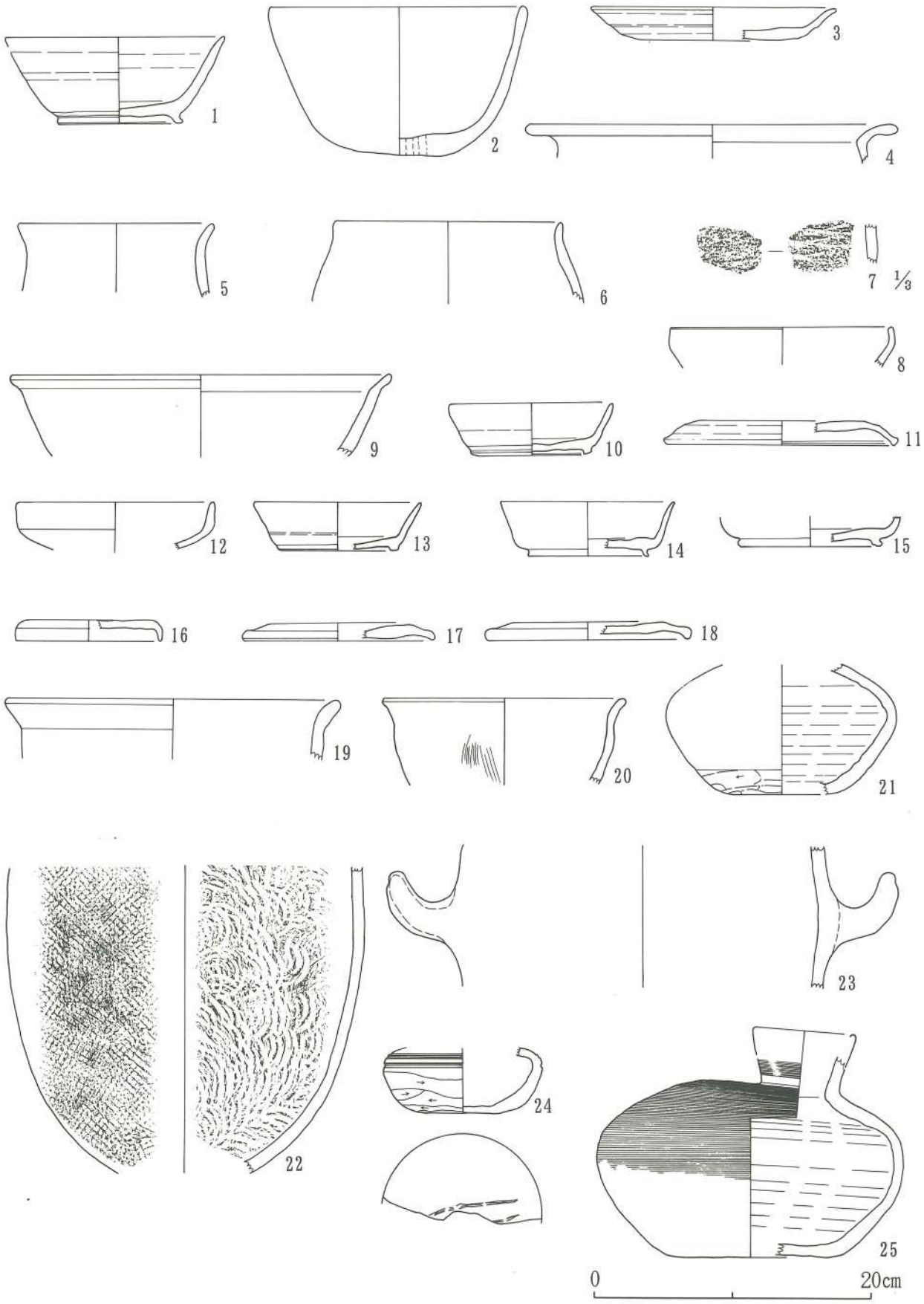



Fig.59　8区・9区出土遺物実測図(1)（1/4）

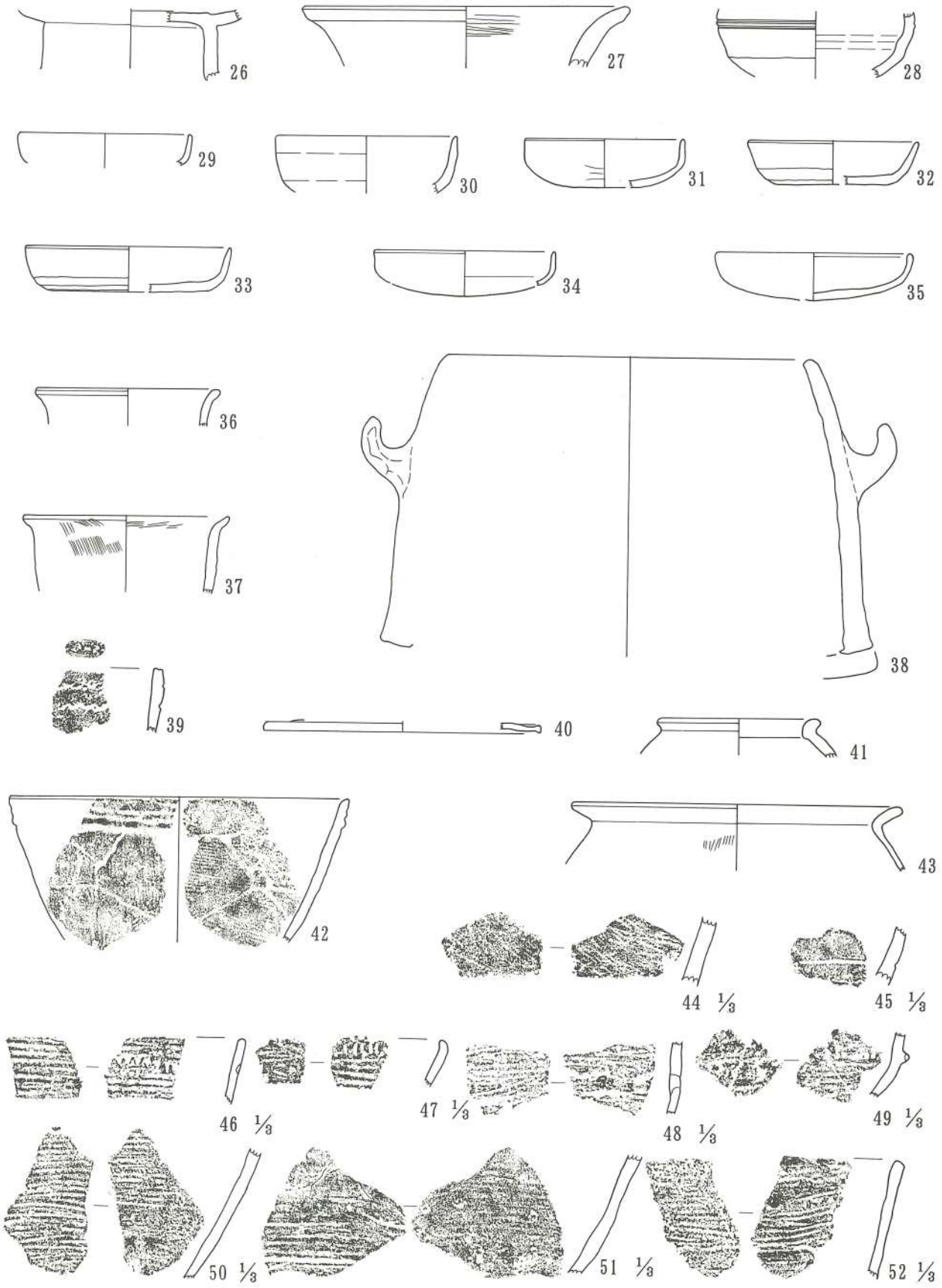



Fig.60　8区・9区出土遺物実測図(2)（1/4）

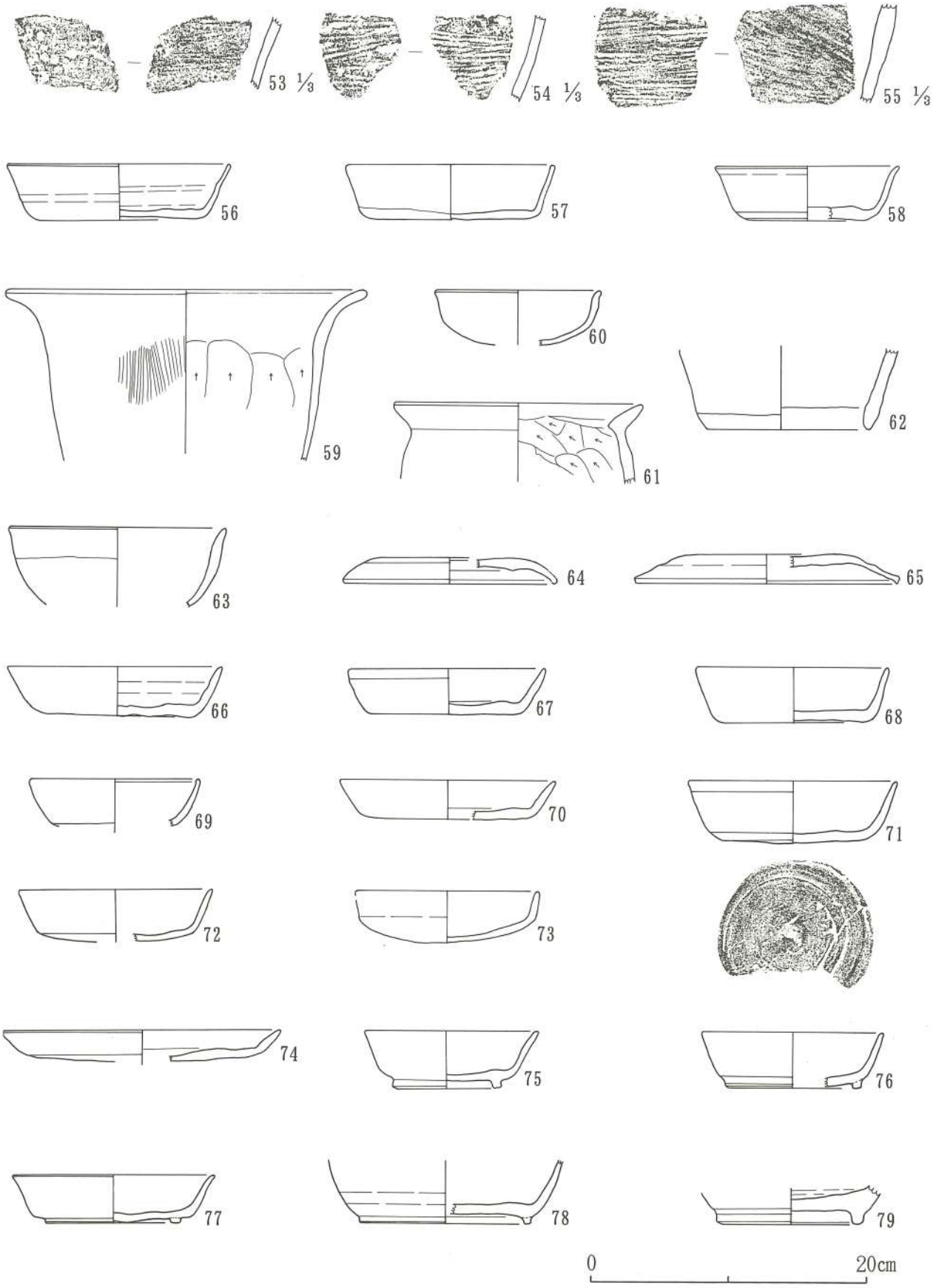



Fig.61　8区・9区出土遺物実測図(3)（1/4）

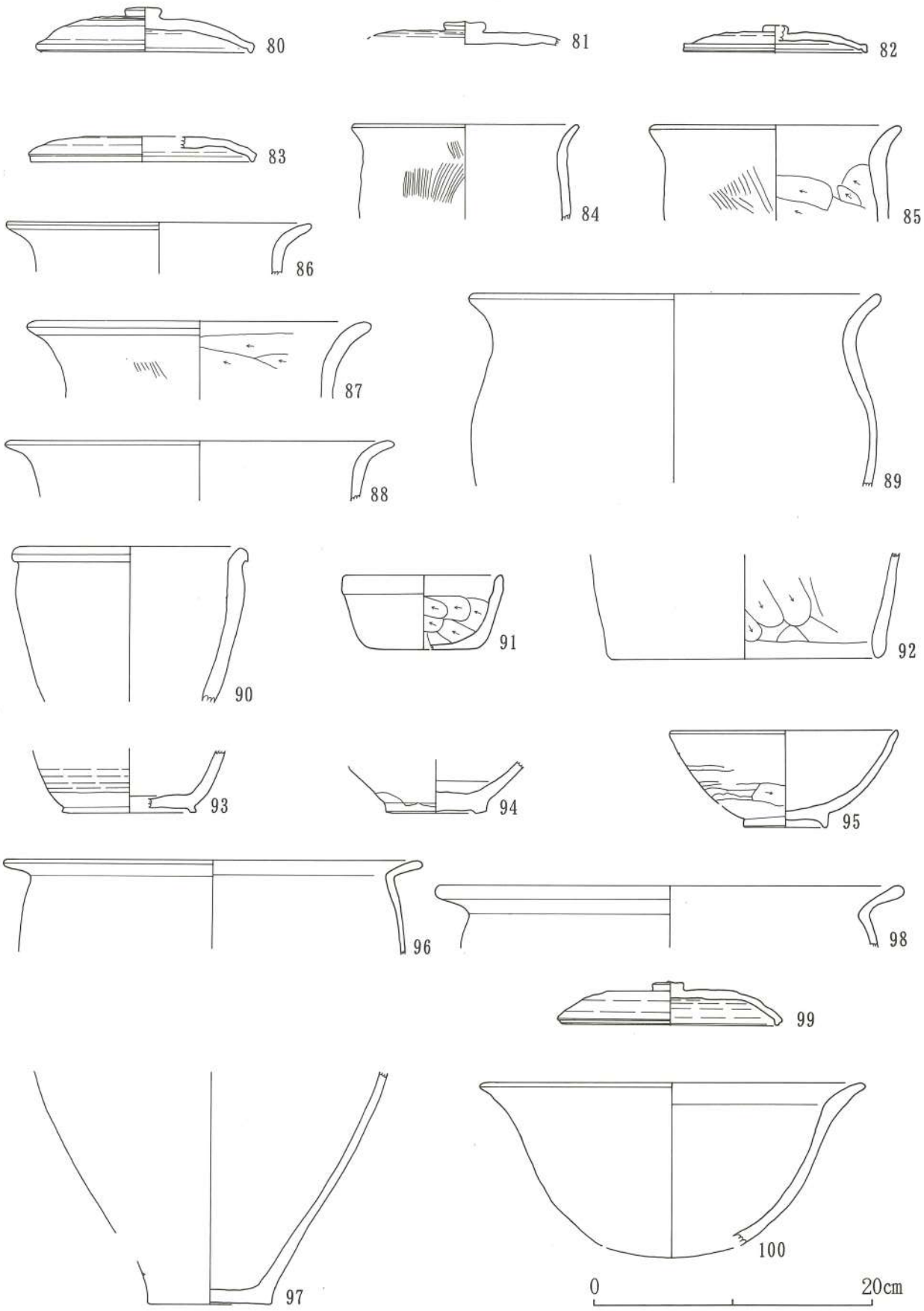



Fig.62　8 区・9 区出土遺物実測図(4)（1/4）

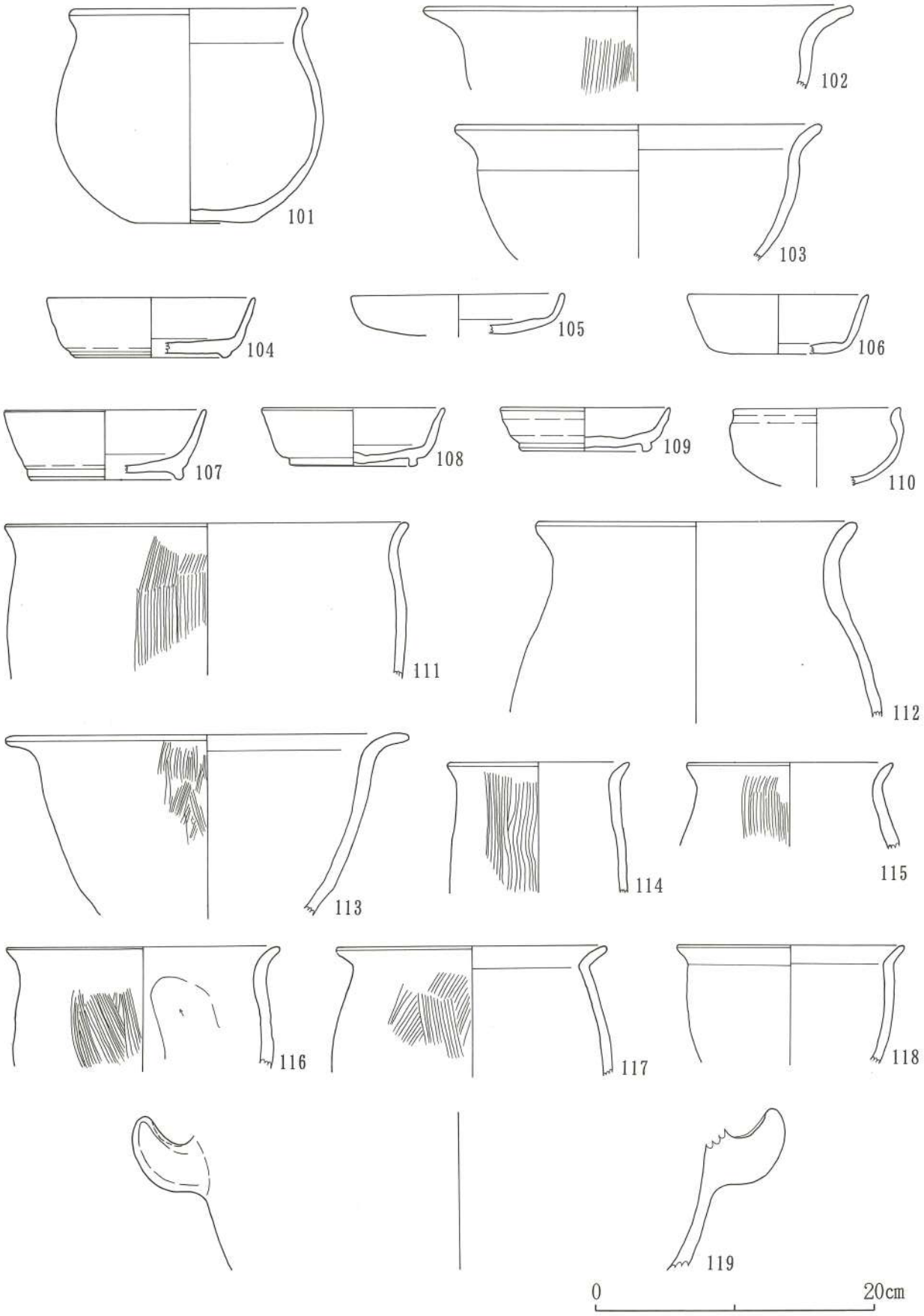



Fig.63　8区・9区出土遺物実測図(5)（1/4）

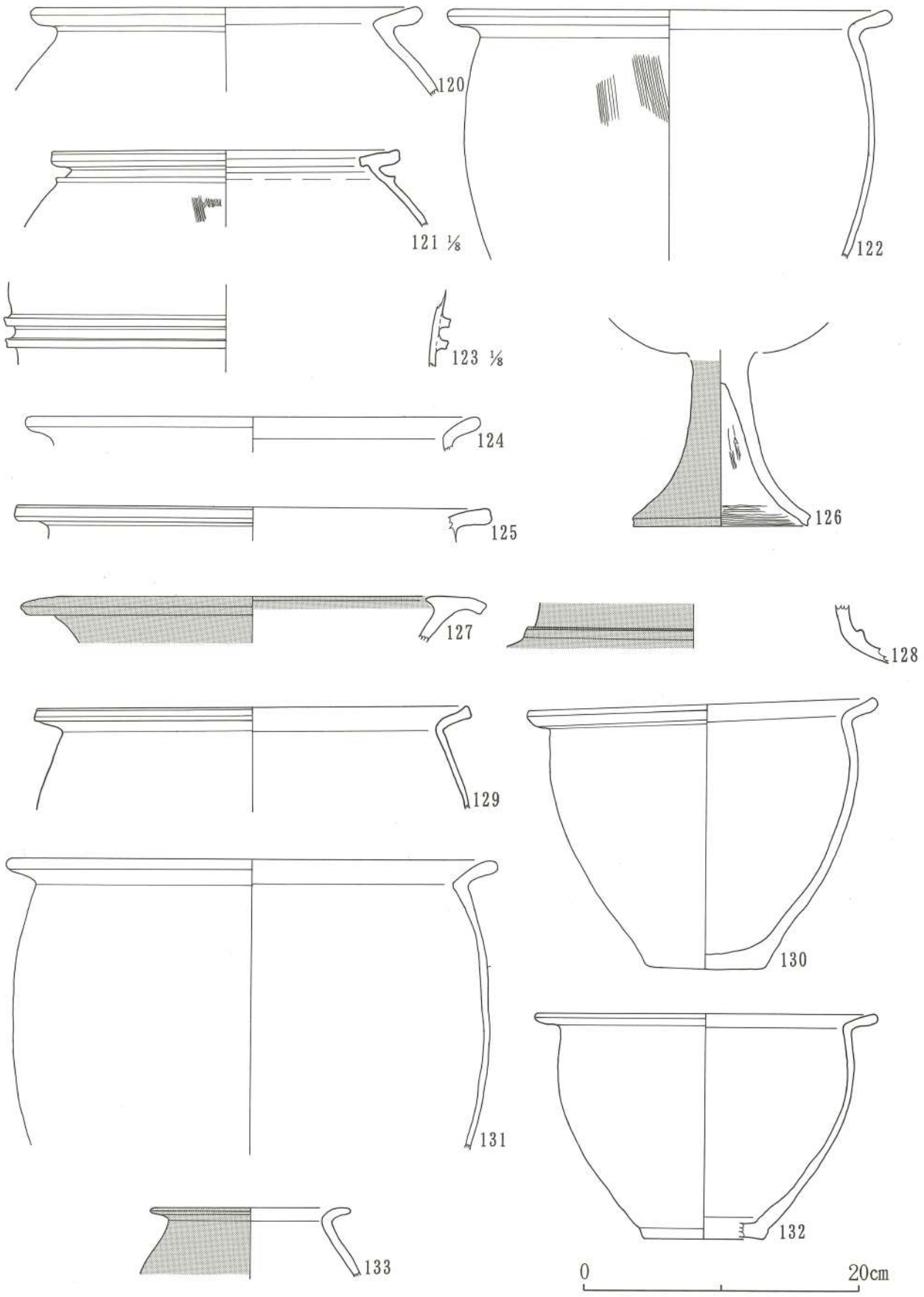



Fig.64　8区・9区出土遺物実測図(6)（1/4）

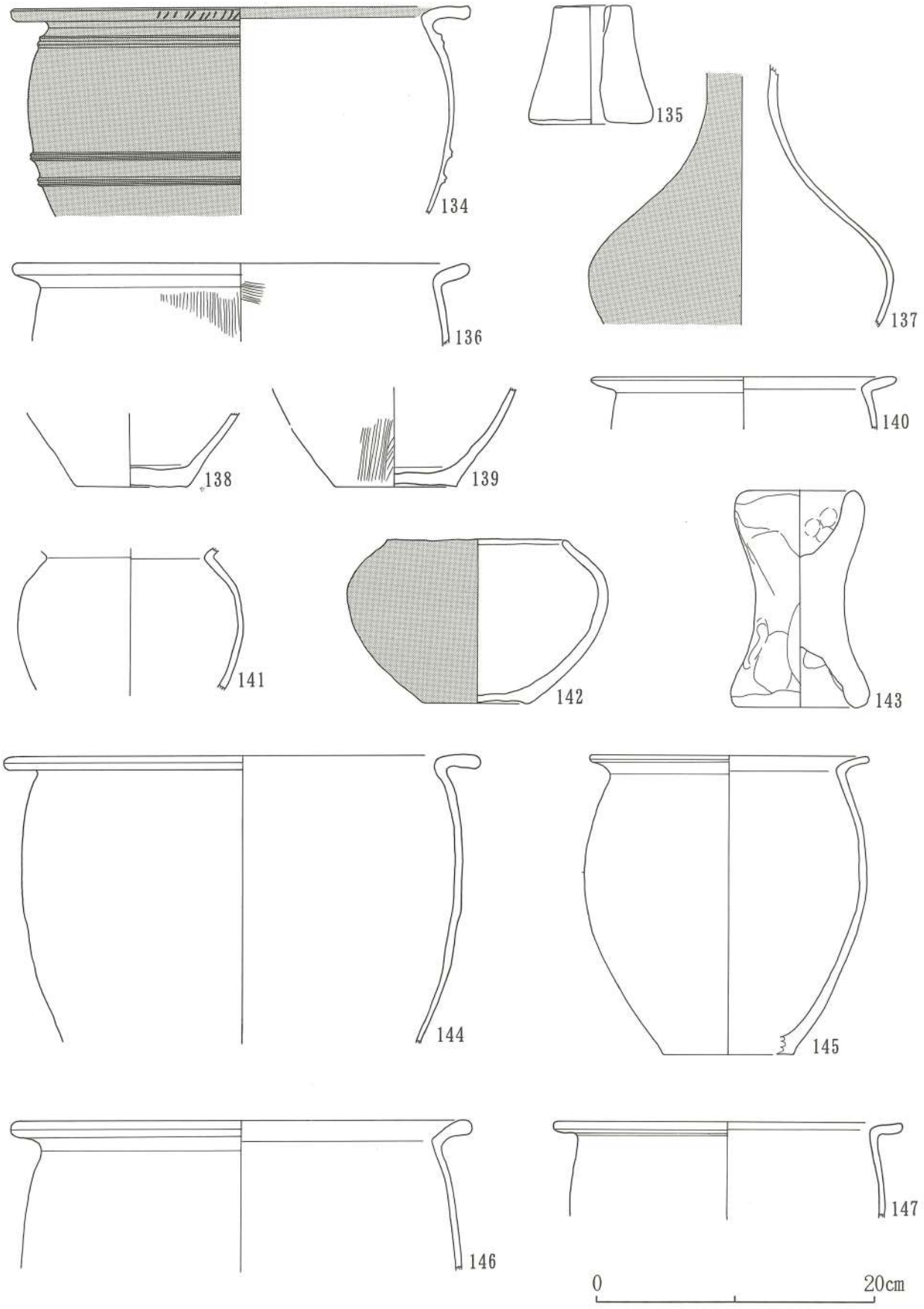



Fig.65　8区・9区出土遺物実測図(7)（1/4）

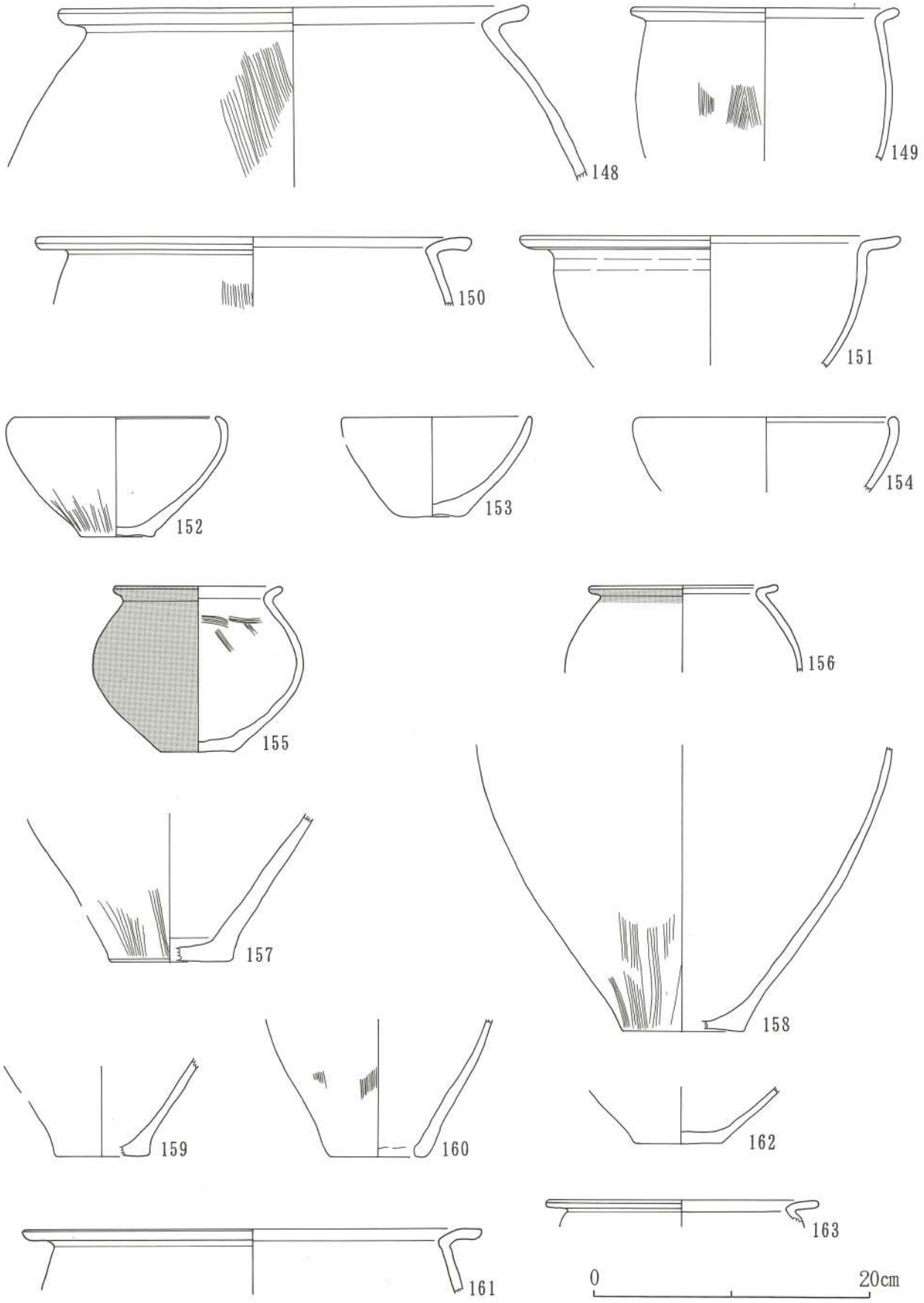



Fig.66　8 区・9 区出土遺物実測図(8)（1/4）

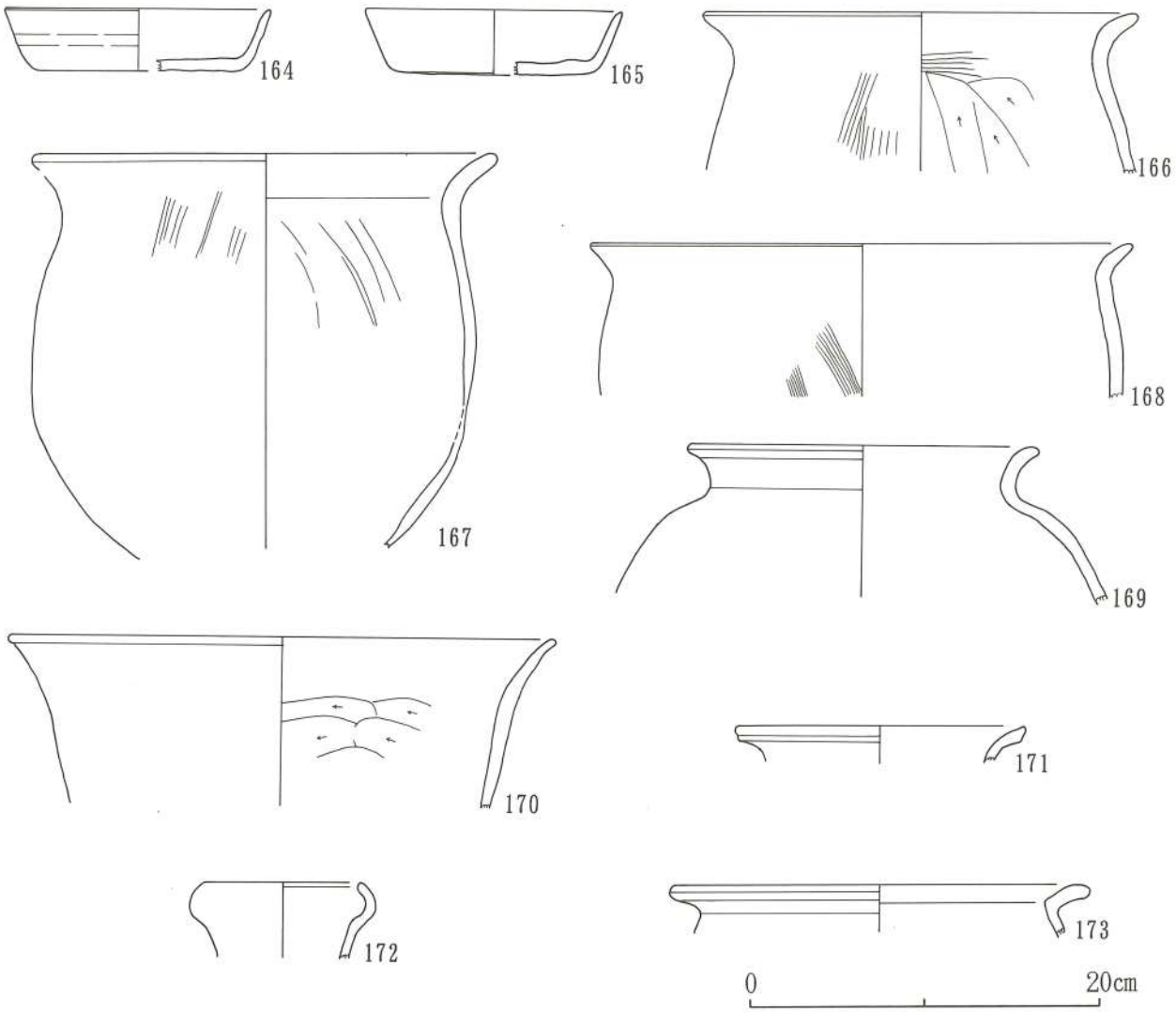



Fig.67　8区・9区出土遺物実測図(9)（1/4）

# VI. 平成５年度10・11区の調査

## １．調査の経過

平成５年度の佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、水田基盤工事により面的に削平が予定されている部分および排水路設置工事により掘削が予定されている部分の計5,000㎡を便宜的に10区・11区の２区に分割し、実施した。調査は、平成５年９月７日に着手し、翌平成６年1月21日まで現地での作業を行った。以下、簡略に調査経過を記す。

９月７日、平成４年度の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査後の工事中に発見された阿蘇４火砕流跡と埋没林の調査が一段落したことを受けて、調査対象地区の10区南部より、重機による表土剝ぎを開始、平成５年度の農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査に着手した。

９月17日、10区の表土剝ぎ終了。

９月20日、現場において作業前に簡単な調査の安全祈願を行い、発掘機材類の搬入、作業員休憩用のテント設営などを行い、午後より10区の南部から作業員による遺構検出作業を開始した。

10月１日、10区の南部より検出された遺構の掘り下げ作業に着手。以後、逐次作業員による遺構検出作業を行い、検出された遺構について順次掘下げ、写真撮影作業を行っていった。

10月７日、11区の表土剝ぎに着手。

10月28日、11区の表土剝ぎ終了。

11月１日、11区の南部から遺構検出作業に着手。

11月15日、10区の遺構掘下げ作業終了。

11月16日、気球による10区の全体写真撮影を行う。

11月17日、11区の南部より検出された遺構の掘り下げ作業に着手。以後、10区と同様に、逐次遺構検出作業を行い、検出された遺構について順次掘下げ、写真撮影作業を行っていった。

12月１日、磁北を基準としたグリッドを設定、測量杭打ち作業に着手。以後、10区南部から遺構の実測作業を開始した。

12月７日、11区の遺構掘下げ作業がほぼ終了。個々の遺構の写真撮影を行う。

この後、現遺構検出面下位の縄文時代遺物包含層の有無を確認するために、部分的に試掘トレンチを設定し調査を実施したが、まとまった遺構・遺物は検出できなかった。

12月22日より天候不順により作業休止、年内に作業再開はできなかった。結局、年末年始の休業日をはさみ、１月９日まで作業ができない状態が続いた。

平成６年１月10日、作業を再開。

１月12日、気球による11区の全体写真撮影を行う。

１月21日、遺構実測作業終了。同日、発掘機材類、テント等の撤収、搬出を行い、現場での全ての作業を終了した。

この後、３月30日まで船石文化財整理事務所にて出土遺物の水洗い作業などを行った。

## 2．調査区の概要（Fig. 3、68）

大字堤字迎原地区から八藤地区へ延びる八藤丘陵は、東西両側をそれぞれ切通側の支流である大谷川、大鳥居川に開析された馬の背状の舌状丘陵で、北方の新立古墳群が位置する高位段丘面から南南西に向かって延びている。先端の八藤地区で標高約20m、北部の高位段丘へ移行する最高部で約35mを測る。丘陵の尾根上には、堤集落から北の塚原集落方面へ農道が縦断しており、『佐賀県遺跡地図』ではこの農道の一部が西の堤土塁跡と八藤遺跡の境界となっている。

八藤丘陵上の耕地は、大正年間に当時としては大規模な人力による耕地整理事業が行われており、地元では一帯を「耕地整理」と呼称している。地目は田であるが、水掛かりが悪く、現在は主に畑地として利用されている。

平成5年度県営農業基盤整備事業施行区域のうち、今回の埋蔵文化財発掘調査の対象となった地区は、平成4年度調査区域の北側に隣接する5,000㎡に及ぶ区域で、上峰町大字堤字迎原の標高30m～35m付近の低位段丘面を占めている。調査区域の北部は新立古墳群が立地する高位段丘面となっている。

今回の調査は、この5,000㎡を便宜的に10区1,250㎡と11区3,750㎡に分けて実施した。調査対象区域全域に磁北を基準とする10m×10mのグリッドを設定した（このグリッドは平成2～4年度の調査で設定したグリッドと連続しており、今回の調査グリッドのC—3Gr.が、平成4年度調査グリッドのD—18Gr.に相当する）。グリッドは、南北列南から1～19の19列、東西列東からA～Lの12列を設定し調査を実施した。

調査区の土層は後世の耕作、耕地整理事業などによって各時代の遺物包含層はほとんど失われ、耕作土あるいは表土直下が洪積世段丘を構成するいわゆる地山であり、この面が遺構検出面となっている。

この八藤遺跡10区・11区の調査では、弥生時代の竪穴式住居址3軒、奈良時代の竪穴式住居址1軒、奈良時代の掘立柱建物址9棟、そのほか、各時代の所産と考えられる土壙、ピットが検出された。また、11区の北部H～K列、12～19列グリッド部分では、遺構検出面の状況から縄文時代以前の遺物包含層の存在も予想されたため、調査区の南辺と西辺を中心に幅50cmの試掘トレンチを断続的に延長75mにわたって設定し、遺構検出面下位の土層の観察を行ったが（Fig.69参照）、期待に反してまとまった成果は得られなかった。

遺物は、各遺構から縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器が出土しているが、量的には少ないといえる。これら土器類のほかには、縄文時代の石斧と叩き石が出土している。

今回の調査で注目される遺構は、11区の北部で検出された建物群でSB-1143、SB-1144として調査した8間×3間の大型建物が注目される。これは3間×3間の建物2棟を連結したような形態を呈しており、本丘陵では類例がなく、特異な性格の建物であろうことを想起させる。また、出土遺物についてもSH-1136、SK-1145から出土した「藥」のヘラ描き文字をもつ土師器、須恵器の坏が注目される。SH-1136からは土師器高台坏が2点、SK-1145からは土師器の皿が1点、須恵器高台坏が2点、合計5点が出土した。土師器高台坏、須恵器高台坏は、それぞれ形態を同じくし、「藥」の文字も同じ筆勢で描かれている。これらは、特定の目的に使用されたものと考えられる。前述の建物にしても、この「藥」の文字をもつ遺物にしても、その性格については、今後の類例の増加を待ちたい。

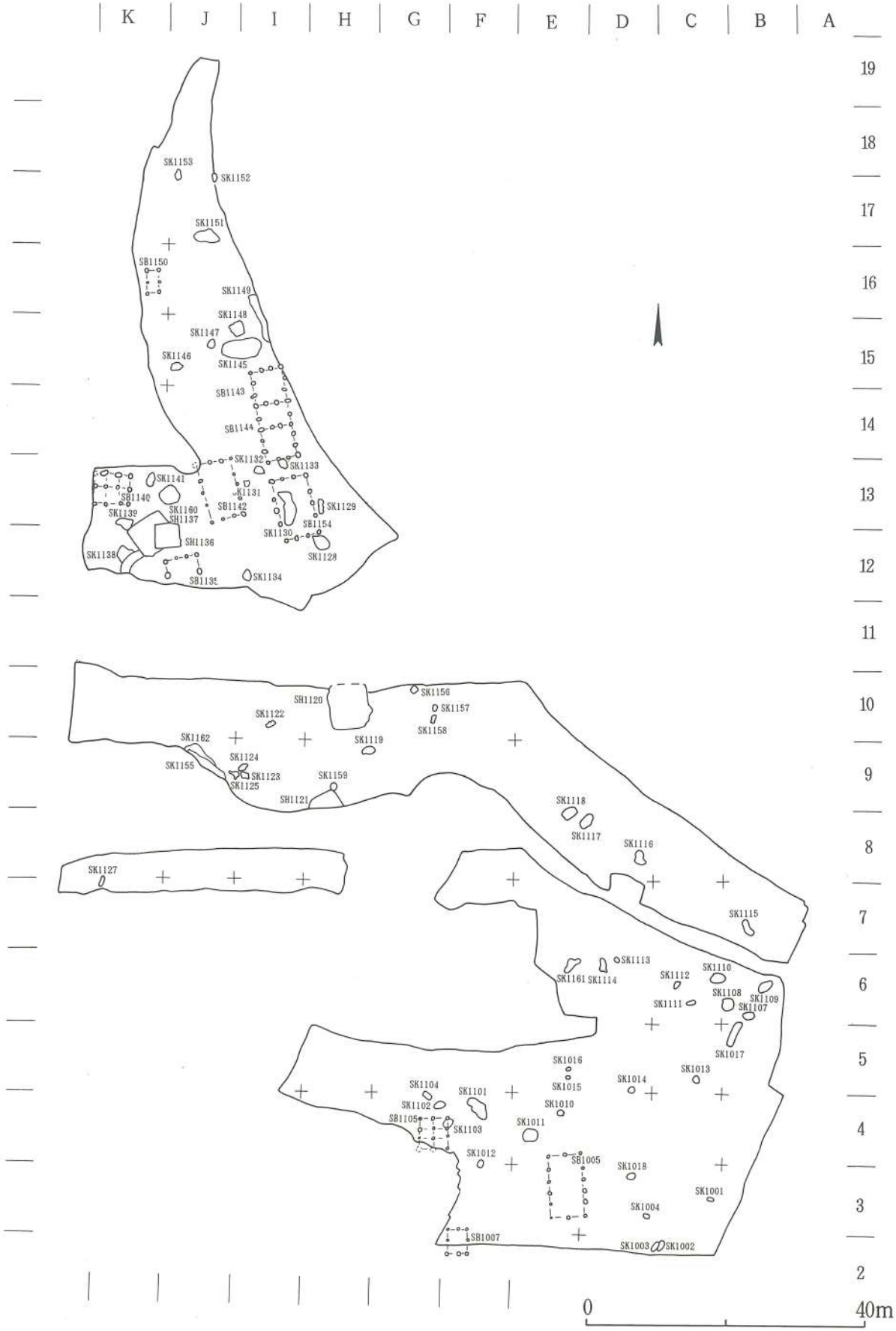



Fig.68　10区・11区遺構配置図（1/800）

Fig.69　縄文時代包含層試掘溝配置図（1/400）

## 3．遺　構

今回の八藤遺跡10区・11区の調査において、遺構番号を付して調査を行った遺構は10区18遺構、11区62遺構、合計80遺構に及んだ。これらのなかで調査を進めるに従い、近世以降の耕作に伴う用排水路跡、掘り込みなど明らかに比較的新しい時期の所産になるものと判明した遺構については、欠番として処理した。

その結果、遺構として取り扱ったものは、竪穴式住居址４軒、掘立柱建物址９棟、貯蔵穴などの土壙61基などの74遺構とピットである。

時期的にみると、前述のように縄文時代から奈良・平安時代におよぶ遺構が検出されているが、ここでは上記74遺構について報告したい。

### (1) 竪穴式住居址（Fig.70、71・PL.53・Tab.10）

今回の調査で検出された竪穴式住居址と考えられる遺構は、いずれも11区から検出されている。H—10Gr.のSH-1120、H—9Gr.のSH-1121、J—12Gr.のSH-1136、K—12Gr.のSH-1137の４軒である。SH-1120、SH-1121、SH-1137は弥生時代中期の所産で、弥生式土器が出土し、SH-1136は奈良時代後半の住居址で土師器、須恵器が出土している。

**SH-1120**（Fig.70・PL.53）

SH-1120は、11区H—10Gr.で検出された竪穴式住居址で、後世の削平を受け、床面の一部と掘り方のみが遺存している。プランは一辺約6mの方形を呈すものと推定され、床面までの深さは深いところでも８cm程度である。掘り方底面は凹凸が激しく柱穴状の掘り込みもみえるが主柱穴は特定できなかった。仮に、図示した柱穴を主軸とすると、N—83°—Eである。弥生式土器の甕、壺が出土している。

**SH-1121**（Fig.70・PL.53）

SH-1121は、11区H—9Gr.で検出された不整形の竪穴式住居址で、住居の南半は調査区外となっている。規模は確認できる部分で4.7m×2.8mを測る。床面までの深さは、約30cm。床面には主柱穴と思われる柱穴２本と炉状土壙もつ。弥生式土器片が出土しているが図示できなかった。

**SH-1136**（Fig. 71・PL.53）

SH-1136は、11区J—12Gr.で検出された奈良時代後半あるいは平安時代前半の竪穴式住居址。プランは一辺約3.5mのほぼ正方形を呈す小型の住居址で、床面までの深さは、約25cm。主軸はほぼ磁北をさす。須恵器坏、土師器甑のほか「藥」のヘラ描き文字をもつ大振りの土師器坏などが出土している。SH-1137を切っている。

**SH-1137**（Fig. 71・PL.53）

SH-1137は、11区K—12Gr.で検出された竪穴式住居址。プランは約5.6m×５mの方形を呈し、床面までの深さは20cm弱を測る。床面には、ピットが散見されるが主柱穴は不明である。長辺方向を主軸とするとN—51°—Eとなる。弥生式土器の甕などが出土している。

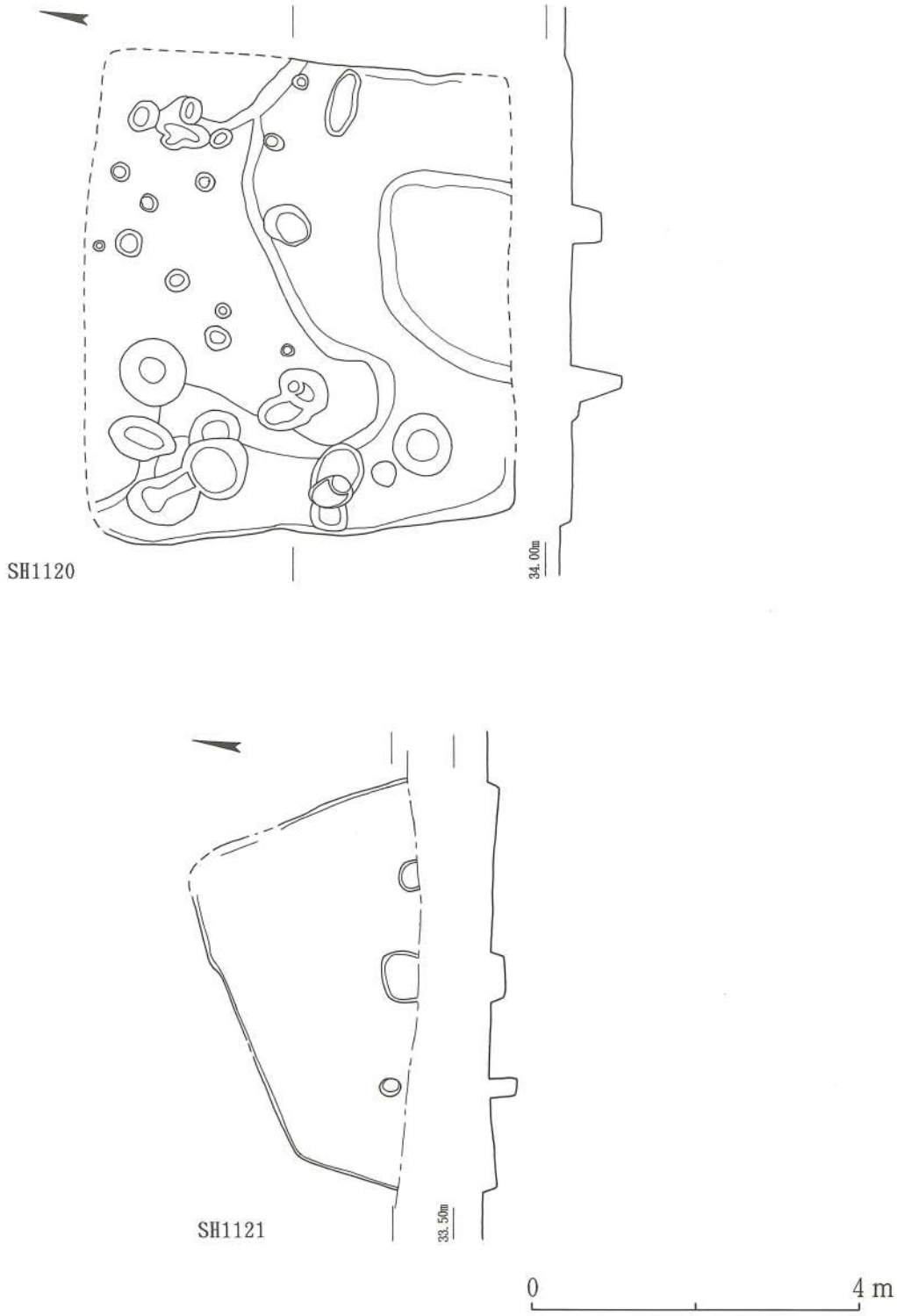



Fig.70　10区・11区出土竪穴式住居址実測図(1)　SH-1120・SH-1121（1/80）

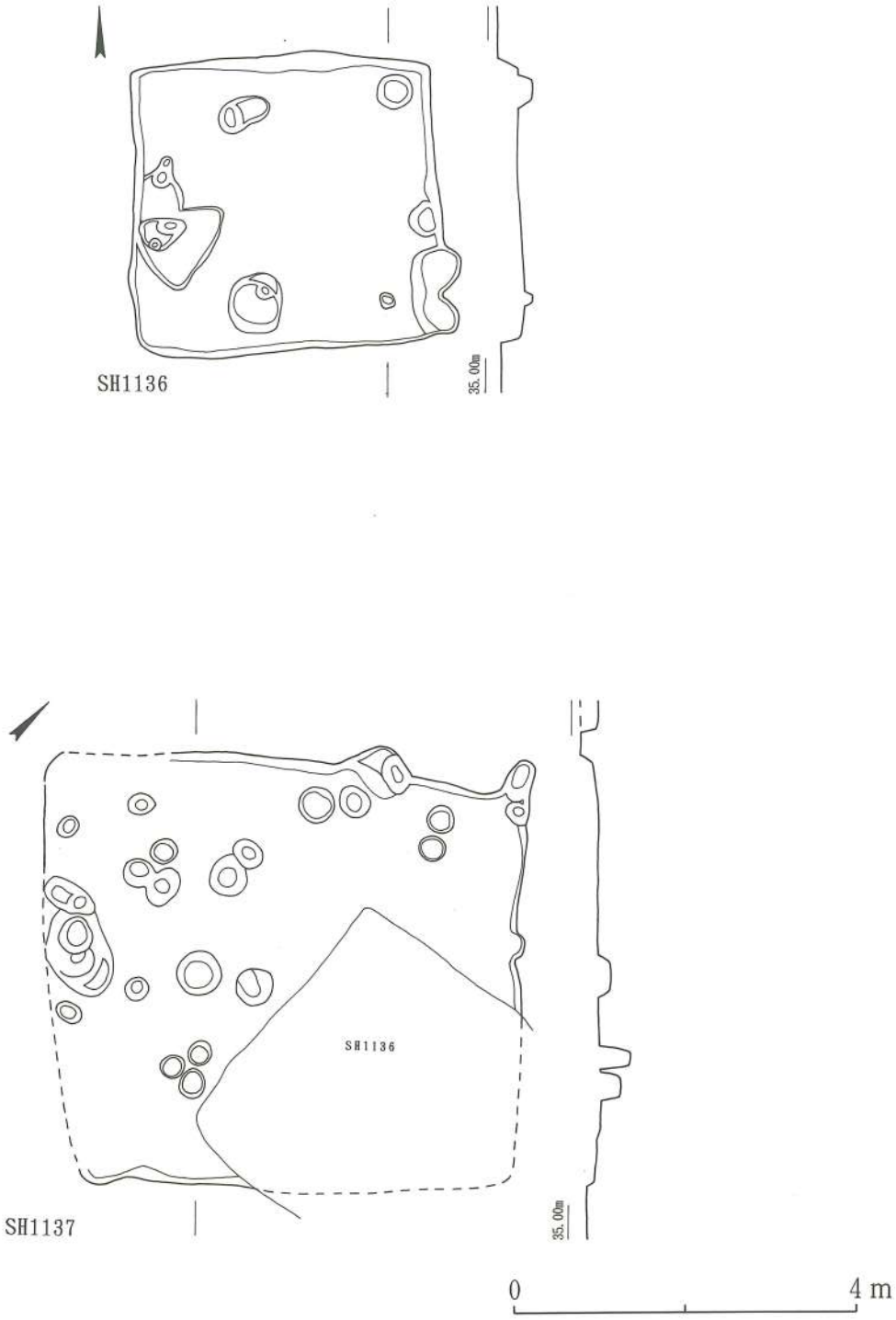



Fig.71　10区・11区出土竪穴式住居址実測図(2)　SH-1136・SH-1137（1/80）

Tab.10　10区・11区出土住居址一覧表

| 住居址番号 | 平面形態 | 規模（m・m²） | | | | 棟方向 | 屋内施設 | | | | 出土遺物<br>上）土器・土製品<br>下）石製品・その他 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 深さ | 床面積 | | 主柱穴 | 溝 | 炉・焼土など | その他 | | |
| SH-1120 | 方形 | 6.00 | ※5.1 | 0.08 | ※30.0 | N−83°−E | | | | | 弥生式土器甕・壺 | |
| SH-1121 | 不整形 | ※4.7 | ※2.8 | 0.32 | ※9.1 | | 2本？ | | 炉状土壙 | | | |
| SH-1136 | 方形 | 3.55 | 3.39 | 0.25 | 11.1 | 磁北 | | | | | 須恵器坏・蓋、土師器坏・甑 | SH-1137を切る。 |
| SH-1137 | 方形 | 5.60 | 5.02 | 0.17 | (16.7) | N−51°−E | | | | | 弥生式土器甕 | |

**(2)　掘立柱建物址**（Fig. 72〜76・PL.54〜57・Tab.11）

今回の調査で検出された掘立柱建物址と考えられる遺構は、10区２棟、11区７棟の合計９棟であった。とくに11区北部では６棟が集中して検出されている（Fig.68・PL.55参照）。これらは、平成２年度調査の八藤遺跡５区の建物群とつながるものである。また、建物群の主軸についてみると、ほぼ南北軸の一群とやや西に振れた軸をもつ一群がみられる。

以下、個々の建物址について簡単に報告する。

**SB-1005**（Fig. 72・PL.54）

SB-1005は、10区E−3Gr.で検出された５間×２間の掘立柱建物址で、柱穴は直径50cm〜80cm、深さ40cm〜60cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は1.7m、梁行の柱間は2.4m。規模は、桁行8.7m、梁行4.7m、床面積40.9m²を測る。主軸は、N−4°−Wである。

**SB-1007**（Fig. 73・PL.54）

SB-1007は、10区南端F−3Gr.で検出された２間×２間の掘立柱建物址で、南辺の柱列は前年度調査区９区において検出されている。柱穴は直径15cm〜30cm、深さ20cm〜40cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は1.8m、梁行の柱間は1.6m。規模は、桁行3.6m、梁行3.1m、床面積11.2m²を測る。主軸は、N−0°である。

**SB-1105**（Fig. 73・PL.54）

SB-1105は、11区南端G−4Gr.で検出された総柱の掘立柱建物址で、建物南部は調査区外に延びるものと推測され、梁行は２間で桁行は３間目までが確認されている。柱穴は直径30cm〜50cm、深さ20cm〜30cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は1.5m、梁行の柱間は2.0m。規模は、桁行３間、梁行２間と仮定すると、桁行4.4m、梁行4.0m、床面積17.6m²となる。主軸は、N−0°である。

**SB-1135**（Fig. 73・PL.55）

SB-1135は、11区E−3Gr.で検出された掘立柱建物址で、建物南部は調査区外に延びており、梁行は3間で桁行は1間目までが確認されている。近接して検出されたSB-1142、SB-1154とほぼ同じ梁行の規模、主軸をとることから、形態的には４間×３間の建物の可能性が高い。柱穴は直径40cm〜100cm、深さ30cm〜60cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は2.2m、梁行の柱間は1.5m。規模は、桁行2.2m以上、梁行4.6m、床面積10.1m²以上。主軸は、

N—10°—W である。

**SB-1140** (Fig. 74・PL.55)

SB-1140は、11区西端K—13Gr.で検出された総柱の掘立柱建物址で、建物西部は調査区外に延びるものと推測され、梁行は2間で桁行は3間目までが確認されている。柱穴は直径40cm～80cm、深さ20cm～50cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は1.5m、梁行の柱間は1.7m。規模は、桁行3間、梁行2間と仮定すると、桁行4.9m、梁行3.3m、床面積16.2m²となる。主軸は、N—85°—W である。

**SB-1142** (Fig. 74・PL.55,56)

SB-1142は、11区J—13Gr.で検出された4間×3間の掘立柱建物址で、柱穴は直径40cm～60cm、深さ20cm～50cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は2.0m、梁行の柱間は1.5m。規模は、桁行8.0m、梁行4.6m、床面積36.8m²を測る。主軸は、N—15°—W である。

**SB-1143・SB-1144** (Fig. 75・PL.55,56)

SB-1143・SB-1144は、11区I—14Gr.で検出された8間×3間の特異な掘立柱建物址で、調査当初は、それぞれ3間×3間の建物2棟として調査を行っていたが、この2棟の間に柱穴が検出されたことから1棟として取り扱った。柱穴は直径50cm～100cm、深さ40cm～80cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は1.6m、梁行の柱間は1.5m。規模は、建物全体で桁行12.8m、梁行4.6m、床面積58.9m²を測る。また、南北の3間×3間で区切られた部分はそれぞれ桁行4.8m、梁行4.6で床面積は22.1m²である。主軸は、N—13°—W である。

**SB-1150** (Fig. 76・PL.55,57)

SB-1150は、11区西端K—16Gr.で検出された掘立柱建物址で、八藤丘陵の調査において最北に位置する建物である。柱穴は2間×1間部分の6本のみが検出されたが、建物はさらに西の調査区外に延びる可能性もある。柱穴は直径30cm～40cm、深さ20cm～70cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は1.6m、梁行の柱間は1.8m。規模は、桁行2間、梁行1間と仮定すると、桁行3.2m、梁行1.8m、床面積5.8m²となる。主軸は、N—2°—W である。

**SB-1154** (Fig. 76・PL.55)

SB-1154は、11区西端I—13Gr.で検出された4間×3間の掘立柱建物址で、SB-1143・SB-1144の南に隣接した建物である。柱穴は直径50cm～90cm、深さ30cm～60cmの円形の掘り込み。桁行の柱間は2.1m、梁行の柱間は1.7m。規模は、桁行8.5m、梁行5.0m、床面積42.5m²となる。主軸は、N—14°—W である。

Tab.11　10区・11区出土掘立柱建物址一覧表

| 建物址番号 | 平面形態 | 規模 (m・m²) | | | | 棟方向 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行柱間 | 梁行柱間 | 長さ×幅 | 床面積 | | |
| SB-1005 | 5×2 | 1.7 | 2.4 | 8.7×4.7 | 40.9 | N—4°—W | |
| SB-1007 | 2×2 | 1.8 | 1.6 | 3.6×3.1 | 11.2 | N—0° | 9区にまたがる |

Tab.11　10区・11区出土掘立柱建物址一覧表

| 建物址番号 | 平面形態 | 規模（m・m²） | | | | 棟方向 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 桁行柱間 | 梁行柱間 | 長さ×幅 | 床面積 | | |
| SB-1105 | 3×2 | 1.5 | 2.0 | 4.4×4.0 | 17.6 | N—0° | 調査区外へ延びる可能性あり。 |
| SB-1135 | ※1×3 | 2.2 | 1.5 | ※2.2×4.6 | ※10.1 | N—10°—W | 4×3の建物か？ |
| SB-1140 | 3×2 | 1.5 | 1.7 | 4.9×3.3 | 16.2 | N—85°—W | 調査区外へ延びる可能性あり。 |
| SB-1142 | 4×3 | 2.0 | 1.5 | 8.0×4.6 | 36.8 | N—15°—W | |
| SB-1143<br>SB-1144 | 8×3 | 1.6 | 1.5 | 12.8×4.6 | 58.9 | N—13°—W | SB-1143北区画<br>SB-1144南区画 |
| SB-1150 | 2×1 | 1.6 | 0.9 | 3.2×1.8 | 5.8 | N—2°—W | 調査区外へ延びる可能性あり。 |
| SB-1154 | 4×3 | 2.1 | 1.7 | 8.5×5.0 | 42.5 | N—14°—W | |

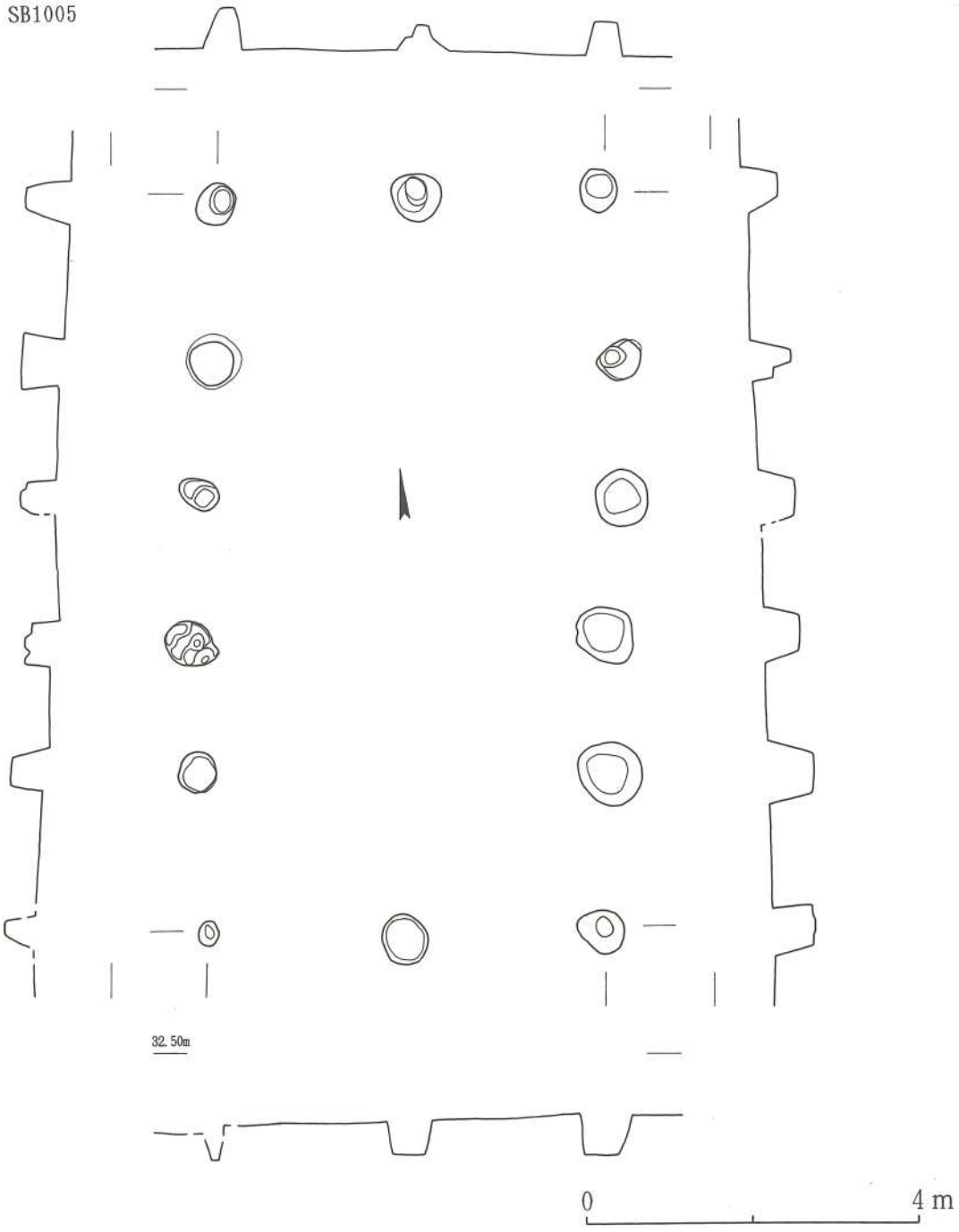



Fig.72　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(1)　SB-1005（1/80）

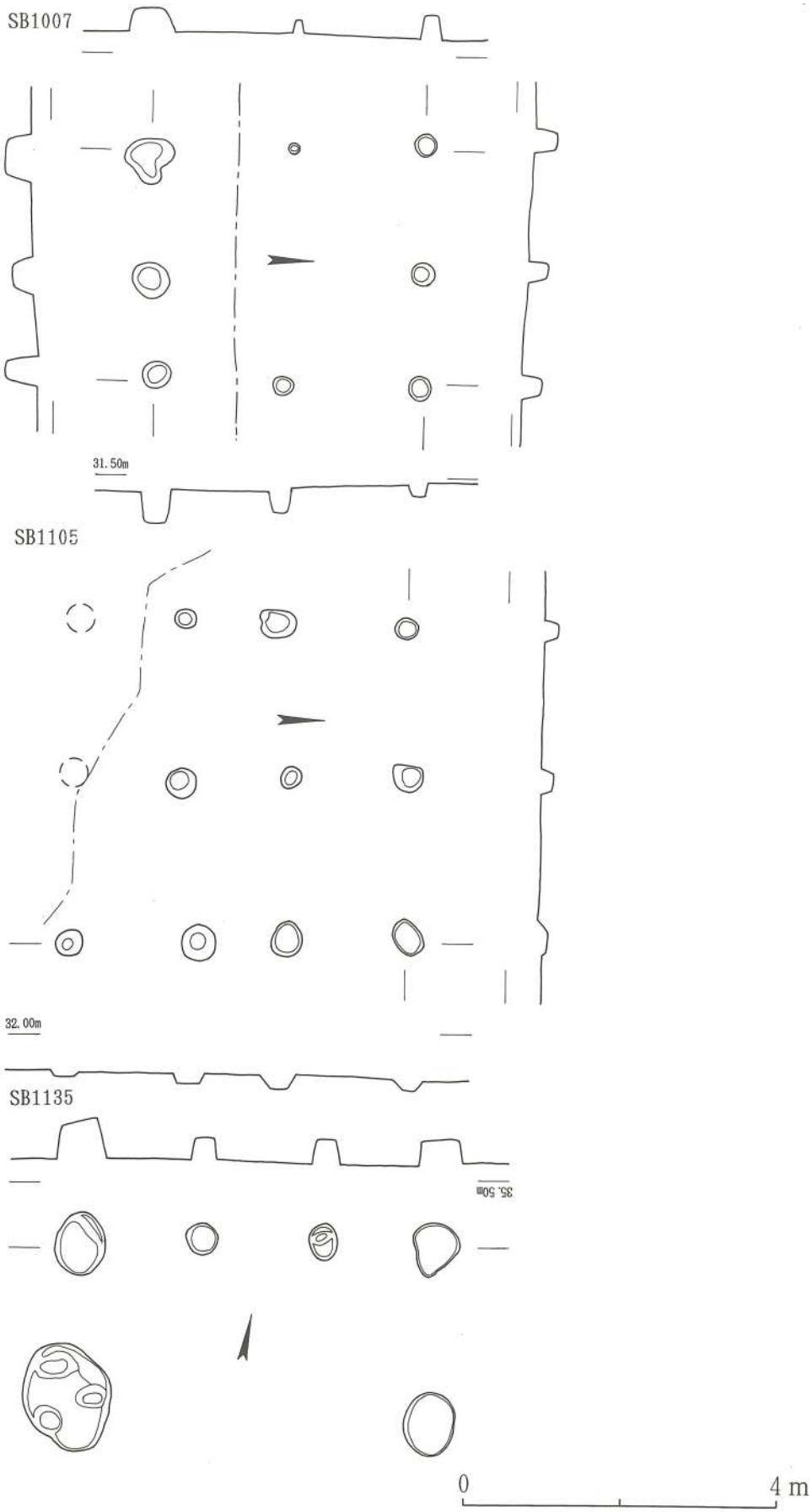



Fig.73　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(2)　SB-1007・SB-1105・SB-1135（1/80）

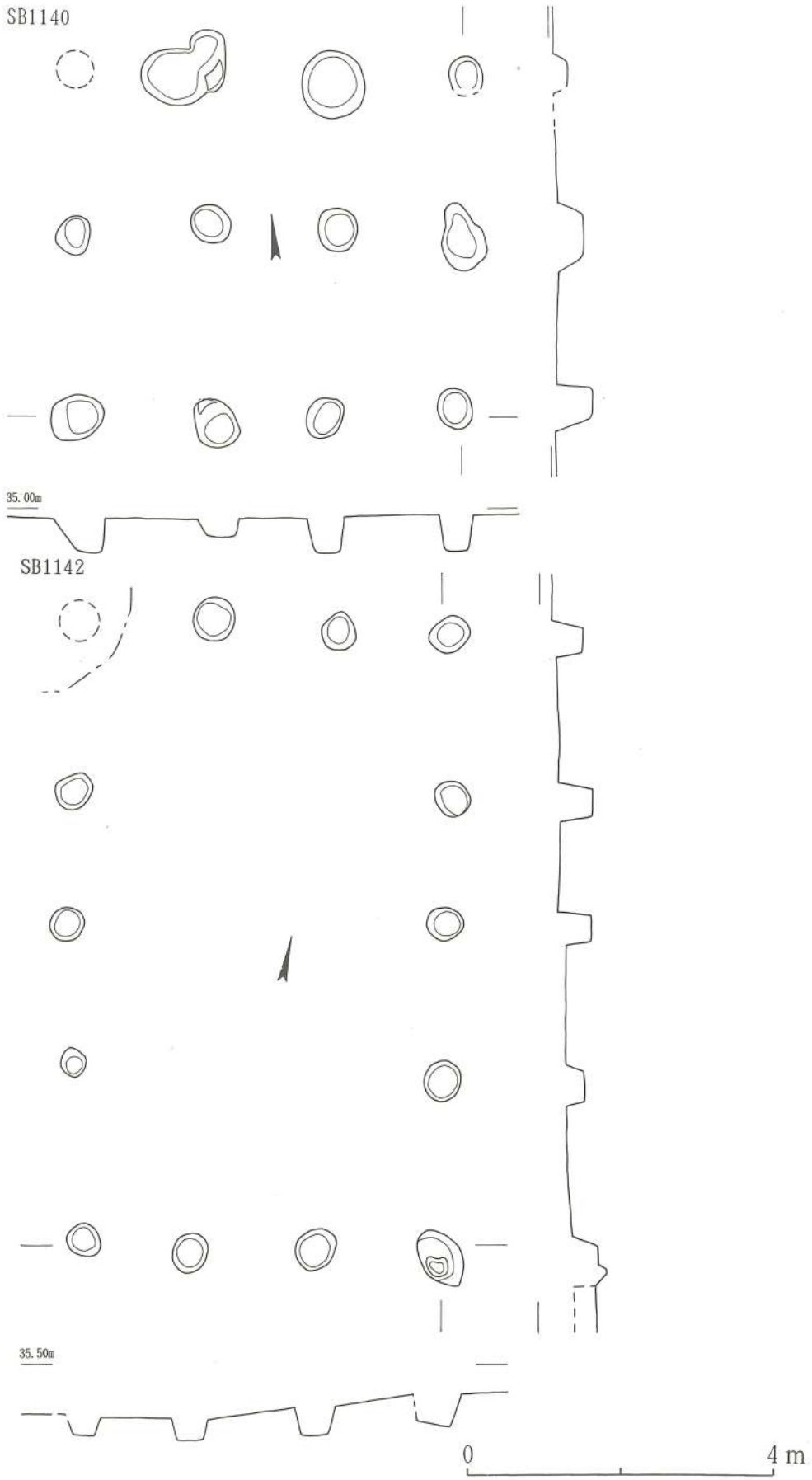



Fig.74　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(3)　SB-1140・SB-1142 (1/80)

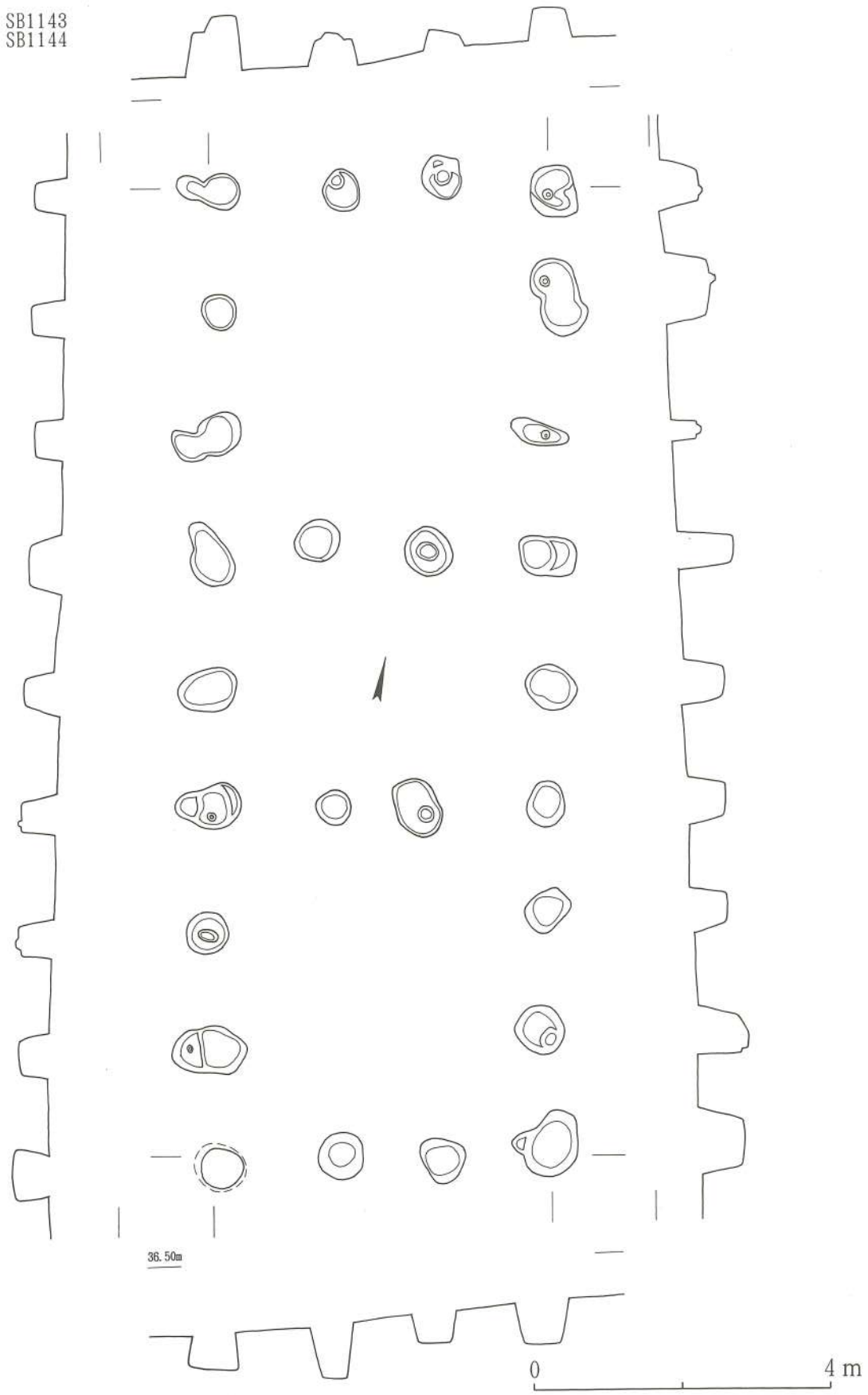



Fig.75　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(4)　SB-1143・SB-1144（1/80）

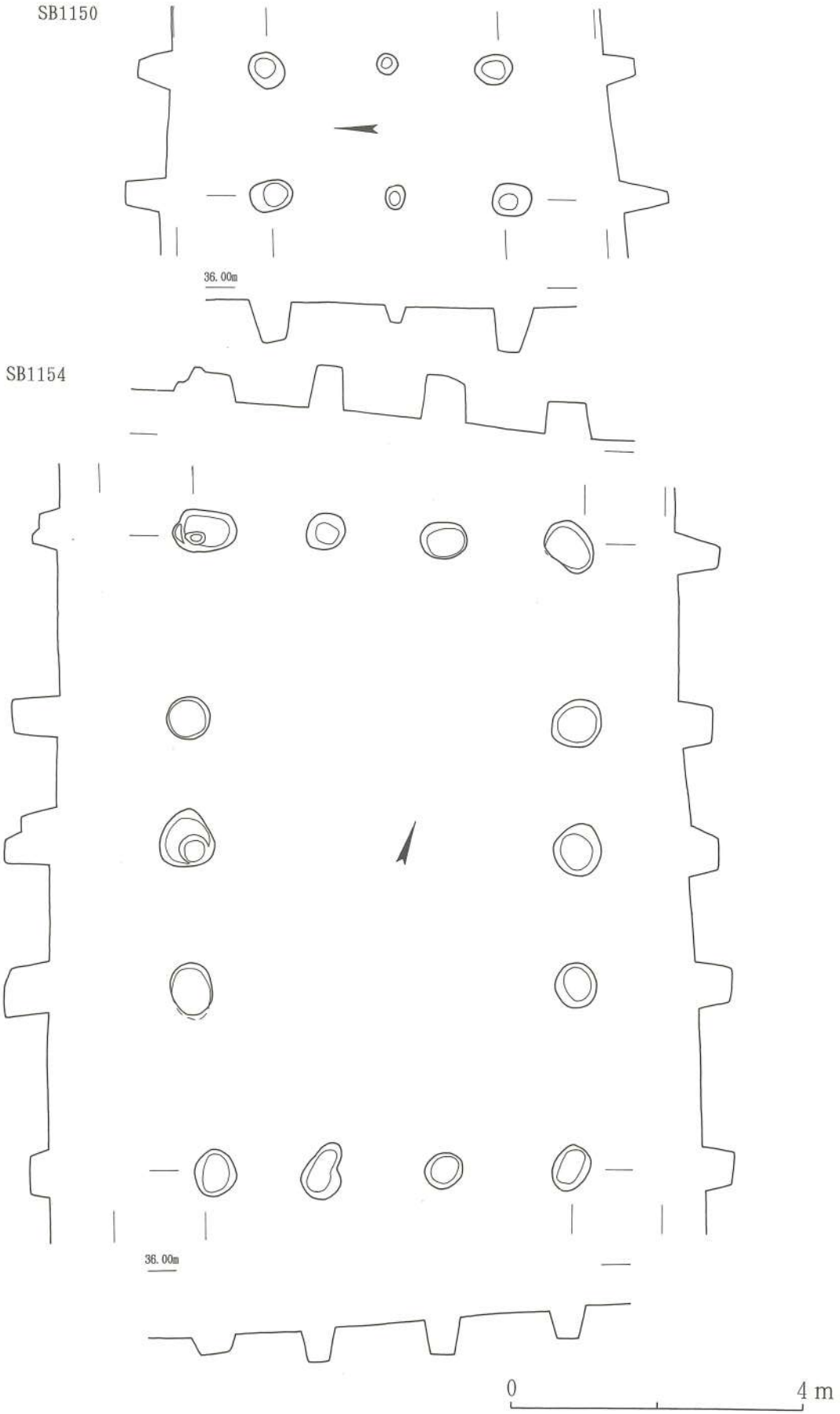



Fig.76　10区・11区出土掘立柱建物址実測図(5)　SB-1150・SB-1154 (1/80)

### (3) 土壙・貯蔵穴 (Fig.77～81・PL.57～62・Tab.12)

今回の調査で検出された土壙は61基であった。これらは、平面形態により、

円形を基調としたプランのもの：

SK-1001、SK-1002、SK-1004、SK-1010、SK-1013、SK-1014、SK-1016、SK-1018、SK-1108、SK-1109、SK-1113、SK-1119、SK-1128、SK-1131、SK-1133、SK-1134、SK-1147、SK-1152、SK-1159、SK-1160

方形を基調としたプランのもの：

SK-1011、SK-1101、SK1103、SK-1104、SK-1132、SK-1138、SK-1155、SK-1156、SK-1157、SK-1158

不整形のプランを呈し掘り方も不規則なもの：

SK-1003、SK-1012、SK-1015、SK-1017、SK-1101、SK-1102、SK-1107、SK-1110、SK-1111、SK-1112、SK-1114、SK-1115、SK-1116、SK-1117、SK-1118、SK-1122、SK-1123、SK-1124、SK-1125、SK-1127、SK-1129、SK-1130、SK-1139、SK-1141、SK-1145、SK-1146、SK-1148、SK-1149、SK-1151、SK-1153、SK-1161、SK-1162

などが認められる。

また、SK-1016、SK-1127、SK-1141、SK-1159などは、土壙床面にピットもち「落とし穴」的土壙と考えられる。

これらの土壙のうち、SK-1155、SK-1162などは検出部分の規模、形状から住居址とも考えられるが、いずれも全体を把握できない現時点では土壙として取り扱った。

出土遺物などから時期が判断できるのものとしては、縄文式土器を出土している、SK-1152が縄文晩期、SK-1155が縄文前期、また、土師器・須恵器などを出土しているSK-1001、SK-1130、SK-1134、SK-1138、SK-1139、SK-1145、SK-1149などが奈良・平安時代の所産と考えられる。

検出された各土壙の規模・深さなどの法量、及び出土遺物は下記一覧表にまとめた。

Tab.12　10区・11区出土土壙一覧表

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模(上段…上面、下段…底面、単位：m・㎡) | | | | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | | | |
| SK-1001 | 楕円形 | 1.09<br>0.87 | 0.54<br>0.33 | 0.17 | 0.2 | | 土師器甕 | |
| SK-1002 | 楕円形 | 1.56<br>0.90 | 0.73<br>0.44 | 0.04 | 0.5 | | | |
| SK-1003 | 不整形 | 1.68<br>1.12 | 0.35<br>0.24 | 0.07 | 0.4 | | | |
| SK-1004 | 不整円形 | 0.95<br>0.86 | 0.66<br>0.57 | 0.08 | 0.4 | | | |
| SK-1010 | 不整円形 | 1.03<br>0.95 | 0.66<br>0.57 | 0.18 | 0.5 | | | |
| SK-1011 | 隅丸方形 | 2.34<br>2.19 | 1.84<br>1.74 | 0.26 | 3.4 | | | |
| SK-1012 | 不整形 | 1.09<br>0.94 | 0.72<br>0.59 | 0.37 | 0.4 | | | |
| SK-1013 | 円形 | 1.20<br>1.10 | 1.00<br>0.86 | 0.17 | 0.7 | | | |
| SK-1014 | 不整円形 | 0.99<br>0.88 | 0.98<br>0.92 | 0.09 | 0.5 | | | |

Tab.12　10区・11区出土土壙一覧表（続き）

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模(上段…上面、下段…底面、単位：m・㎡) | | | | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | | | |
| SK-1015 | 不整形 | 0.70<br>0.62 | 0.56<br>0.48 | 0.10 | 0.2 | | | |
| SK-1016 | 不整円形 | 0.70<br>0.60 | 0.60<br>0.40 | 0.19 | 0.2 | 床面にピット | | |
| SK-1017 | 不整形 | 3.94<br>3.71 | 0.96<br>0.90 | 0.32 | 2.8 | | | |
| SK-1018 | 不整円形 | 1.29<br>1.12 | 0.98<br>0.81 | 0.22 | 0.8 | | | |
| SK-1101 | 不整形 | 3.61<br>1.56 | 2.07<br>1.49 | 0.14 | 4.0 | | | |
| SK-1102 | 不整形 | 1.84<br>1.65 | 1.10<br>0.90 | 0.11 | 1.1 | | | |
| SK-1103 | 不整方形 | 2.17<br>2.02 | 1.80<br>1.63 | 0.05 | 1.3 | | | |
| SK-1104 | 隅丸方形 | 2.11<br>1.68 | 1.10<br>0.65 | 0.52 | 0.5 | | | |
| SK-1107 | 不整形 | 1.71<br>1.42 | 1.13<br>0.88 | 0.33 | 0.8 | | | |
| SK-1108 | 不整円形 | 1.89<br>1.69 | 1.79<br>1.68 | 0.18 | 2.2 | | | |
| SK-1109 | 不整楕円形 | 2.36<br>2.17 | 1.29<br>1.13 | 0.35 | 1.9 | | | |
| SK-1110 | 不整形 | 2.37<br>2.16 | 1.48<br>1.34 | 0.53 | 2.2 | | | |
| SK-1111 | 不整形 | 1.22<br>0.95 | 0.68<br>0.64 | 0.10 | 0.5 | | | |
| SK-1112 | 不整形 | 1.10<br>0.89 | 0.66<br>0.41 | 0.31 | 0.3 | | | |
| SK-1113 | 不整円形 | (0.9)<br>(0.8) | 0.66<br>0.41 | 0.31 | (0.3) | | | |
| SK-1114 | 不整形 | ※1.75<br>※1.53 | 1.04<br>※1.2 | 0.90 | 0.18 | | | |
| SK-1115 | 不整形 | 1.52<br>1.26 | 1.16<br>1.00 | 0.35 | 1.0 | | | |
| SK-1116 | 不整形 | 2.00<br>1.84 | 1.15<br>0.98 | 0.25 | 1.8 | | | |
| SK-1117 | 不整形 | 2.48<br>2.32 | 1.48<br>1.36 | 0.17 | 2.4 | | | |
| SK-1118 | 不整形 | 2.30<br>2.08 | 1.62<br>1.33 | 0.39 | 2.5 | | | |
| SK-1119 | 不整円形 | 1.78<br>1.65 | 1.29<br>1.20 | 0.17 | 1.7 | | | |
| SK-1122 | 不整形 | 1.41<br>1.26 | 0.73<br>0.54 | 0.19 | 0.5 | | | |
| SK-1123 | 不整形 | 1.12<br>0.90 | 1.11<br>0.90 | 0.46 | 2.6 | | | |
| SK-1124 | 不整形 | 1.14<br>1.06 | 0.94<br>0.78 | 0.50 | 0.7 | | | |
| SK-1125 | 不整形 | 1.04<br>0.88 | 1.02<br>0.90 | 0.21 | 0.5 | | | |
| SK-1127 | 不整形 | 1.61<br>1.46 | 0.59<br>0.43 | 0.17 | 0.5 | 床面に窪み | | |

Tab.12　10区・11区出土土壙一覧表（続き）

| 遺構番号 | 平面形態 | 規模(上段…上面、下段…底面、単位：m・㎡) | | | | 柱穴状のピットなど | 出土遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ・長径 | 幅・短径 | 深さ | 底面積 | | | |
| SK-1128 | 不整円形 | 2.37<br>2.30 | 1.97<br>1.88 | 0.36 | 3.3 | | | |
| SK-1129 | 不整形 | 2.10<br>1.98 | 0.84<br>0.73 | 0.19 | 0.9 | | 叩き石 | |
| SK-1130 | 不整形 | 4.84<br>4.68 | 1.70<br>1.60 | 0.35 | 6.5 | | 土師器甕、中世土器甕、弥生式土器甕 | |
| SK-1131 | 不整円形 | 1.05<br>0.92 | 1.00<br>0.87 | 0.13 | 0.5 | | | |
| SK-1132 | 不整方形 | (1.2)<br>(1.1) | 0.95<br>0.81 | 0.16 | (0.7) | | | |
| SK-1133 | 不整円形 | 1.45<br>1.30 | 1.22<br>1.06 | 0.45 | 1.1 | | | |
| SK-1134 | 不整円形 | 1.48<br>1.18 | 1.14<br>1.00 | 0.37 | 1.0 | | 土師器甕 | |
| SK-1138 | 不整方形 | 2.25<br>2.20 | ※2.00<br>※1.97 | 0.04 | ※3.9 | | 土師器坏、須恵器坏蓋、縄文式土器深鉢 | |
| SK-1139 | 不整形 | 1.84<br>1.48 | 1.12<br>0.78 | 0.45 | 0.9 | | 須恵器甕 | |
| SK-1141 | 不整形 | 2.00<br>1.83 | 1.06<br>0.91 | 0.22 | 1.4 | 床面に窪み | | |
| SK-1145 | 不整形 | 5.89<br>5.76 | 2.80<br>2.33 | 0.55 | 8.0 | | 土師器甕・坏・皿・鉢、須恵器坏・盤・坏蓋・鉢 | |
| SK-1146 | 不整形 | 1.68<br>1.41 | 1.26<br>1.12 | 0.20 | 1.0 | | | |
| SK-1147 | 不整楕円形 | 1.47<br>1.31 | 1.08<br>0.80 | 0.50 | 0.8 | | | |
| SK-1148 | 不整形 | 2.09<br>1.91 | 1.98<br>1.76 | 0.16 | 2.7 | | | |
| SK-1149 | 不整形 | ※5.40<br>※5.32 | ※1.37<br>※1.33 | 0.06 | ※5.0 | | 土師器甕・鉢、須恵器壺・高坏 | |
| SK-1151 | 不整形 | 2.69<br>2.47 | 2.44<br>2.26 | 0.34 | 4.2 | | | |
| SK-1152 | 不整楕円形 | 1.17<br>1.05 | 0.65<br>0.48 | 0.28 | 0.4 | | 縄文式土器深鉢・浅鉢・高坏 | |
| SK-1153 | 不整形 | 1.45<br>1.31 | 1.00<br>0.50 | 0.18 | 0.6 | | | |
| SK-1155 | 不整方形 | ※6.47<br>※4.90 | ※0.89<br>※0.68 | 0.32 | ※3.3 | | 縄文式土器深鉢<br>石斧 | 住居址の可能性あり。 |
| SK-1156 | 不整方形 | 1.11<br>1.01 | 0.83<br>0.72 | 0.31 | 0.6 | | | |
| SK-1157 | 不整方形 | 0.93<br>0.78 | 0.65<br>0.4 | 0.58 | 0.26 | | | |
| SK-1158 | 不整方形 | 1.20<br>1.09 | 0.67<br>0.57 | 0.11 | 0.5 | | | |
| SK-1159 | 不整円形 | 1.08<br>0.87 | 0.91<br>0.64 | 0.29 | 0.5 | 床面にピット | | |
| SK-1160 | 不整円形 | 3.88<br>3.70 | 2.98<br>2.75 | 0.87 | 6.4 | | | |
| SK-1161 | 不整形 | 2.50<br>0.47 | 1.17<br>0.31 | 0.66 | 0.1 | | | |
| SK-1162 | 不整形 | ※5.05<br>※4.70 | ※1.28<br>※1.04 | 0.31 | 4.9 | | | 住居址の可能性あり。 |

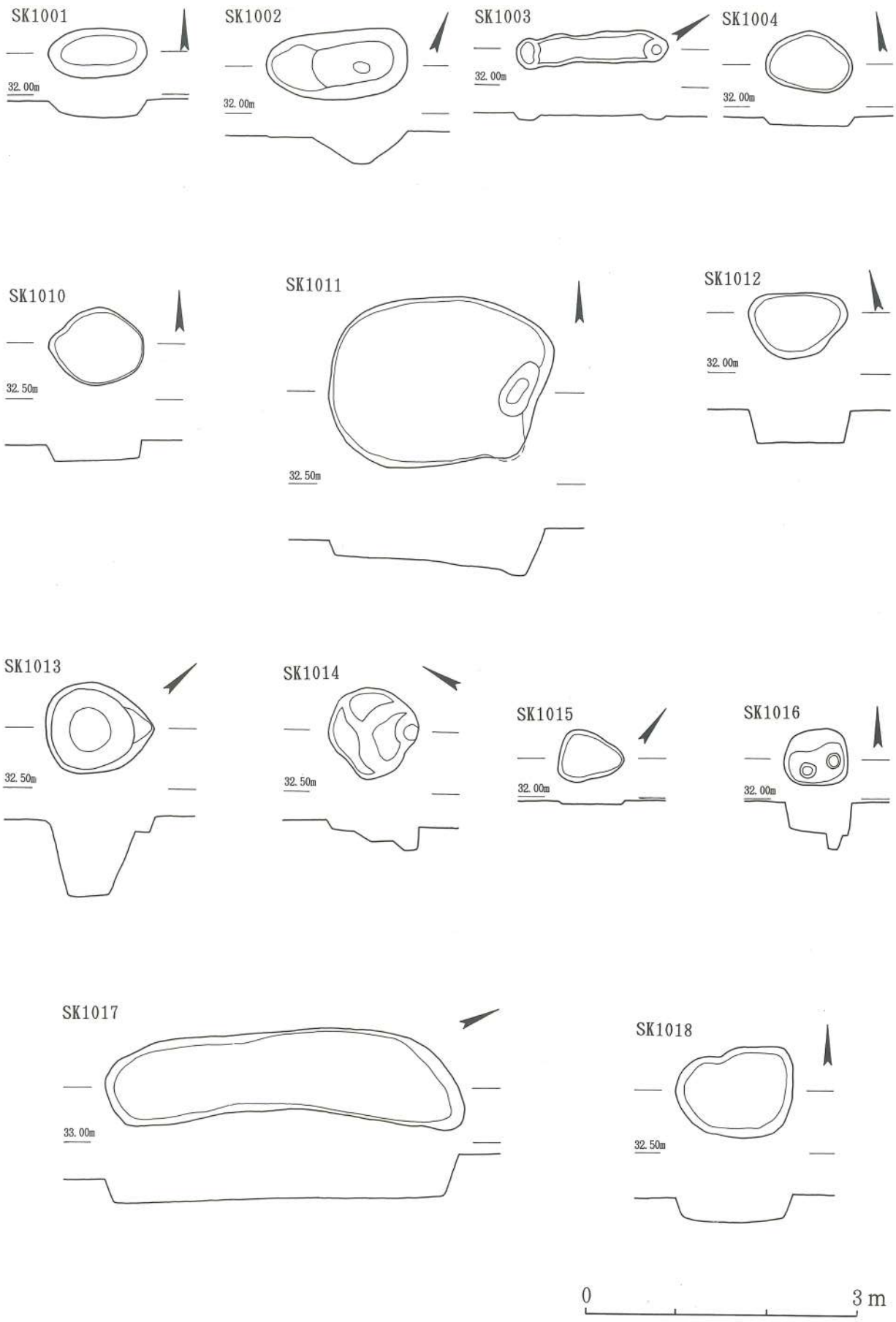



Fig.77　10区・11区出土土壙実測図(1)　SK-1001～SK-1004・SK-1010～SK-1018（1/60）

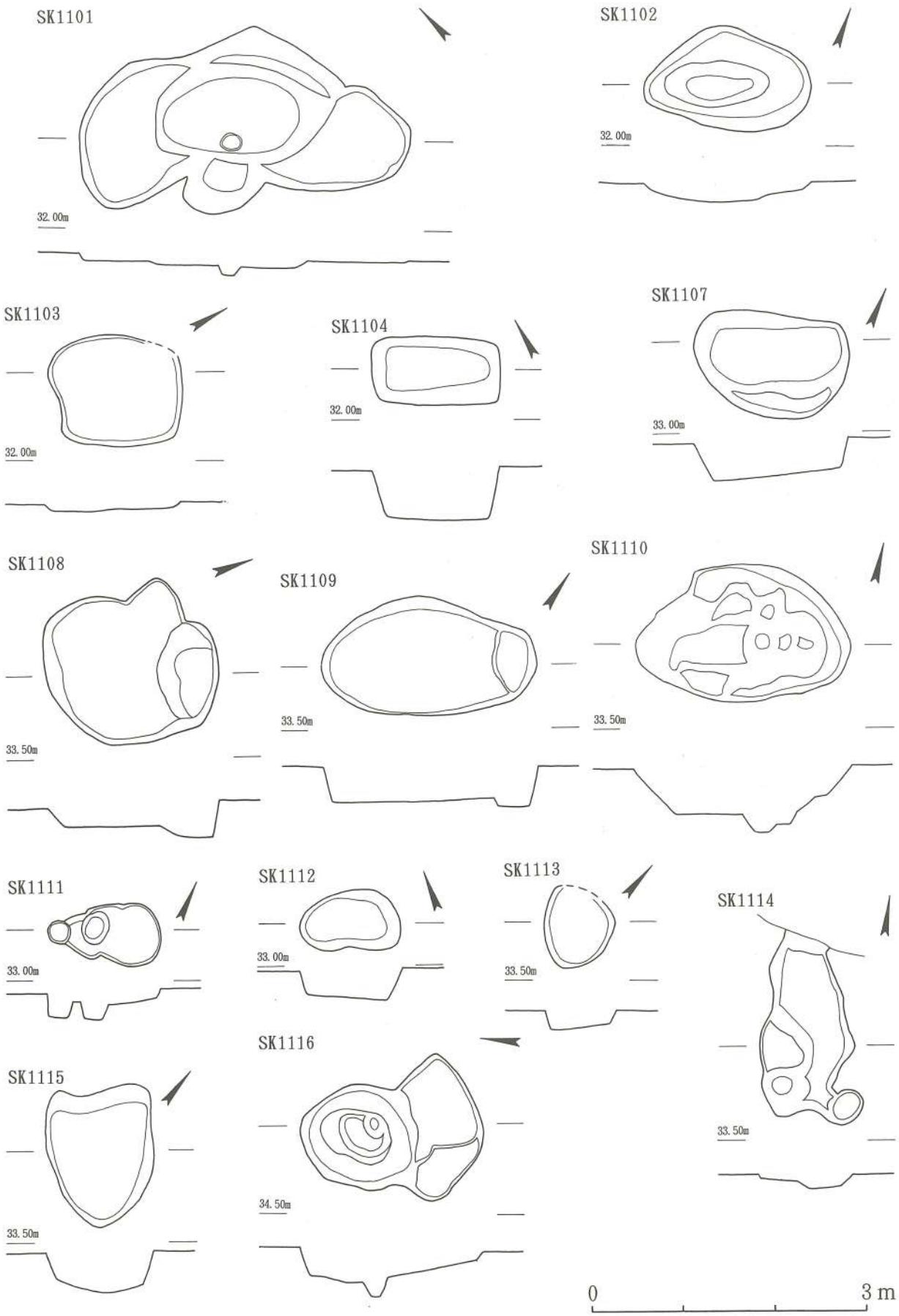



Fig.78　10区・11区出土土壙実測図(2)　SK-1101～SK-1104・SK-1107～SK-1116（1/60）

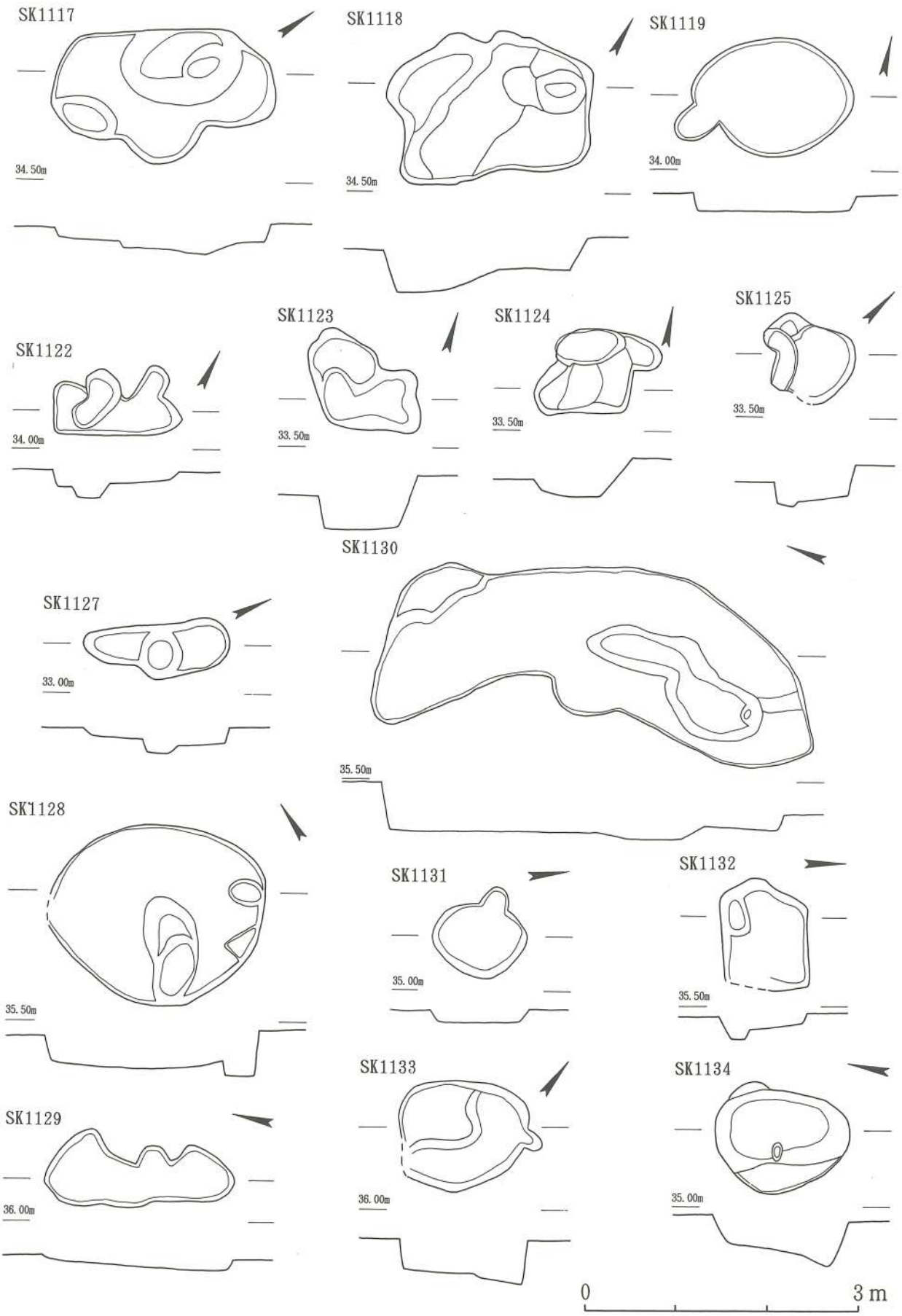



Fig.79　10区・11区出土土壙実測図(3)　SK-1117～SK-1119・SK-1122～SK-1125・SK-1127～SK-1134（1/60）

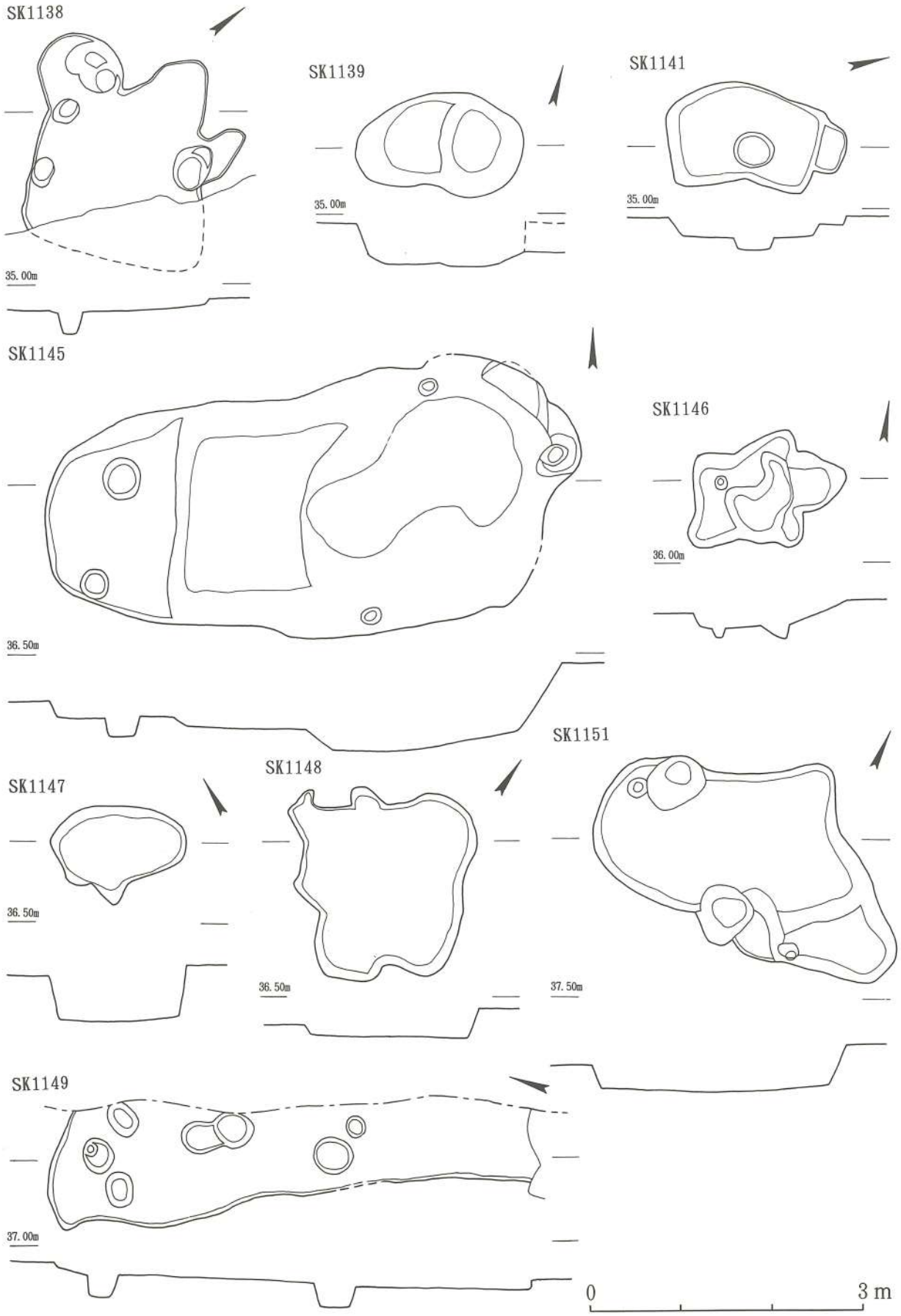



Fig.80　10区・11区出土土壙実測図(4)　SK-1138・SK-1139・SK-1141・SK-1145～SK-1149・SK-1151（1/60）

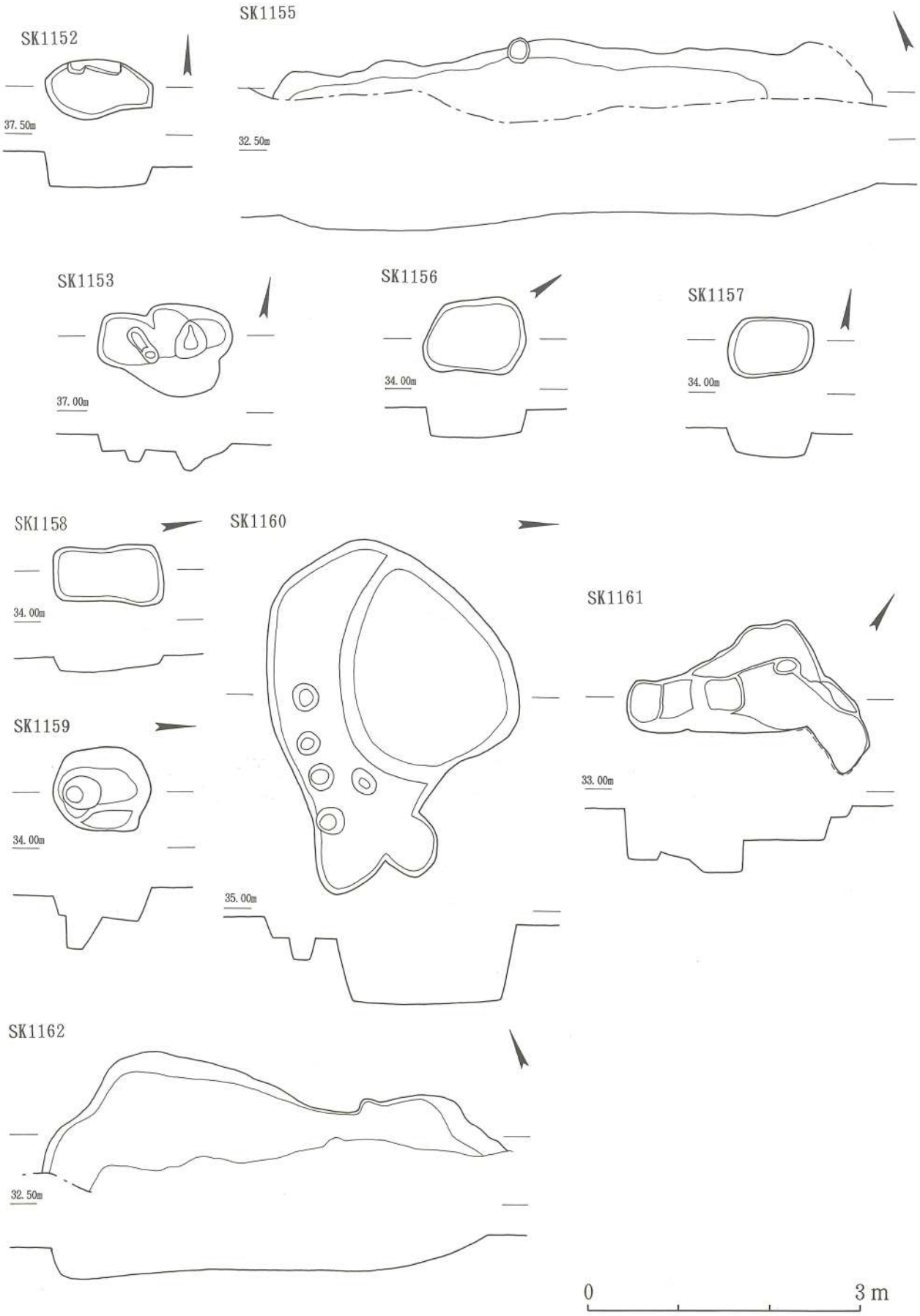



Fig.81　10区・11区出土土壙実測図(5)　SK-1152・SK-1153・SK-1155～SK-1162 (1/60)

## 4．遺　　物

今回の調査では、各時代の遺構から縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代及び中世の各時代の土器や石器などが出土している。なお、近世以降の遺物も少なからず出土しているが、紙面の都合で割愛した。

出土遺物の量は、八藤丘陵におけるこれまでの調査区のそれと比べると少ない。ここでは土器の代表的なものを遺構ごとに、石器類を器種ごとに報告する。

なお、実測図中の土器拓影、断面は、縮尺1/3であり、遺物番号のあとに「1/3」と表記した。特記のないものは、すべて縮尺1/4である。また、実測図、写真図版に付した遺物番号は一致する。

### (1) 土　　器（Fig.82～85・PL.62～67）

**SK-1011出土土器**（Fig.82・PL.62）

1は、土師器の甕または甑の胴部。

**SH-1120出土土器**（Fig.82・PL.62、63）

2～8は、弥生式土器。2～7は甕、2、6、7は口縁が水平に開く逆L字形口縁の甕。いずれも外面ハケ目調整。3～4は口縁が「く」の字型に開くもの。8は広口壺、胴部は中位に最大径をもち算盤の珠状を呈し、口縁は短く水平に開く。内面ナデ、外面は磨きに近い丁寧なナデ。底面を除き、外面には赤色塗彩。口縁部には蓋を細紐で取り付けるためと考えられる小穴が2ヵ所に穿たれている。

**SK-1130出土土器**（Fig.82・PL.63）

9、10、12は土師器の甕。9、10は小ぶりで口縁が外反しながら開く。10は口縁部下位に横位のハケ目を残す。12は中世土器と思われ、口縁は外傾し口唇は肥厚する。胴部外面には粗いカキ目を残す。11、13は弥生式土器の甕。11は逆L字形口縁をもつ。13は「く」の字形に開く口縁を持つ。いずれも外面にハケ目を残す。

**SK-1134出土土器**（Fig.82・PL.63）

14は土師器甕。

**SH-1136出土土器**（Fig.82、83・PL.63、64）

15、18は土師器高台坏。やや大ぶりの造りで、体部は内湾しながら立ち上がり口縁に至る。「ハ」の字形の短い高台をもち、底面に「藥」のヘラ描き文字をもつ。16は須恵器高台坏。体部はやや外反しながら立ち上がる。太く低い高台がつく。17は須恵器坏蓋。口縁端部が「く」の字形に屈折し受けとなる。20は土師器甑。下半部がやや絞られた円筒状の胴部で口縁は外反し開く。内面は一部にハケ目を残すもののナデ、外面粗いハケ目。胴部中位よりやや上部に把手をもつ。

**SH-1137出土土器**（Fig.83・PL.64）

19、21は、弥生式土器で、逆L字形口縁の甕。21は外面ハケ目。

**SK-1138出土土器**（Fig.83、85・PL.67）

22は須恵器坏蓋、天井部は平坦で、口唇端が「く」の字形に小さく屈曲する。23は土師器の鉢の体部かと思われる。53は縄文式土器の深鉢。胎土の滑石を含み、外面には櫛目文、列点文が、内面には横位の条痕文が施されている。

**SK-1139出土土器**（Fig.83）

24は須恵器甕の口縁部。

**SB-1143出土土器**（Fig.83・PL.64）

25、26は、いずれも土師器坏。25は平底で底部との間に明瞭な稜をもち、直線的に開く体部が立ち上がる。26はやや丸底で体部は直線的に開く。

**SK-1145出土土器**（Fig.83、84・PL.64～66）

28は須恵器鉢。大きく内湾する口縁部をもつ。29～31は、土師器甕。29は胴部に張りがなく口縁が直線的に水平に開く。30、31は頸部が明瞭で口縁は外反しながら開く。30は外面に縦横のハケ目が規則的に施されている。31は土師器皿。平底の底部に「ハ」の字形の短い高台がつく。底部と口縁部の境界が肥厚し、短い口縁が立ち上がる。底面高台内に「藥」のヘラ描き文字をもつ。33～36は須恵器高台坏。33、34は、胎土、焼成ともに八藤丘陵出土の他の須恵器類とは異質で、「ハ」の字形の短い高台をもち体部は内湾し立ちあがり口縁は小さく外反する。底面高台内に「藥」のヘラ描き文字をもつ。35は「ハ」の字形の短い高台をもち体部は内湾しそのまま口縁に至る。36は腰がやや張った深めの造りで、太く短い高台をもち口縁部はやや外反する。37、39は須恵器盤。37はやや垂れ下がった平底で、底部と口縁の境界に明瞭な稜をもち、短い口縁は外反し開く。39は上げ底気味の底部をもち口縁端部が玉縁状につままれている。38は土師器坏。丸底の底部に内湾し肥厚する口縁部がつく。40は須恵器坏蓋。つまみは扁平で垂れ下がった天井部をもつ。41は土師器鉢。分厚い造りの体部は朝顔状に開き、底部は丸底に近いものと推定される。

**SK-1149出土土器**（Fig.84・PL.66）

42～45は土師器の甕。46は須恵器で、長頸壺の類の底部と思われる。47は弥生式土器の広口壺。48は須恵器高坏の脚部。

**SK-1152出土土器**（Fig.84・PL.67）

49～52は縄文式土器。49、52は撥状に広がる鉢類の底部破片。50は浅鉢。体部は中位で内湾し、口縁は屈曲し短く開く。口唇部内外面にはそれぞれ浅い沈線が1条めぐる。体部には補修孔と思われる穴が焼成後に穿孔されている。51は小ぶりの高坏と思われるもの。浅い坏部は「く」の字形に屈折し短い口縁が直立する。口唇部は玉縁状を呈す。

**SK-1154出土土器**（Fig.85・PL.67）

54～61は縄文式土器。54～59は胎土に滑石を含み、幾何学模様をもつもので曽畑式土器と考えられるもの。54は朝顔状に開く口縁をもつ深鉢。57は口縁が小さく外反する鉢。60は、口縁部の破片と思われ、外面にはヘラ条工具の先端復縁の連続押圧文がみられる。61は、爪形状の連続押圧文が2段確認できる。

### (2) 石　器（PL.67）

今回の10区・11区の調査では、土器のほかに、石器類も少量であるが出土している。ここではそれらのうち代表的なもの2点について簡単に報告する。

**石　斧**（PL.67）

62は、安山岩製の石斧。敲打により成形し刃部を磨き出し上下両側面部分的に磨き整形している。断面は楕円形を呈す。長さ11.4cm、幅4.4cm、厚さ2.6cm、重量189.5g。SK-1155出土。

**叩き石**（PL.67）

63は砂岩質の叩き石。上面観は円形を呈し、断面は扁平な楕円形を呈す。遺存部径9.8cm、厚さ3.6cm、重量350.0g。SK-1129出土。

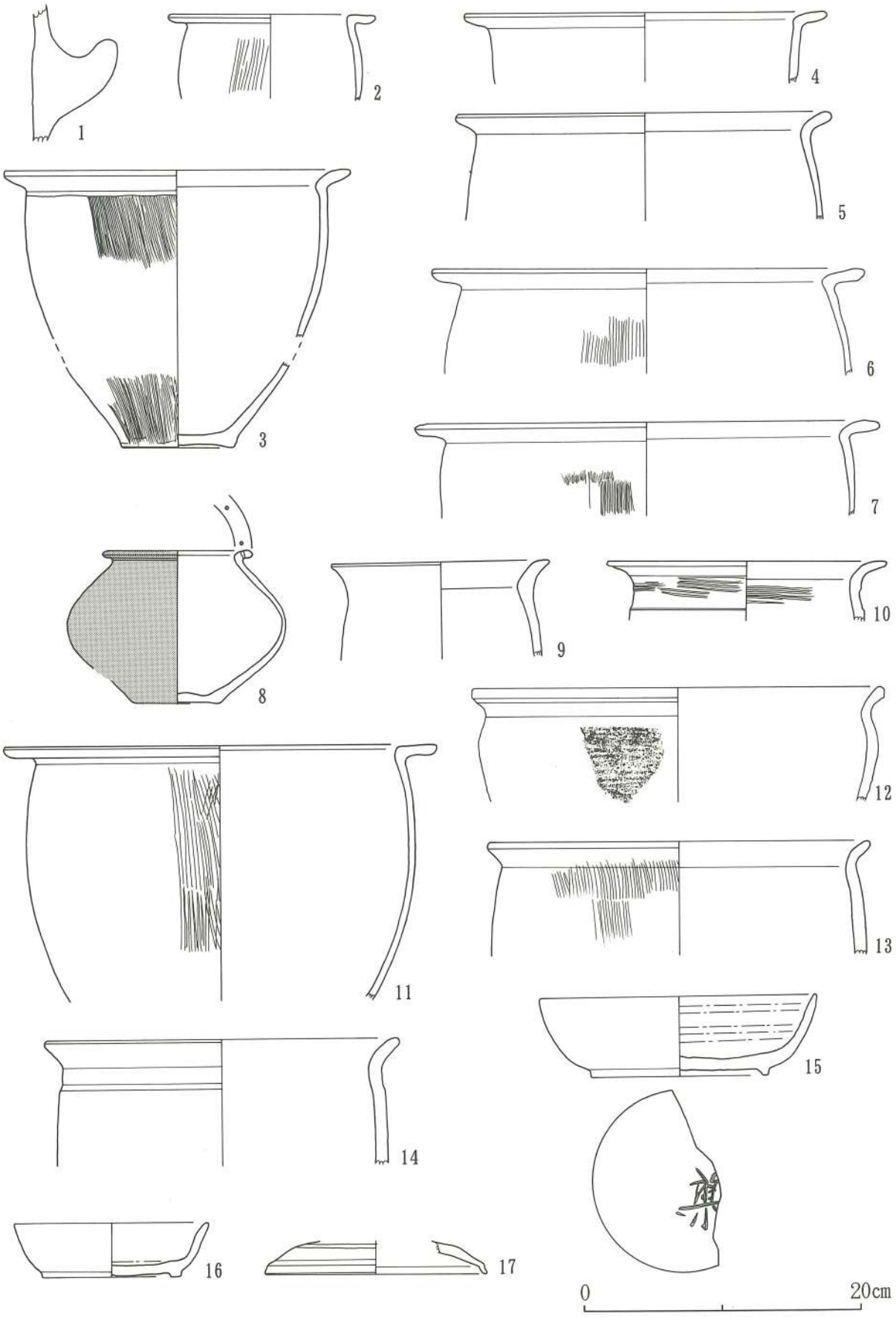



Fig.82　10区・11区出土遺物実測図(1)（1/4）

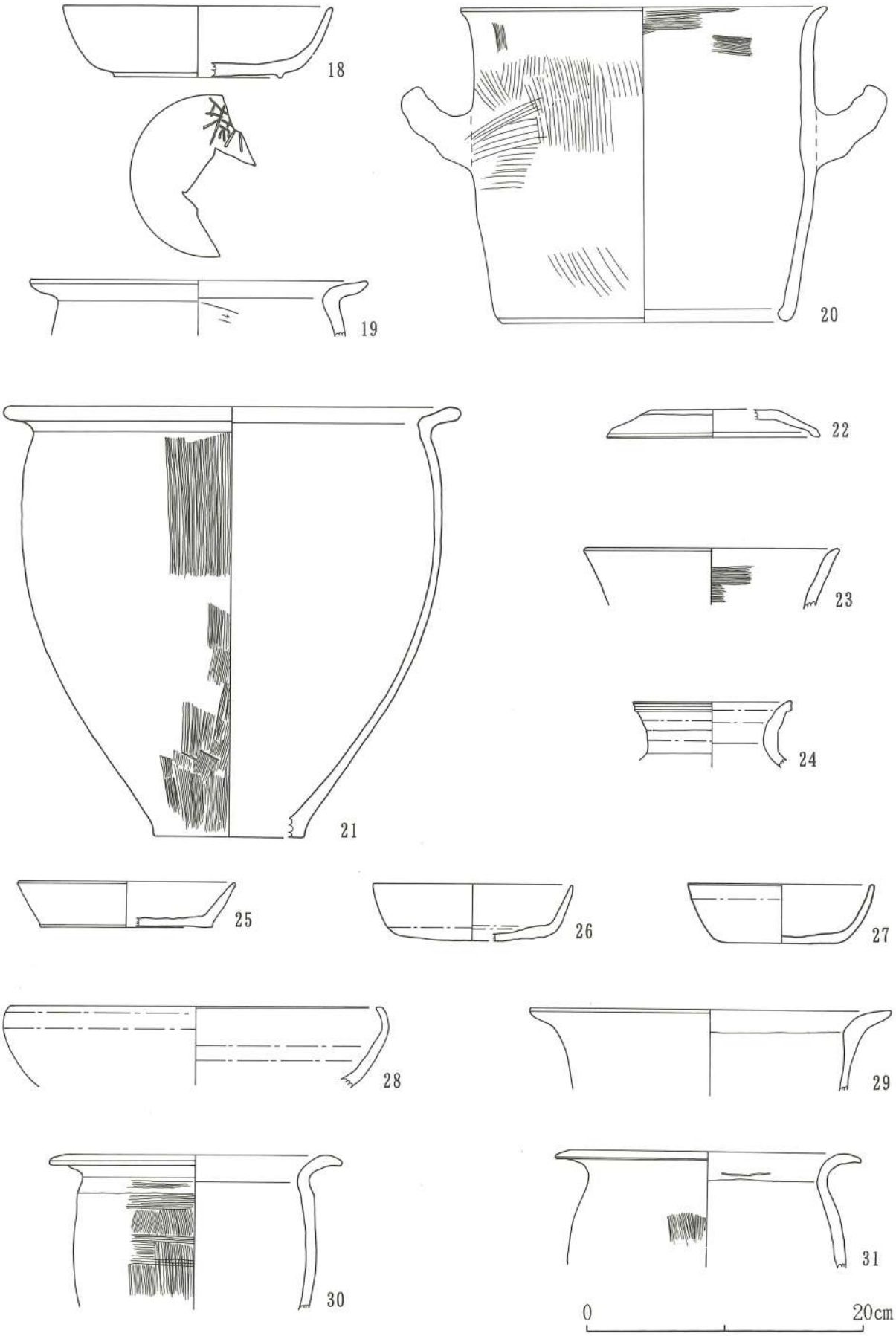



Fig.83　10区・11区出土遺物実測図(2)（1/4）

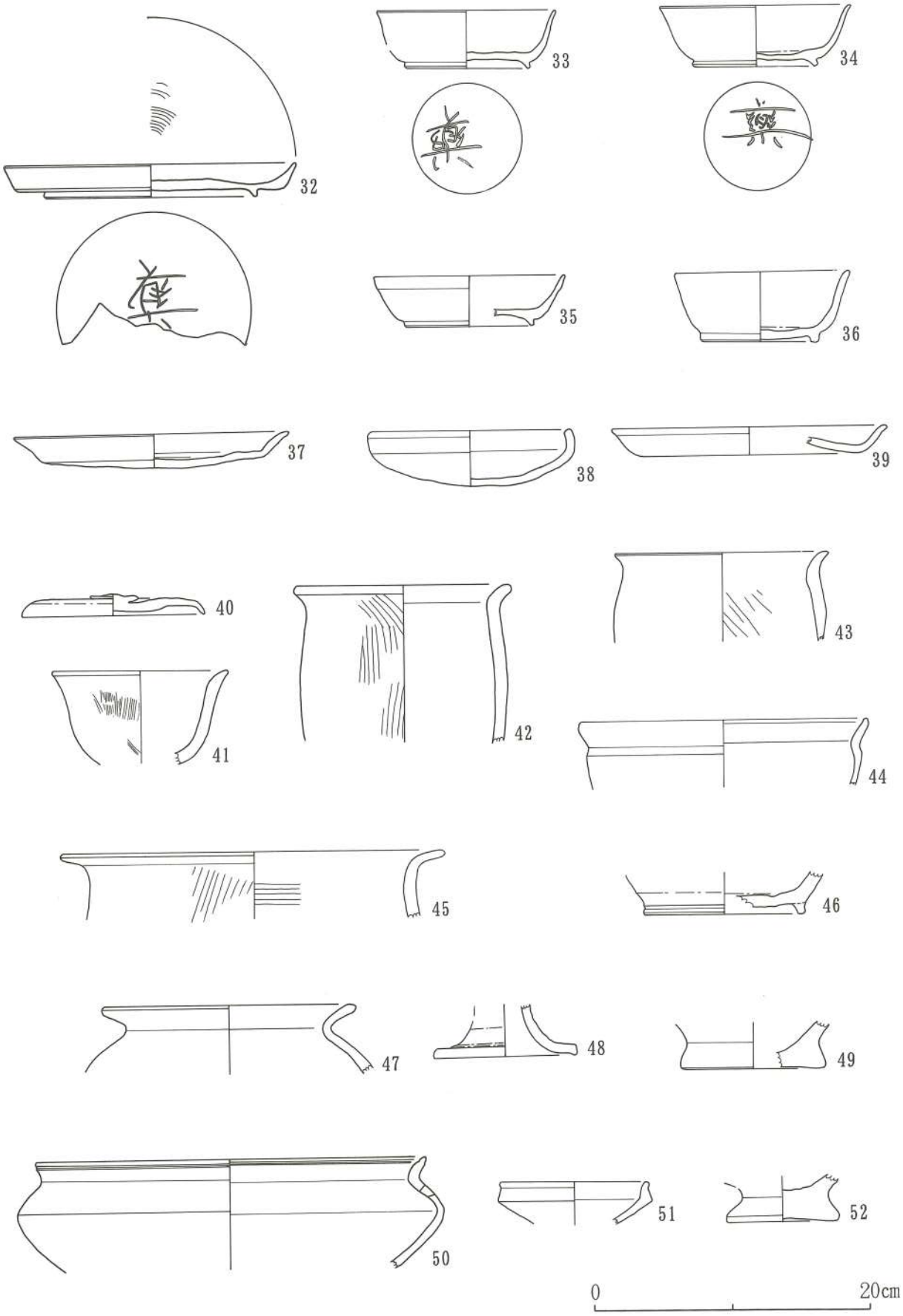



Fig.84　10区・11区出土遺物実測図(3)（1/4）

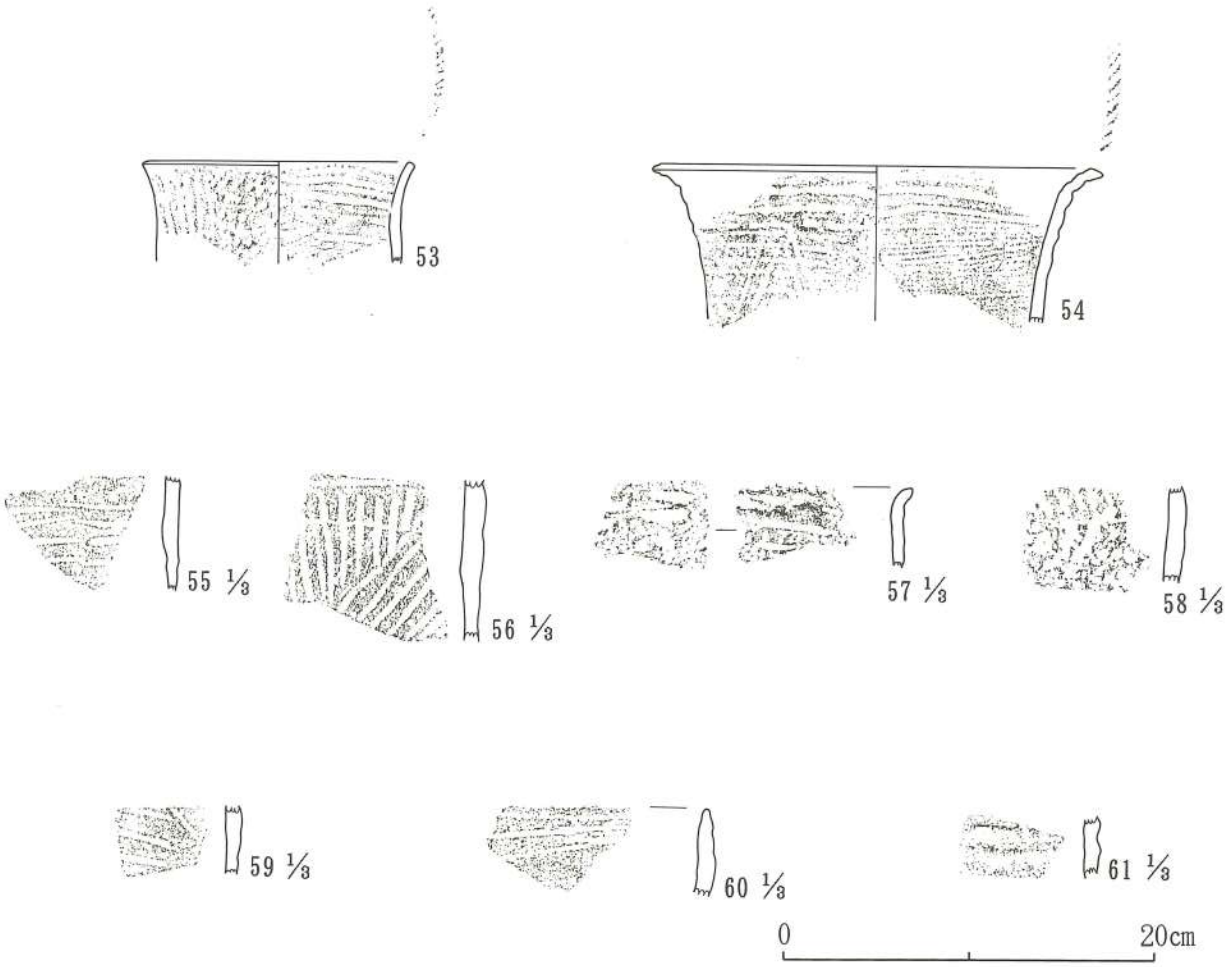



Fig.85　10区・11区出土遺物実測図(4)（1/4）

# Ⅶ. ま と め

佐賀県営上峰北部農業基盤整備事業に伴い平成元年度より開始した八藤丘陵上の埋蔵文化財発掘調査も今回報告してきた平成３年度から５年度の３次に及ぶ調査を含めると、調査面積の合計は、51,450㎡（平成２年度調査の堤土塁跡２区3,350㎡を含めると54,800㎡となる）に及んでいる。

今回ここに報告した平成３年度から５年度及ぶ３ヵ年度の調査では、先土器時代から弥生時代、奈良・平安時代から中世に及ぶ遺構が検出された。その内訳〔() 内は年度ごとの内訳〕は、以下のとおりである。

竪穴式住居址：弥生時代　10軒（３年度４軒、４年度３軒、５年度３軒）
　　奈良時代　２軒（――、１軒、１軒）
掘立柱建物址：奈良時代　30棟（21棟、10棟、９棟）
各時期の土壙：　　208基（70基、77基、61基）
その他の遺構：奈良時代火葬墓１基、道路側溝状遺構２条、中世大溝１条など

これに堤土塁跡２区を含む平成元年度、２年度調査で検出された遺構を加えると八藤丘陵の調査で検出された遺構は、全体で、

竪穴式住居址：弥生時代　14軒（元年度――、２年度４軒、３年度４軒、４年度３軒、５年度３軒）
　　古墳時代　１軒（１軒、――、――、――、――、）
　　奈良時代　２軒（――、――、――、１軒、１軒）
掘立柱建物址：奈良時代　35棟（１棟、４棟、21棟、10棟、９棟）
各時期の土壙：　　387基（49基、130基、70基、77基、61基）
その他の遺構：弥生時代甕棺墓28基、奈良時代火葬墓１基、道路側溝状遺構２条、中世大溝１条など

となる。そしてこれらの遺構群から、先土器時代から中世に及ぶ様々な遺物が出土している。

以下、平成３年度から５年度の調査で検出された遺構・遺物について、平成元年度以降の調査成果を踏まえながら、各時代ごとに調査所見を簡単に列記し、まとめとしたい。

### 先土器時代の八藤遺跡

平成３年度６区・７区、平成４年度８区・９区の調査において、先土器時代の所産になると思われる尖頭器、打製石斧、掻器、細石刃、石核などが検出された。これらの多くは後世の遺構内から出土しており、いずれも厳密な意味での原位置は損なわれ、二次的な出土の仕方をしている。しかし、町内における先土器時代遺物の初めての出土例であり、調査例である。

これまで町内では当時の人々の足跡が皆無であった。これらは、この時代の人々の活動を知る手がかりとして貴重な資料である。今後の、この周辺地域における調査例の増加を期待したい。

### 縄文時代の八藤遺跡

平成５年度11区の調査において検出された土壙SK-1152、SK-1155からは、それぞれ、まとまった土器群が出土しており、前者が晩期、後者が前期の所産であることが確認できた。とくにSK-1155は、調査区境界付近で検出され一部の発掘にとどまったが、その規模や形状から住居址の可能性も高い。

また、11区北部では遺構検出面の状況から、縄文時代以前の遺物包含層の存在が期待され、調査区の周辺部に断続的に総延長75mに及ぶ試掘トレンチを設定し調査を行ったが、期待した成果は得られなかった。

八藤丘陵の調査では、平成２年度に続き、前期あるいは後期、晩期というように時期の特定が可能な遺構・遺物が増加した。今後この地域の縄文時代人の動向を考える上で貴重な資料といえる。

**弥生時代の八藤遺跡**

平成元年度から５年度までの調査において、八藤丘陵上で検出された弥生時代の遺構は、竪穴式住居址10軒、平成元年度調査の甕棺墓28基、その他土壙などである。甕棺墓群は、遺跡南部の丘陵先端部に集中して比較的短時間の間に営まれている。また、住居址については、この甕棺墓群を残した集団の集落と考えることが妥当である。住居址のうち３軒が円形住居址で比較的早い時期に営まれたものと考えられる。残りの７件の住居址は、いずれも中期から後期の長方形の住居址である。この住居址と甕棺墓の数を、大谷川に開析された谷を隔てた対岸の南東に位置する船石丘陵上の船石遺跡と比較すると、時を同じくして営まれていたこの2遺跡のあり方は対照的である。この格差の要因は、丘陵の両側の谷底平野にしか耕地を求めることができなかった八藤丘陵の集団と南に広大な沖積平野が広がる船石丘陵を占有した集団との立地条件の差であろうか。いずれにせよ八藤遺跡の集団は、弥生時代後期には船石の集団かあるいは別の南の集団に吸収されたものと推定される。

**奈良時代以降の八藤遺跡**

奈良時代、八藤丘陵に堤土塁の築造という一大変化が起きる。堤土塁は、八藤丘陵と切通川を隔てて西に位置する二塚山丘陵とがもっとも接近する位置に築かれた全長約300m、基部の幅約40m、南側の田面との此高約９ｍの土塁で、現在は土塁中央部を切通川が南流し、中央約80mの間に土塁は見えず、東西それぞれ長さ約110mの分立した土塁となっている。この土塁の東側部分（「東側土塁」と呼称。）は、八藤丘陵から西に派生する支丘を土塁として整形、利用している。

平成元年度から実施してきた八藤丘陵の埋蔵文化財調査において、この時期の遺構として注目されるのは、平成２年度の八藤遺跡４区・堤土塁跡２区の調査でその西端が検出され、以後平成４年度調査の八藤遺跡９区東端まで、ほぼ東西に丘陵を横断する形で断続的に検出された延長216mの道路側溝状の遺構である。

これまで堤土塁の築造目的について、防衛施設、かんがい施設、その併用施設など論じられてきたが、今回の八藤丘陵の調査により、道路遺構という新たな選択肢が提起されたといえる。

その他の遺構として注目される遺構は、上記の道路側溝状遺構の南北から検出された掘立柱建物群がある。平成３年度、４年度の調査で道路側溝状遺構の南北にそれぞれ12棟と19棟の合計31棟が確認された。個々の建物は重複しているものもあり、主軸をみても、ほぼ磁北を取るもの、東西に軸が振れるものの３類に区分できそうである。ところが道路側溝状遺構と重複した建物は一棟もなく、並存していたものと推定され、「駅」テキな機能をもった施設であったことが推測される。

この時期の遺物で注目されるのは、平成５年度調査の11区から出土した「薬」のヘラ描き文字をもつ土師器、須恵器である。SH-1136、SK-1145から出土したこれらの遺物は、八藤丘陵出土の他の土師器、須恵器とは趣きを異にしており、特別の用途をもつものと推定されるが、具体的には不明である。

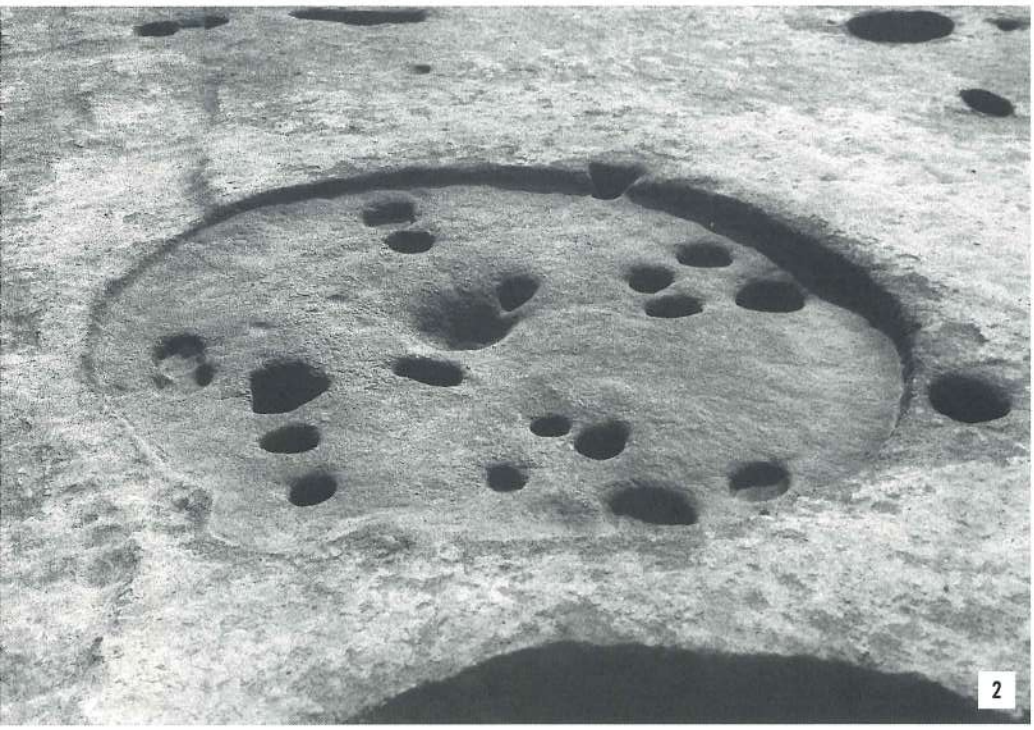
中世の遺構として注目される遺構は、平成４年度の調査で８区・９区の境界部分で検出された大溝である。丘陵の最も狭い部分をほぼ東西に横断するこの溝の開削目的は不明である。ただ、溝の底面の標高が24.5mであることから考えられるのは、堤土塁の東側土塁「野越」部分の標高と一致することから、土塁北側の後背地の性格と何らかの関係があるのかも知れない。

# 図　　版

八藤遺跡６区・７区全景（平成３年度：北から）

八藤遺跡８区・９区全景（平成４年度：南から）

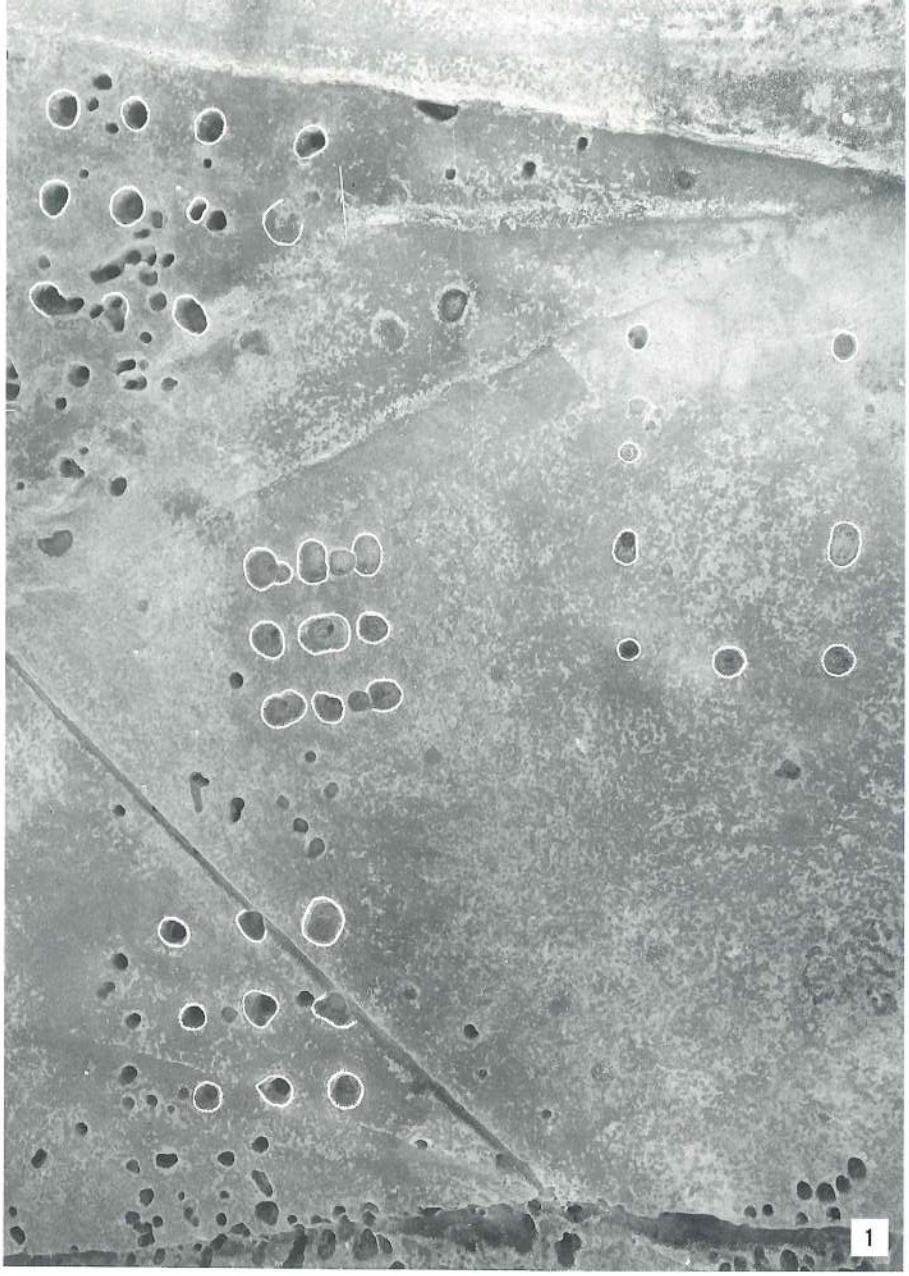
八藤遺跡10区・11区全景（平成５年度：南から）



1．SH-619（南から）
2．SH-625（北東から）
3．SH-629（北東から）

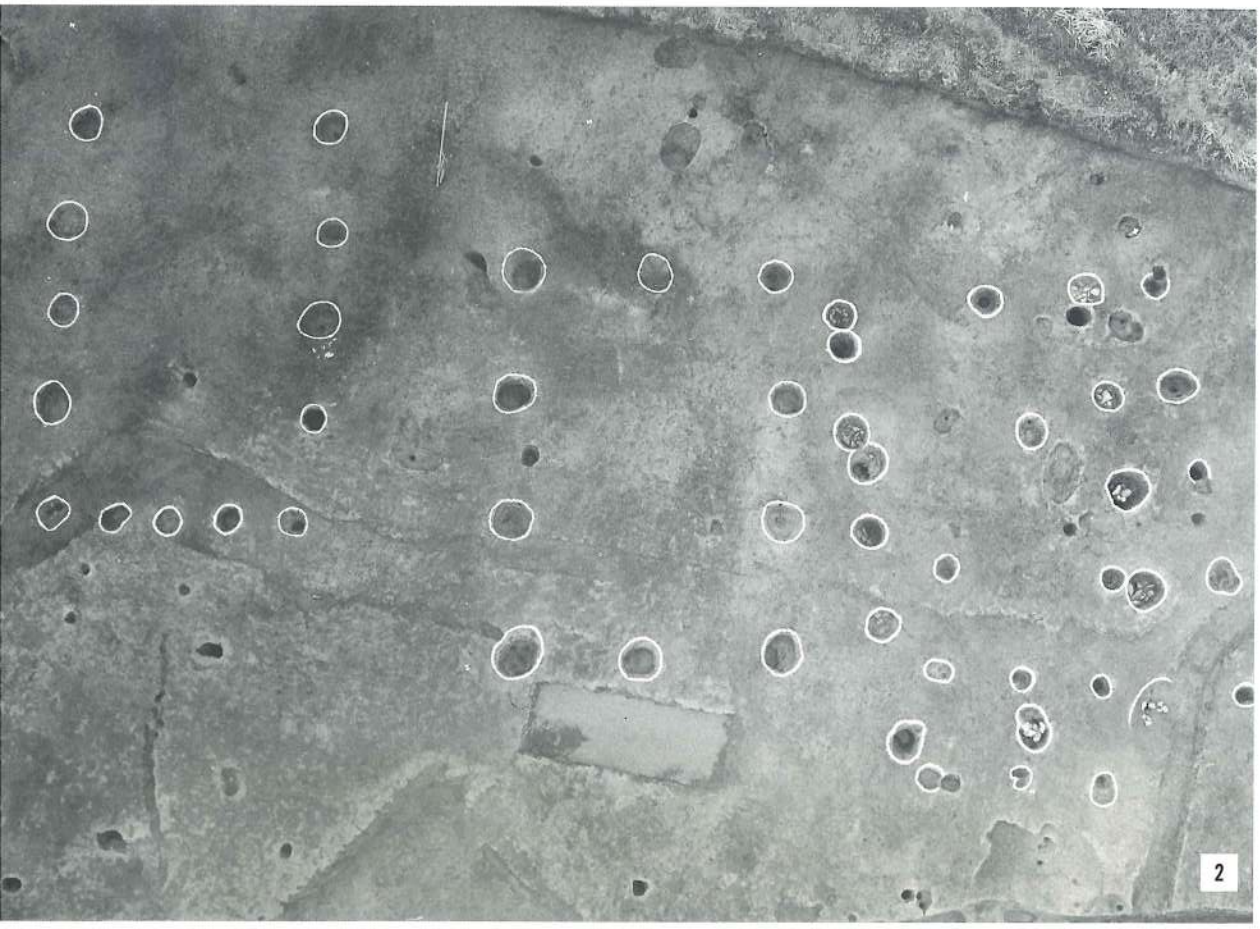
1．道路側溝状遺構と北側掘立柱建物群（写真上方が北）

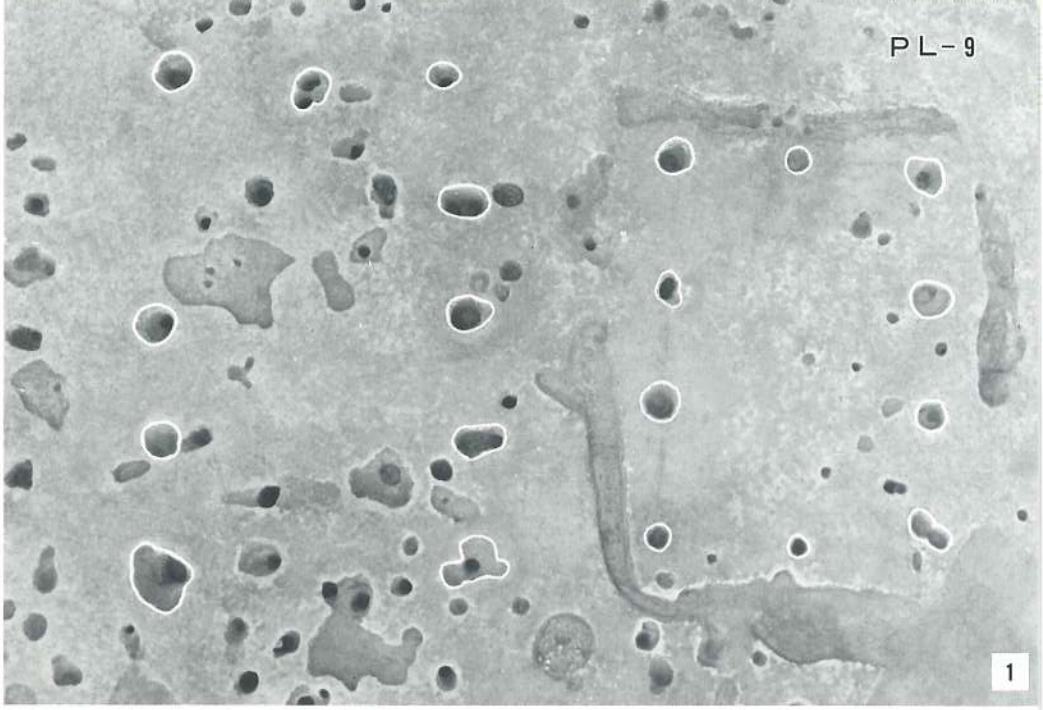
2．道路側溝状遺構と南側掘立柱建物群（写真上方が北）

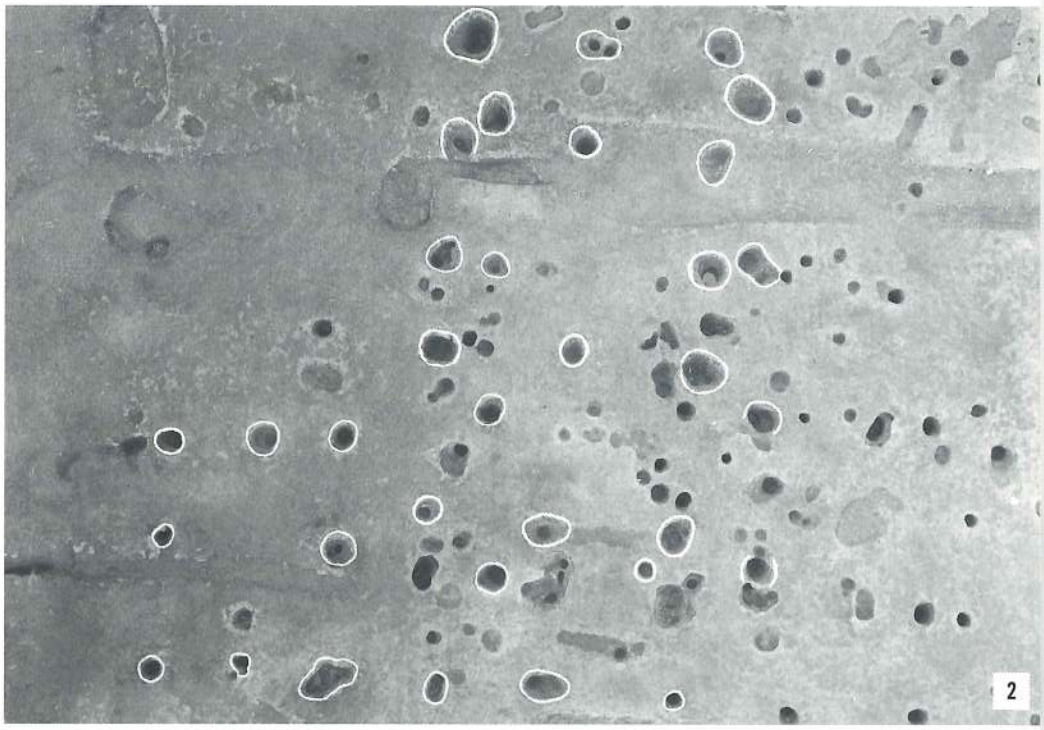


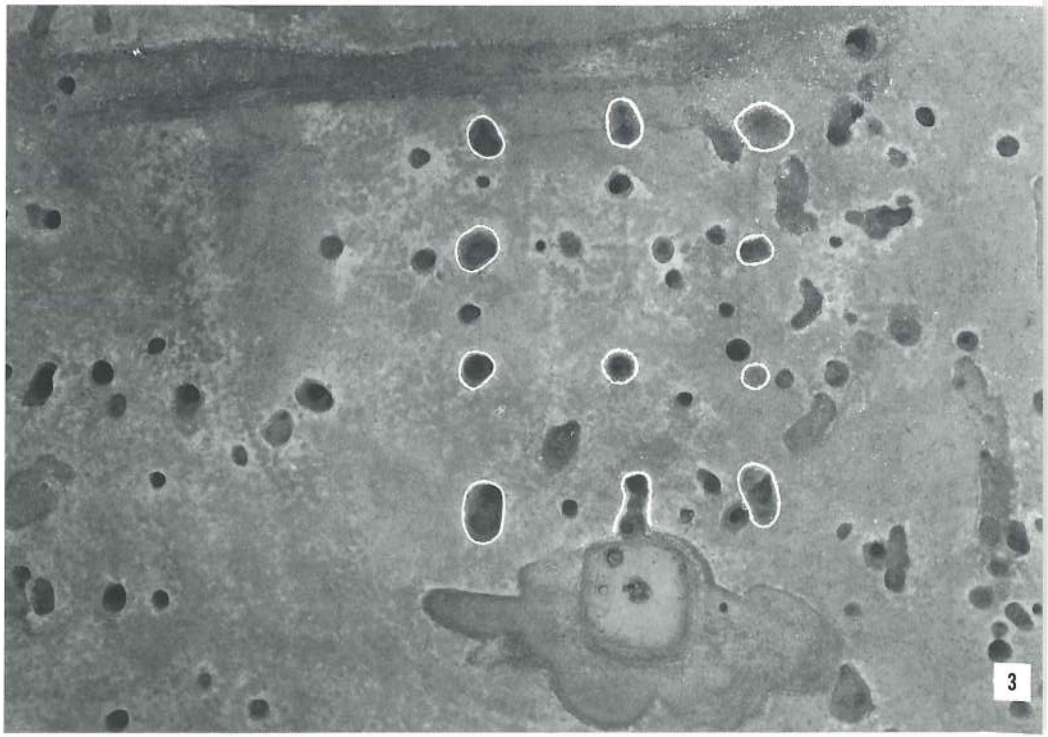

1．北側掘立柱建物群(1)
(写真上方が北)
SB-617
SB-638
SB-649
SB-691

2．北側掘立柱建物群(2)
(写真上方が北)
SB-642
SB-646
SB-647
SB-648
SB-675





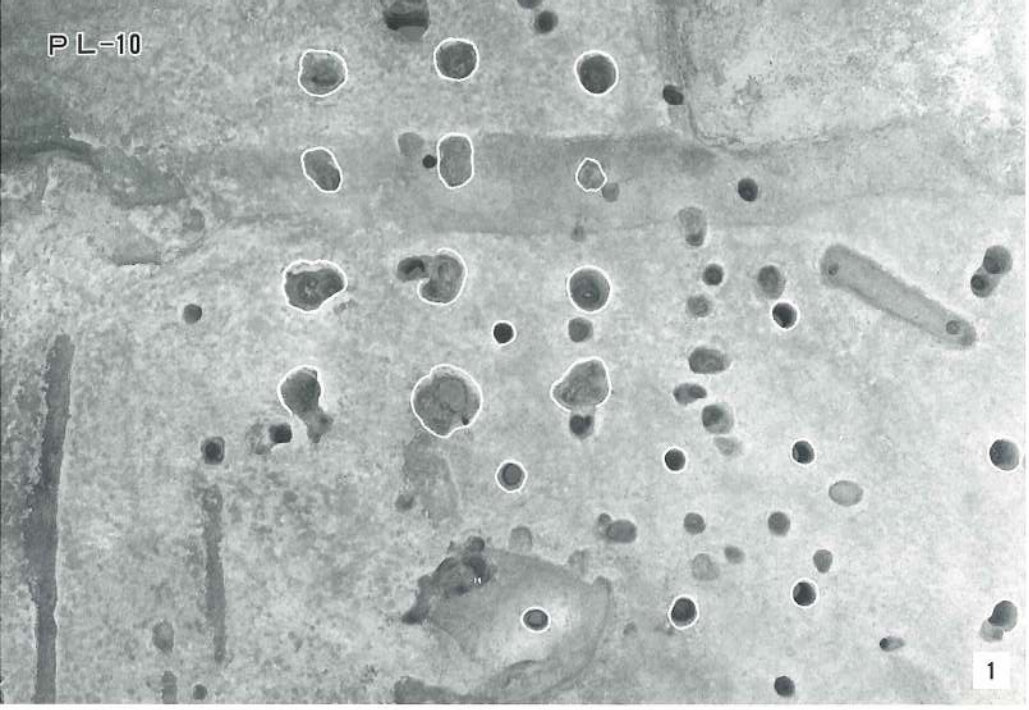



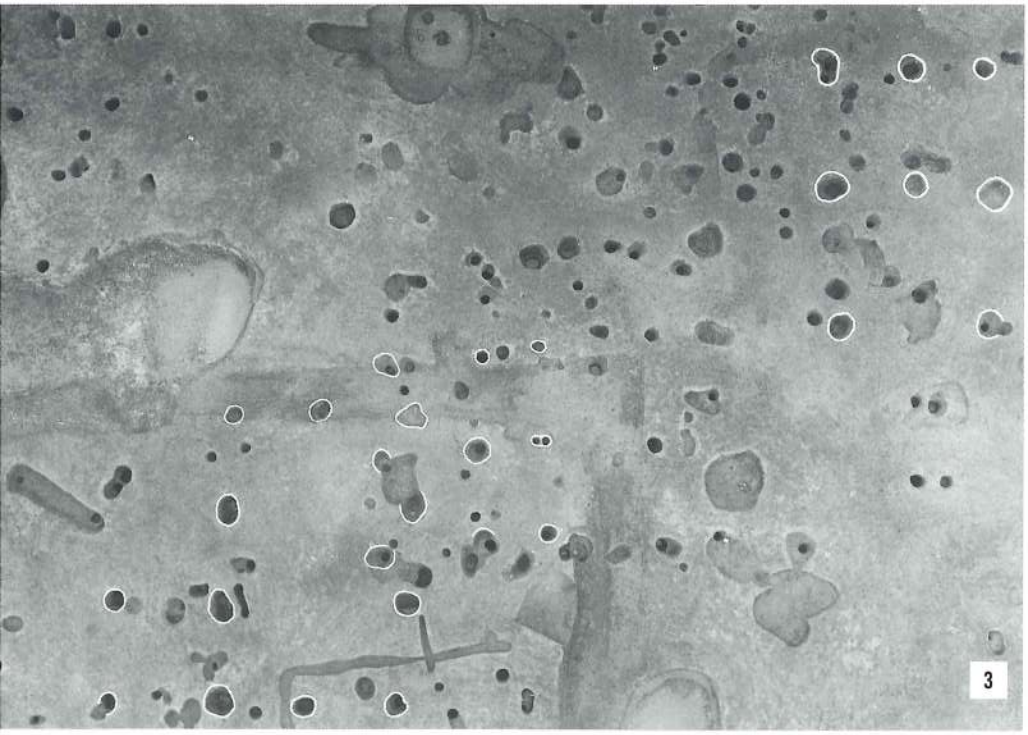




1．南側掘立柱建物群(1)
(写真上方が北)
SB-651
SB-652

2．南側掘立柱建物群(2)
(写真上方が北)
SB-653
SB-654
SB-655
SB-682

3．南側掘立柱建物群(3)
(写真上方が北)
SB-656
SB-657
SB-647

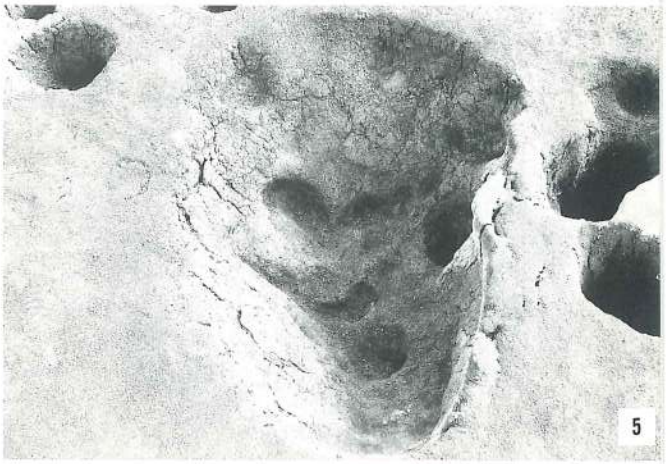


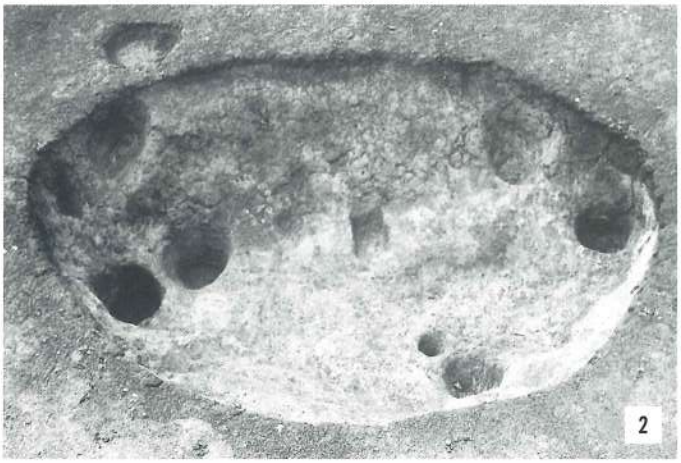


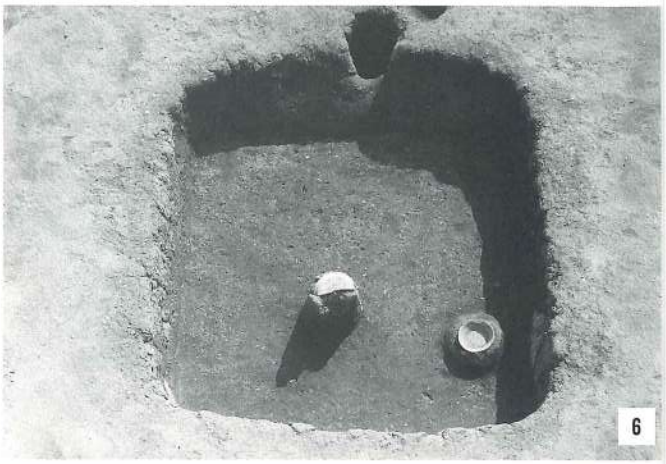

1．南側掘立柱建物群(4)
(写真上方が北)
SB-658
SB-659

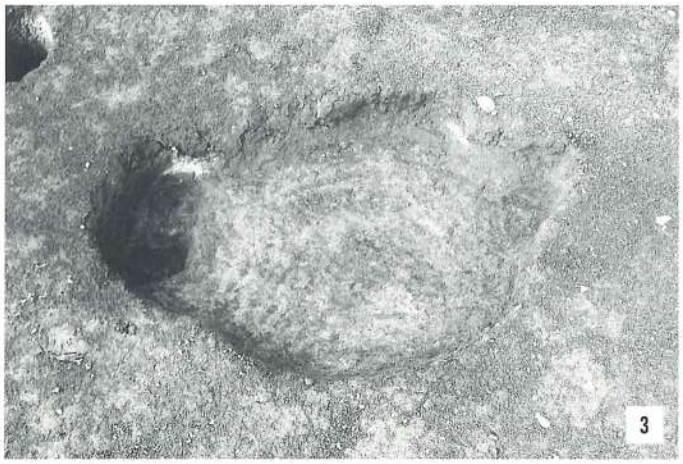
2．南側掘立柱建物群(5)・ピット群
(写真上方が北)
SB-689

3．南側掘立柱建物群(6)
(写真上方が北)
SB-708
SB-717
SB-647

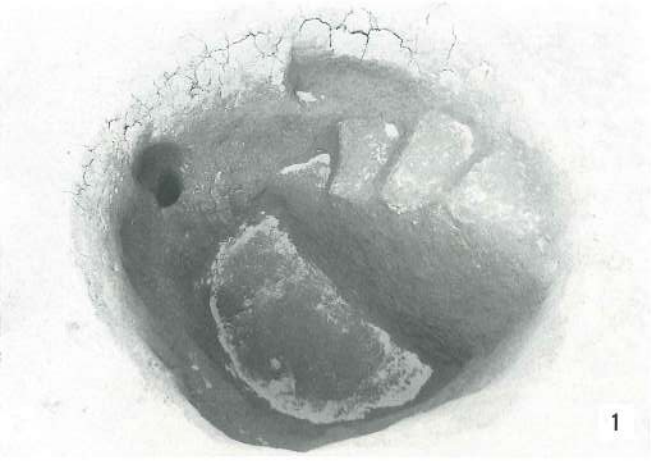


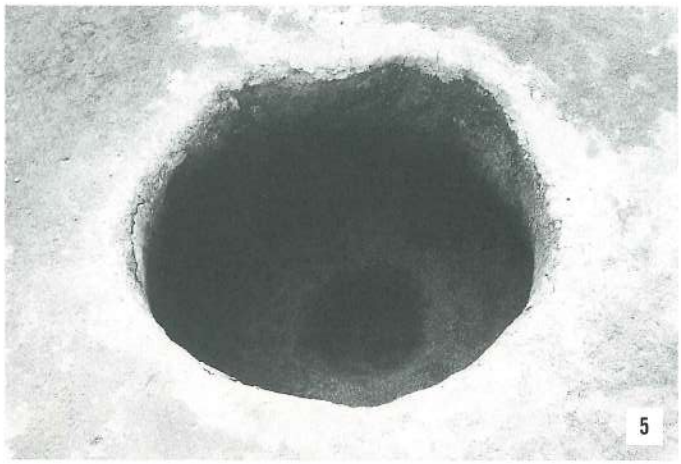



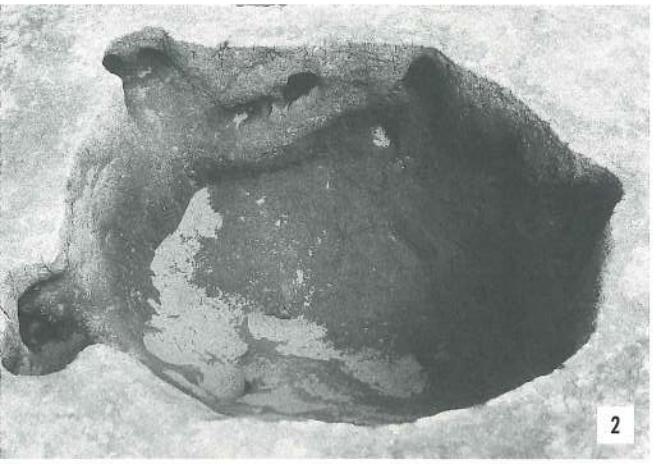



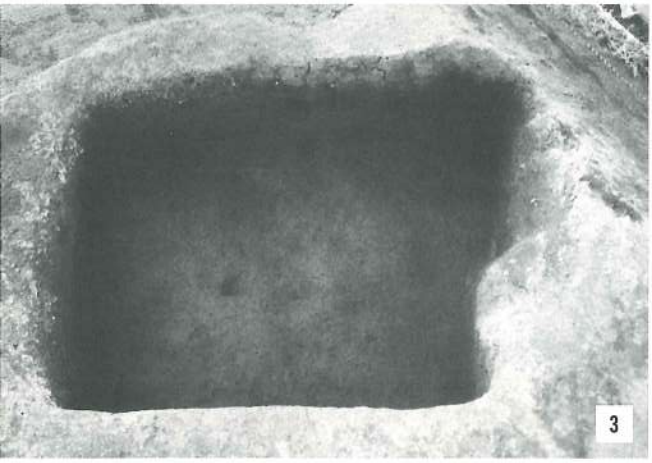



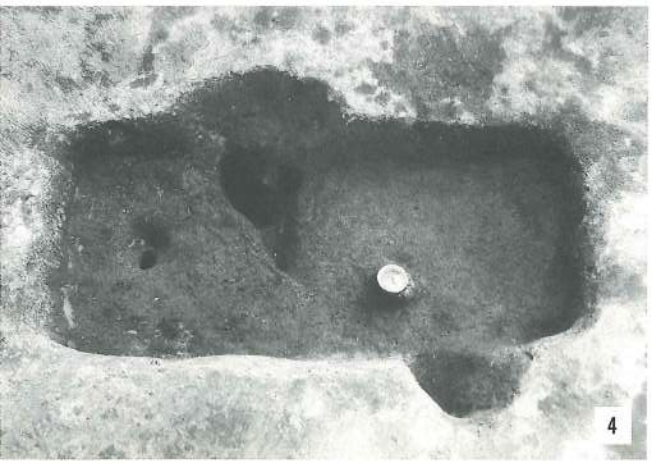
1．SK-601（北から）
2．SK-602（北から）
3．SK-605（東から）
4．SK-614（北から）
5．SK-616（北から）
6．SK-618（北から）
7．SK-624（北東から）
8．SK-626（南西から）

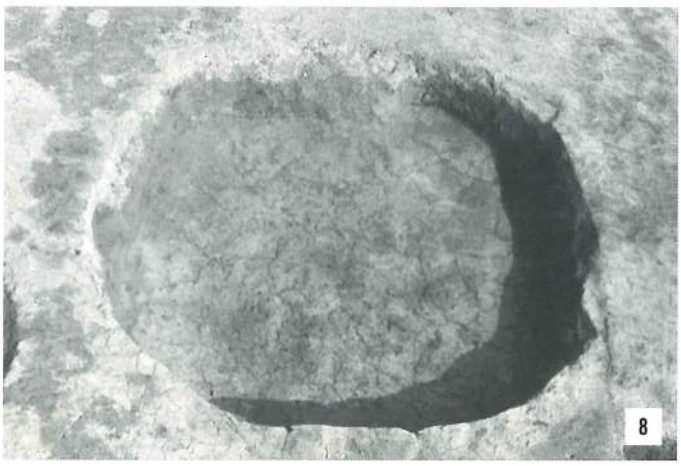


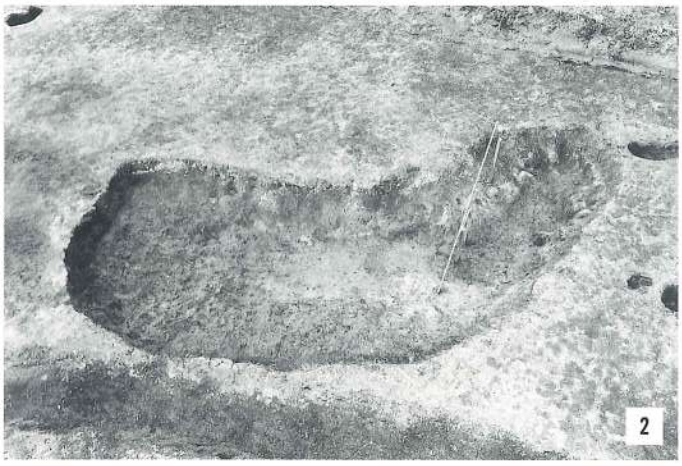



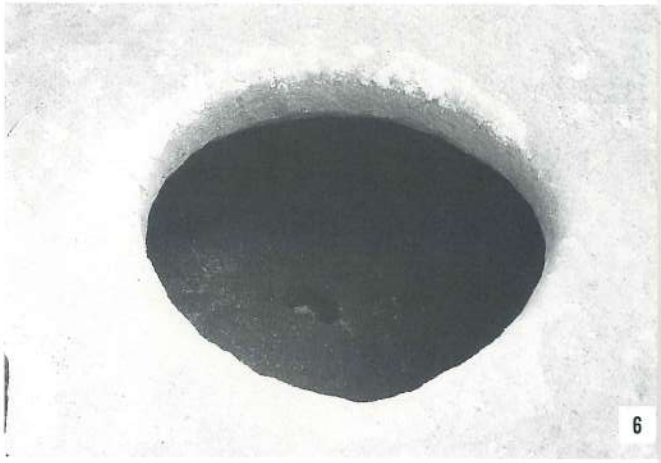


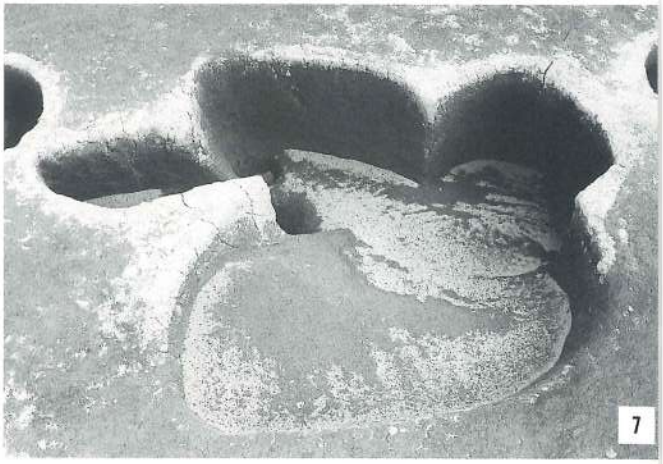


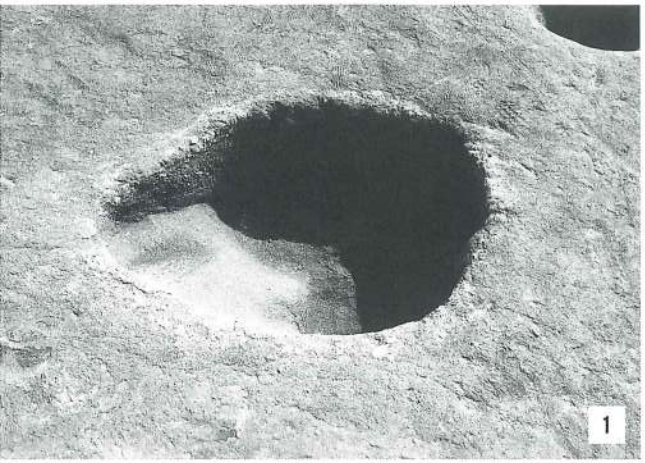

1．SK-627（南西から）
2．SK-628（西から）
3．SK-633（北東から）
4．SK-634（北西から）
5．SK-635（北から）
6．SK-636（北から）
7．SK-637（北から）
8．SK-639（西から）

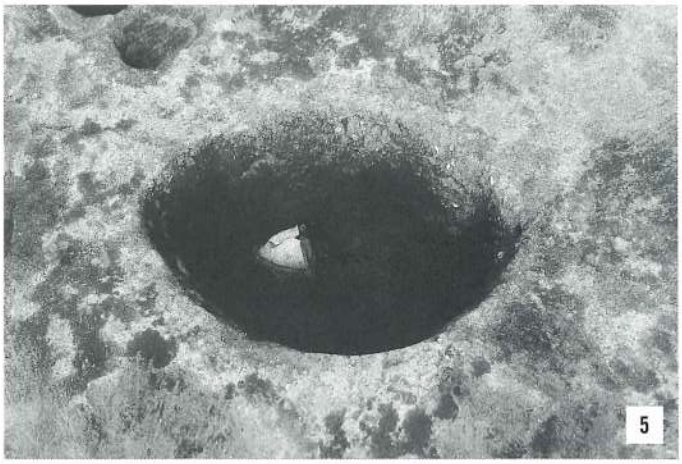


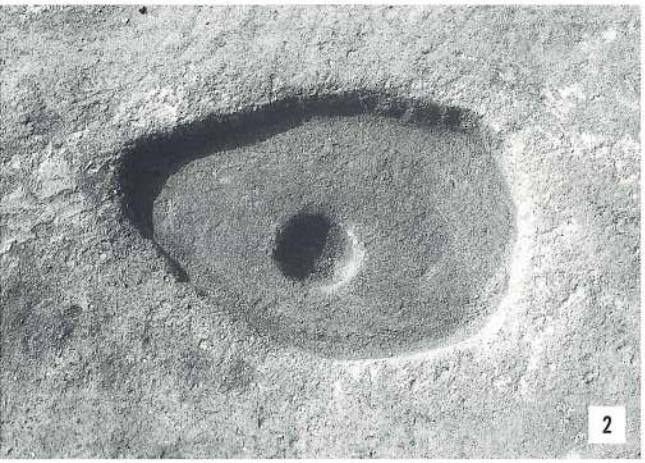


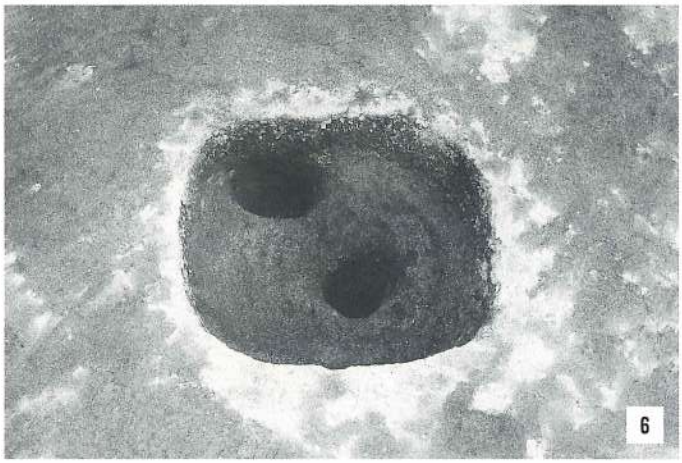



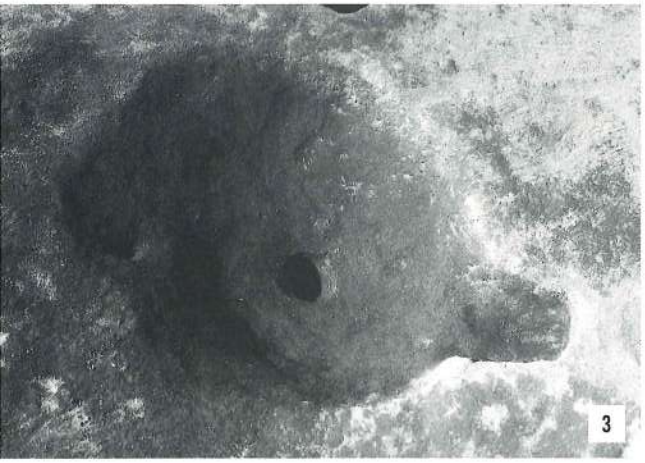
1．SK-640（北東から）
2．SK-645（南東から）
3．SK-657（北から）
4．SK-660（西から）
5．SK-661（西から）
6．SK-662（西から）
7．SK-663（北西から）
8．SK-667（北から）

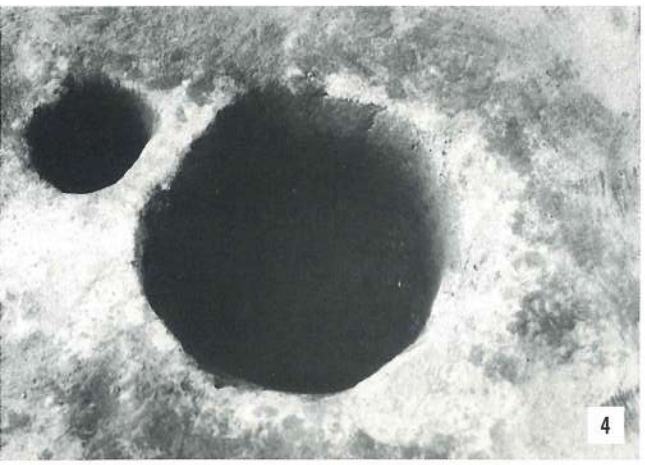


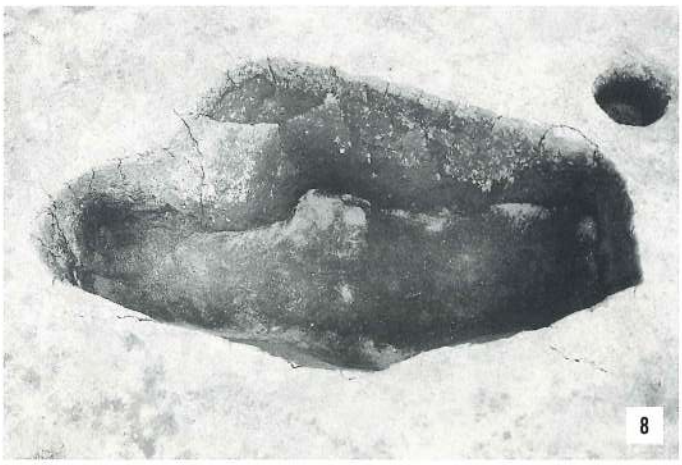



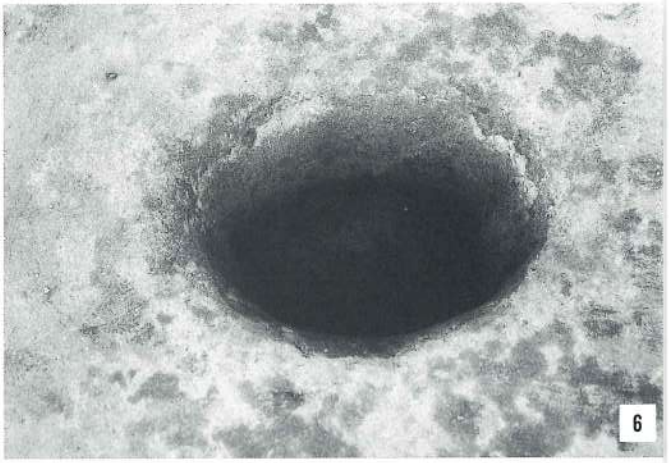



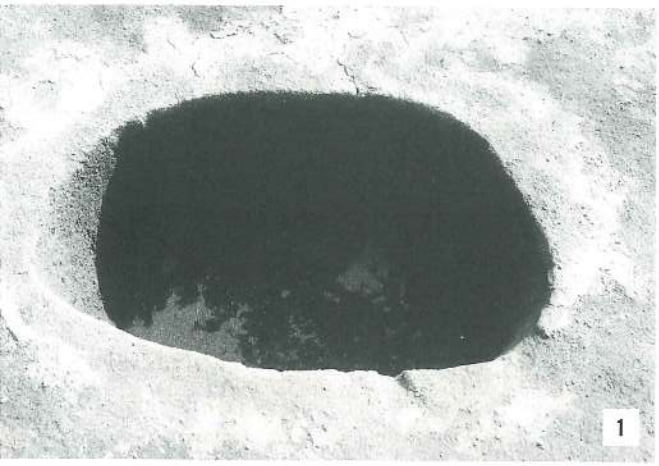


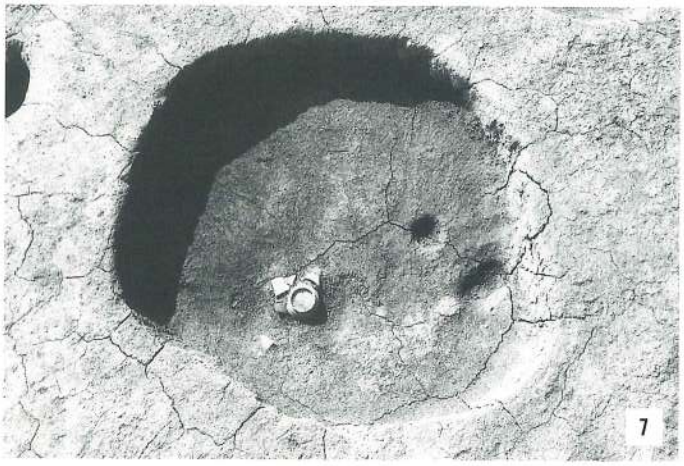



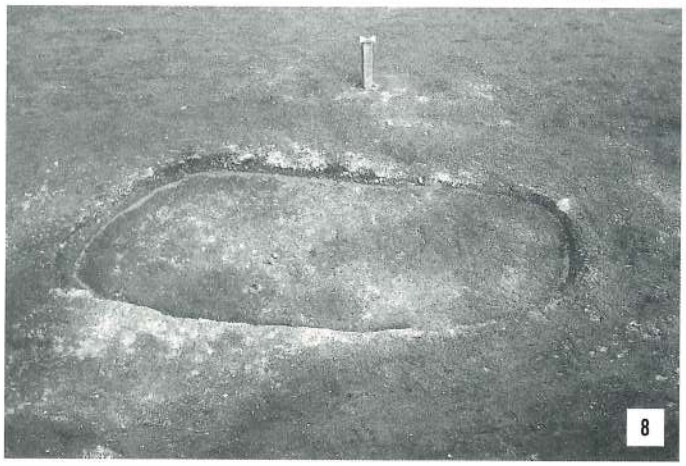

1．SK-668（北から）
2．SK-669（南東から）
3．SK-670（東から）
4．SK-671（東から）
5．SK-672（南から）
6．SK-673（西から）
7．SK-674（北から）
8．SK-676（西から）



1．SK-677（南から）
2．SK-678（東から）
3．SK-679（北から）
4．SK-680（南から）
5．SK-681（南東から）
6．SK-683（南から）
7．SK-684（西から）
8．SK-685（南西から）

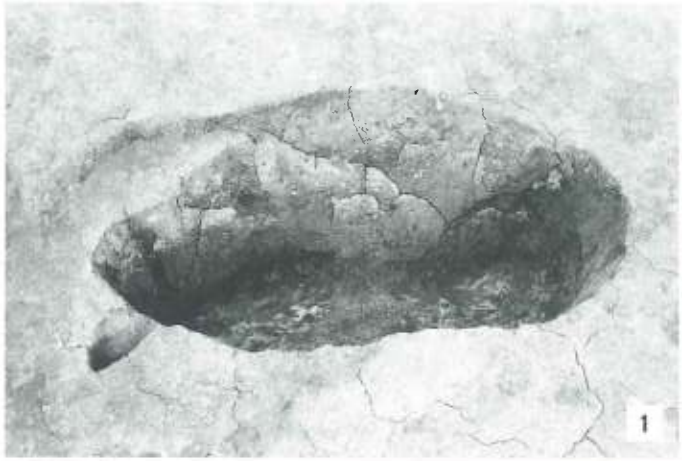


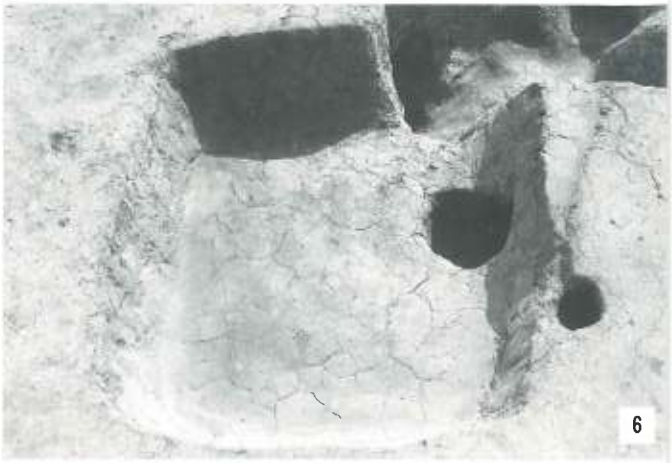


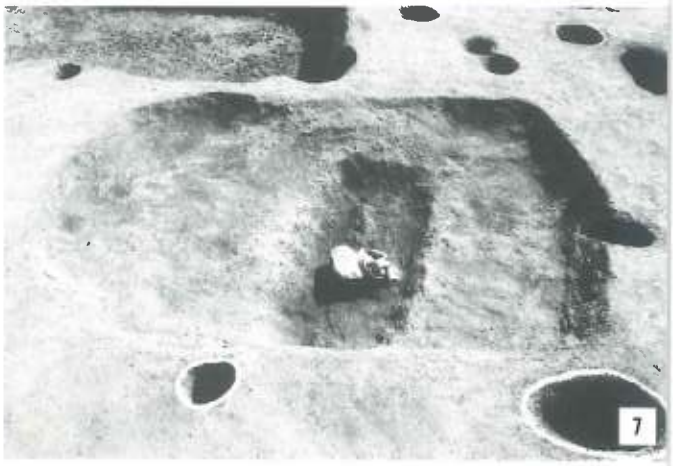



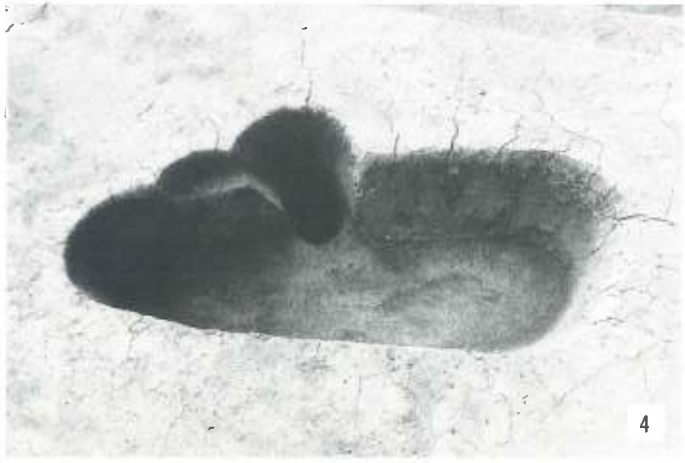

1．SK-686（北西から）
2．SK-687（北から）
3．SK-688（北東から）
4．SX-696（北東から）

5．SK-701（東から）
6．SK-702（北東から）
7．SK-706（東から）
8．SK-707（北西から）

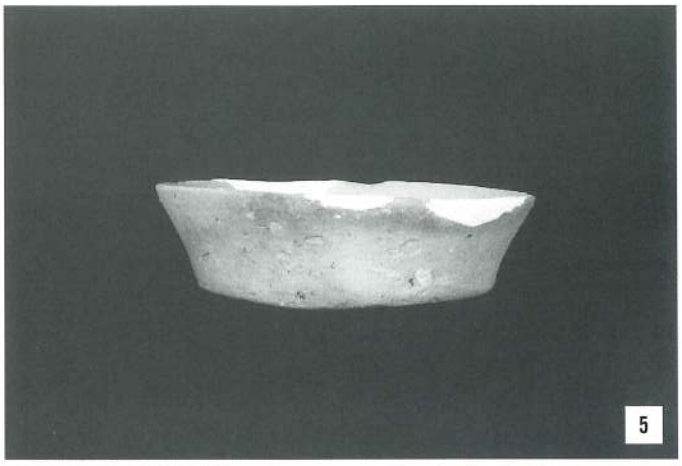


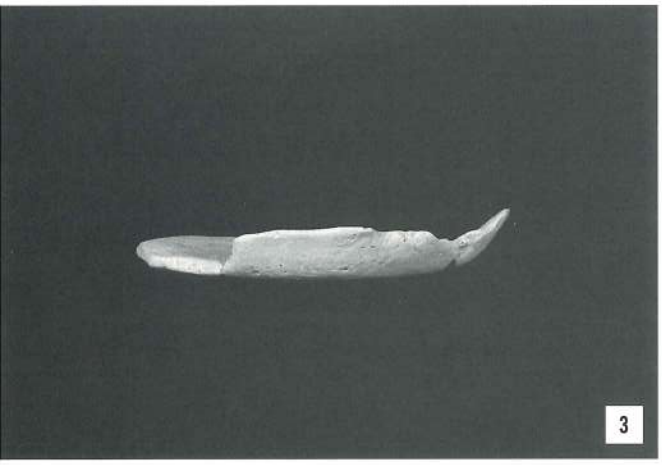


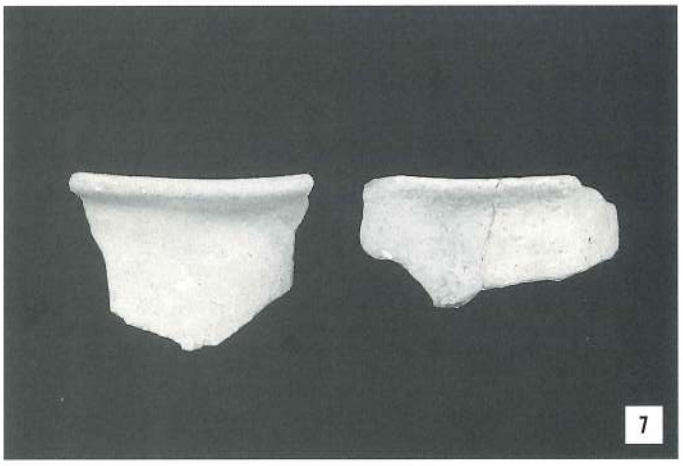


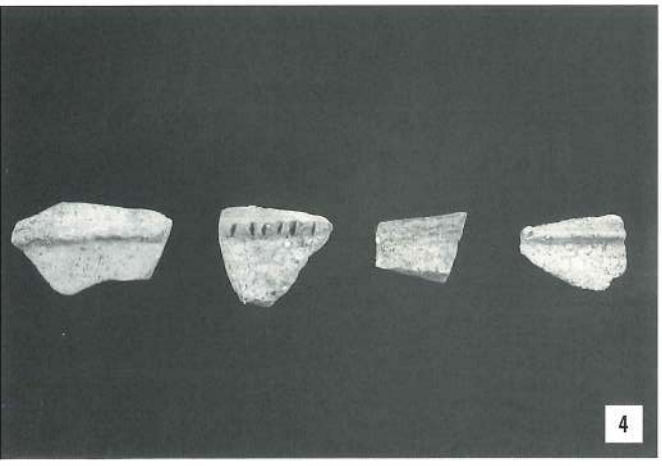



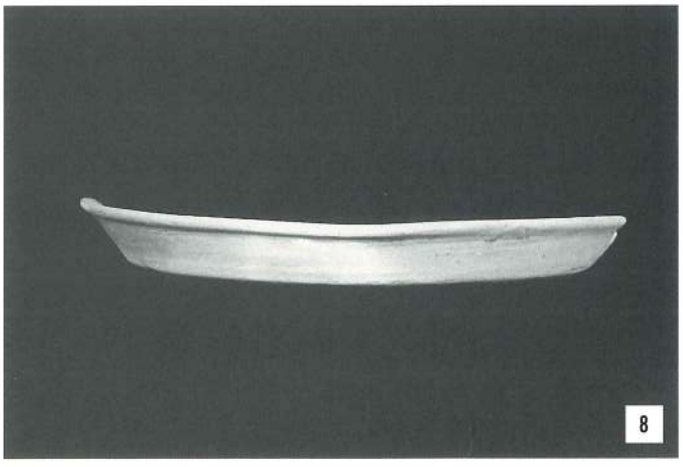
1．SK-709（西から）
2．SK-710（東から）
3．SK-712（東から）
4．SK-714（東から）
5．SK-715（北から）
6．SK-716（北から）
7．SX-644（北から）
8．SX-644主体部（北から）



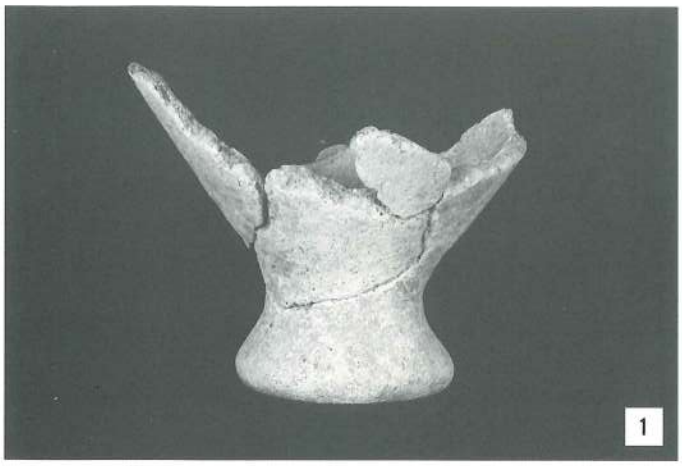


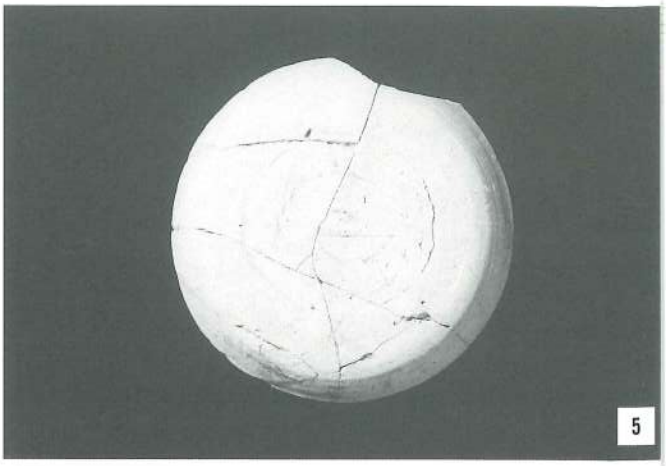



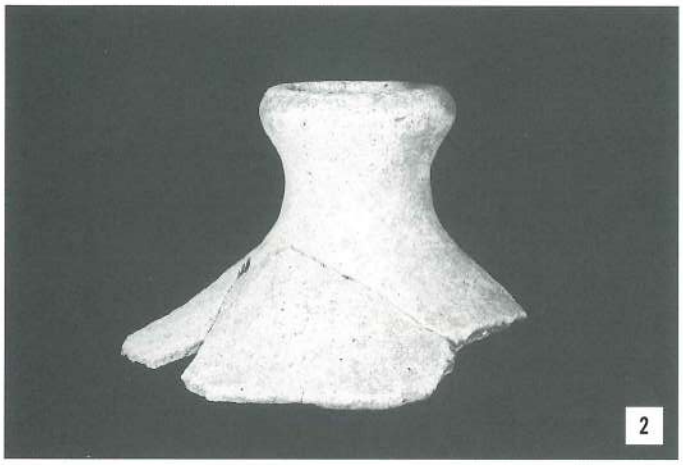



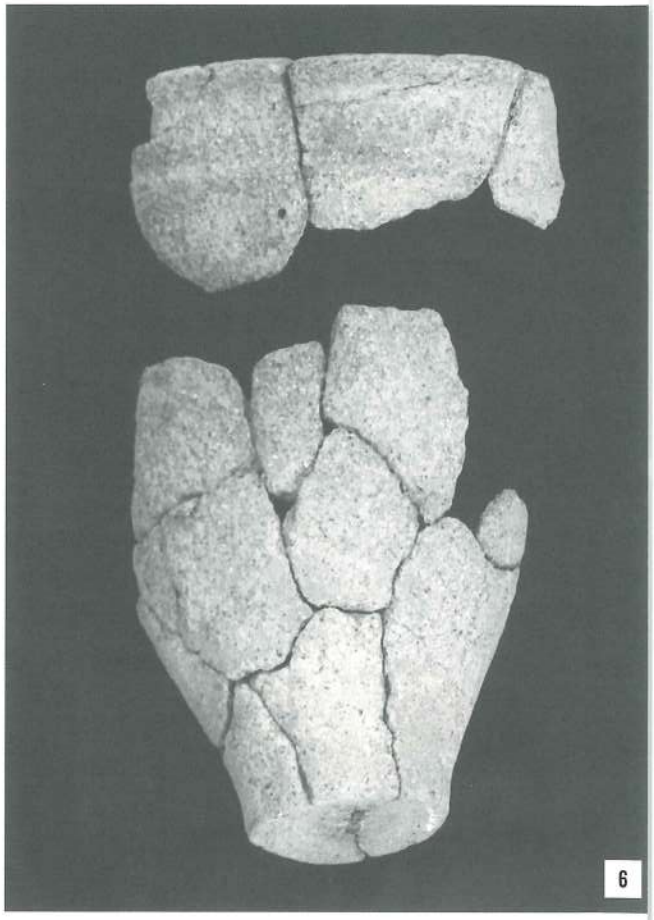



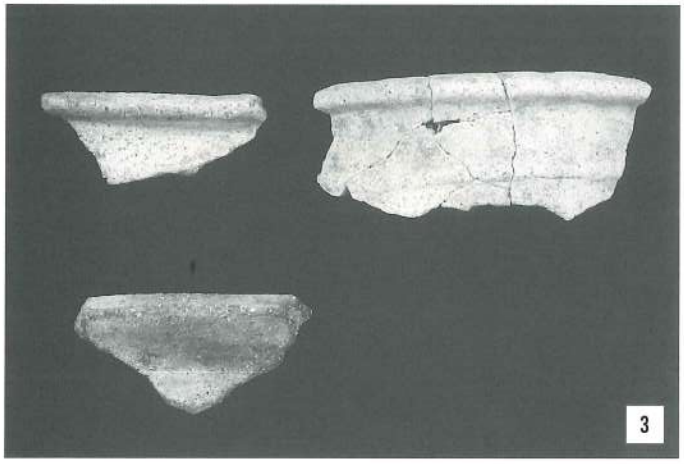

1．SD-643（南から）
2．SD-643遺物出土状況（北東から）
3．3　SD-609
4．5・17～19　SK-614
5．6　SK-618
6．6　SK-618
7．7・8　SK-618
8．10　SK-618

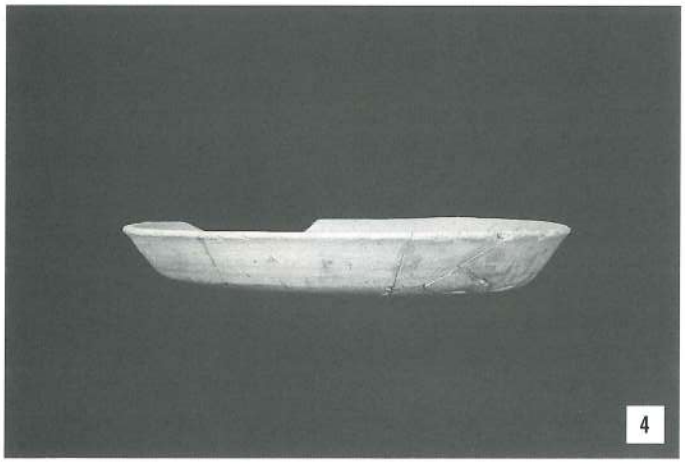


1．12　SH-625

2．13　SH-625

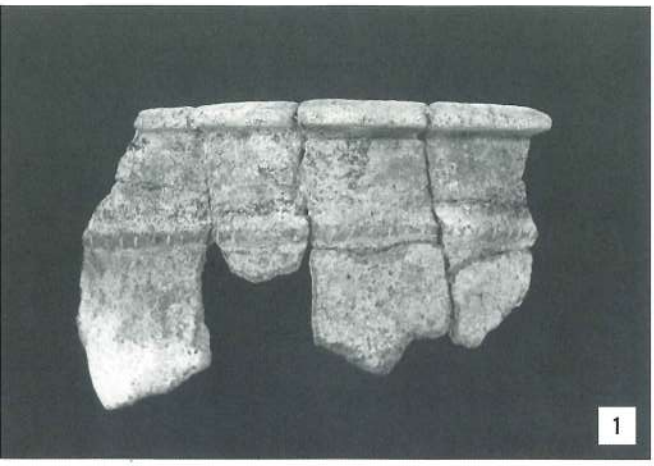
3．上)14・15　下)16　SH-625

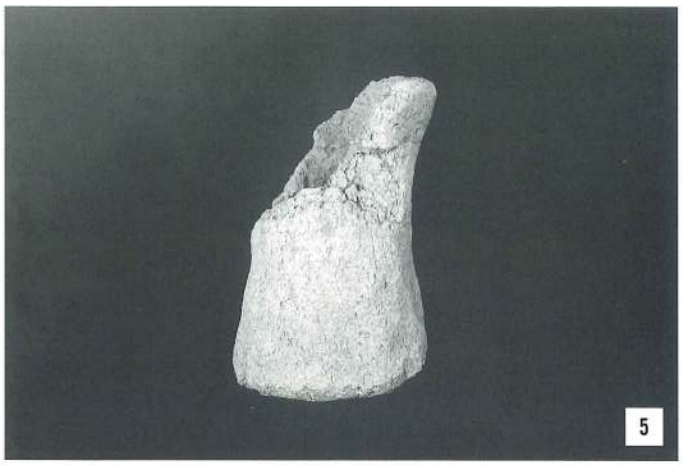
4．20　SK-634

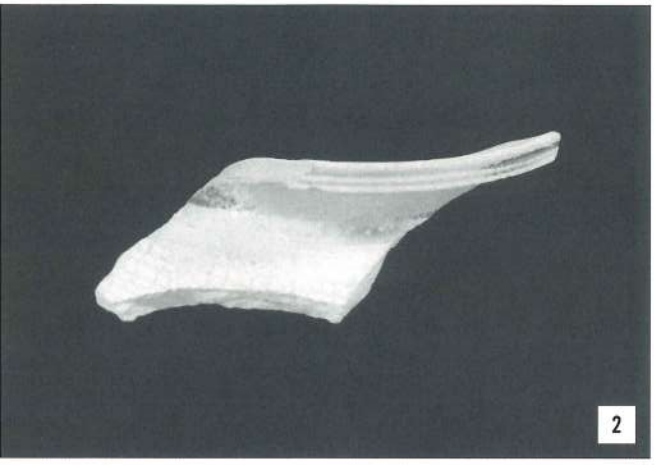
5．20　SK-634

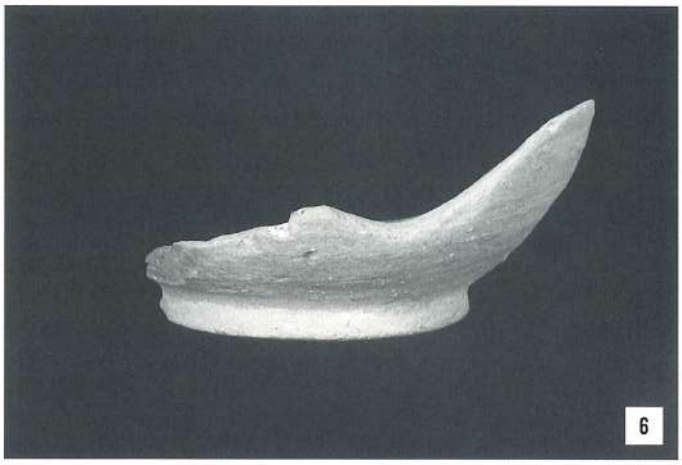
6．21　SK-637

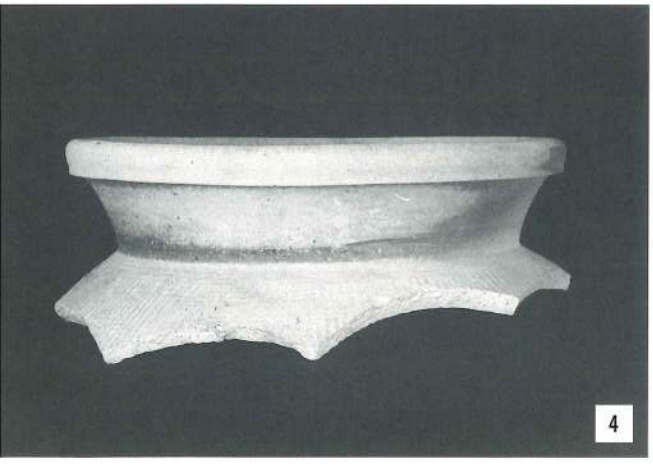
7．22　SK-637



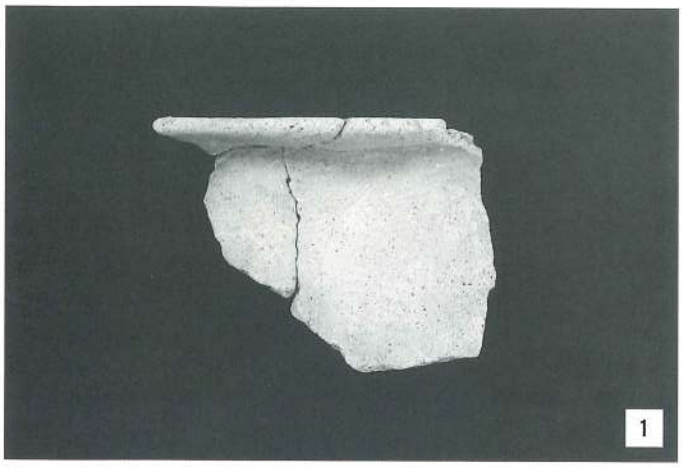



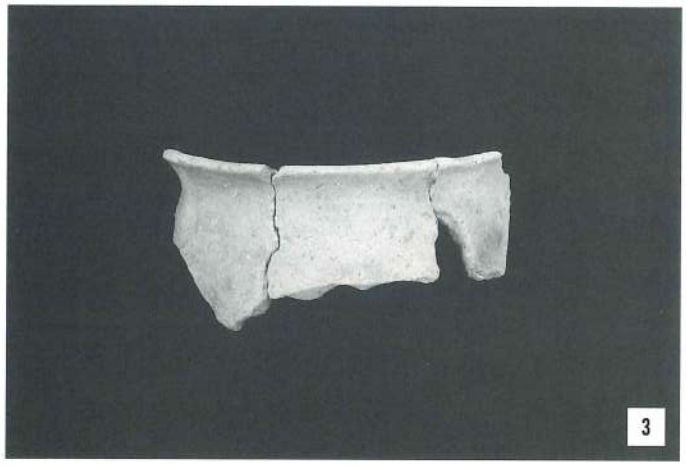



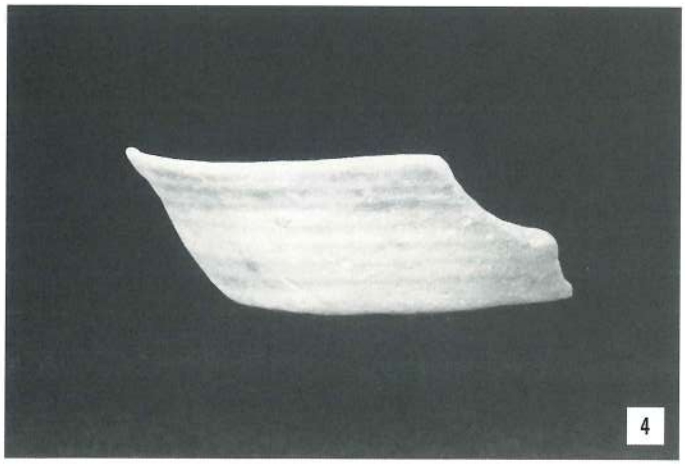


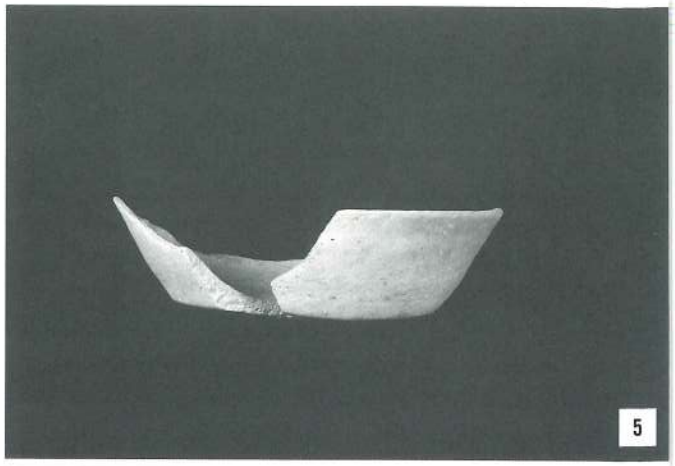
1．23　SK-637
2．28　SX-641
3．29　SK-640
4．30　SD-643

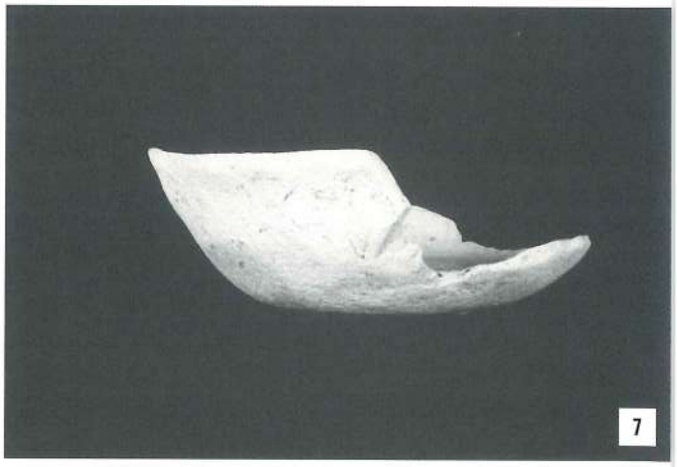
5．32　SD-643
6．33　SX-644
7．34　SX-644
8．35・36　SX-644

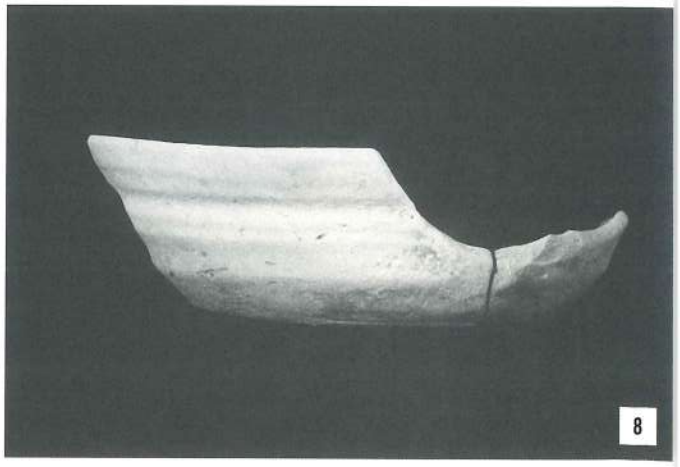




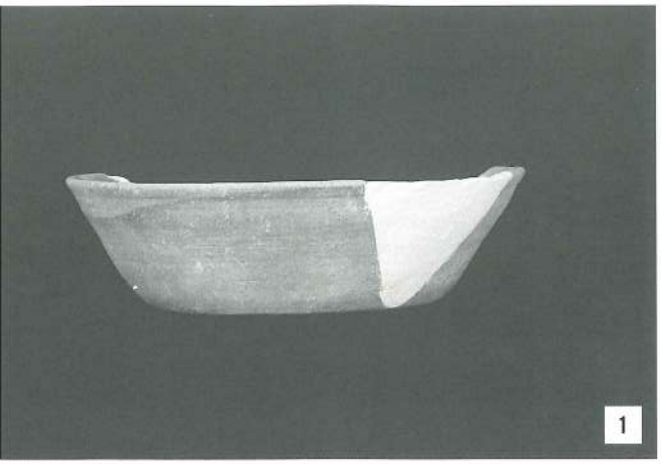



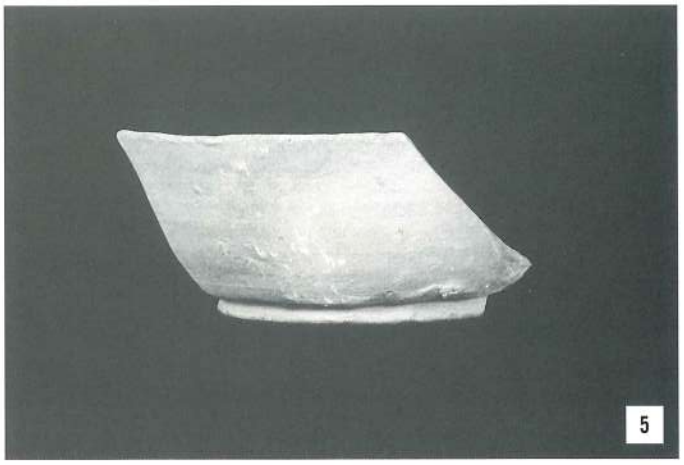



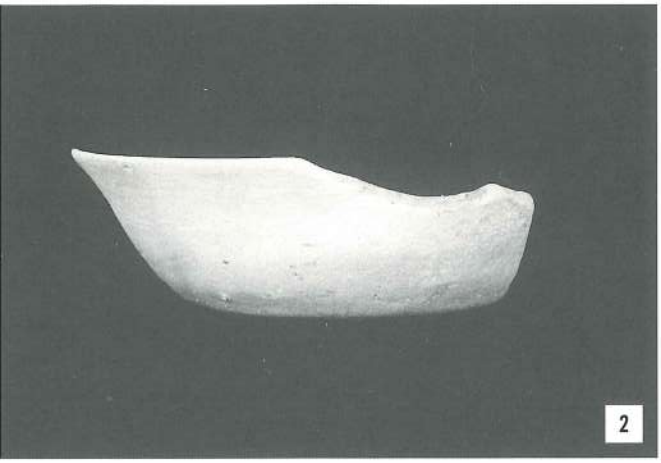


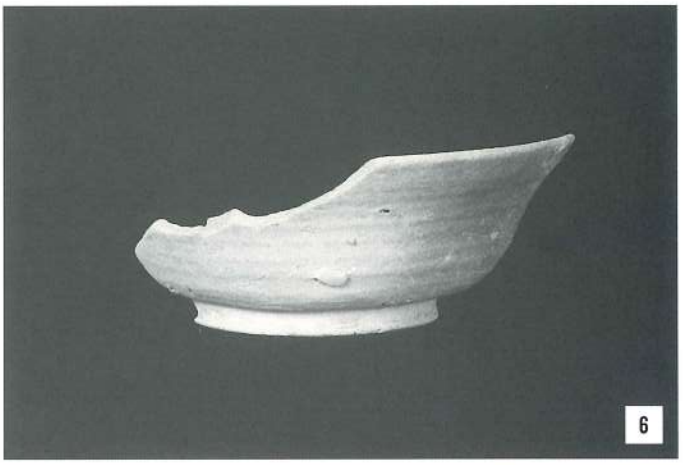



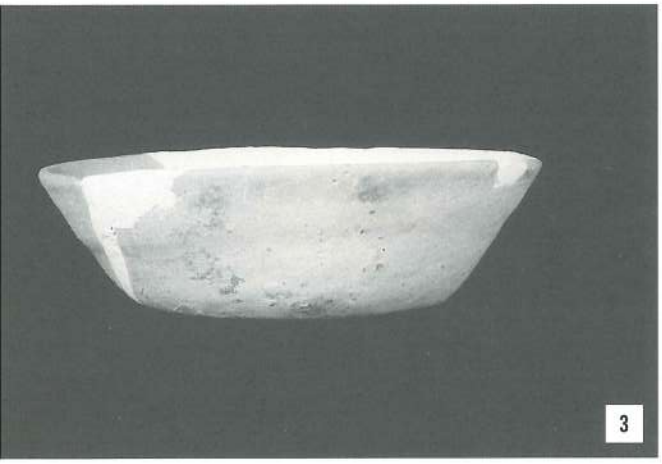

1. 39 SK-645
2. 40 SK-657
3. 41 SB-648
4. 42 SK-650
5. 43 SK-650
6. 44 SK-650
7. 45 SK-650
8. 46 SK-650

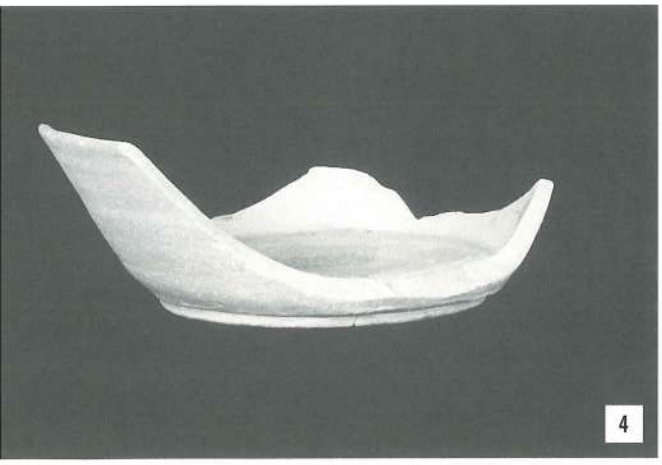


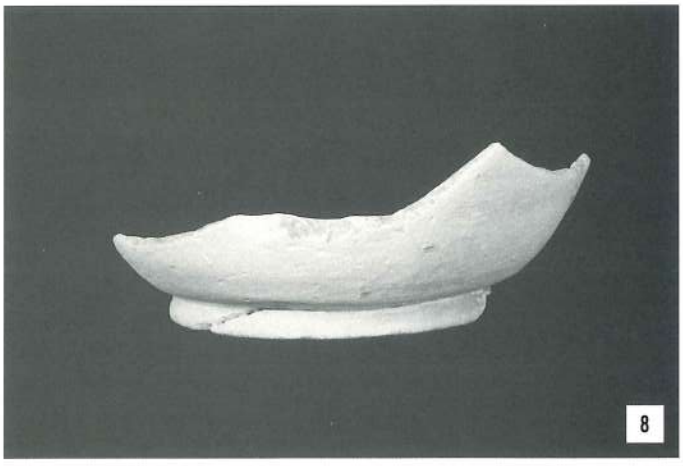



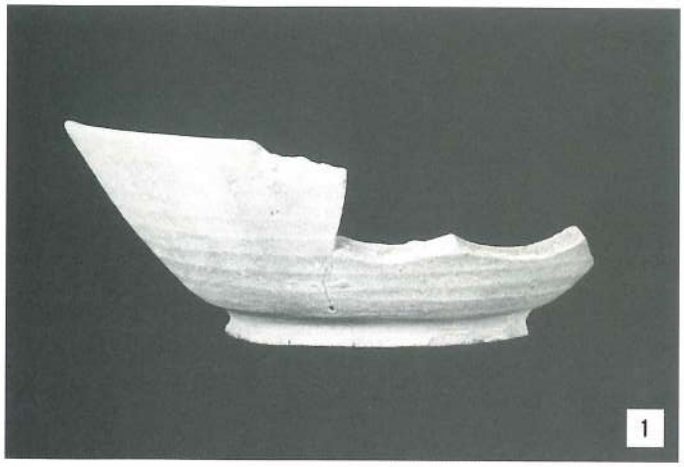



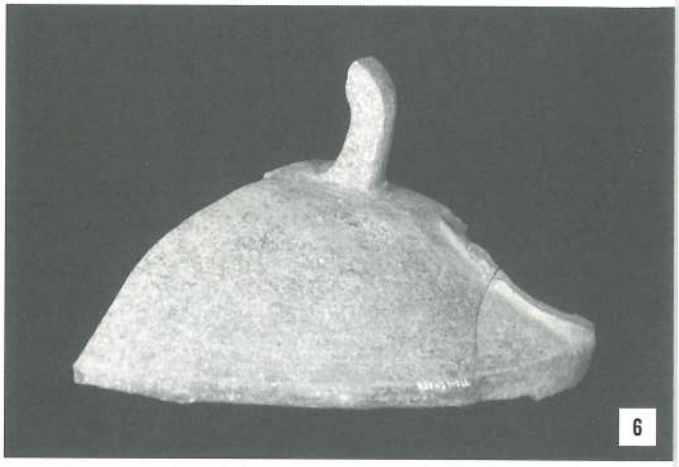


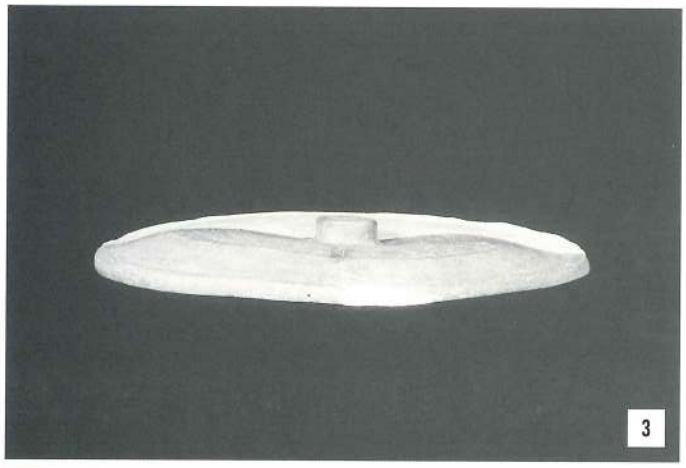



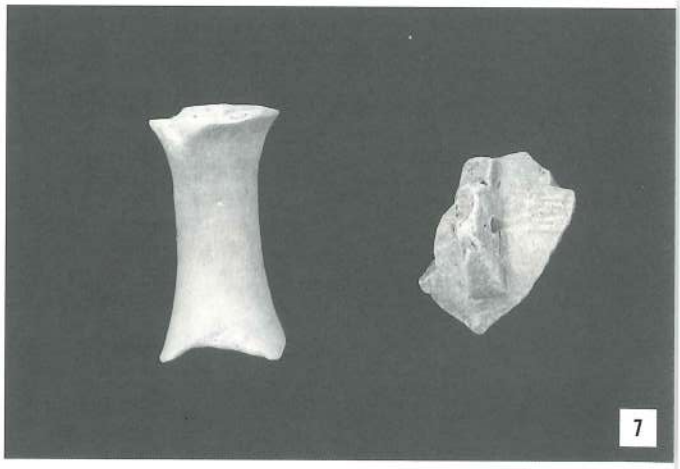

1．47　SK-650
2．48　SK-650
3．49　SK-650
4．50　SK-650

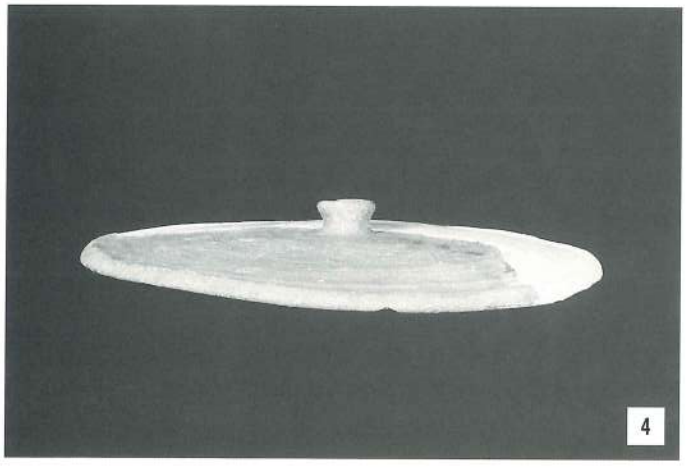
5．51　SK-650
6．52　SK-650
7．53　SK-650
8．54　SK-650





1．56　SK-650

2．66　SK-650

3．69　SK-650

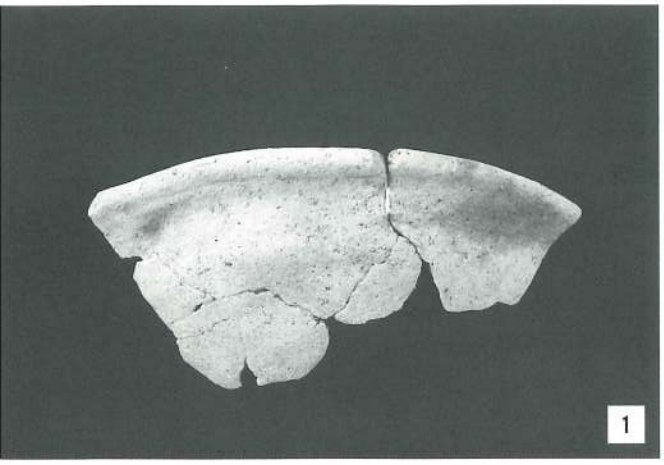
4．70　SK-650

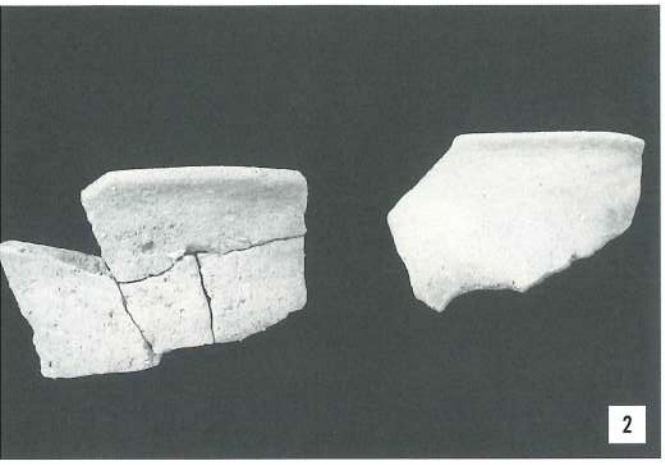
5．上）71・72　下）73・74　SK-650

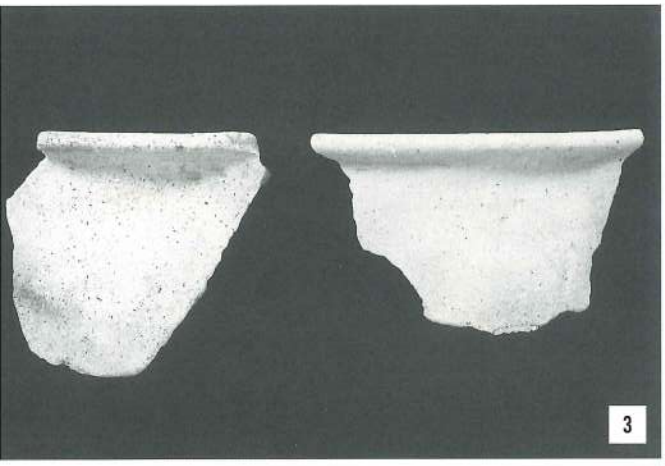
6．75　SK-650

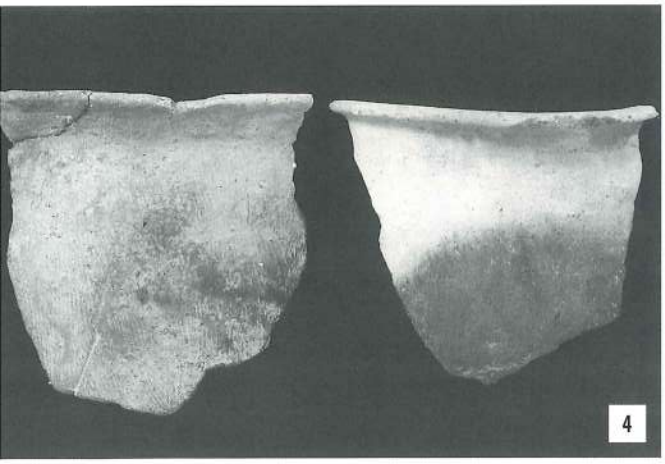
7．76・78　SK-650

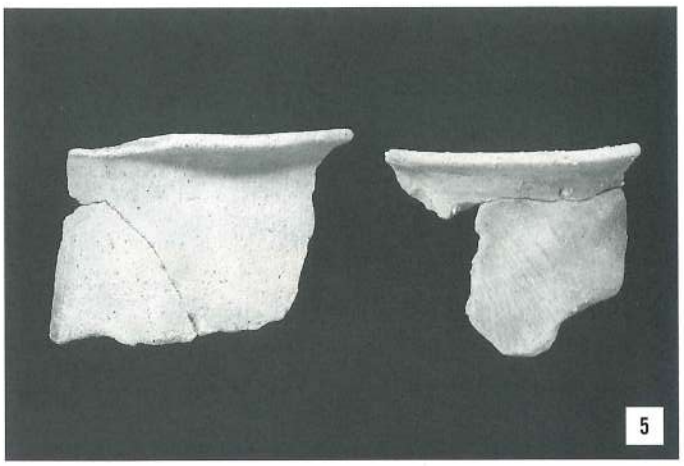
8．77　SK-650

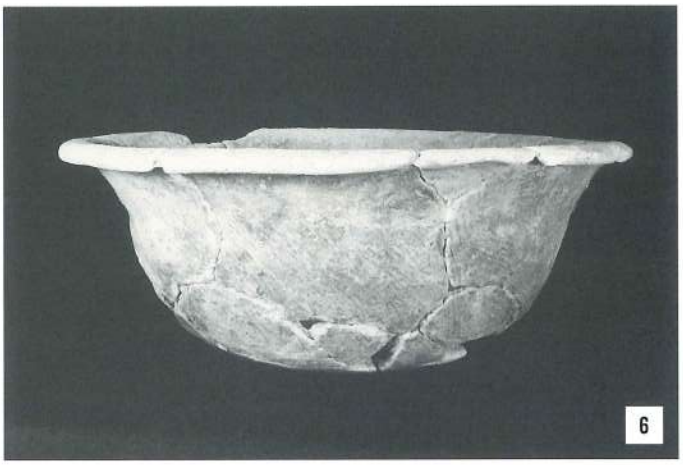


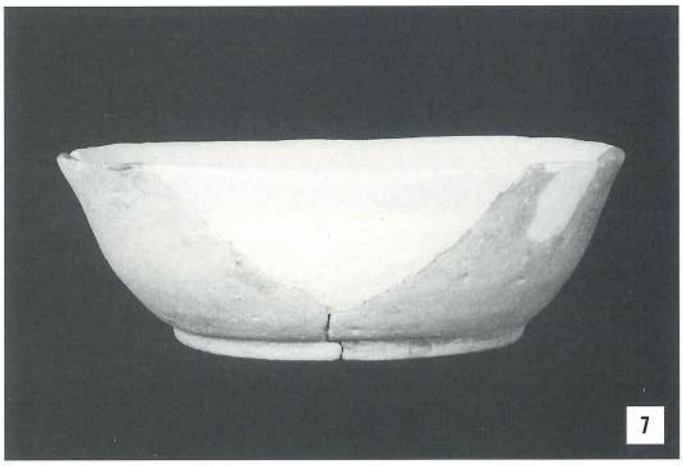



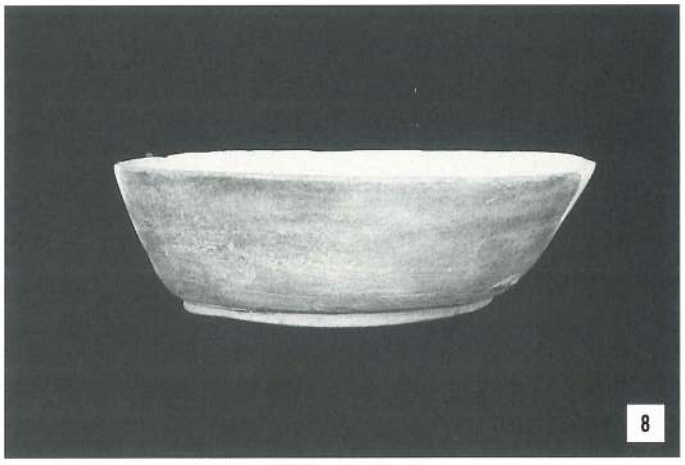



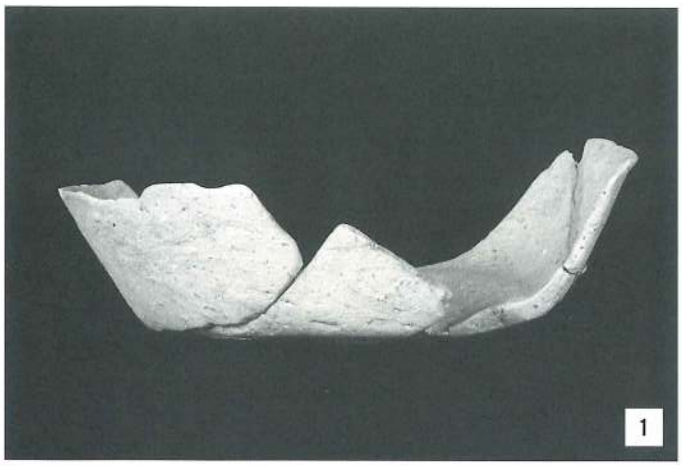



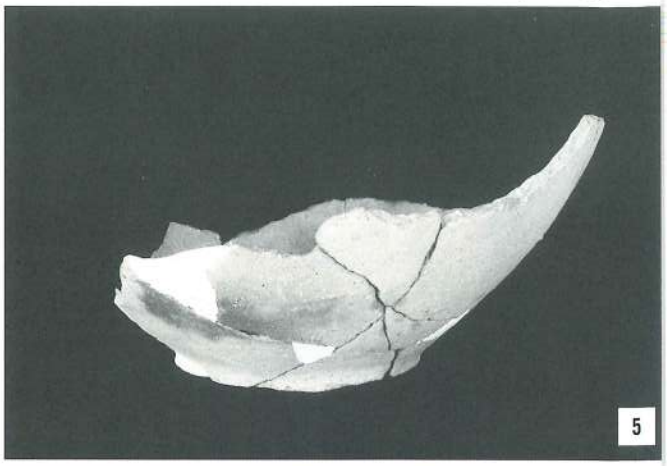



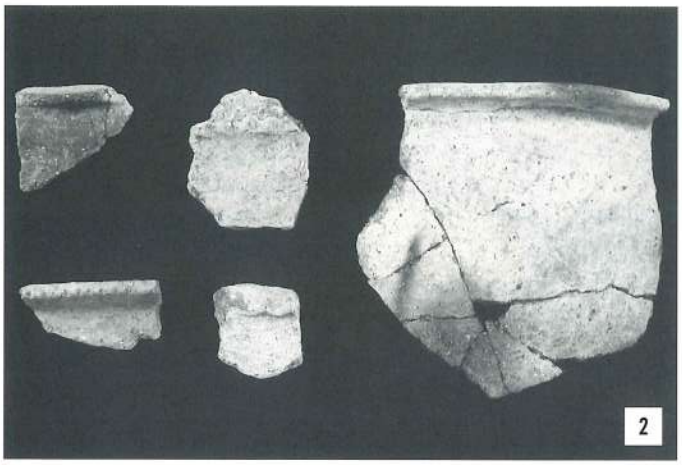



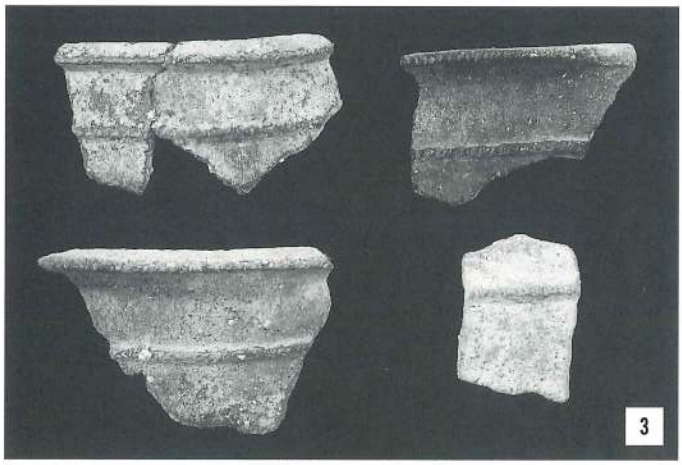



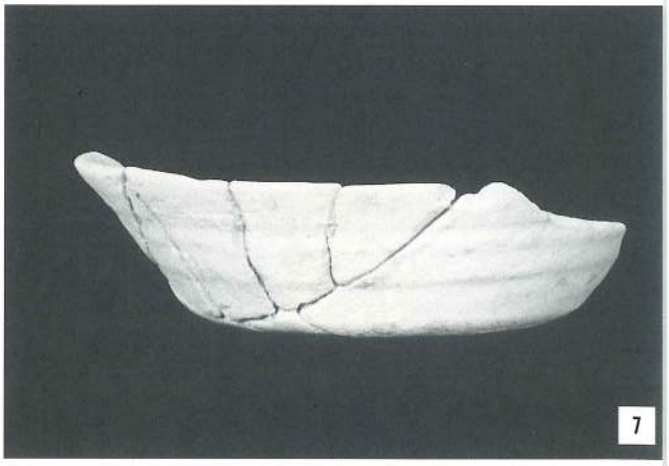

1．79　SK-650
2．80・81　SK-650
3．82・83　SK-650
4．84・85　SK-650
5．86・87　SK-650
6．88　SK-657
7．89　SK-657
8．90　SK-657

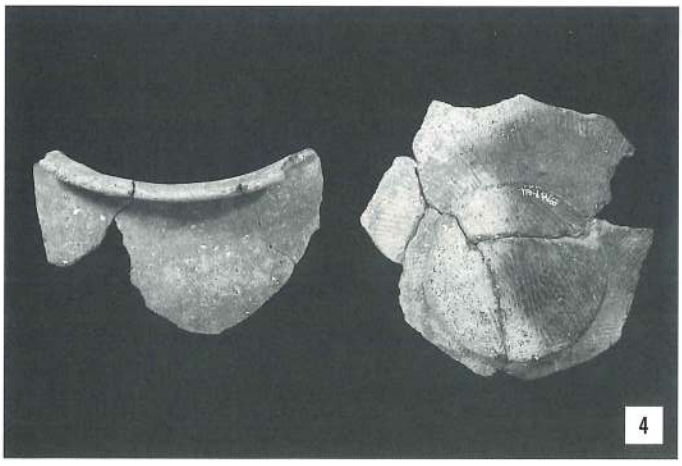


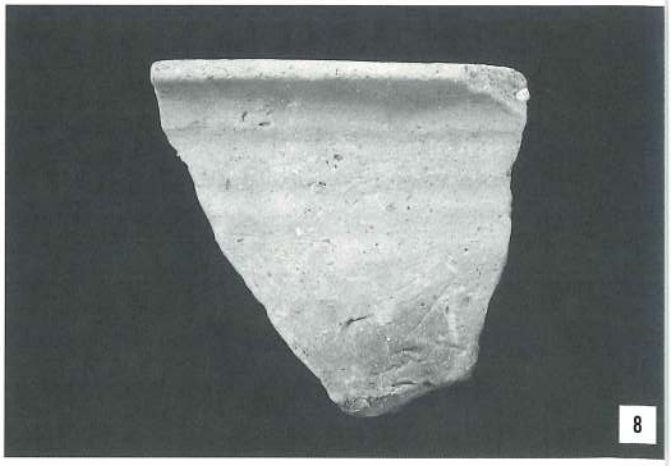






1．91　SK-657

2．上）94・95・99　下）96・97　SK-660

3．上）100・101　　下）102・103　SK-662

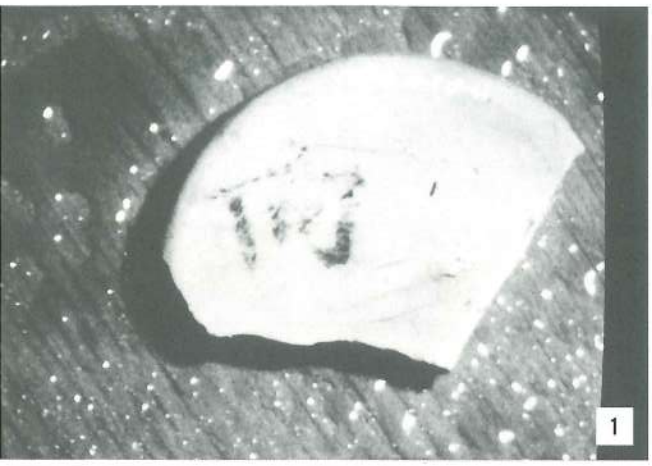
4．104　SK-663

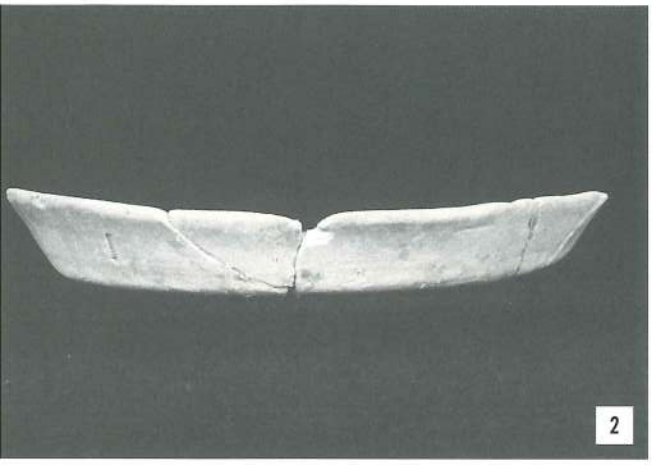
5．106　SK-663

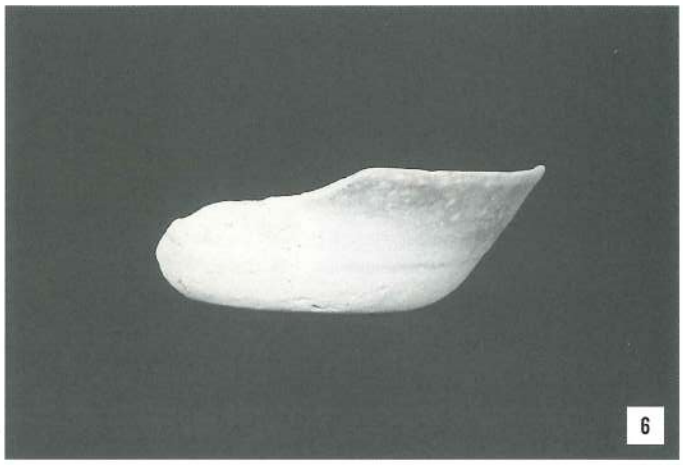
6．109　SK-670

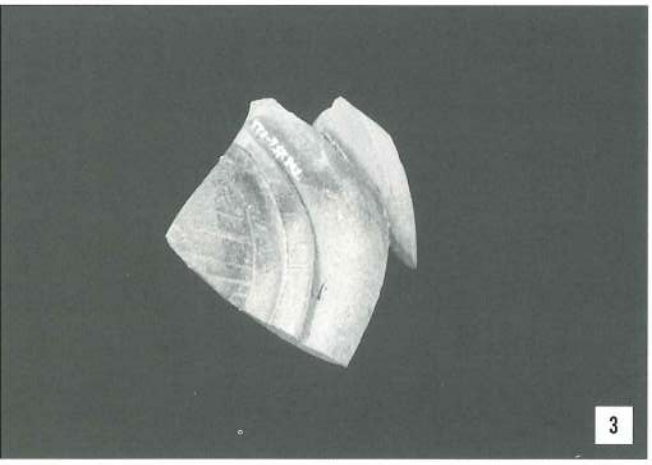
7．110　SB-652

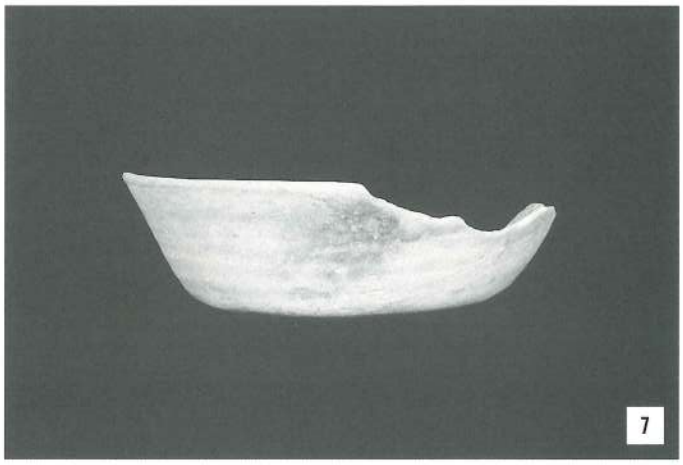
8．112　SB-652

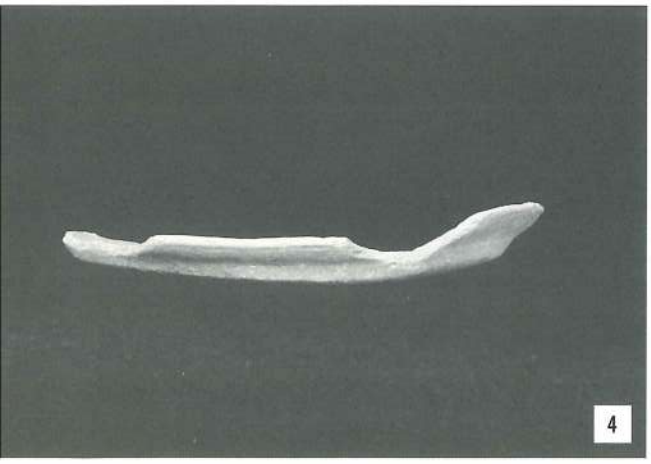


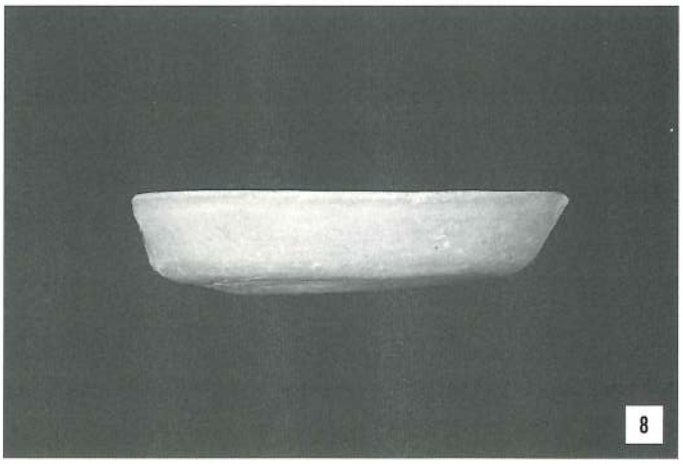


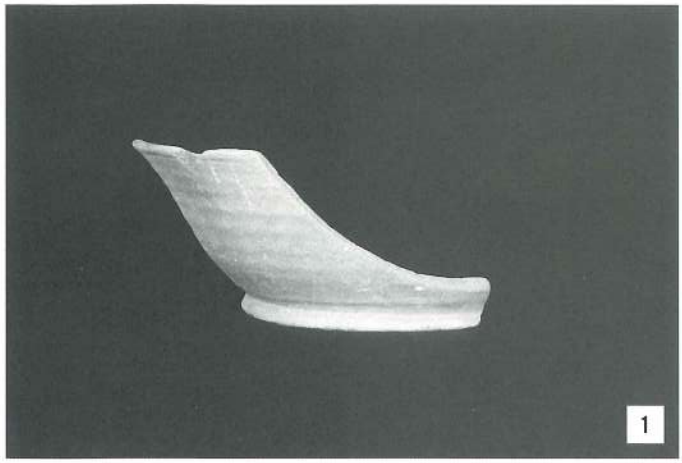



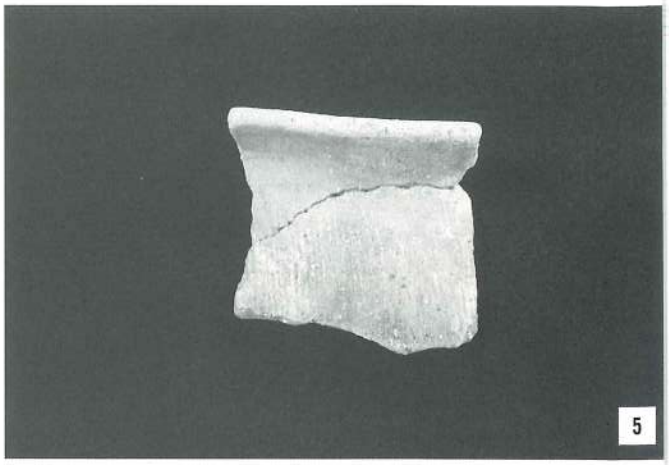



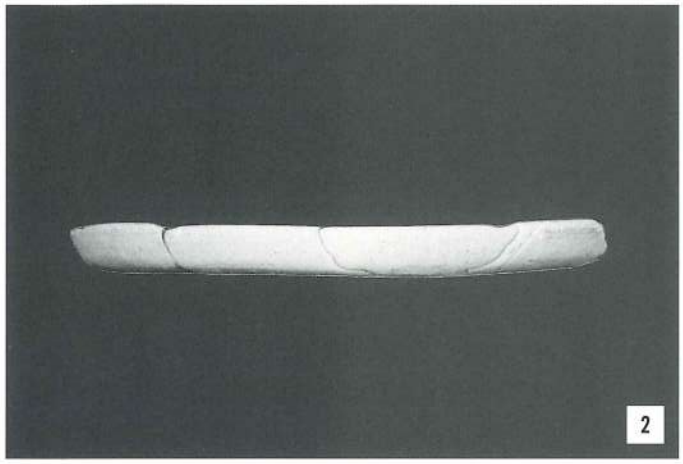



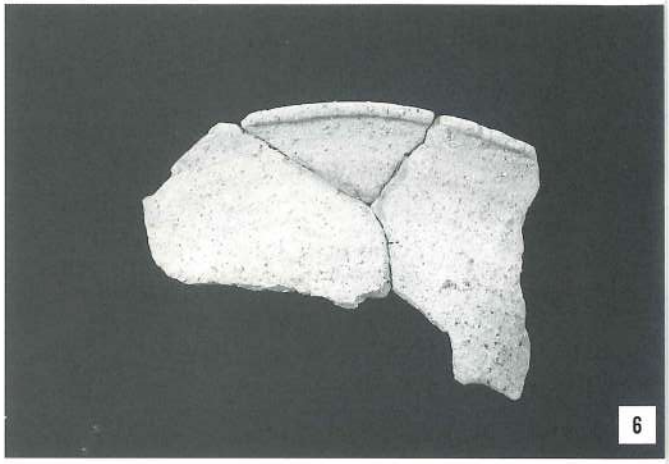



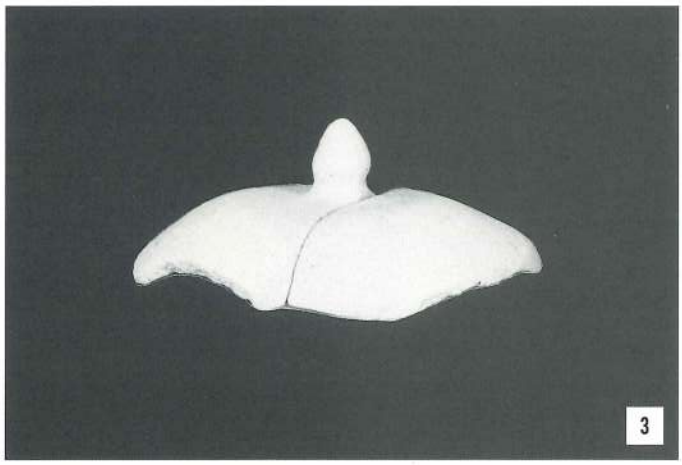

1. 114 SD-698
2. 115 SK-701
3. 118 SK-702
4. 123 SK-705
5. 123 SK-705
6. 124 SK-705
7. 125 SK-705
8. 126 SK-705

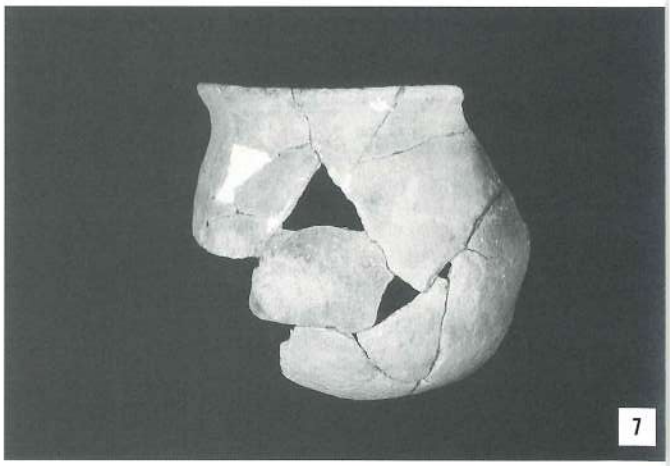


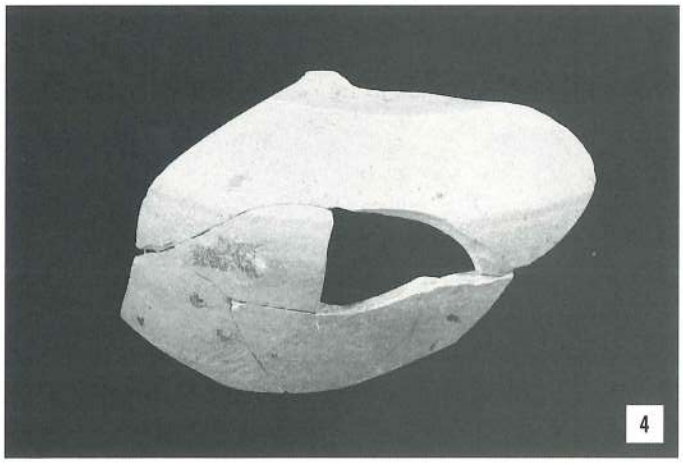



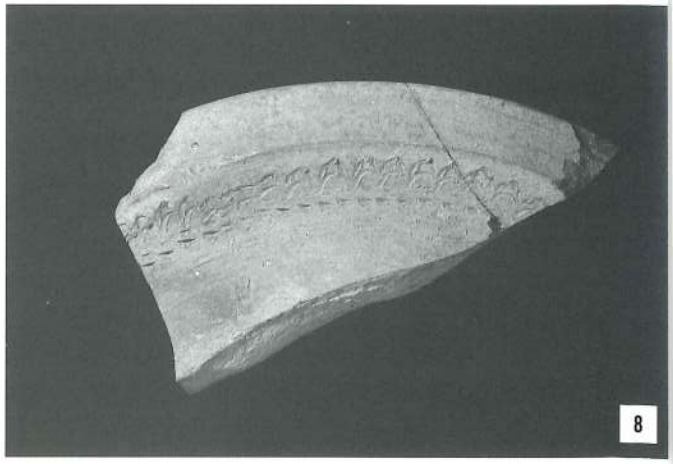



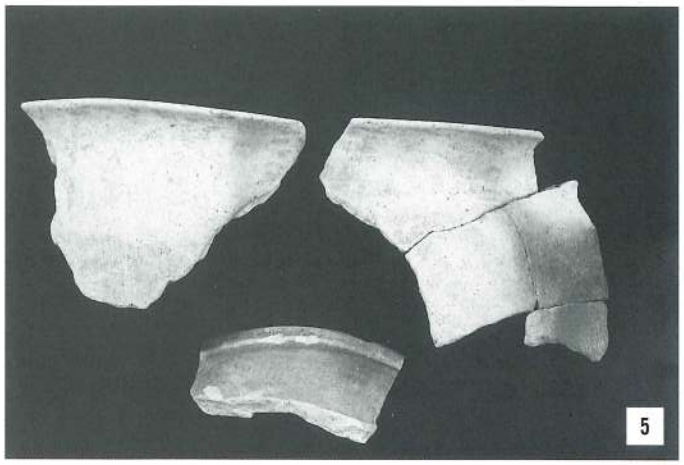



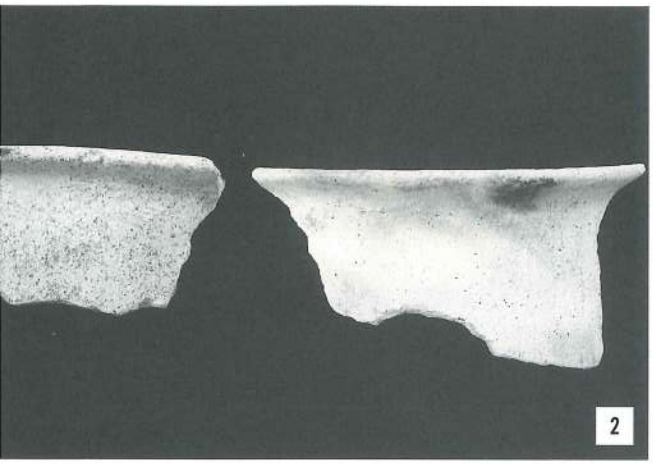



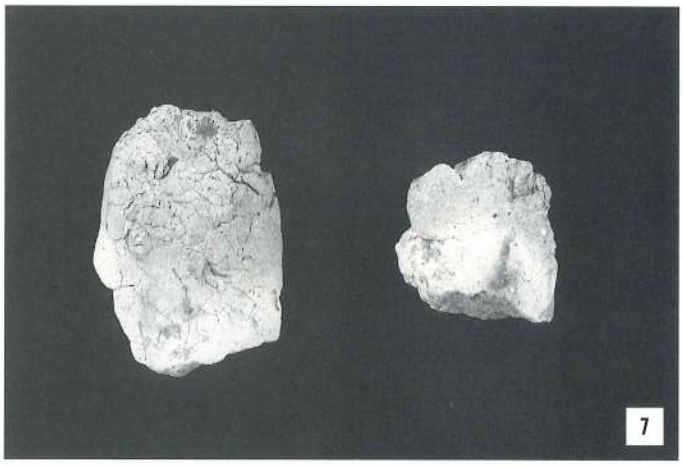



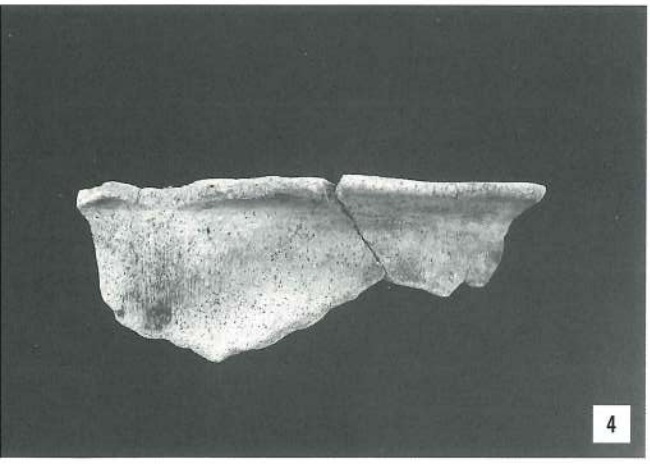



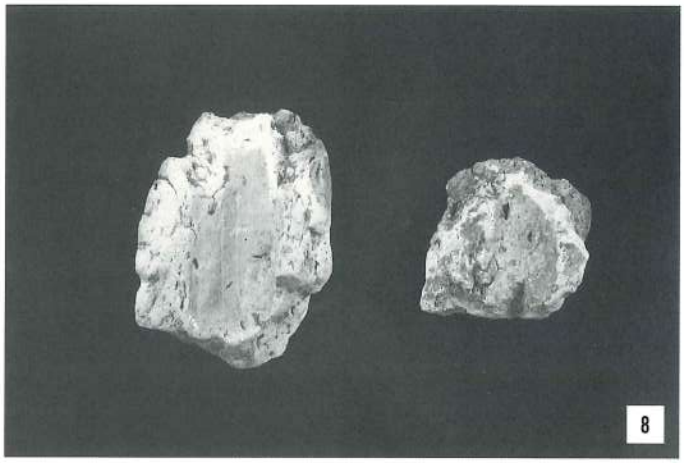

1. 127 SK-705
2. 132 SK-707
3. 134 SK-707
4. 135 SK-707
5. 138 SK-711
6. 140 SK-712
7. 141 SK-712
8. 142 SK-712



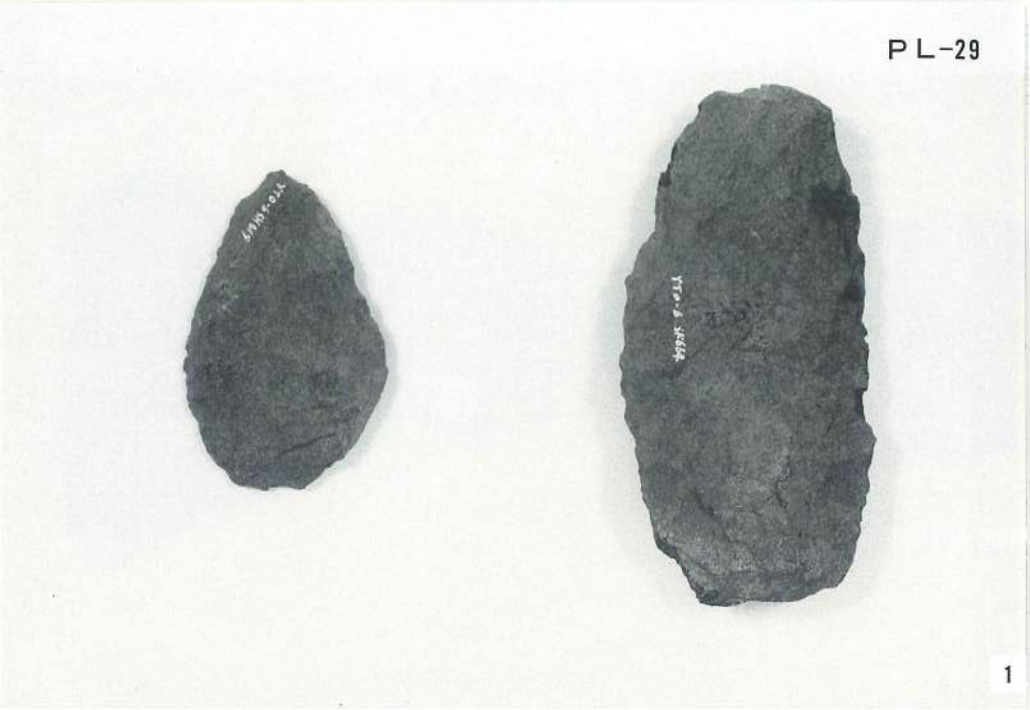





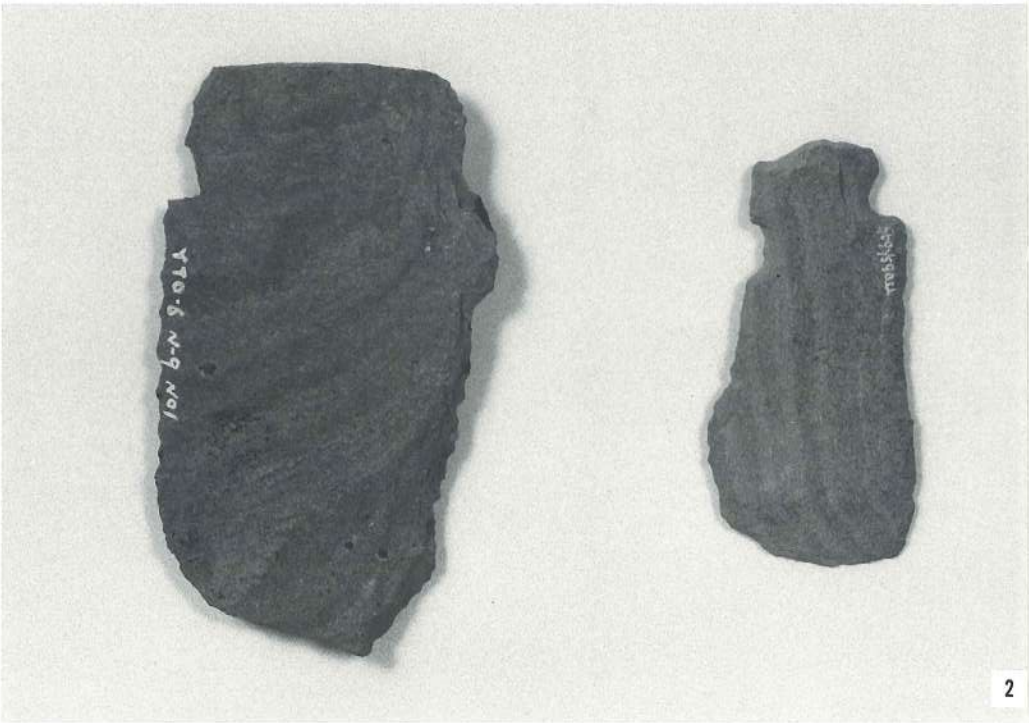



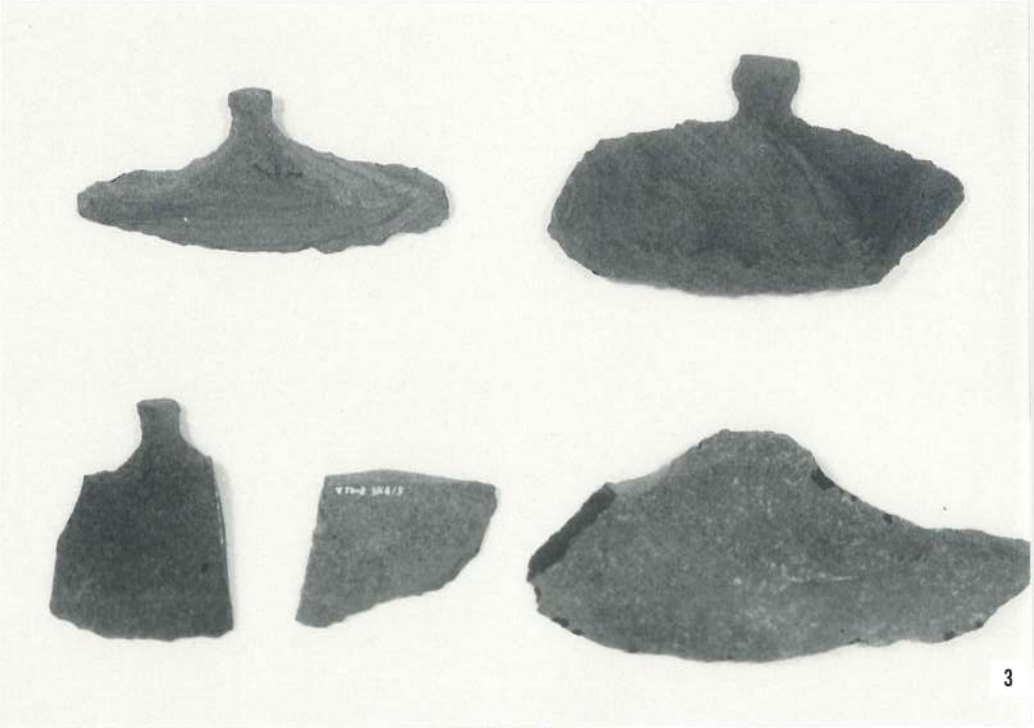

1．143　SK-716
2．145・146　SK-716
3．147　SK-716
4．148　SK-716
5．上）150・151　下）152　SD-720
6．153　SD-720
7．154　SK-612
8．154　SK-612



1

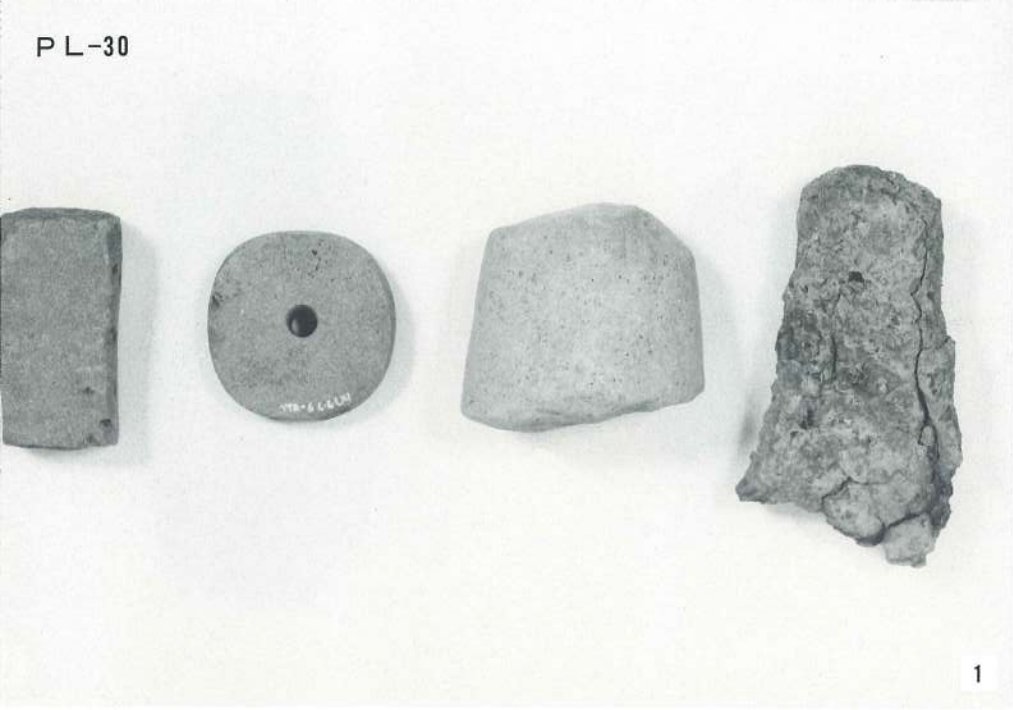


2

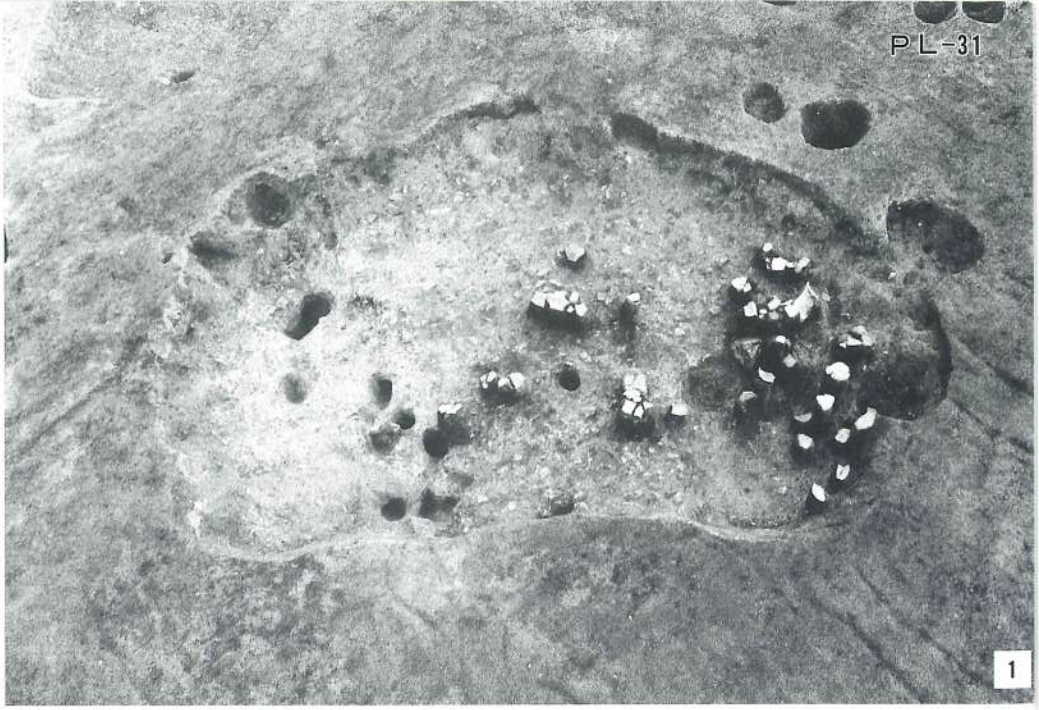


3

1．左）石銛　155
　右）尖頭器　156
2．石匙　157・158
3．上）石匙　159・160
　下）石匙　161・掻器　162・163

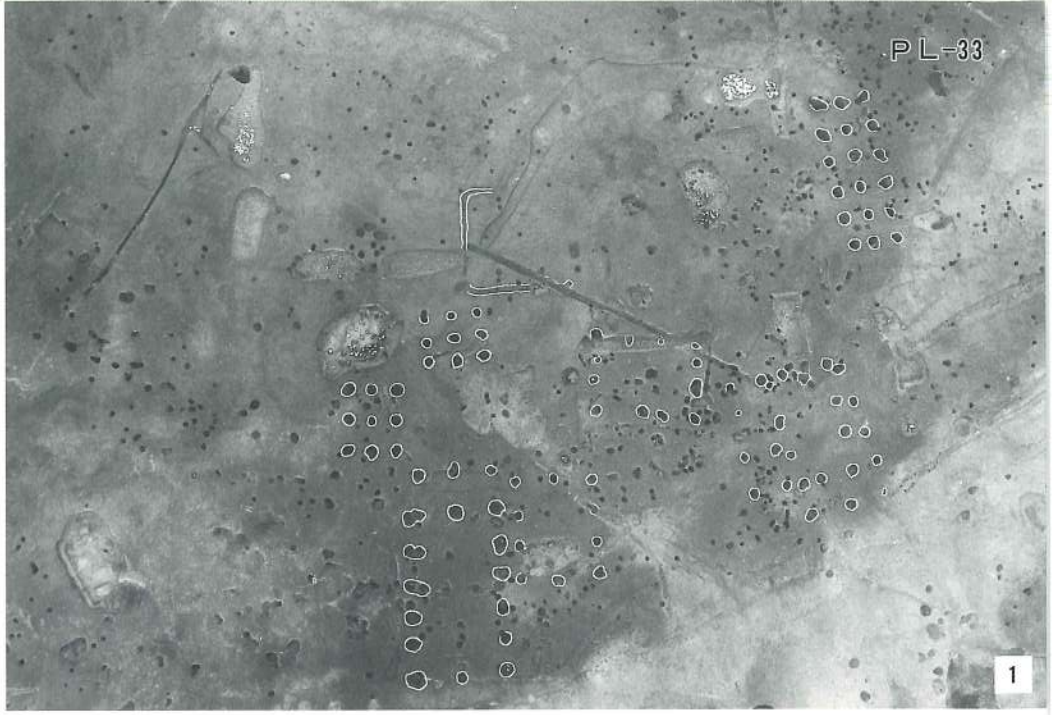


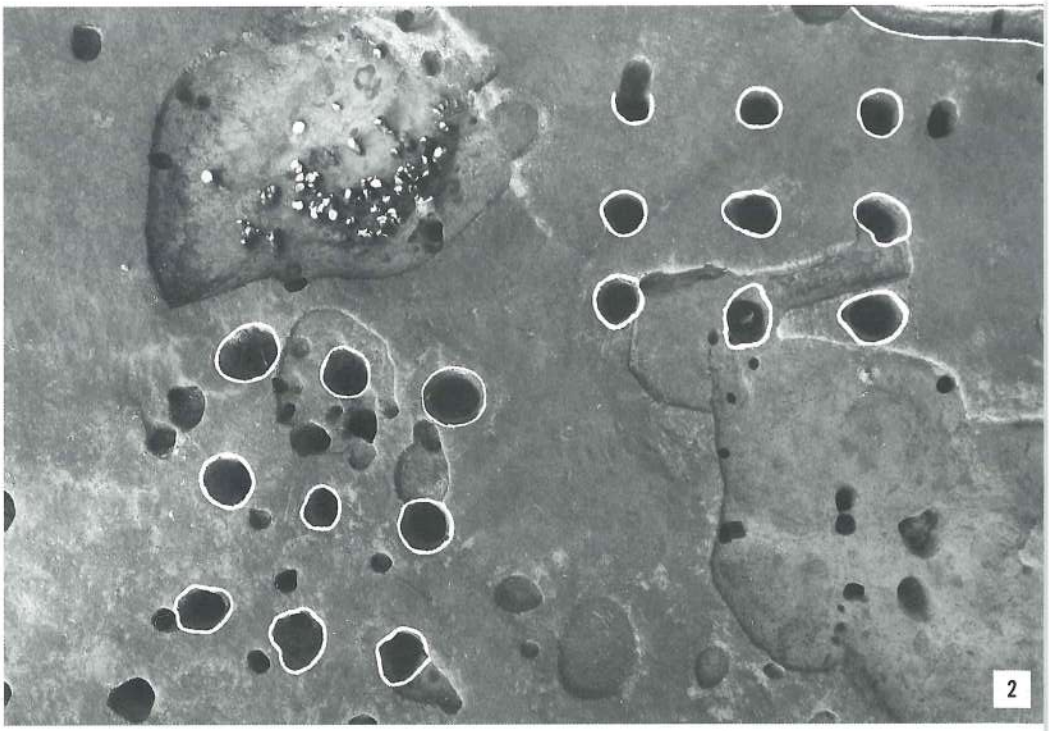

1．砥石　164
紡錘車　165
石斧　166
鉄滓　177

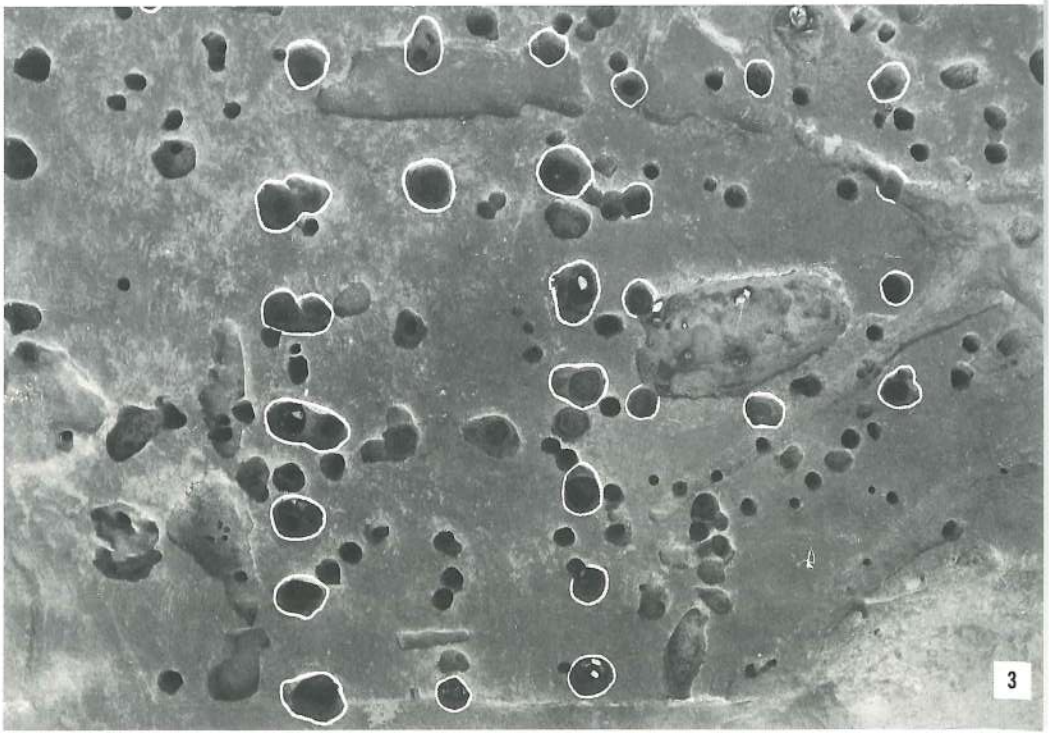


1．SH-953（西から）
2．SH-971
　SK-972
　SK-969
　（写真上方が南西）
3．SH-975（北から）

1．SH-976
（写真上方が北東）
2．SH-976（北東から）



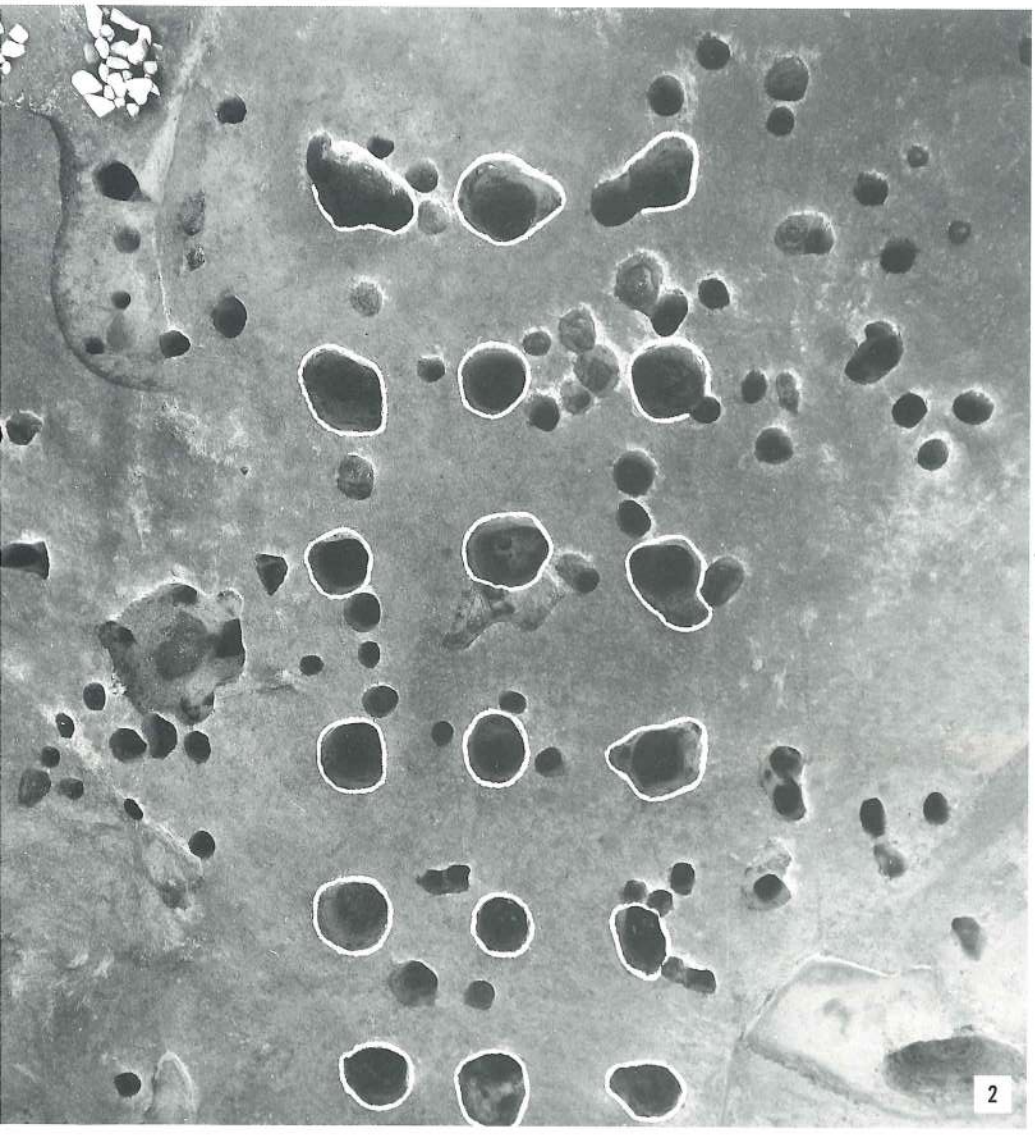




1．掘立柱建物群
（写真上方が北）

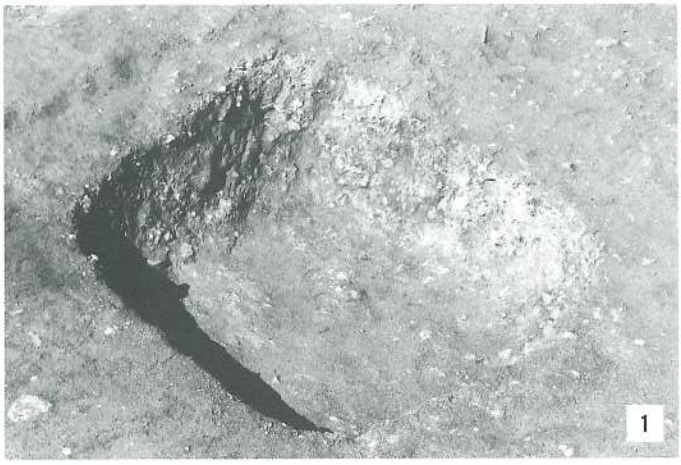
2．SB-990・SB-991
（写真上方が北）

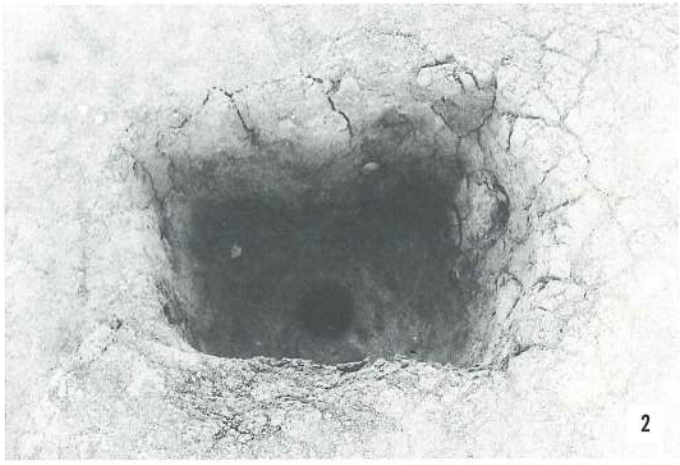
3．SB-992～SB-994
（写真上方が北）

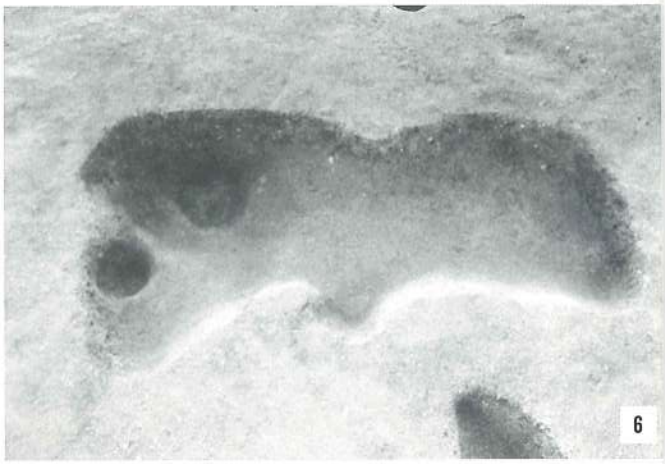


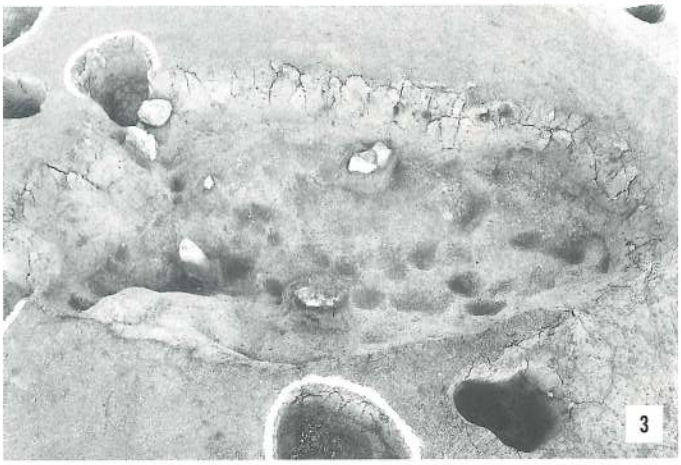
1．SB-994～SB-997
（写真上方が北）

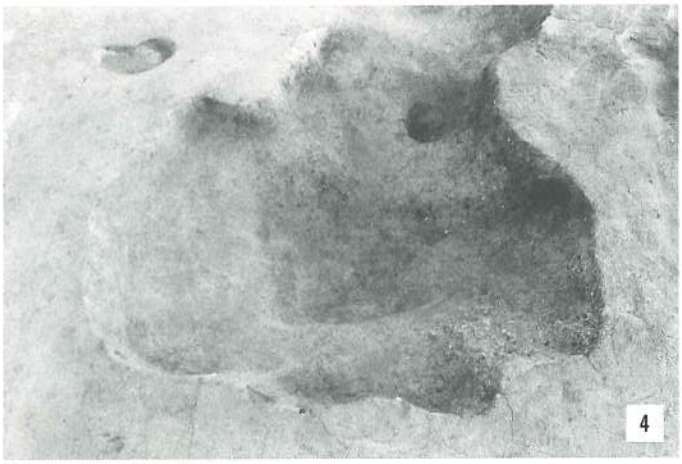
2．SB-998・SB-999
（写真上方が北）

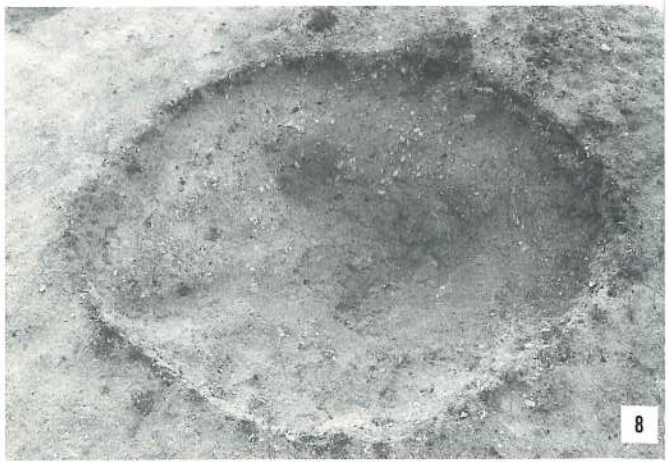




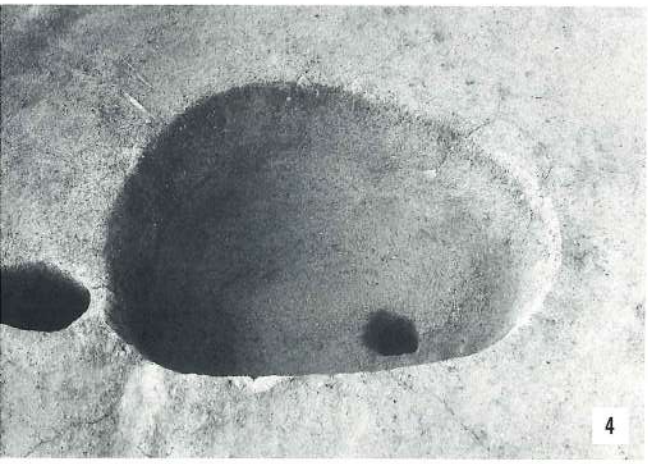



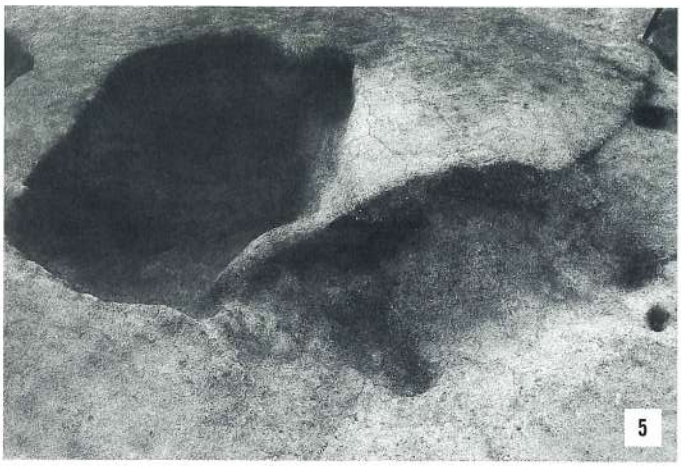



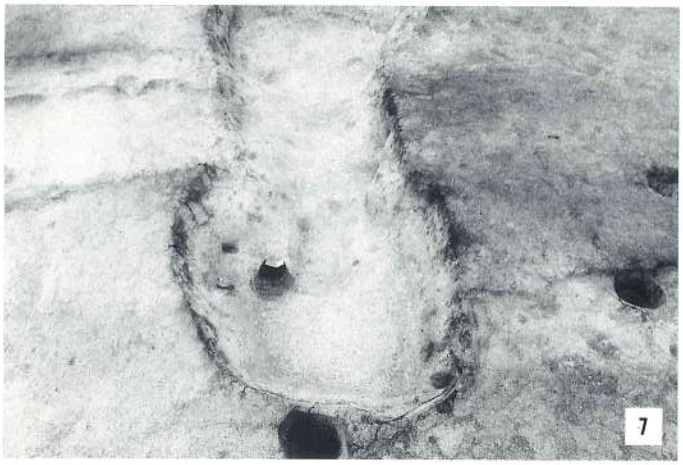


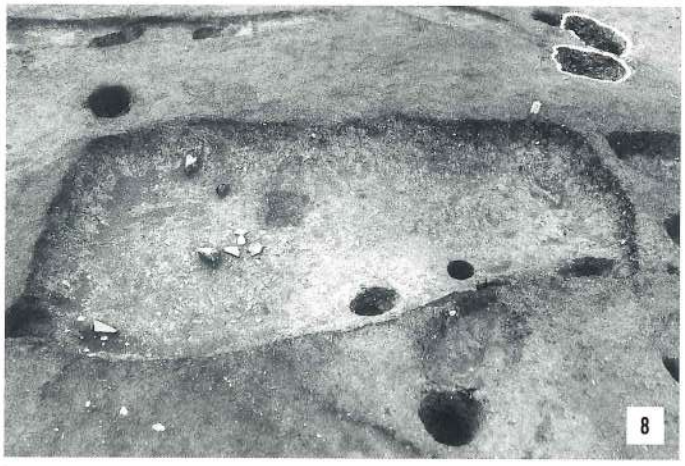




1．SK-801（南東から）
2．SK-901（東から）
3．SK-912（南東から）
4．SK-913（西から）
5．SK-915（北東から）
6．SK-916（北から）
7．SK-917（北から）
8．SK-918（北から）



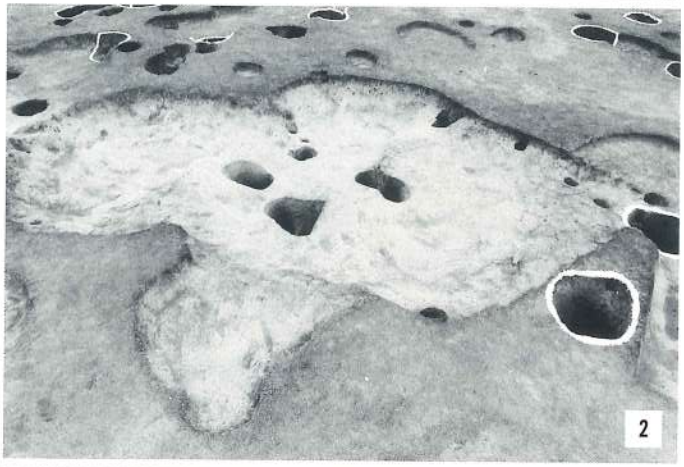



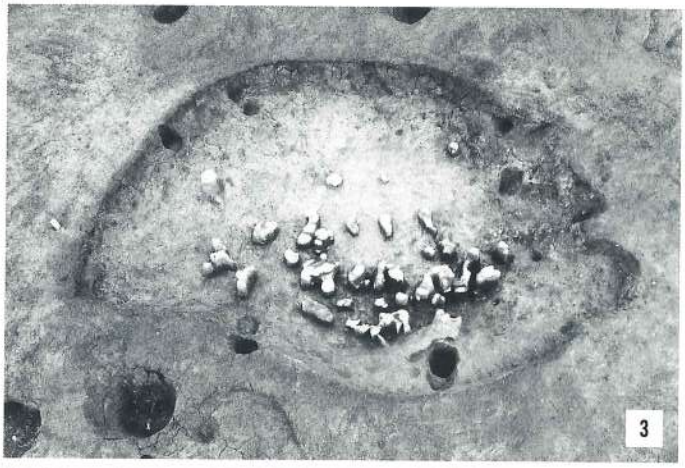


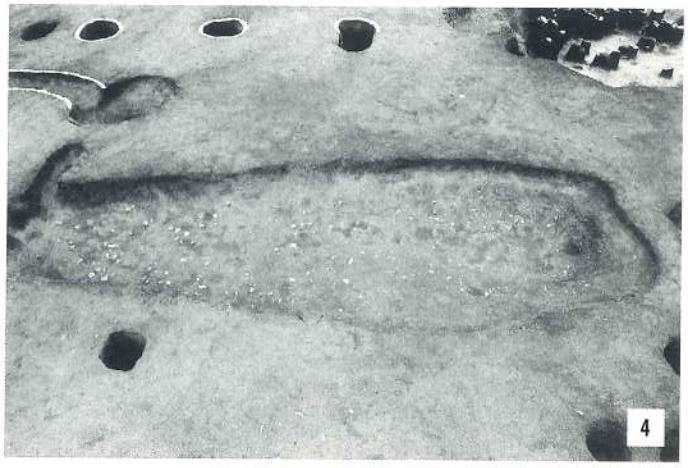



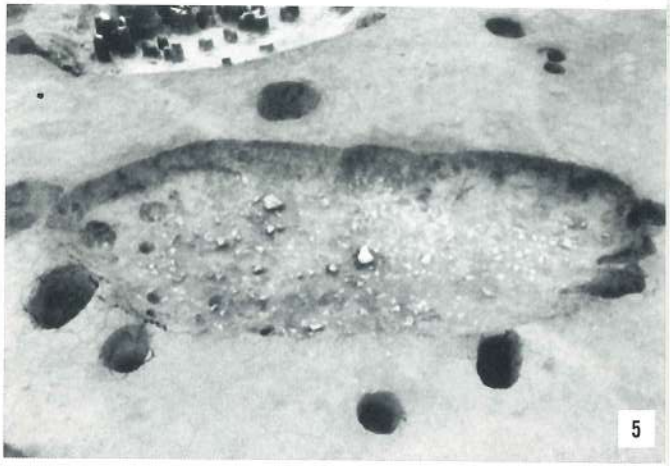

1．SK-919（北から）
2．SK-920（北から）
3．SK-921（南から）
4．SK-925（東から）

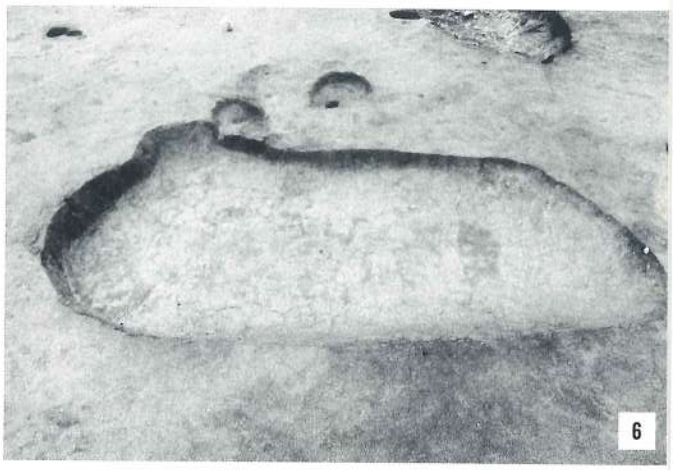
5．SK-927・SK-928（北から）
6．SK-932（西から）
7．SK-933（北西から）
8．SK-934（西から）



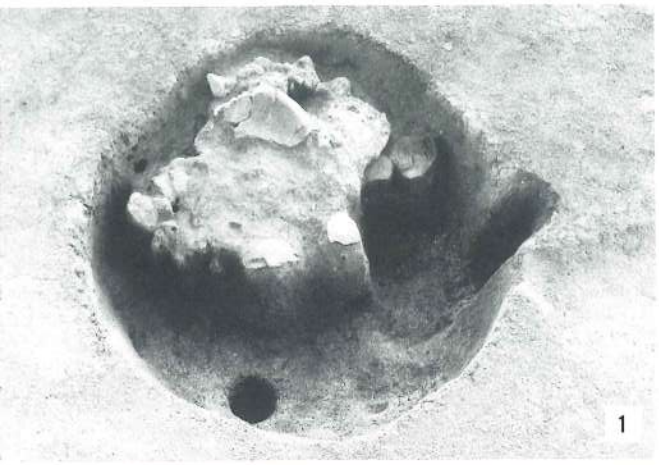



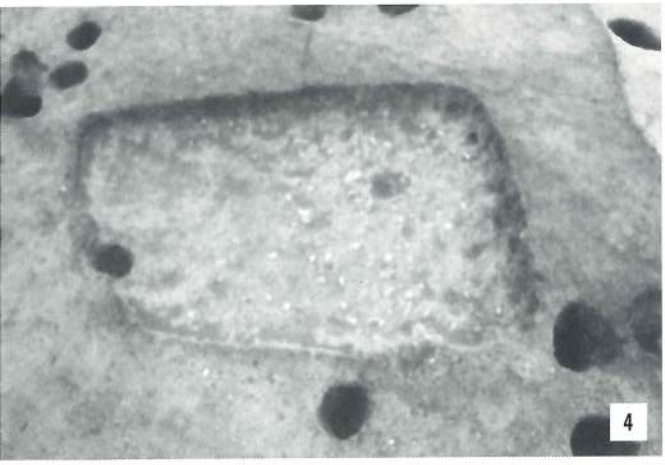



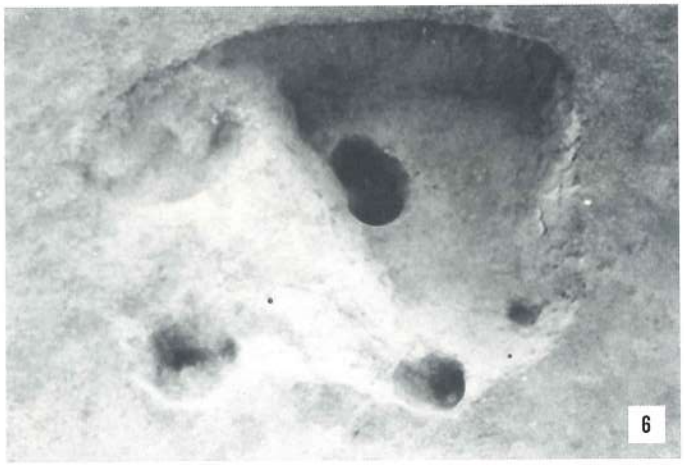



1．SK-935（北から）
2．SK-936～SK-938（北から）
3．SK-940（南から）
4．SK-941（北から）

5．SK-942（北から）
6．SK-943（北から）
7．SK-944・SK-945（北から）
8．SK-947（南東から）

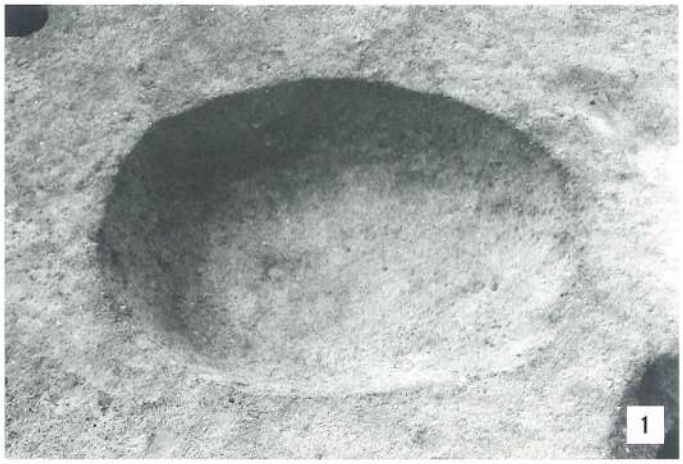


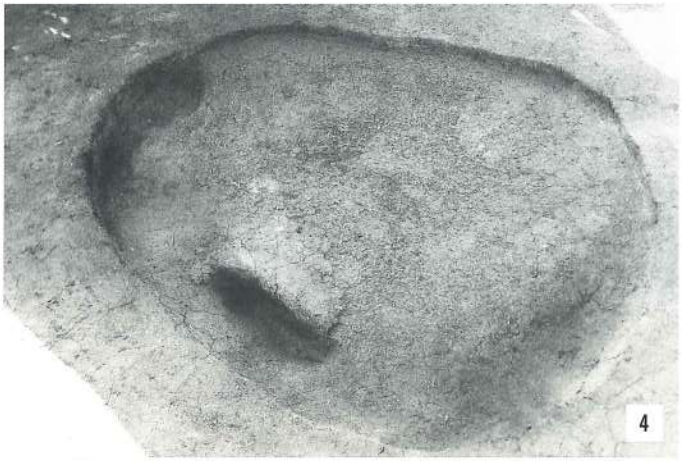


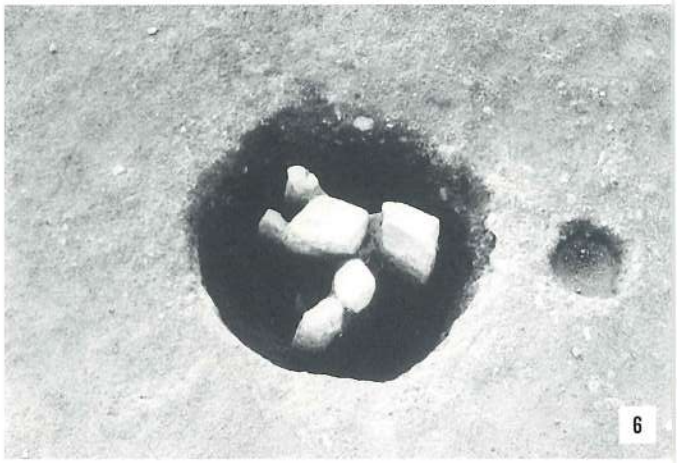


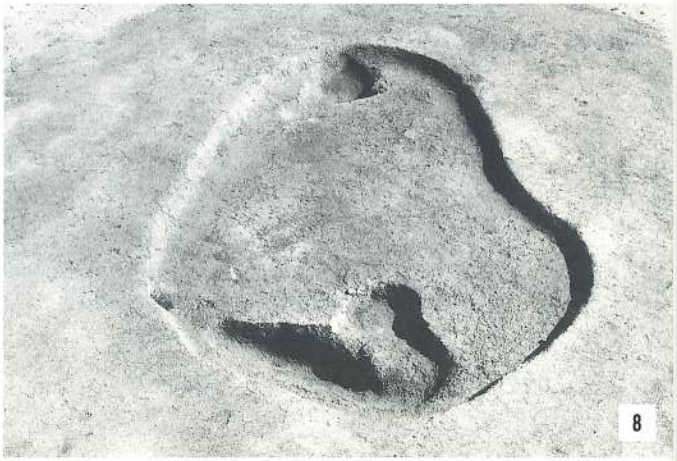
1．SK-949（北から）
2．SK-951（北から）
3．SK-952（北東から）
4．SK-954（南から）

5．SK-960（北西から）
6．SK-961（南東から）
7．SK-965（南西から）
8．SK-966（北西から）

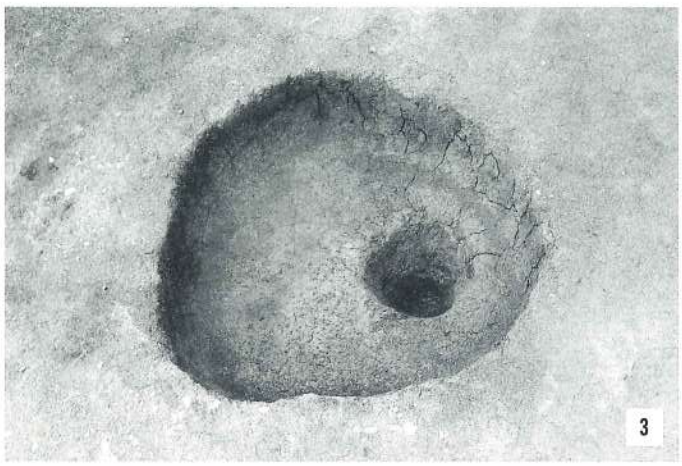


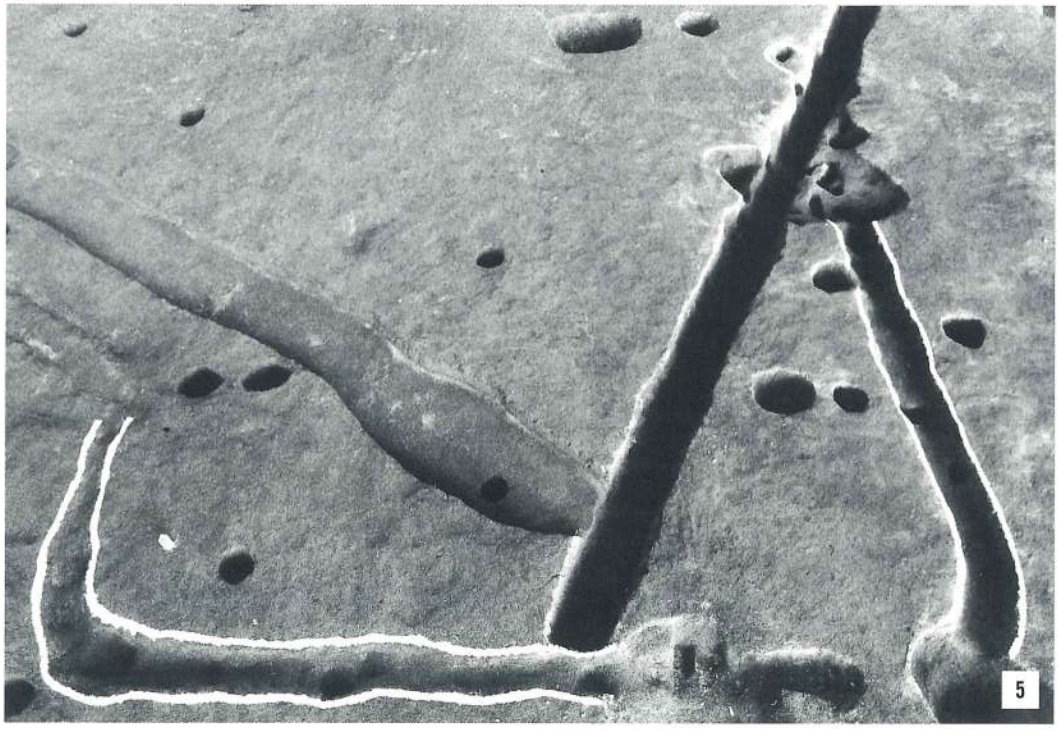







1．SK-967（北から）
2．SK-968（南西から）
3．SK-977（南から）
4．SK-978（西から）
5．SK-981（北西から）
6．SK-982（北から）
7．SK-983（南東から）
8．SK-984（西から）





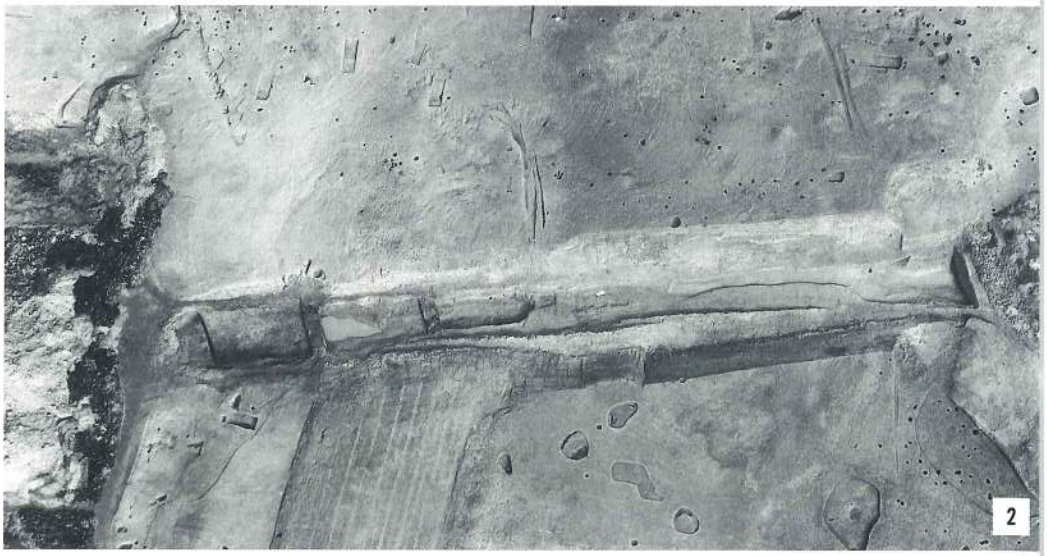

1．SK-985（北から）

2．SK-986（南西から）

3．SK-988（南から）

4．SK-989（西から）

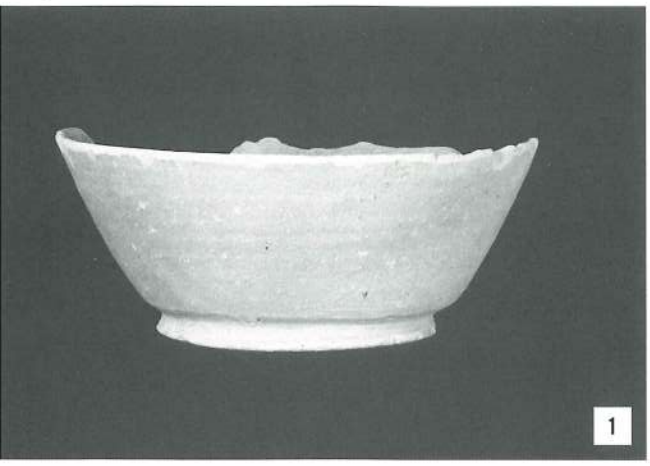
5．SD-957（西から）

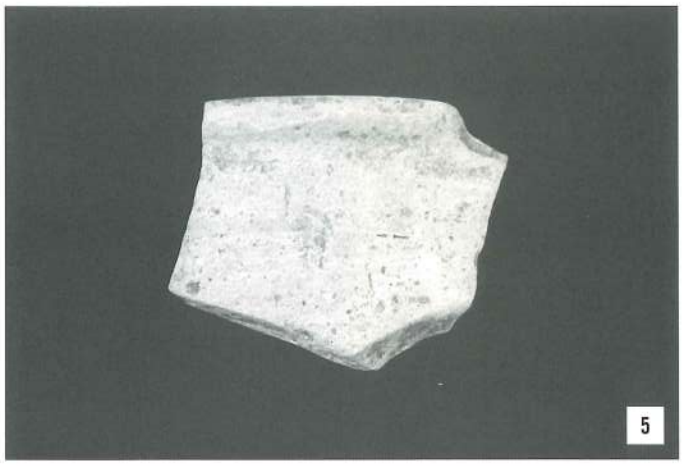


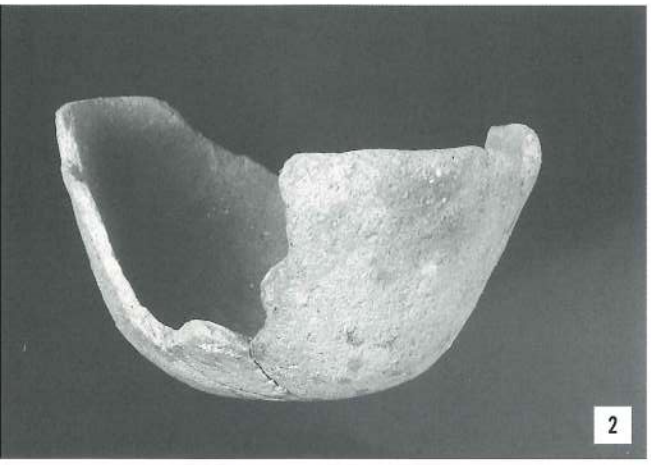
1．SD-970（西から）

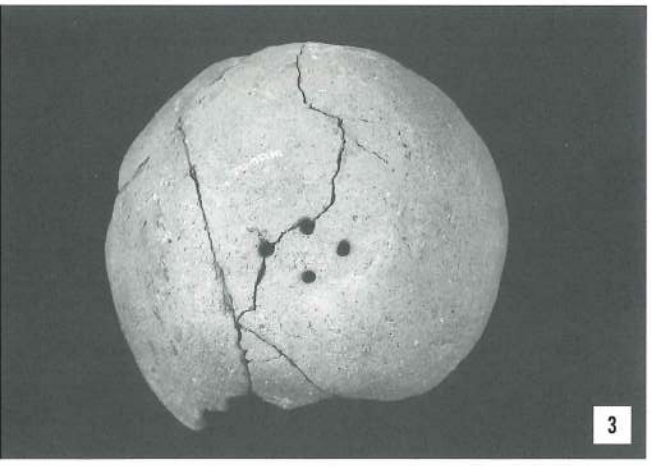
2．SD-970
（写真上方が北）

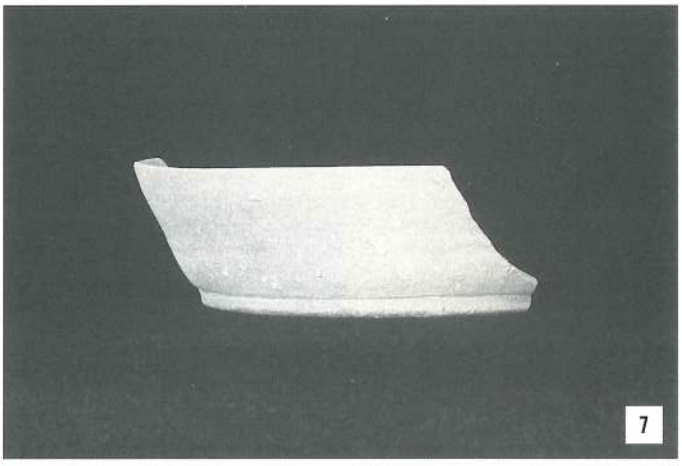
3．遺物包含層調査地区
（写真上方が北西）

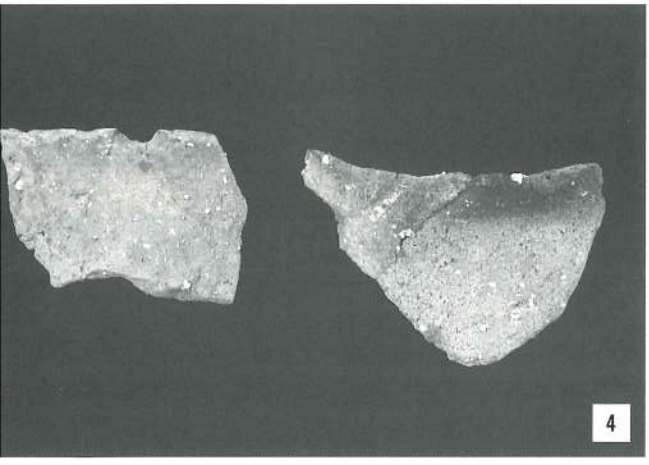


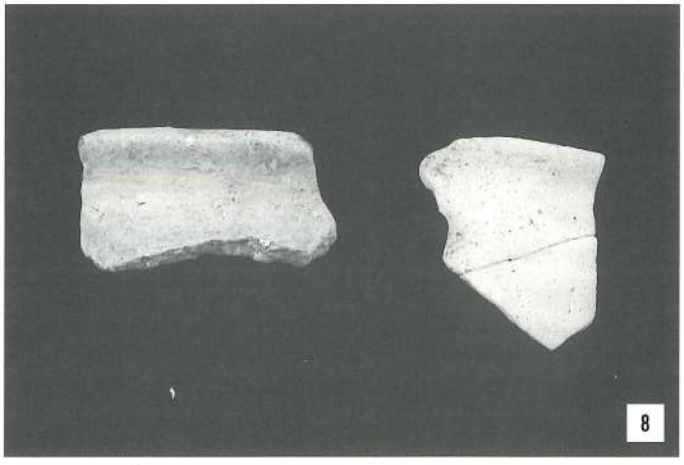



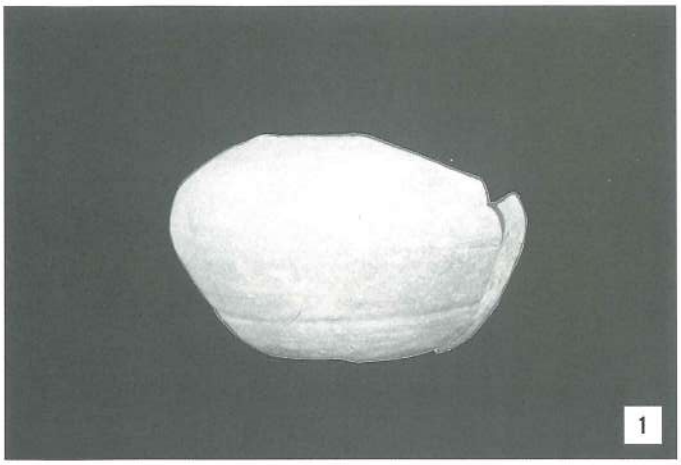


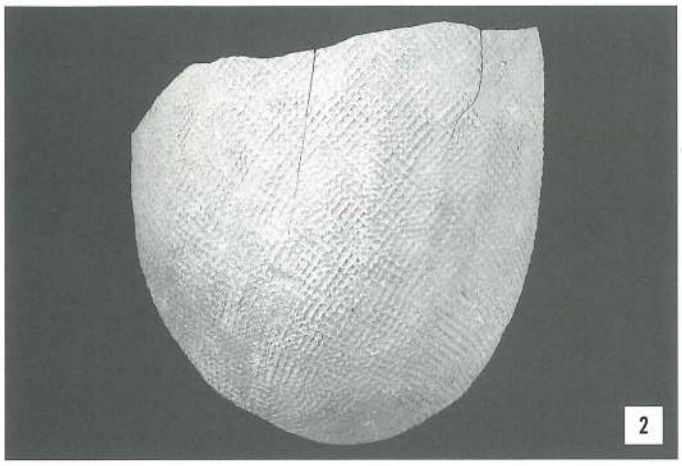



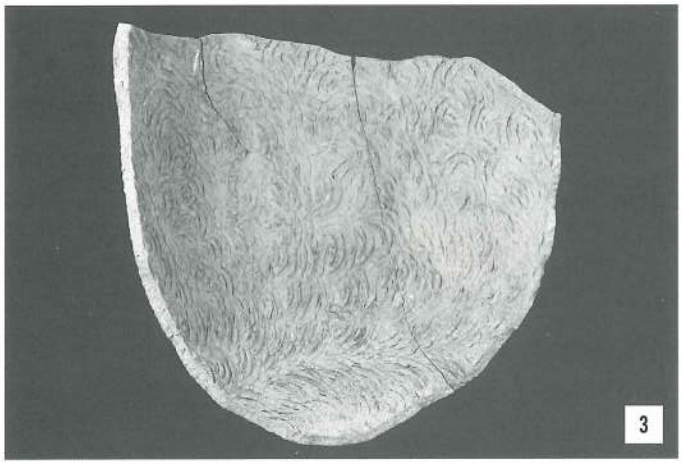



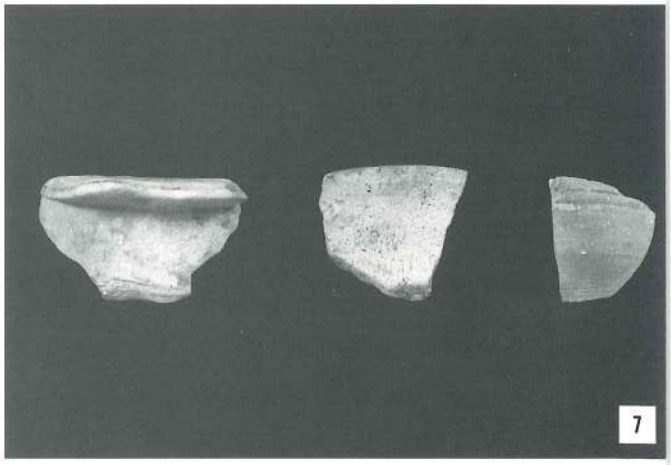



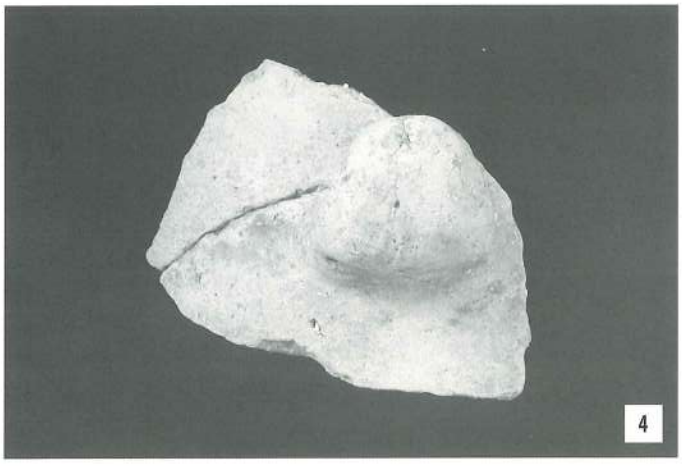

1. 1 SK-801
2. 2 SK-801
3. 2 SK-801
4. 5・6 SD-903
5. 9 SK-905
6. 10 SK-906
7. 13 SD-903
8. 19・20 SK-907

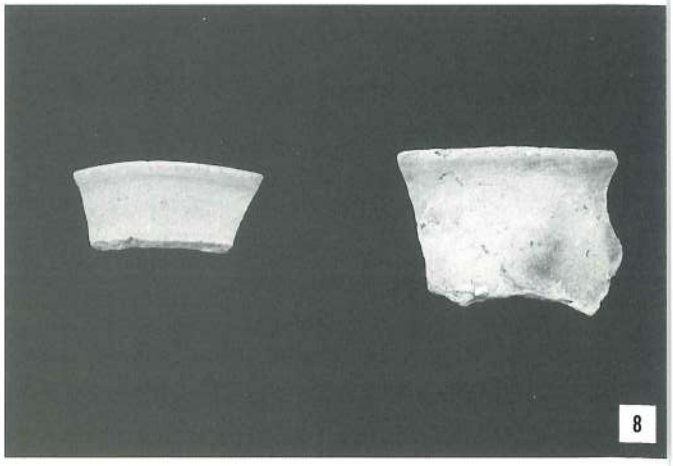







1．21　SK-907

2．22　SK-907

3．22　SK-907

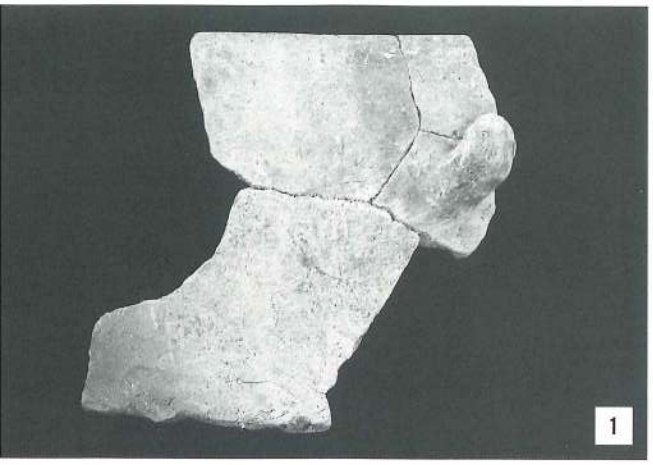
4．23　SK-907

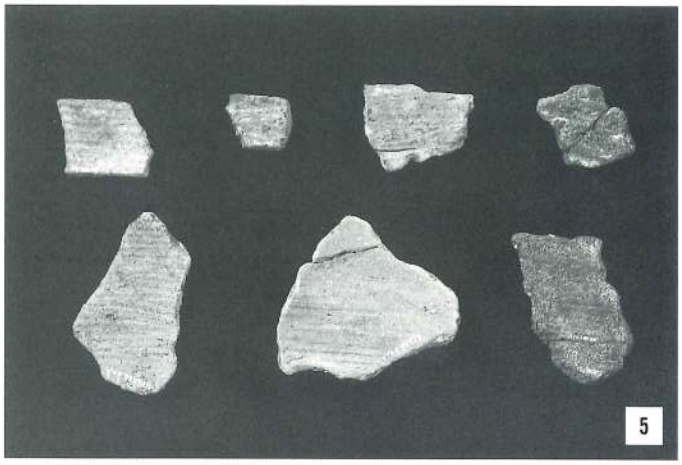
5．24　SD-909

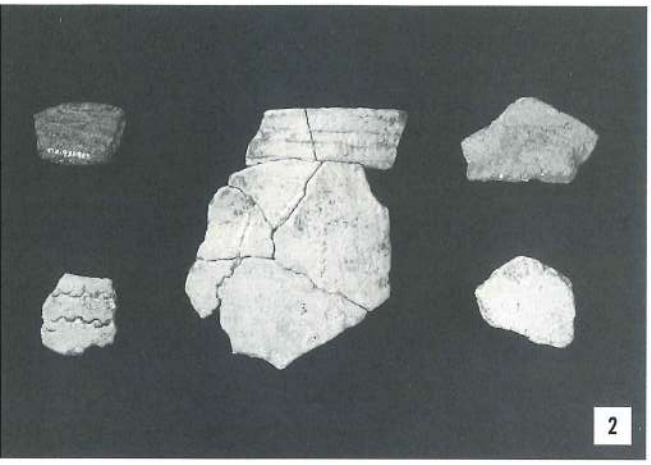
6．25　SD-910

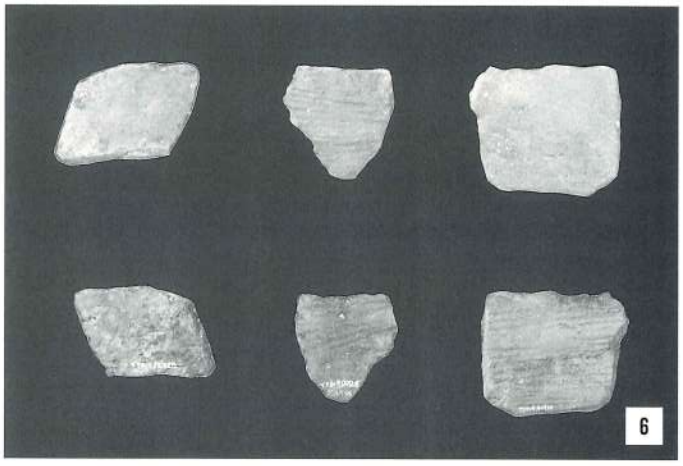
7．26・27・28　SB-993

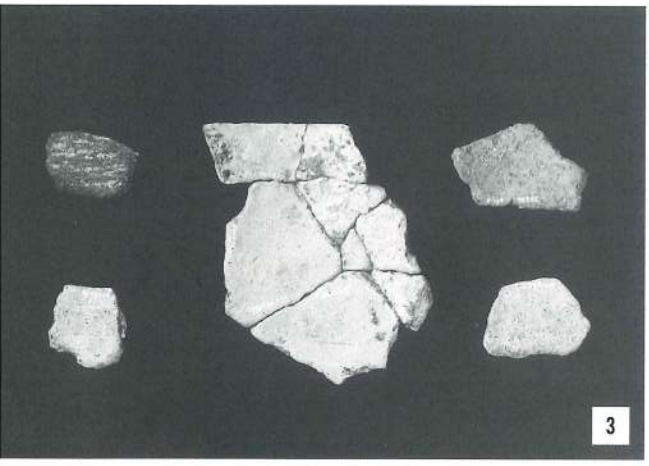
8．36・37　SK-912

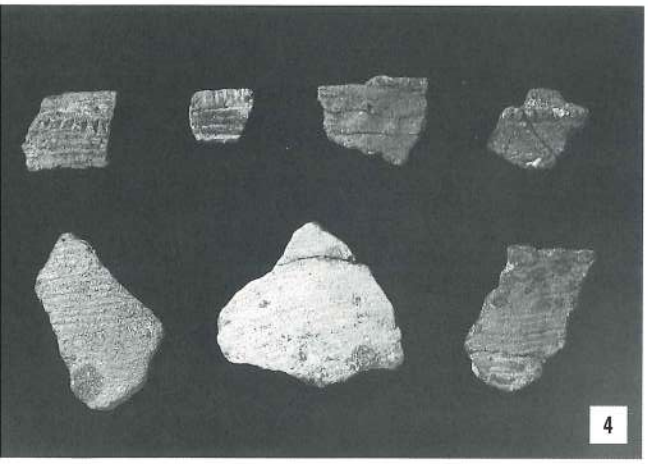


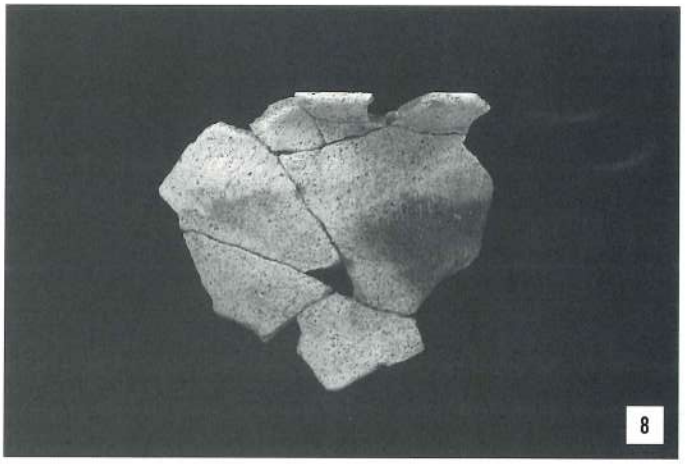






1．38　SK-907

2．左）7　SD-903・39　SK-914

　中）42　SK-921　右）44・45　SK-922

3．2．に同じ

4．上）46～49　下）50～52　SK-928

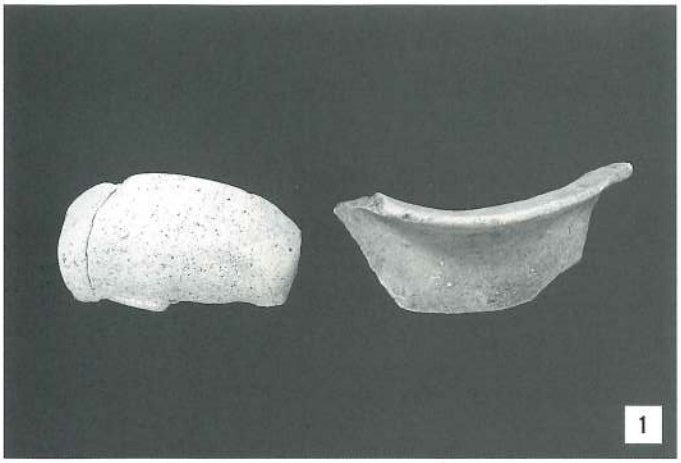
5．4．に同じ

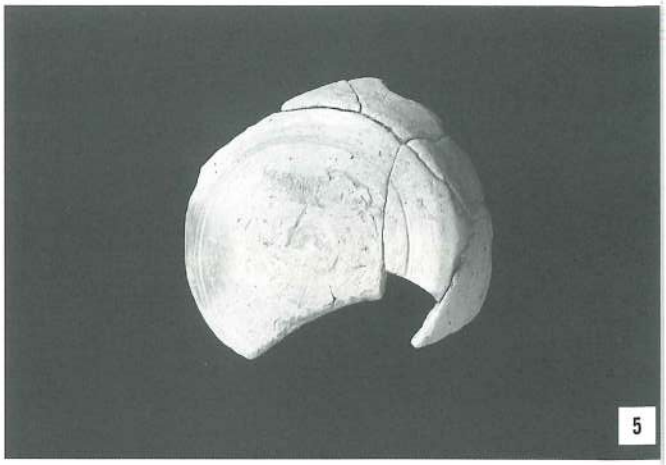
6．上）53・54　SK-928・55　SK-930

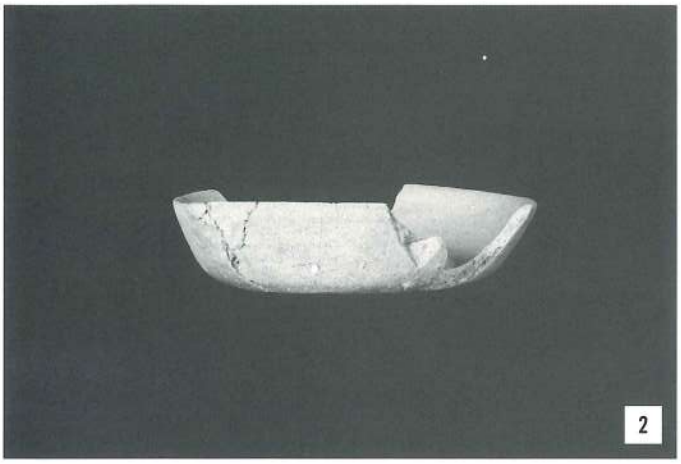
　下）同上

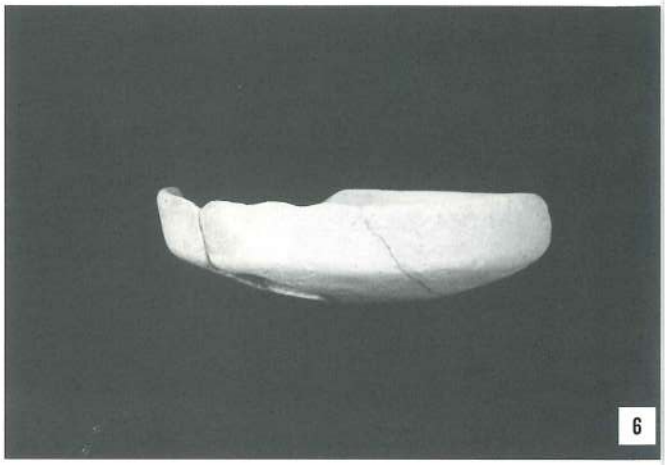
7．56　SK-932

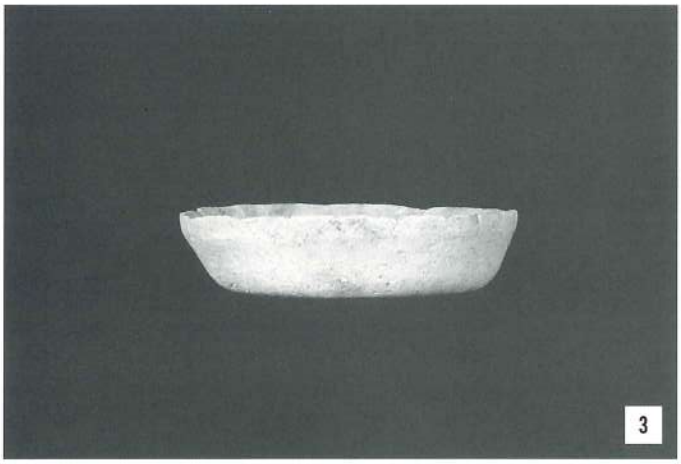
8．59　SK-933

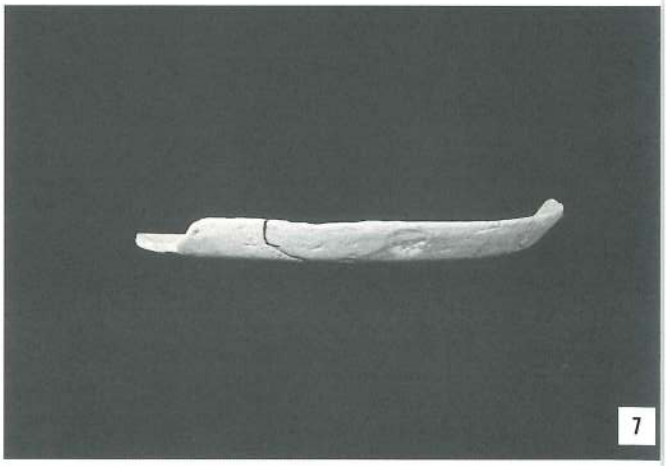


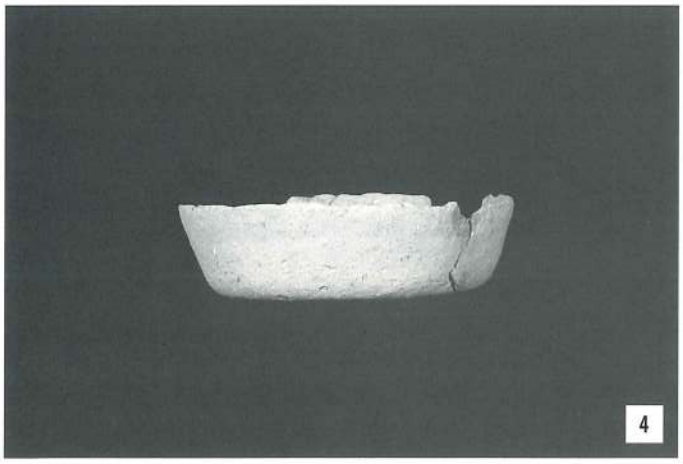



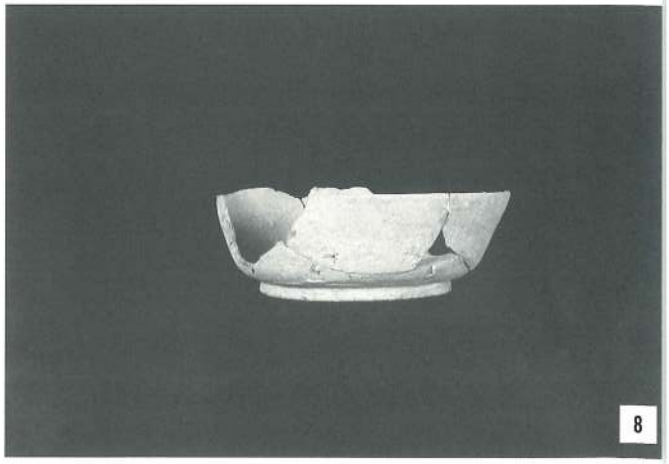



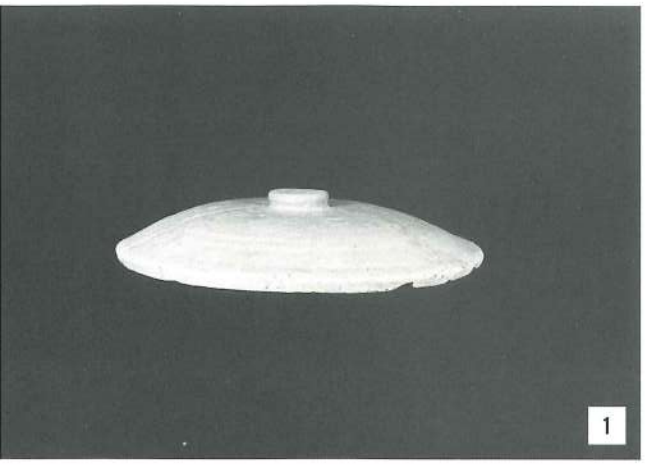



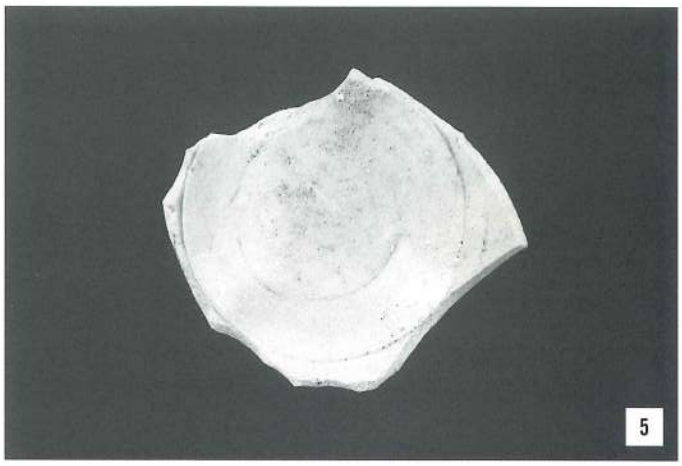



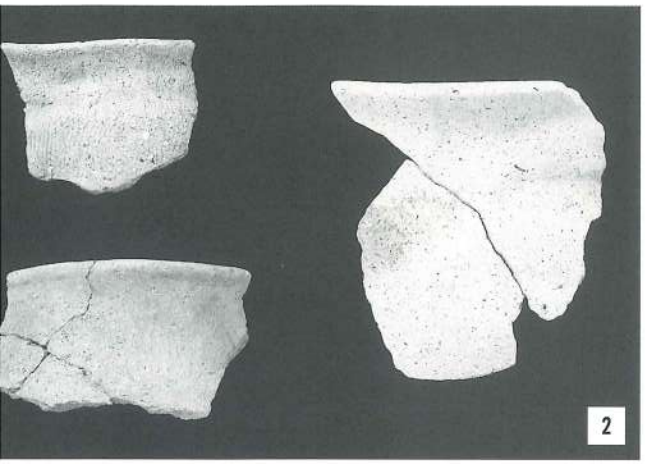



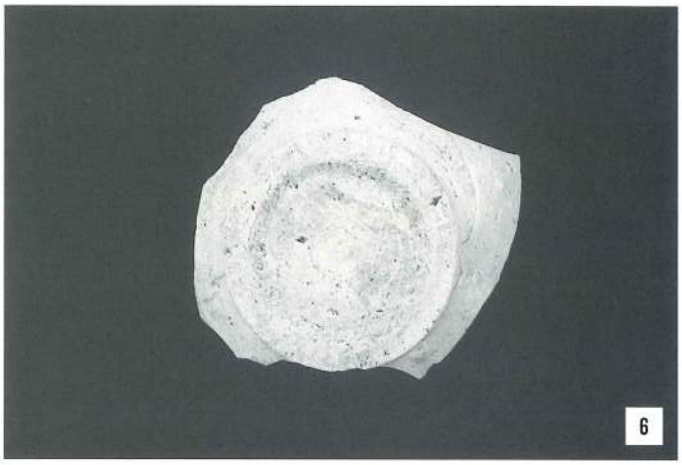



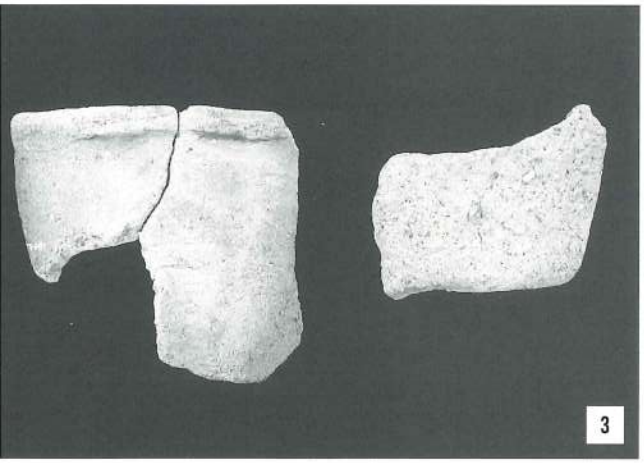

1．60・61　SK-934
2．66　SK-940
3．67　SK-940
4．68　SK-940
5．71　SK-940
6．73　SK-940
7．74　SK-940
8．75　SK-940

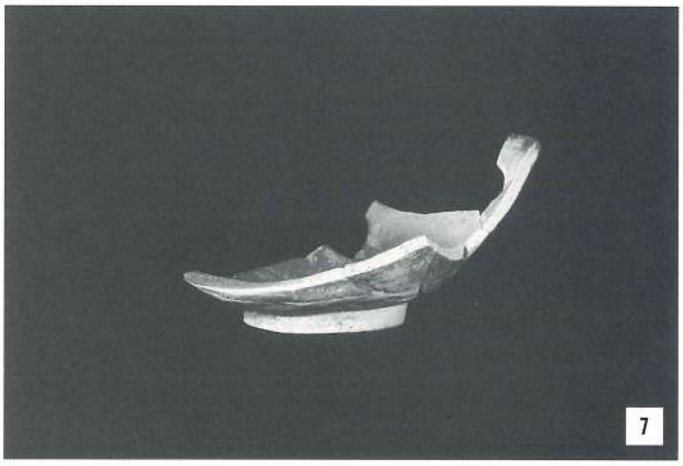


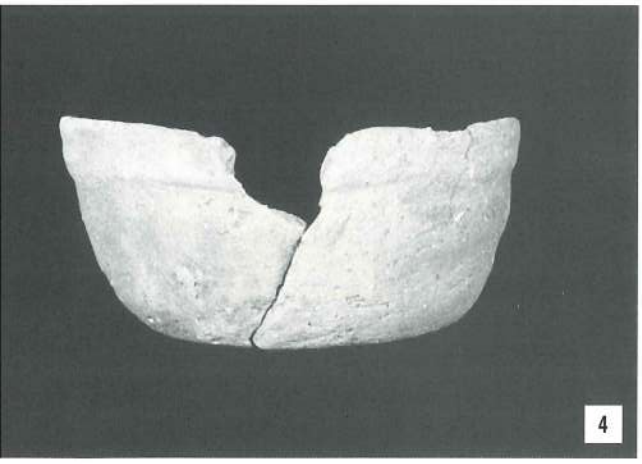



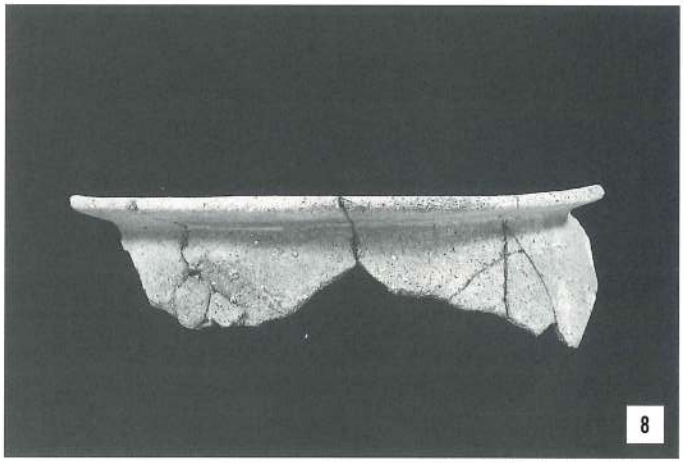




1．80　SK-940

2．左）84・85　右）89　SK-940

3．90・92　SK-940

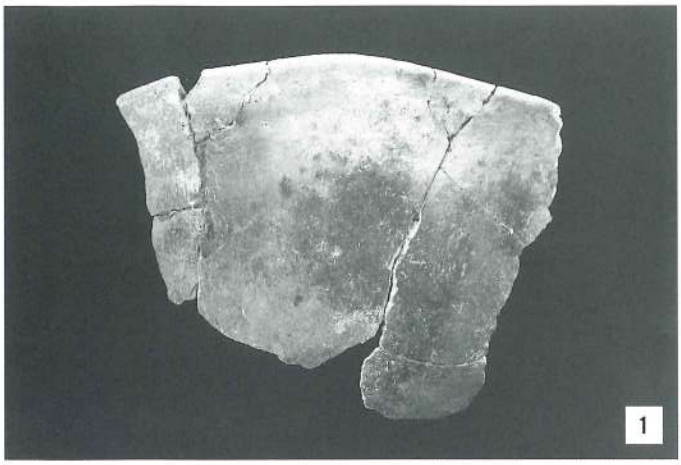
4．91　SK-940

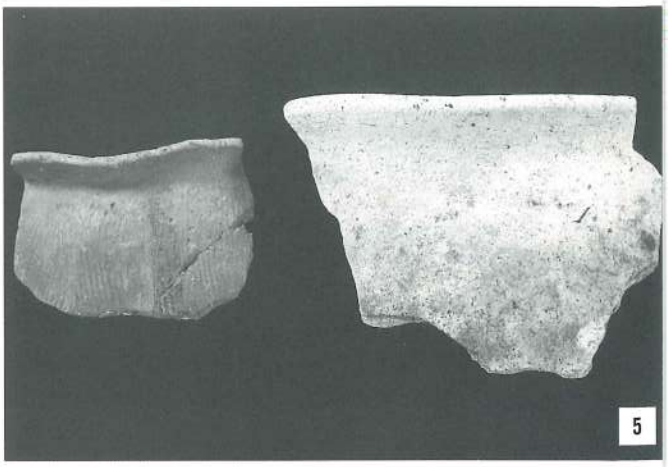
5．94　SD-970

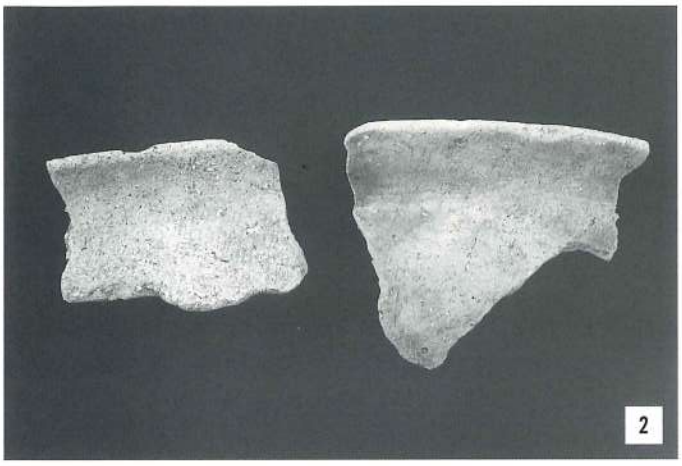
6．94　SD-970

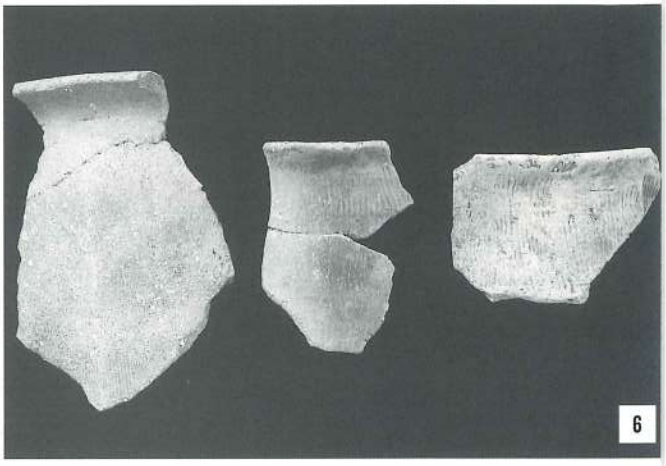
7．95　SD-970

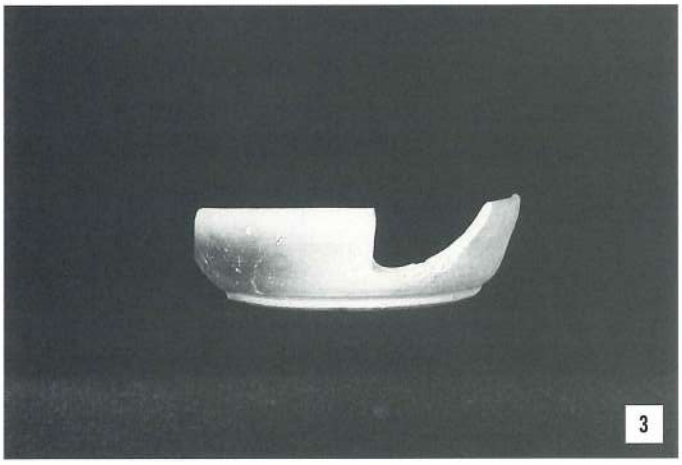
8．96　SD-948

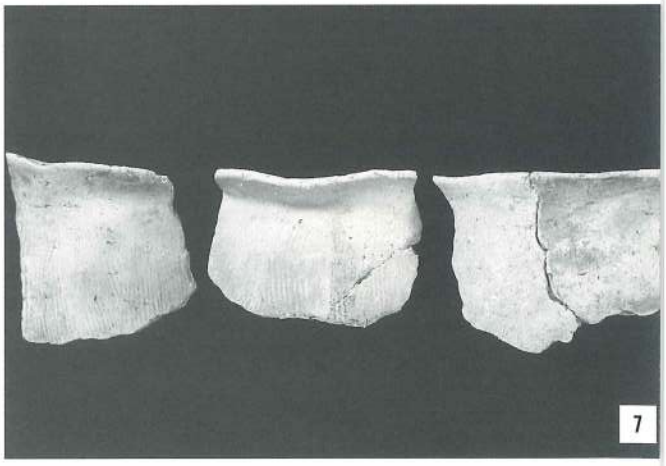


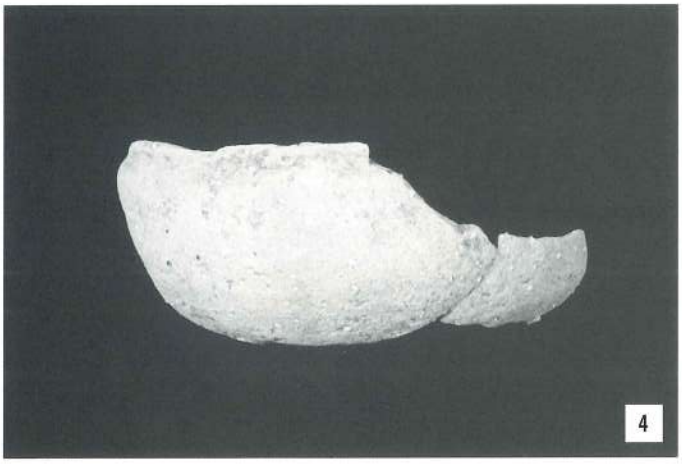



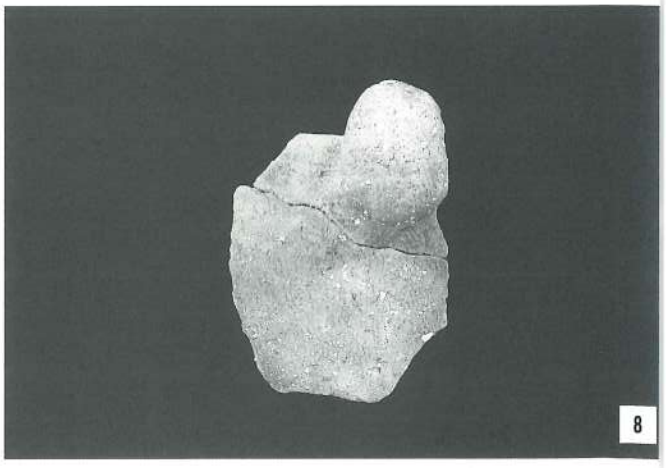




1．100　SK-949

2．102・103　SK-951

3．104　SK-951

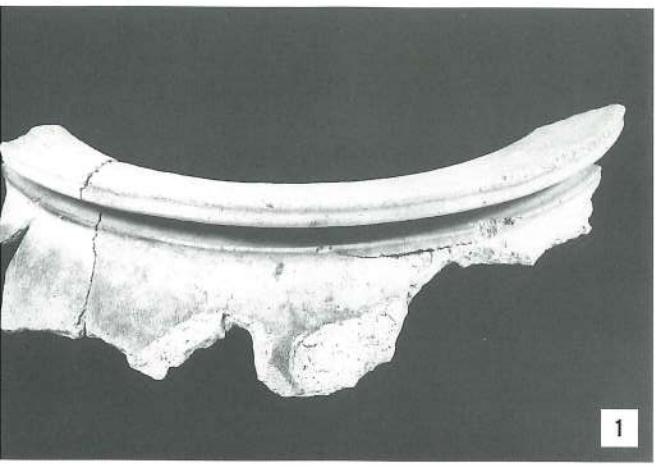
4．110　SH-953

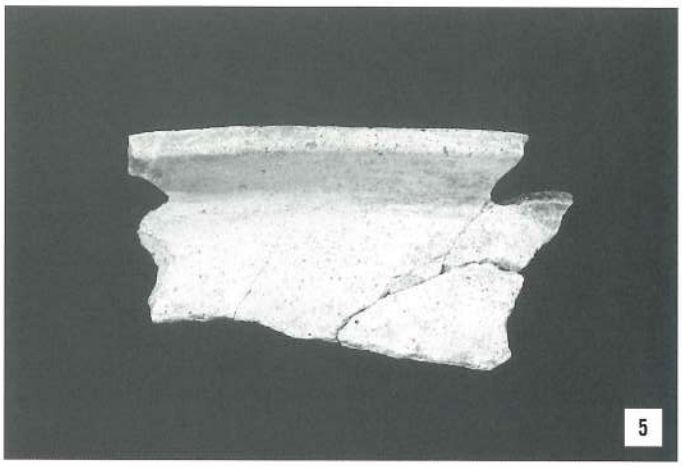
5．111・112　SH-953

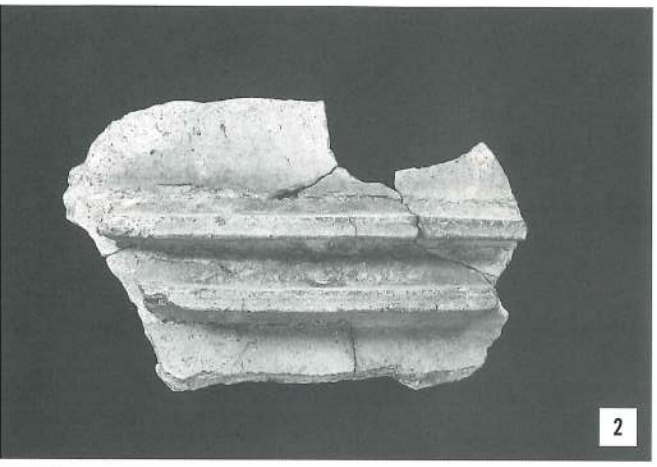
6．113～115　SH-953

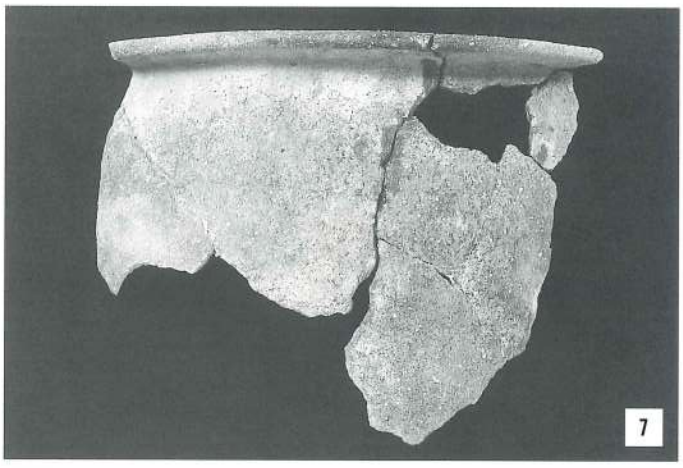
7．116～118　SH-953

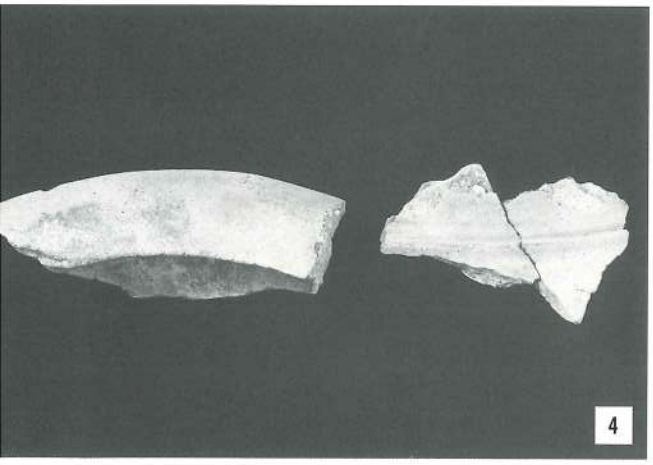
8．119　SH-953

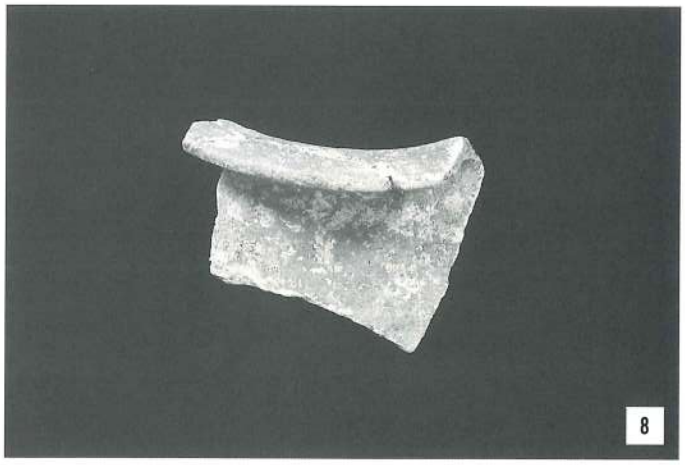


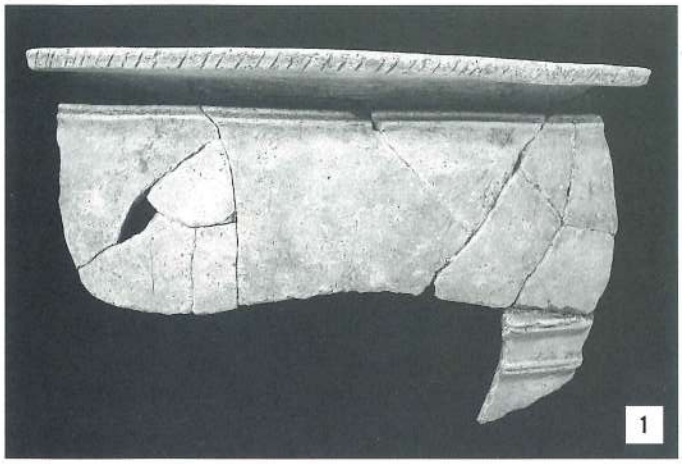



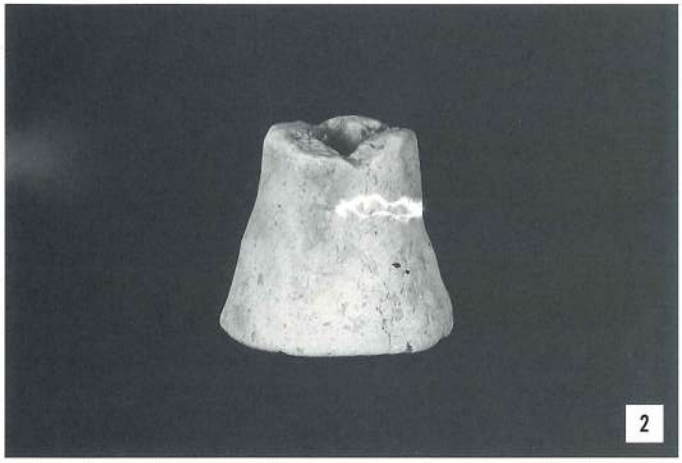


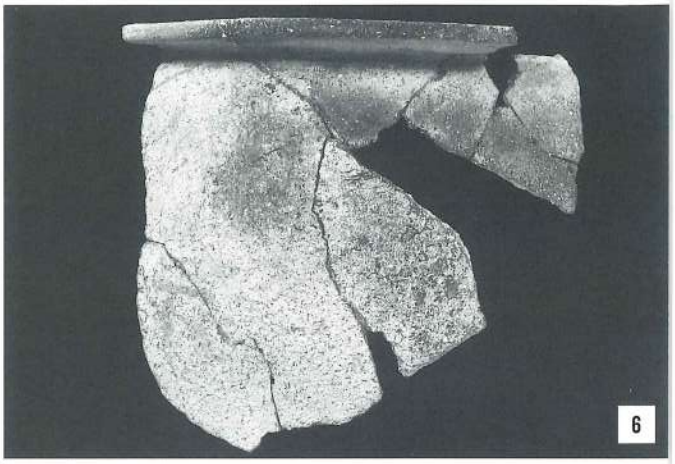



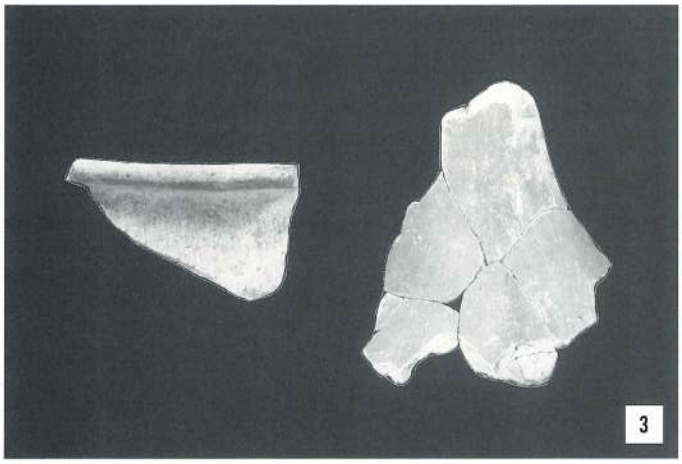



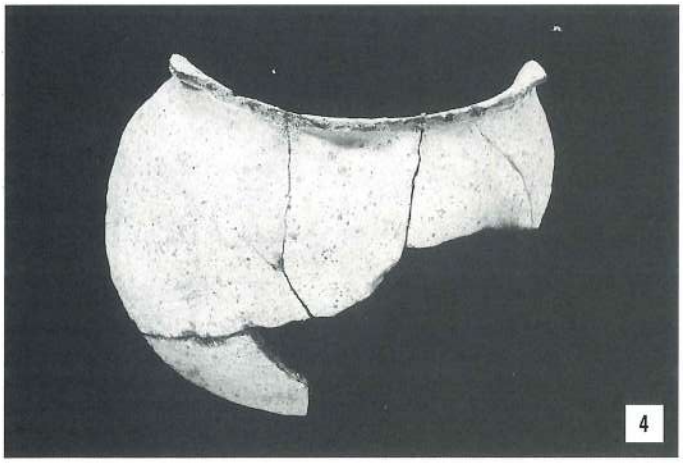

1. 121 SK-960
2. 123 SK-960
3. 126 SK-964
4. 127・128 SH-965
5. 129 SK-966
6. 130 SK-966
7. 131 SK-966
8. 133 SK-966

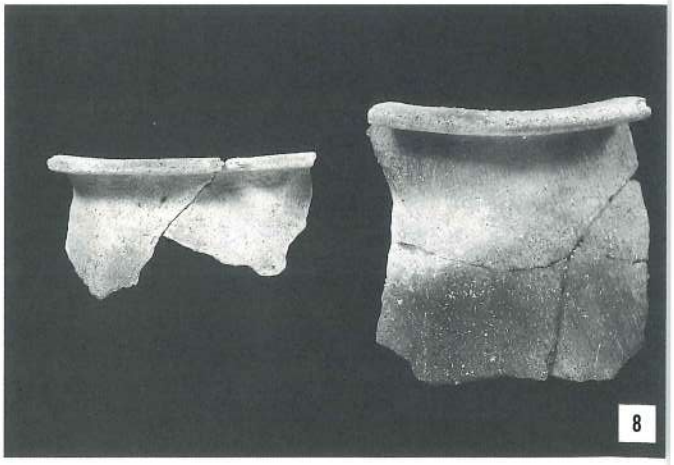




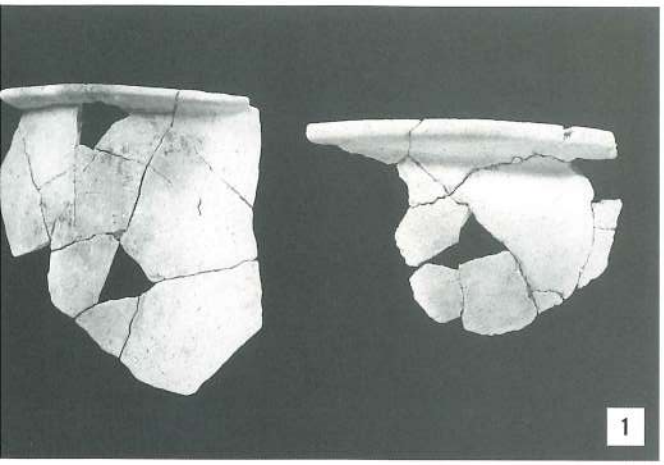



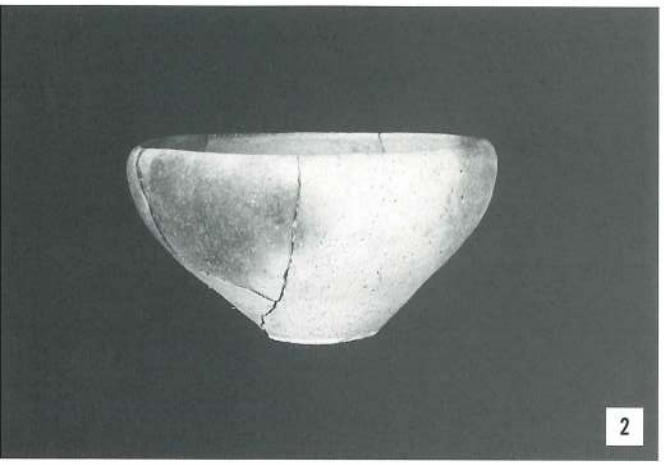



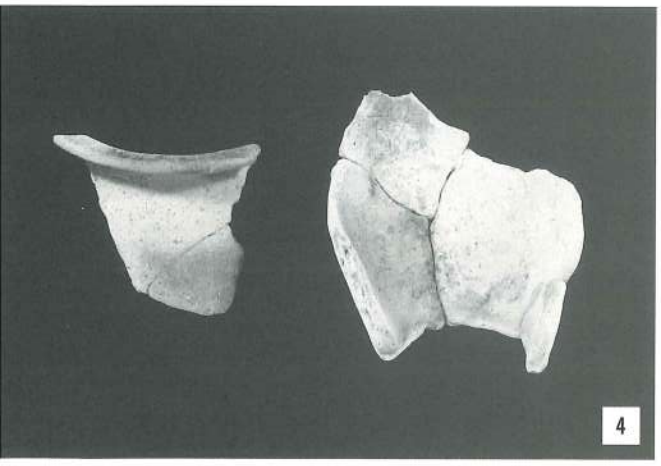


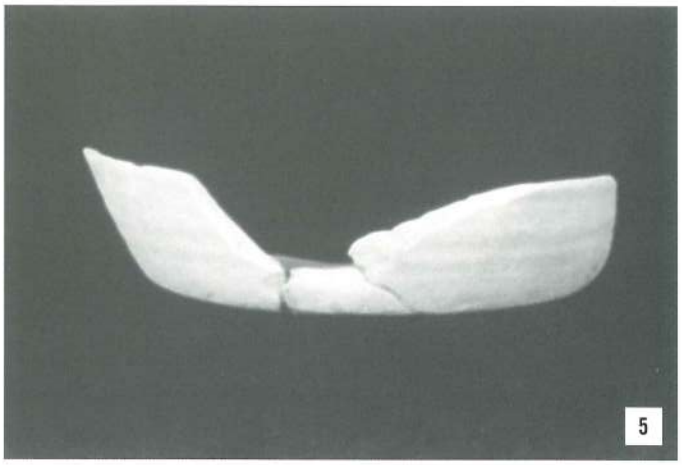



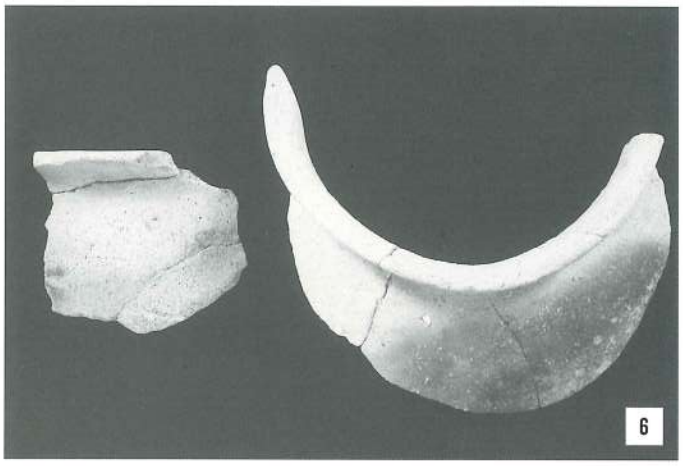

1. 134 SK-966
2. 135 SK-966
3. 136・137 SK-968
4. 141 SH-971
5. 142 SH-971
6. 144 SH-975
7. 145 SH-976
8. 147・148 SH-976

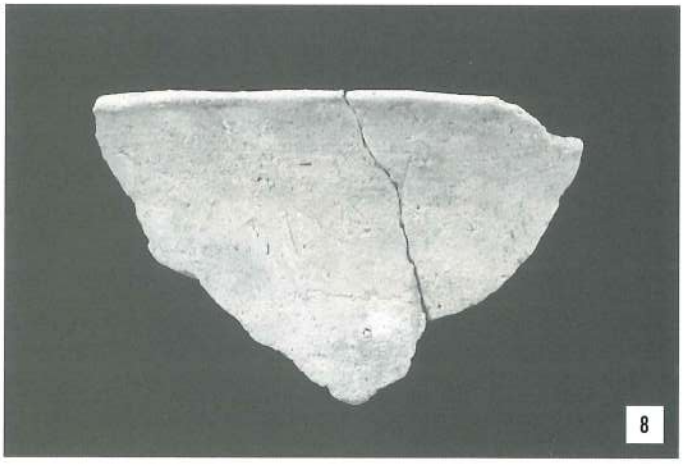




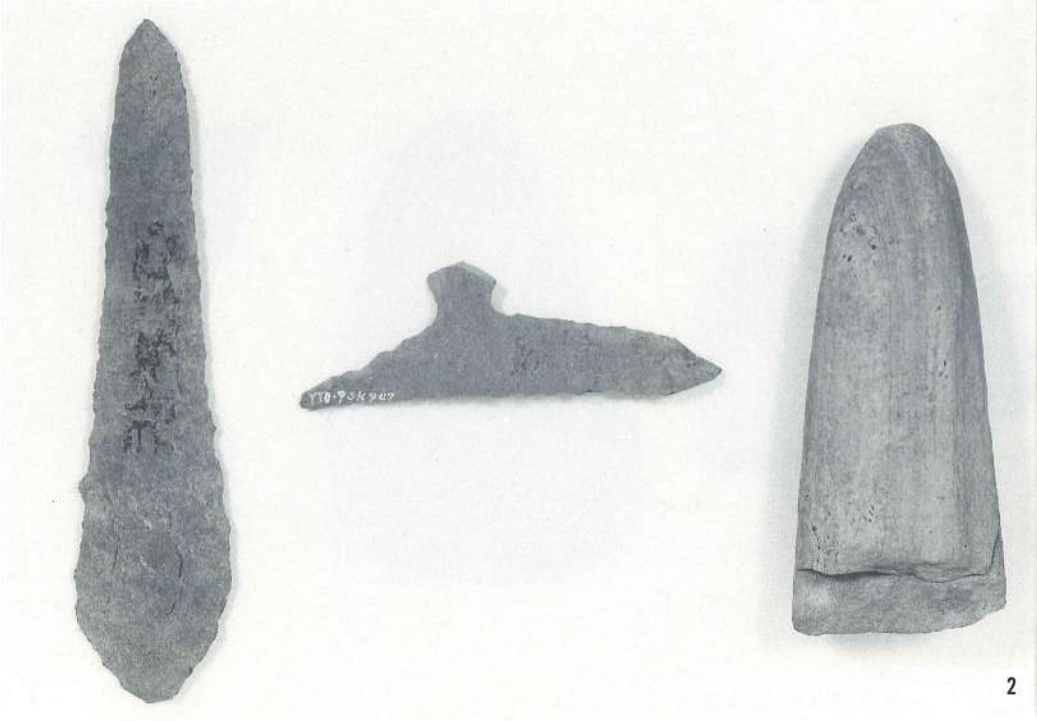






1. 149・151 SH-976
2. 152 SH-976
3. 155 SH-976
4. 156・160 SH-976
5. 164 SK-981
6. 166・169 SK-981
7. 167 SK-981
8. 170 SK-981

1

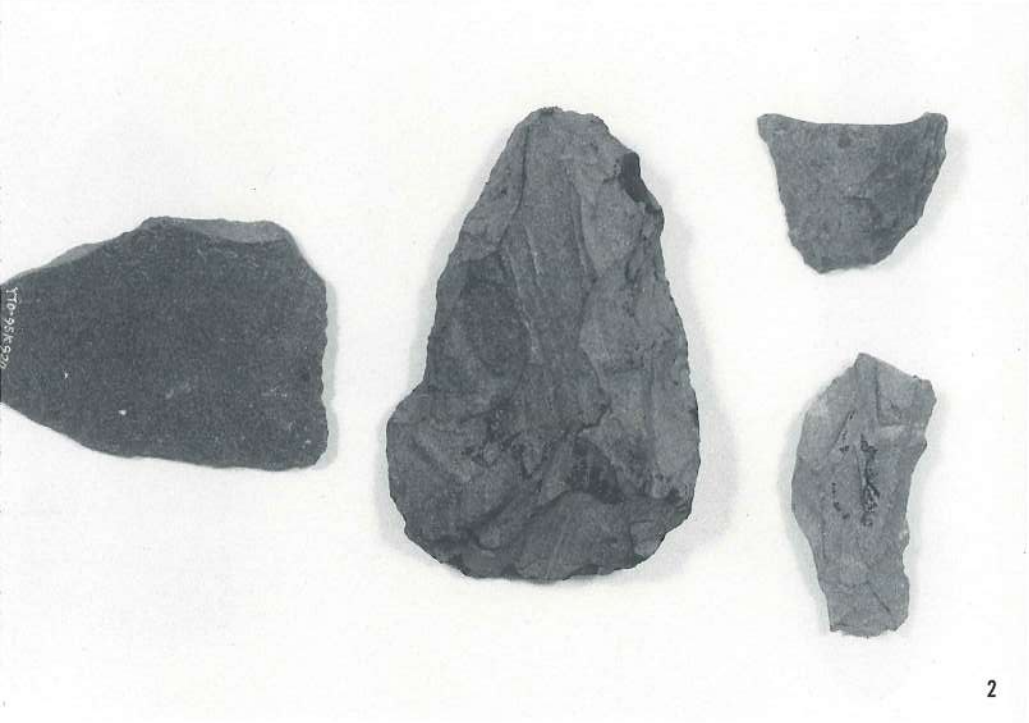


2

3

1. 細石刃　174　石鏃　175・176
2. 石剣　177　石匙　178　石斧　179
3. 石斧　左）180・181
　　中）182　右）183

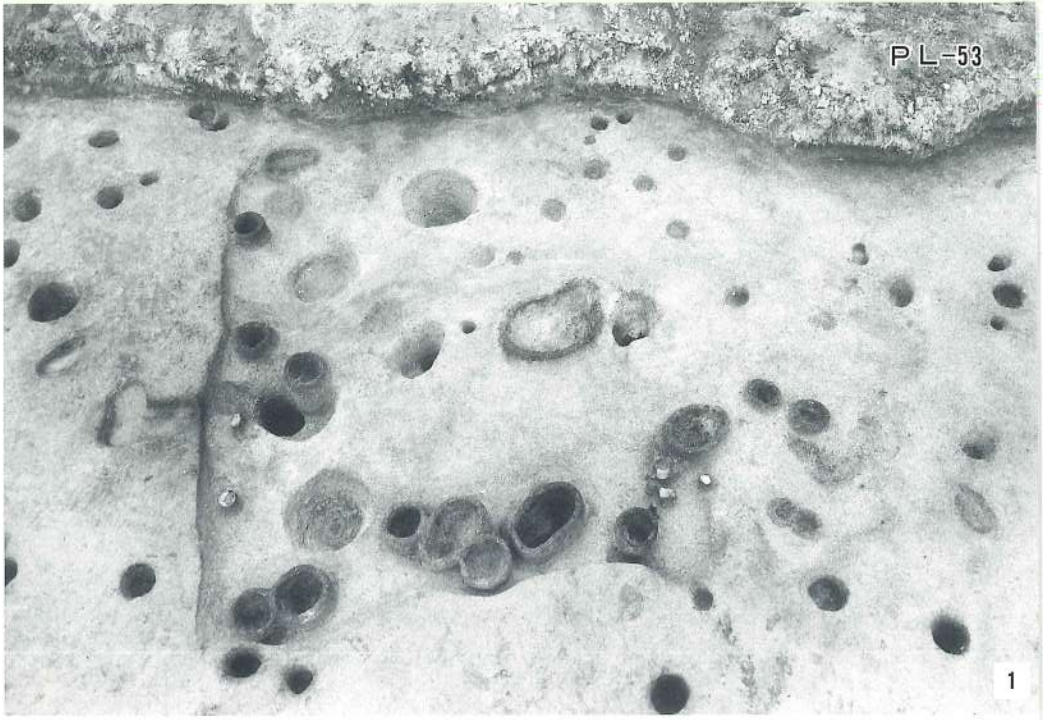
1

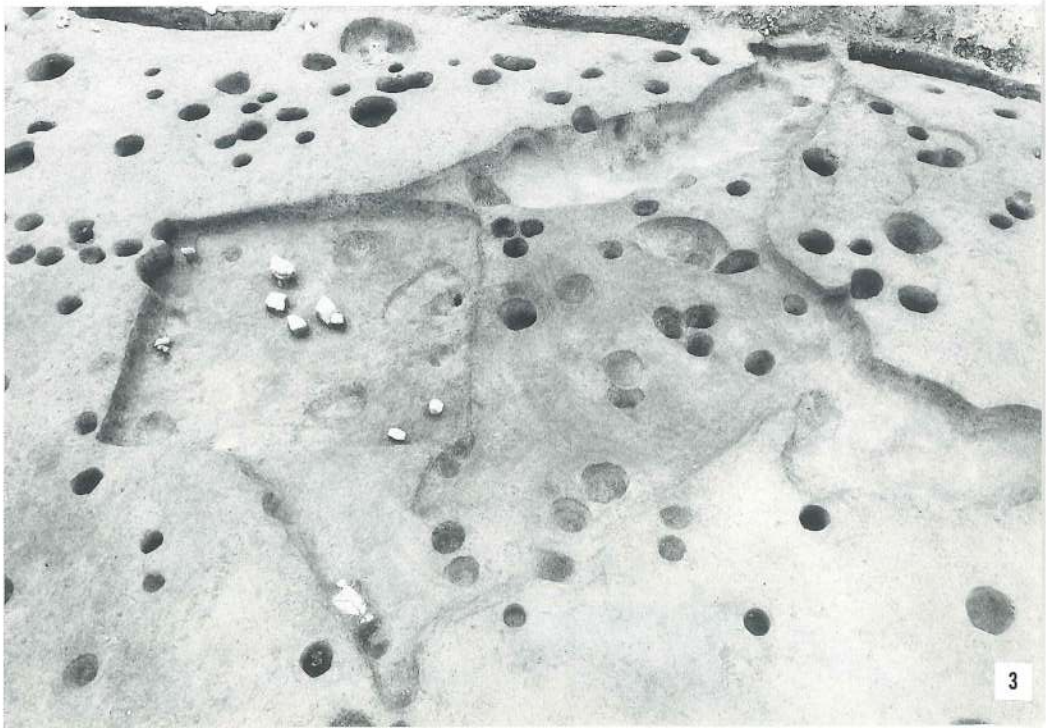


2

3

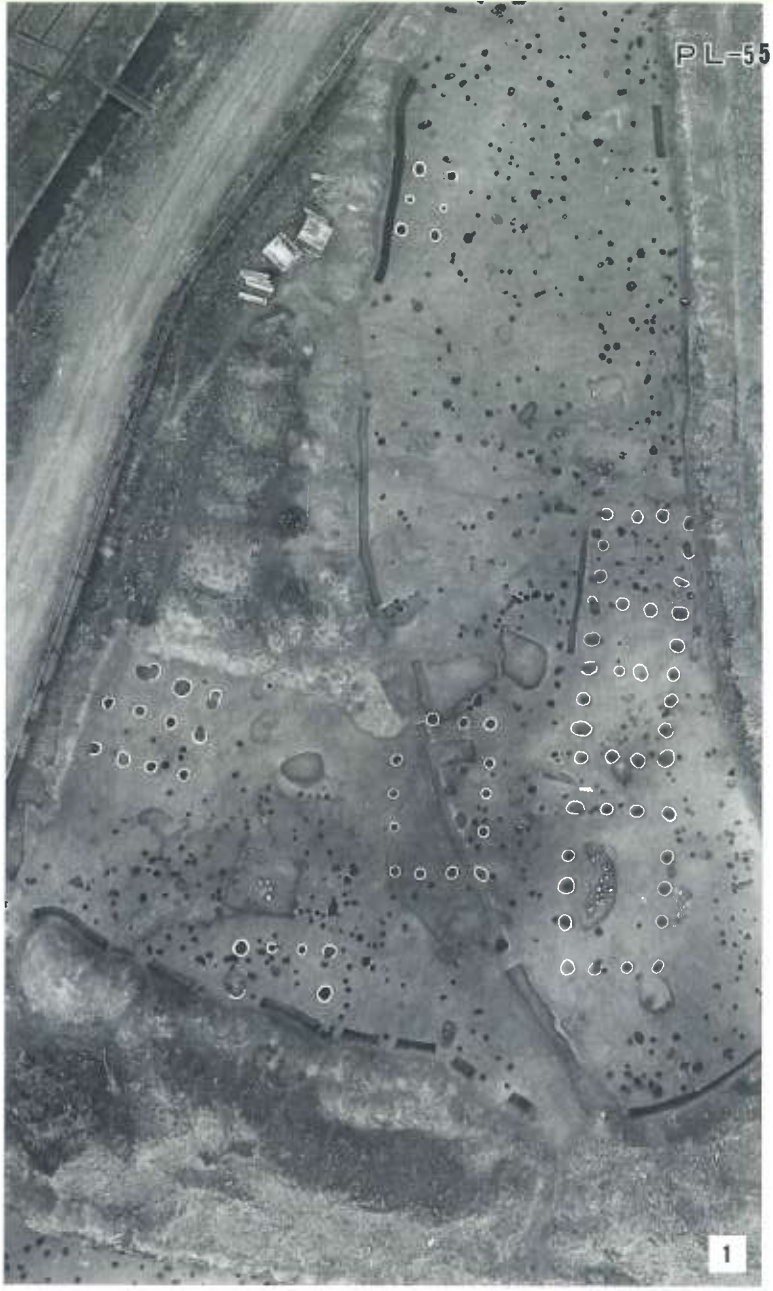
1．左）　片刃石斧　184・185
　右上）　石包丁　186
　右下）　砥石　187
2．掻器等　左）188　中）189
　　右上）190　右下）191
3．石核　192

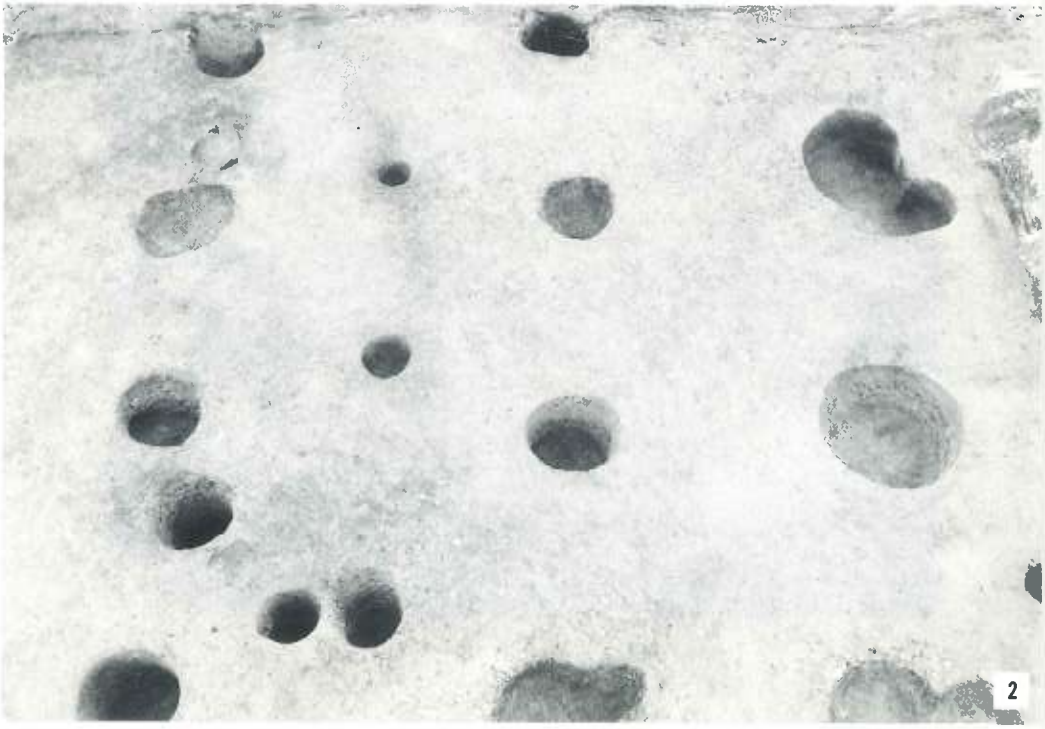





1．SH-1120（南から）
2．SH-1121（北西から）
3．SH-1136・SH-1137（北から）

1．SB-1005（南から）
2．SB-1007（東から）
3．SB-1105（北から）

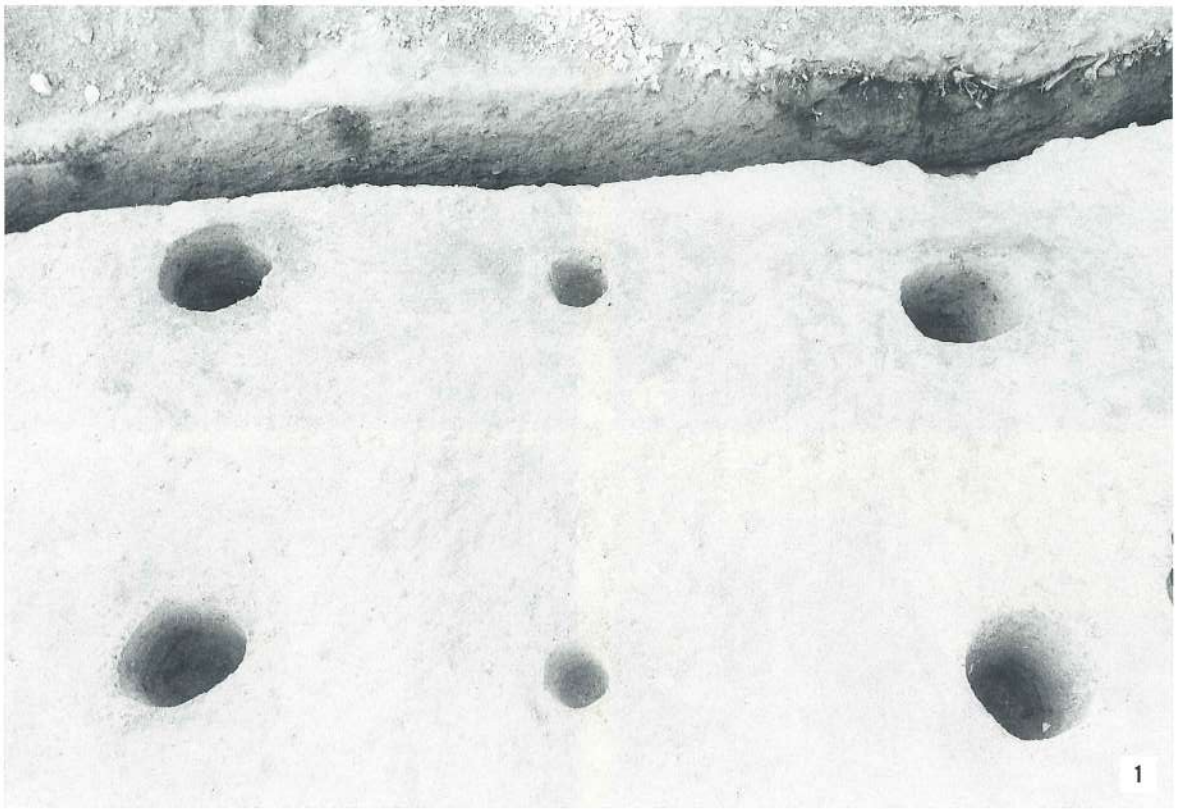


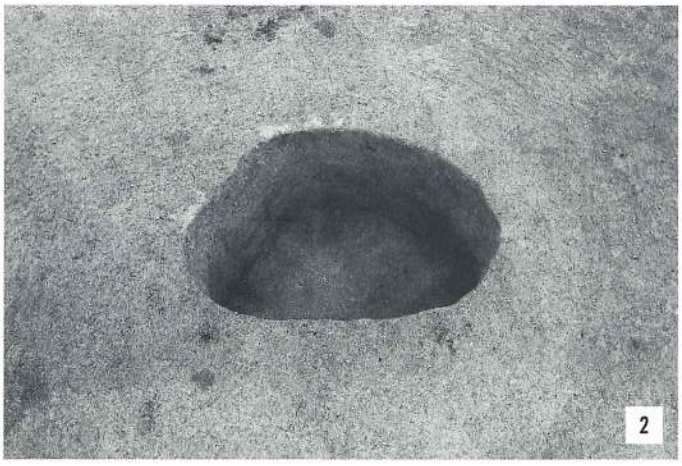



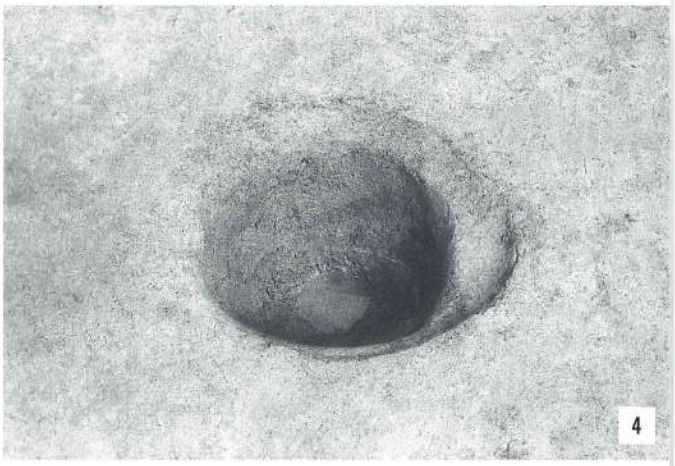

1．掘立柱建物群
（写真上方が北）
SB-1135
SB-1140
SB-1142
〜
SB-1145
2．SB-1140（東から）

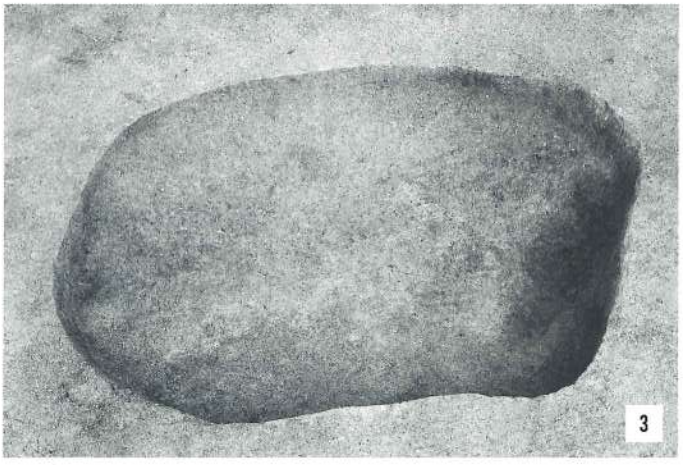
1．SB-1142（南から）

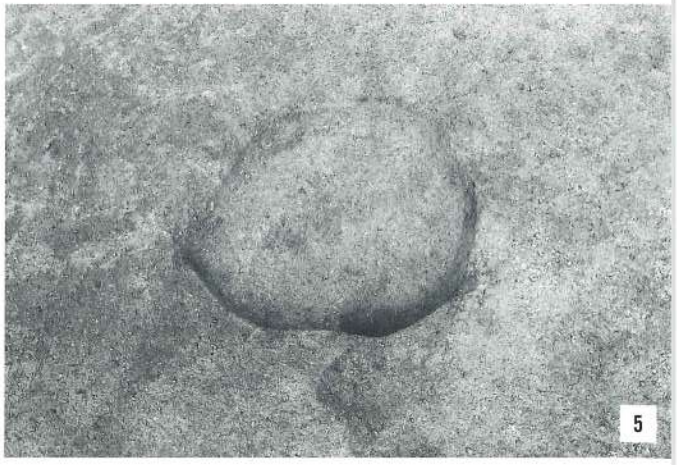
2．SB-1143・SB-1144（南東から）











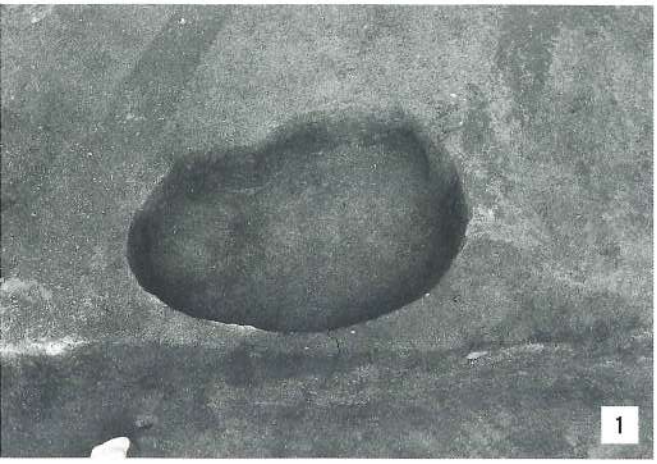
1．SB-1150（東から）

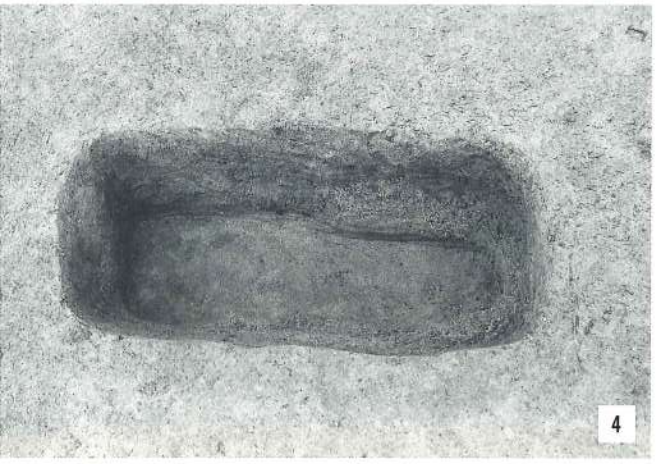
2．SK-1010（南から）

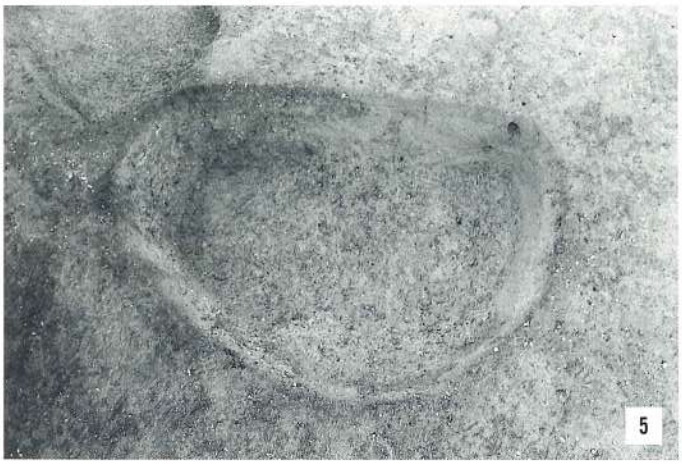
3．SK-1011（南から）

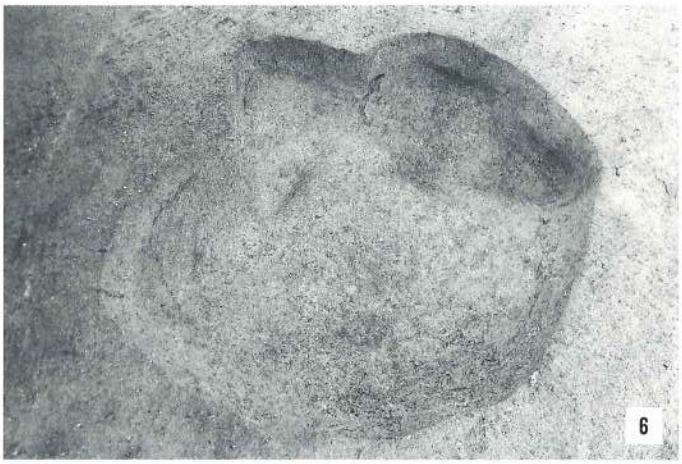
4．SK-1013（南西から）

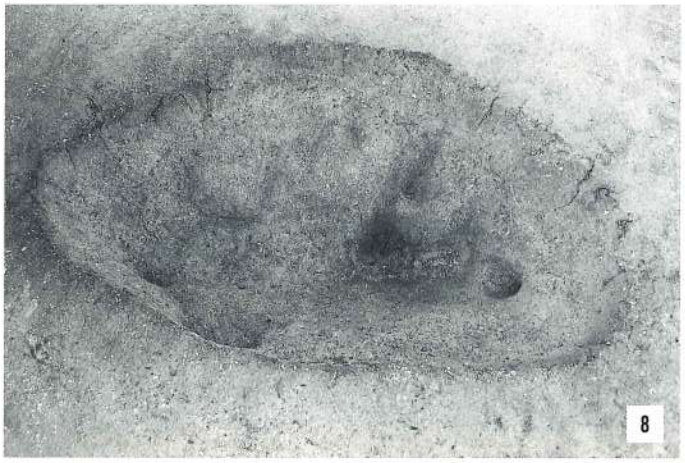
5．SK-1014（南から）



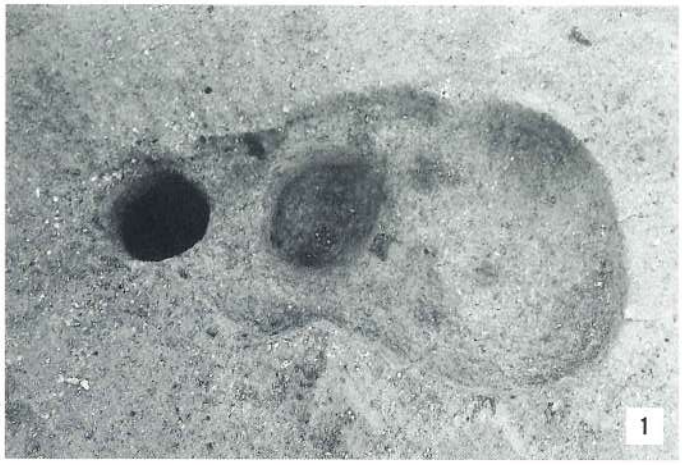


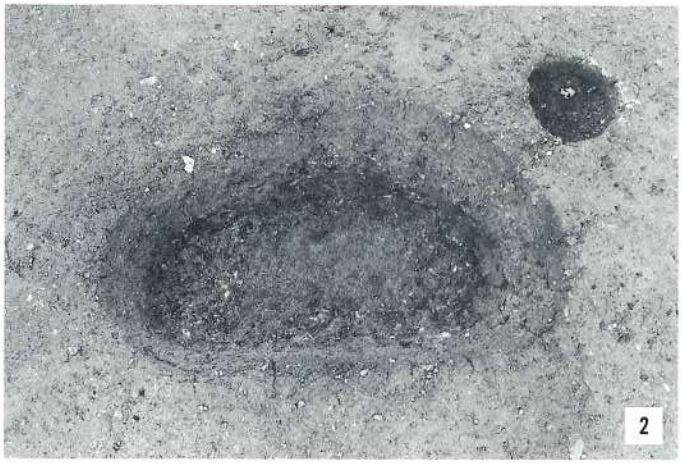



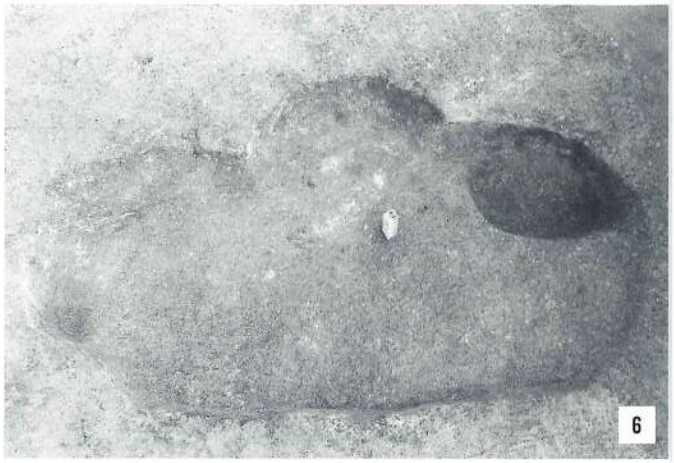



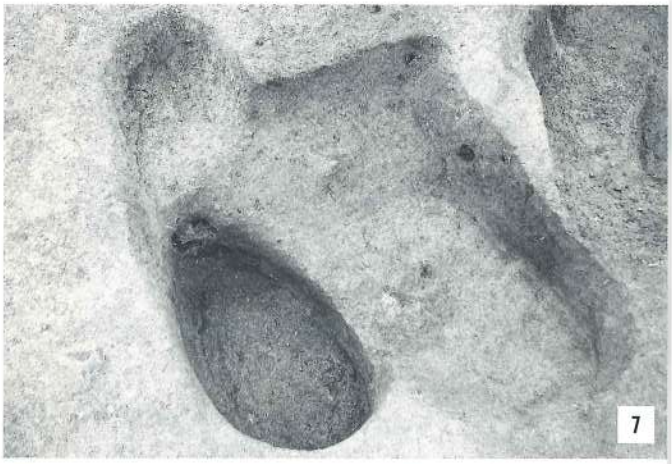


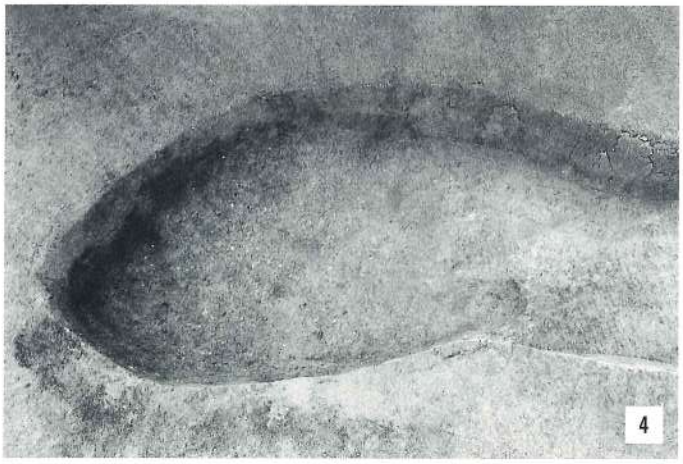

1．SK-1018（南から）
2．SK-1101（南西から）
3．SK-1102（北から）
4．SK-1104（南東から）
5．SK-1107（南東から）
6．SK-1108（南東から）
7．SK-1109（南東から）
8．SK-1110（南東から）

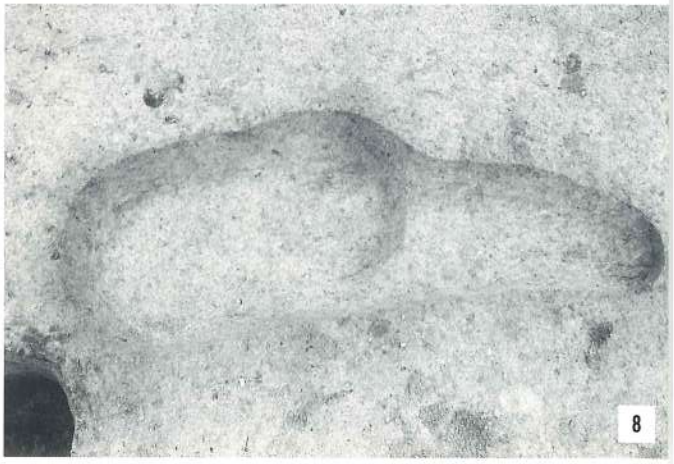




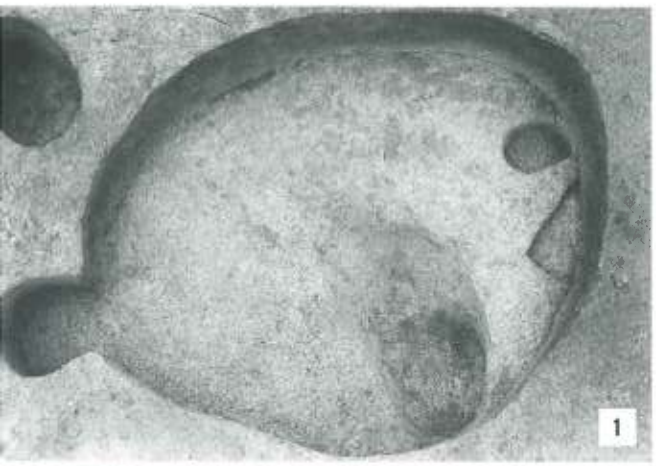



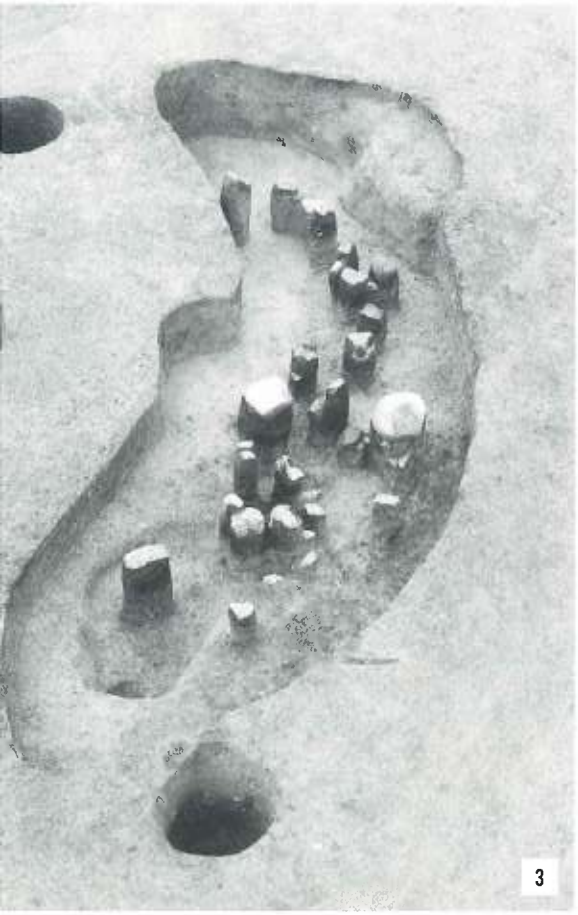


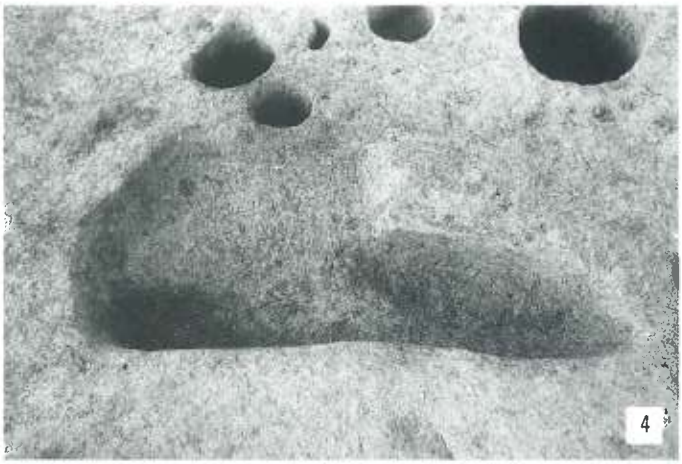



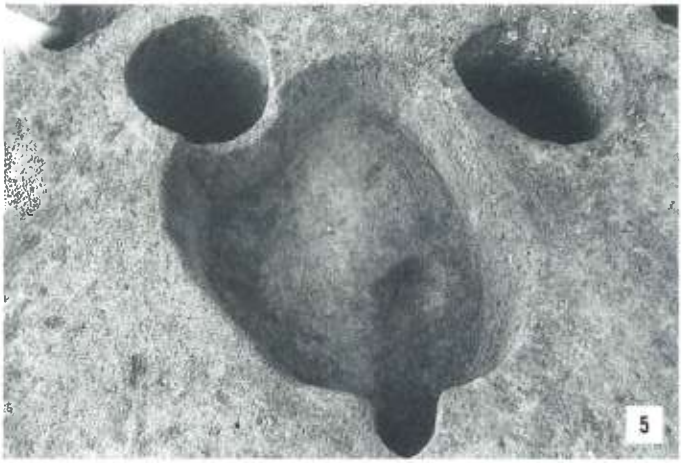



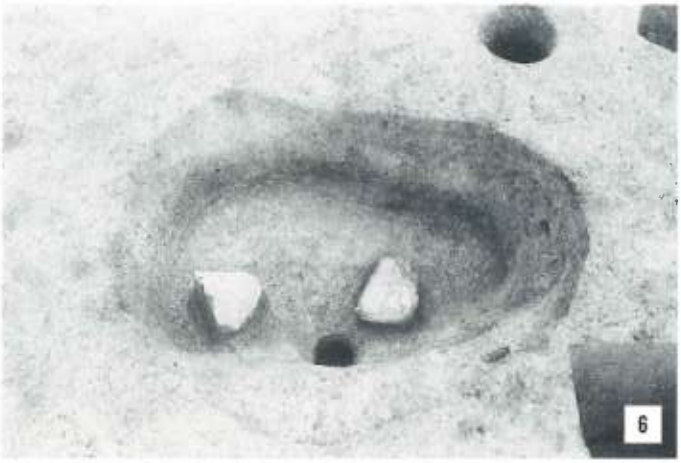

1．SK-1111（南から）
2．SK-1112（南東から）
3．SK-1113（北東から）
4．SK-1115（北東から）
5．SK-1116（西から）
6．SK-1117（北西から）
7．SK-1124（西から）
8．SK-1127（北西から）

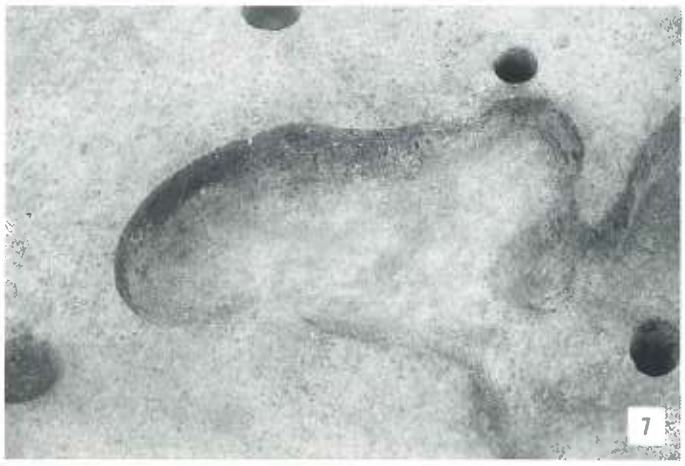




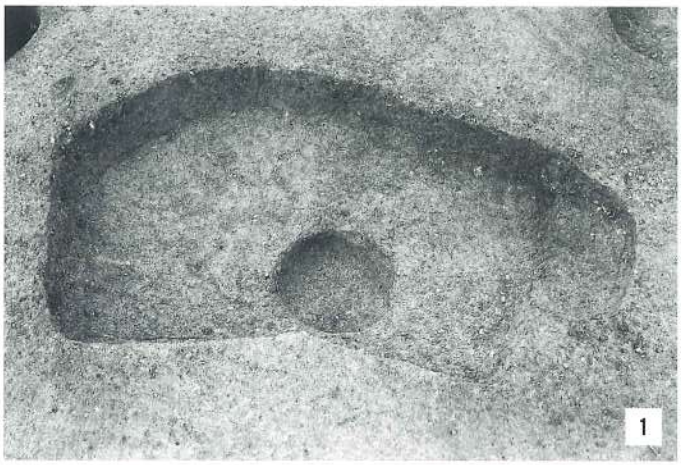



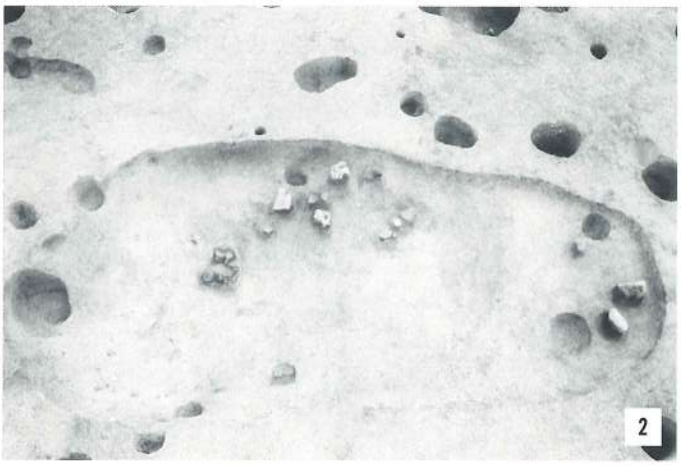



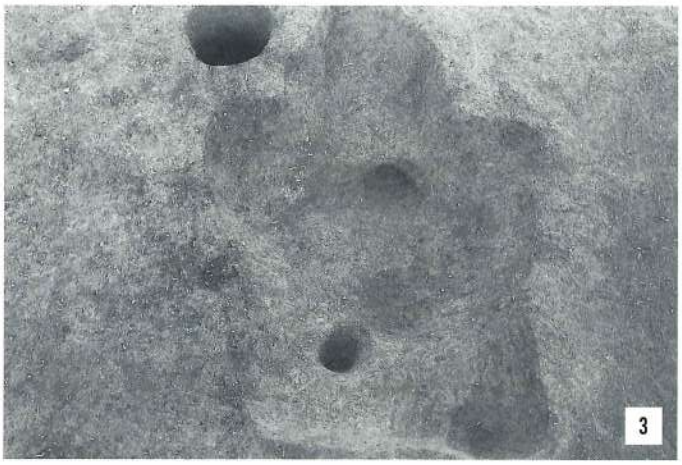



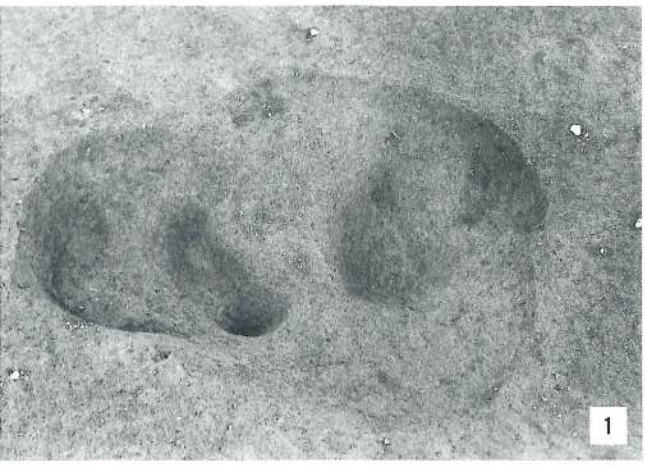

1．SK-1128（南西から）
2．SK-1129（西から）
3．SK-1130（南から）
4．SK-1132（南から）
5．SK-1133（南から）
6．SK-1134（西から）
7．SK-1139（南から）

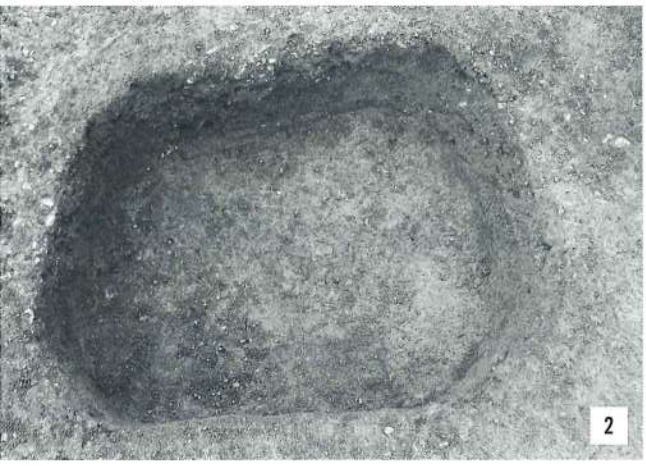


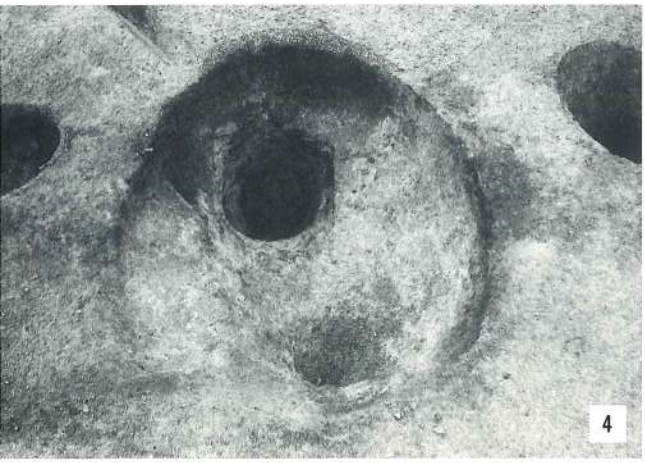


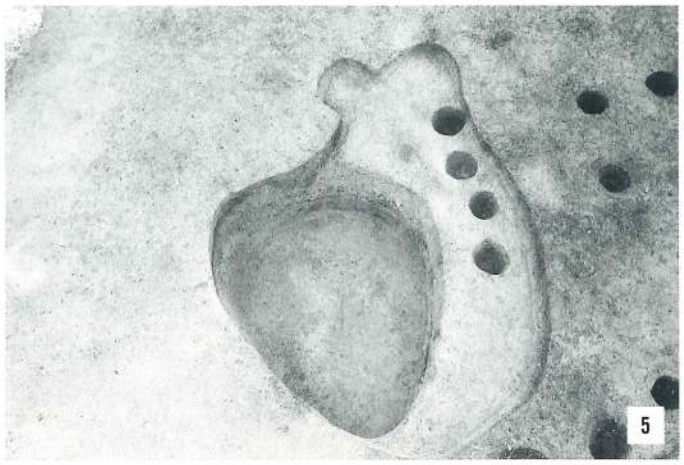


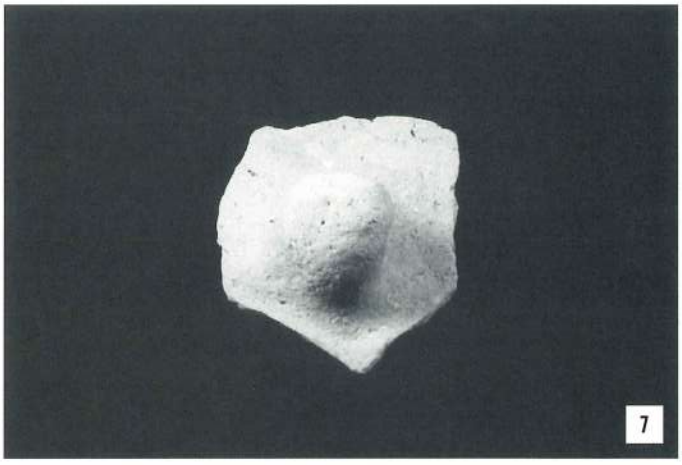
1．SK-1141（東から）
2．SK-1145（北から）
3．SK-1146（西から）
4．SK-1147（北西から）
5．SK-1148（西から）
6．SK-1149（南西から）
7．SK-1151（南から）
8．SK-1152（西から）

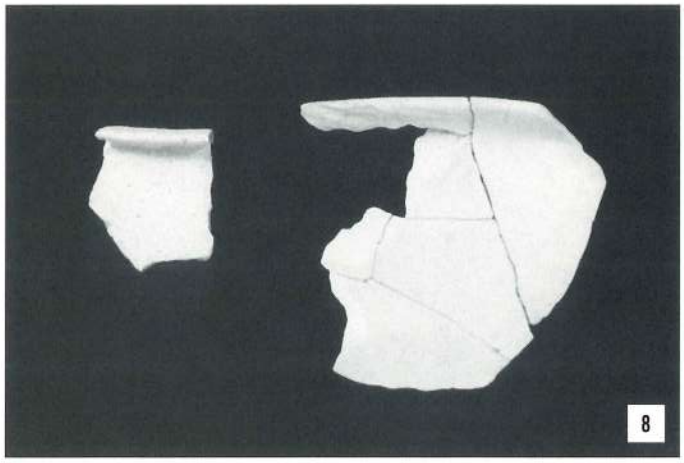




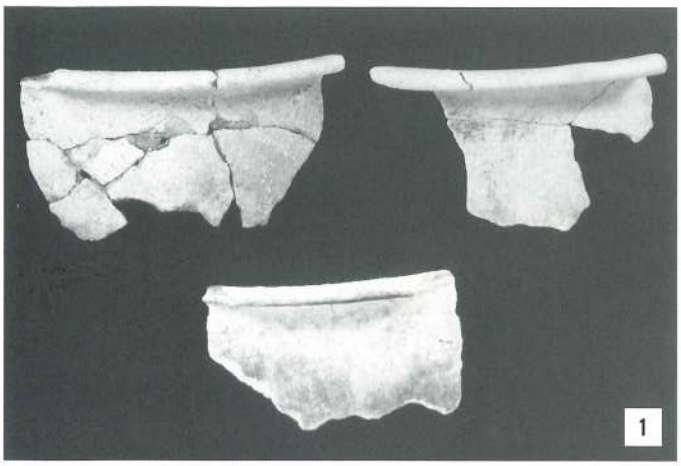



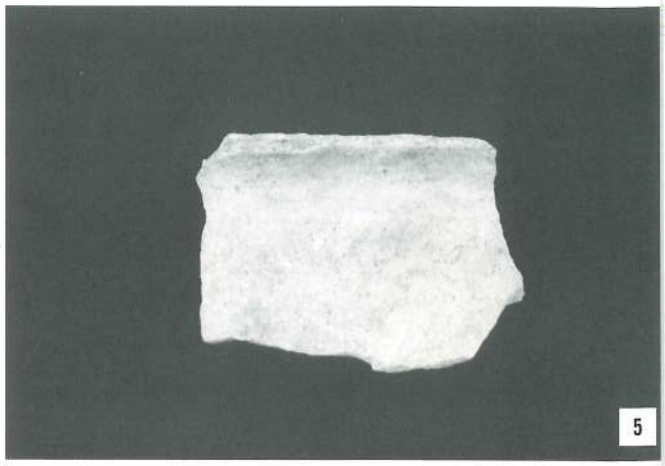


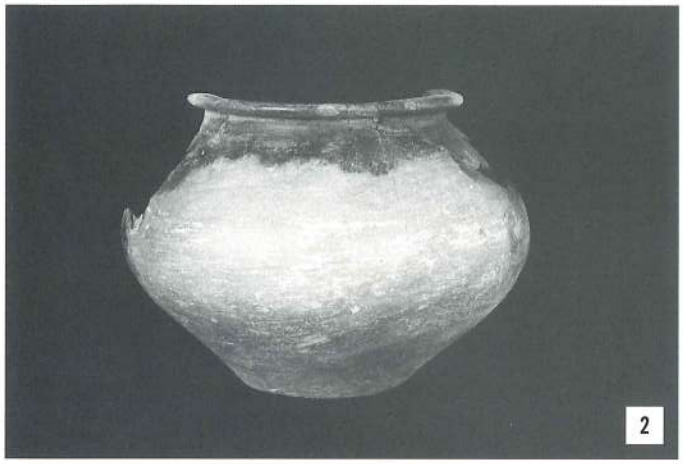



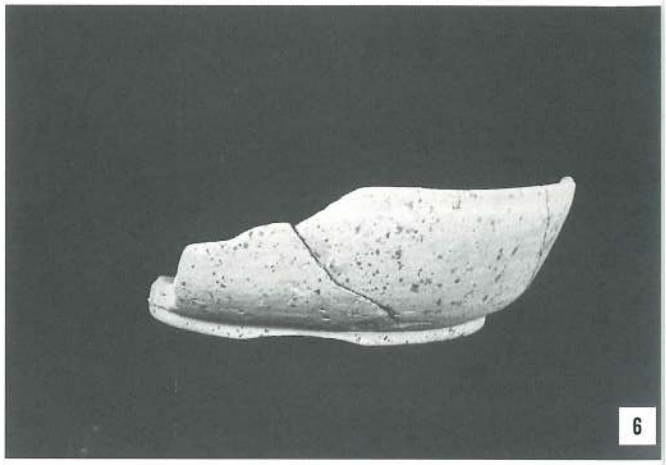

1．SK-1153（西から）
2．SK-1156（南東から）
3．SK-1158（東から）
4．SK-1159（東から）

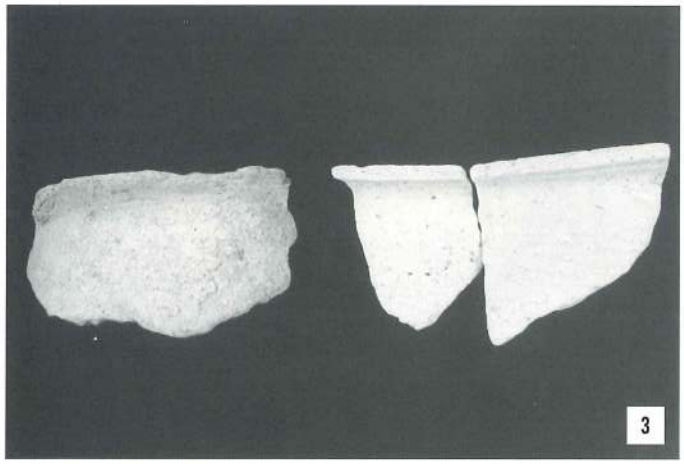
5．SK-1160（西から）
6．SK-1161（北東から）
7．1　SK-1001
8．2・3　SH-1120

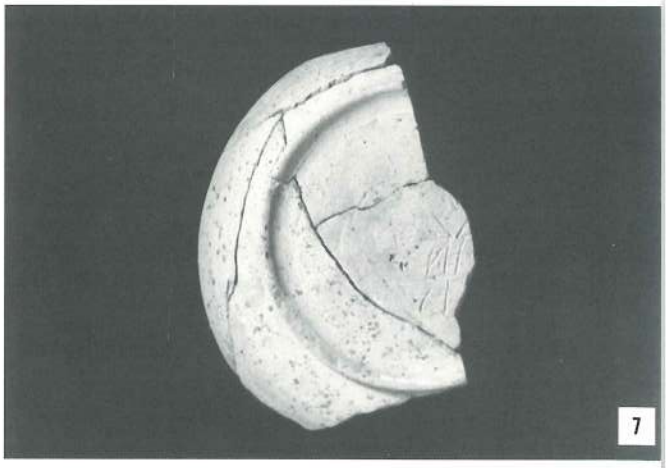


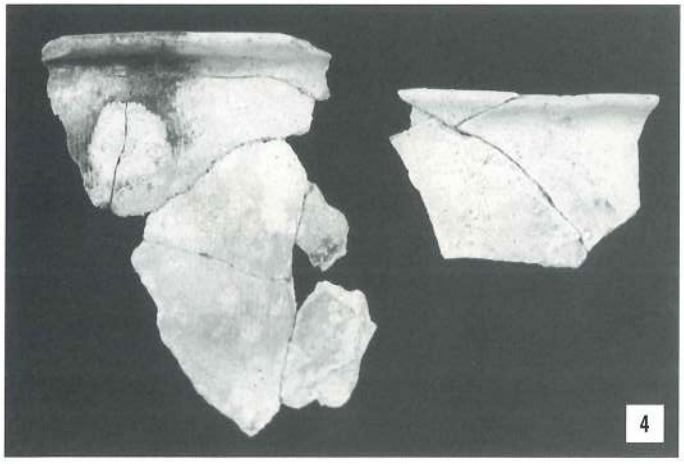



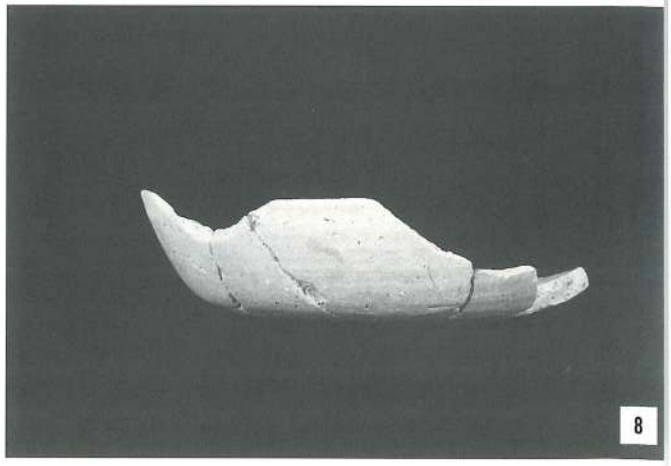




1．上）5・6　下）7　SH-1120

2．8　SH-1120

3．9・12　SK-1130

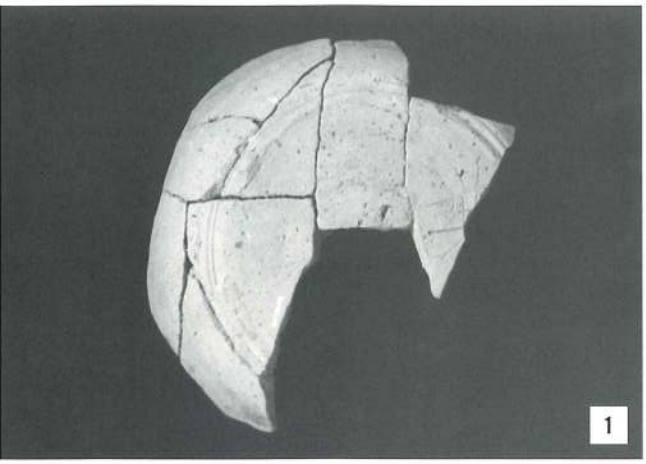
4．11・13　SK-1130

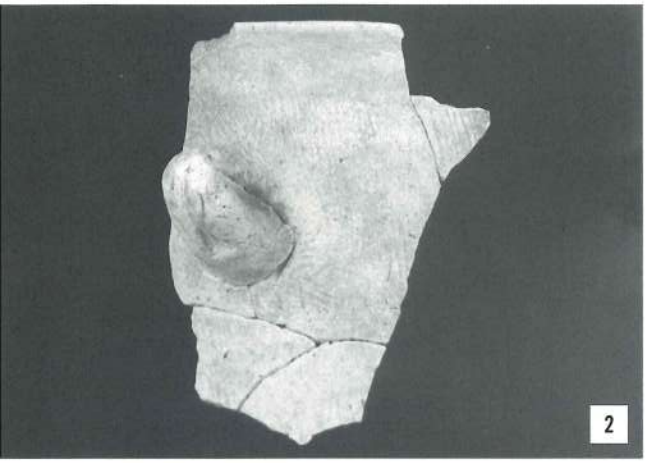
5．14　SK-1134

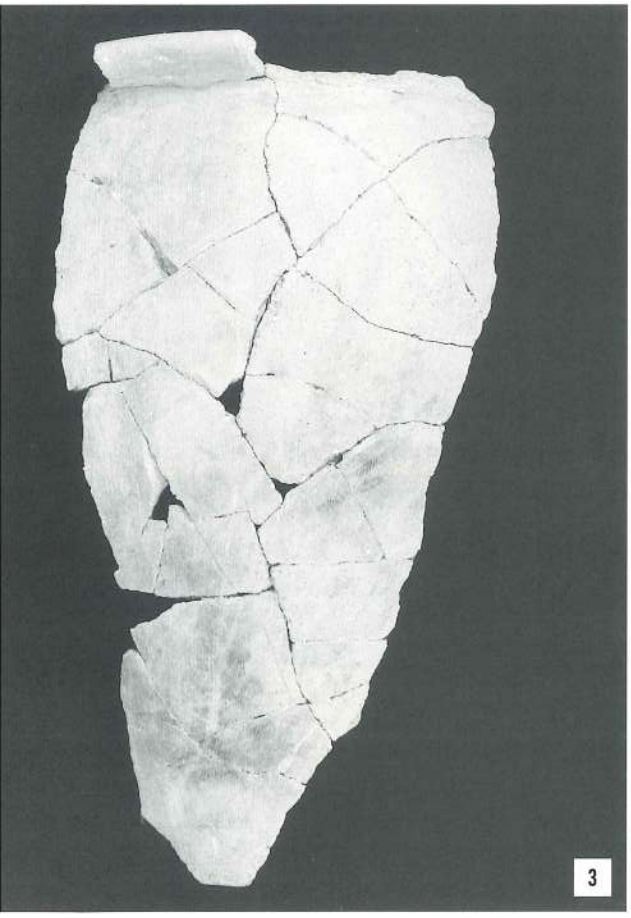
6．15　SH-1136

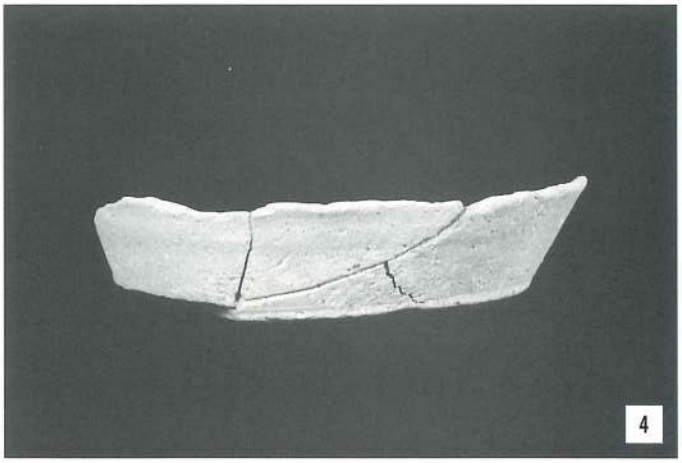
7．15　SH-1136

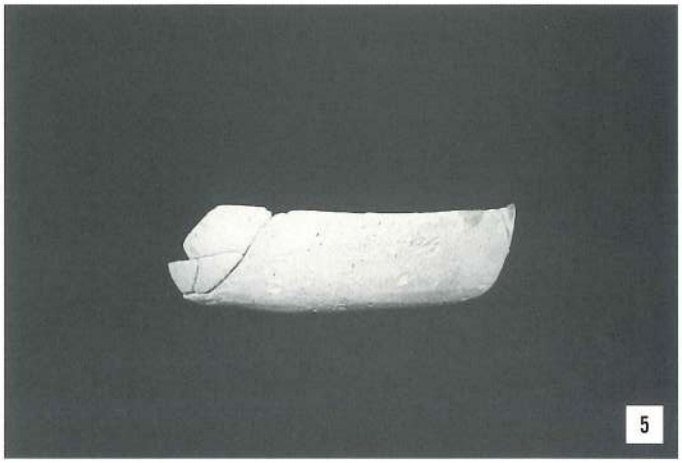
8．18　SH-1136

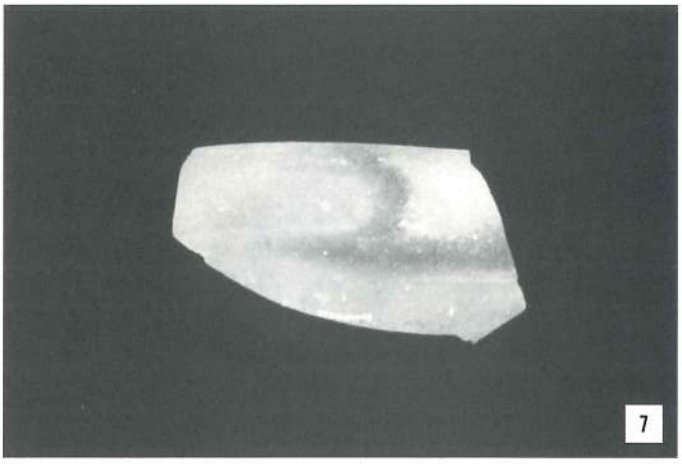


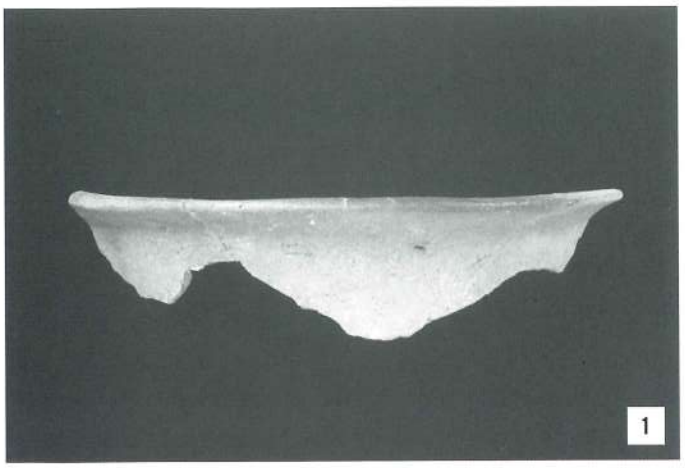



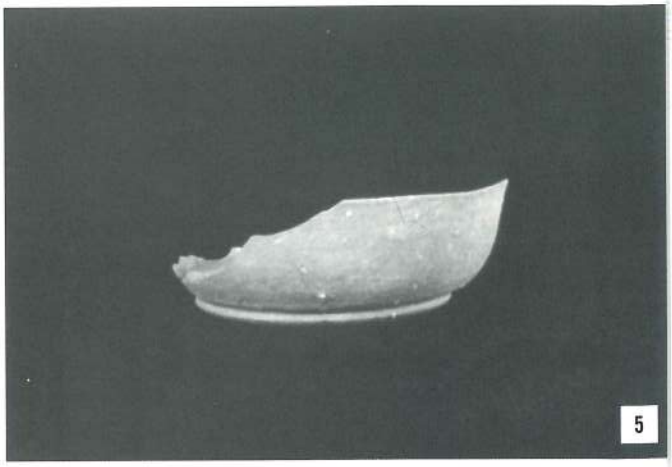



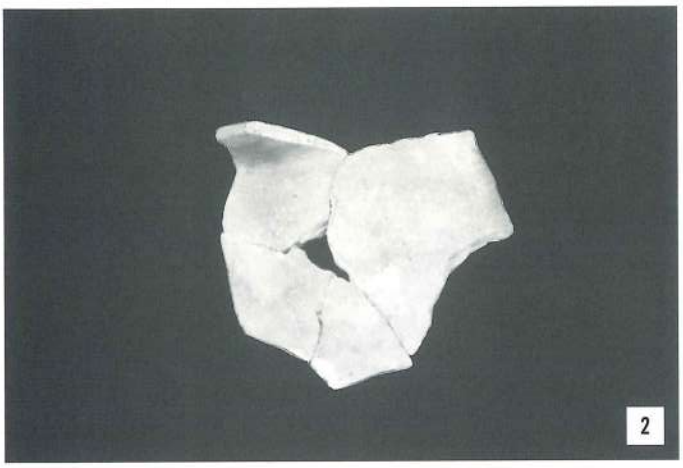


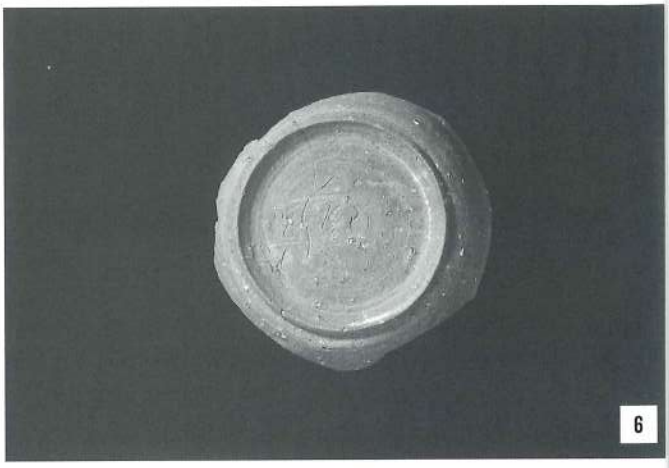

1. 18 SH-1136
2. 20 SH-1137
3. 21 SH-1137

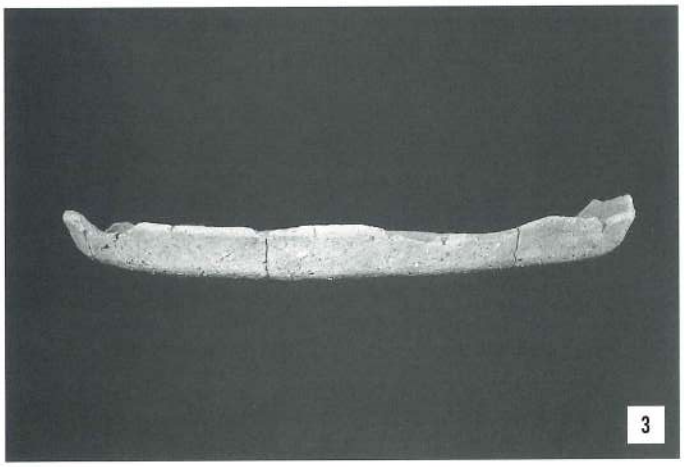
4. 25 SB-1143
5. 26 SK-1145
6. 27 SK-1145
7. 28 SK-1145

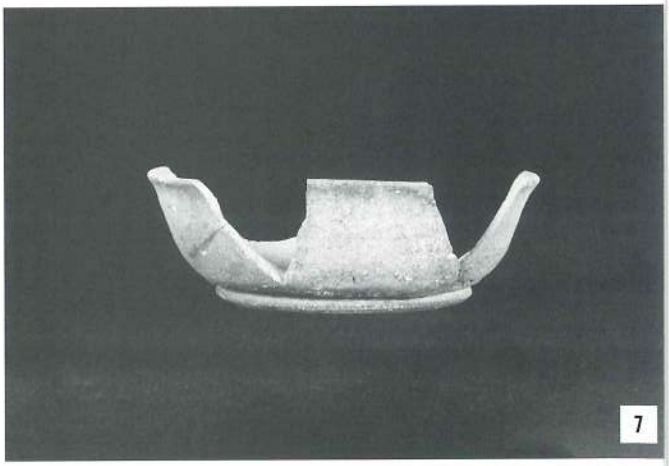


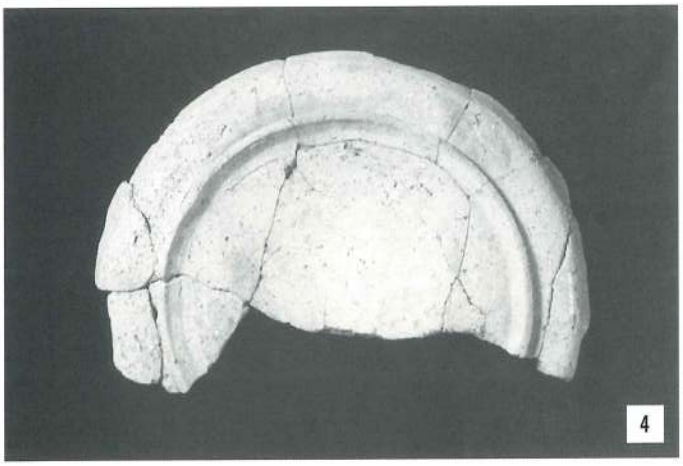



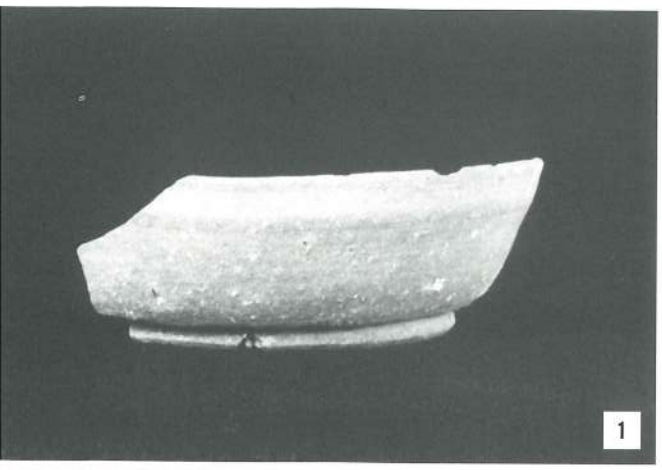



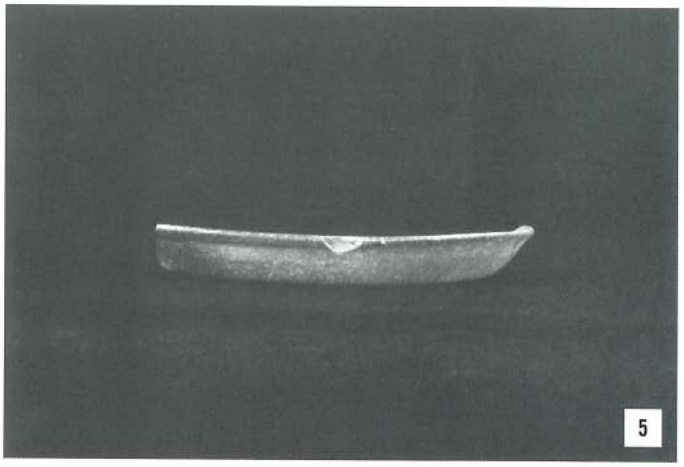



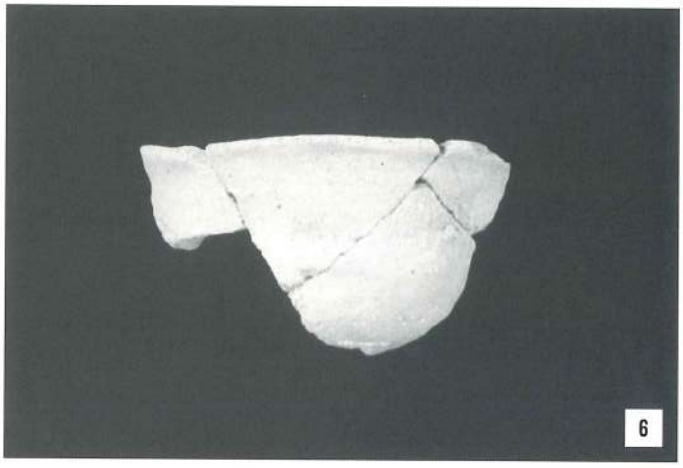



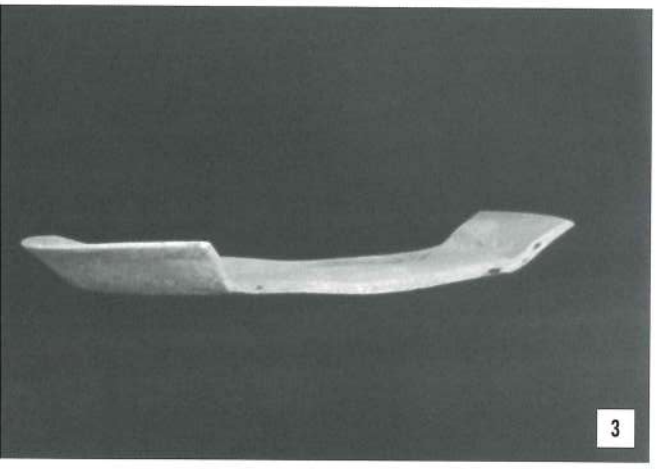



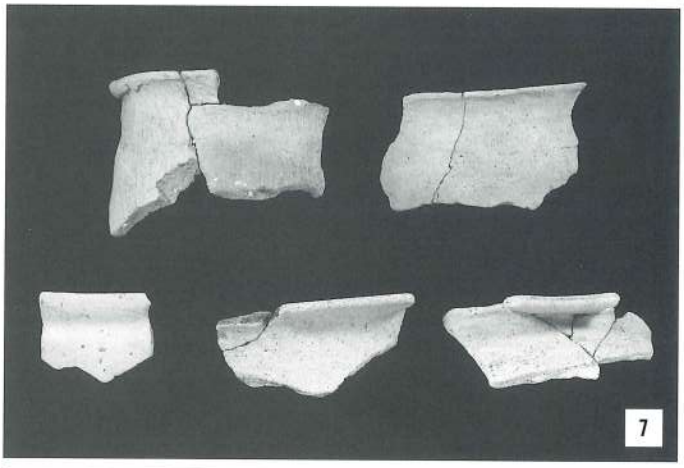
1. 29 SK-1145
2. 30 SK-1145
3. 32 SK-1145
4. 32 SK-1145
5. 33 SK-1145
6. 33 SK-1145
7. 34 SK-1145
8. 34 SK-1145

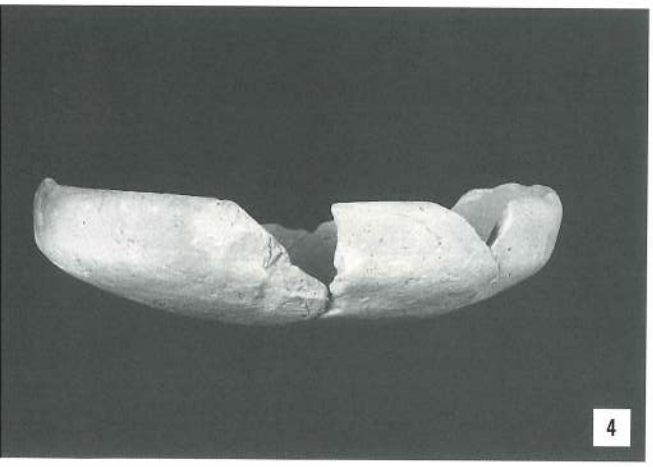


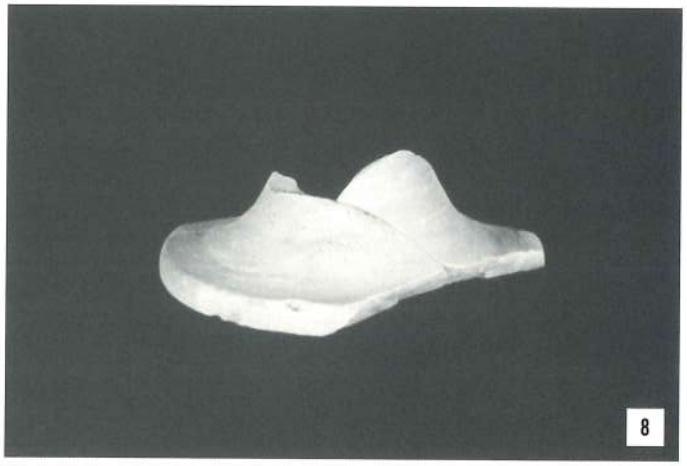





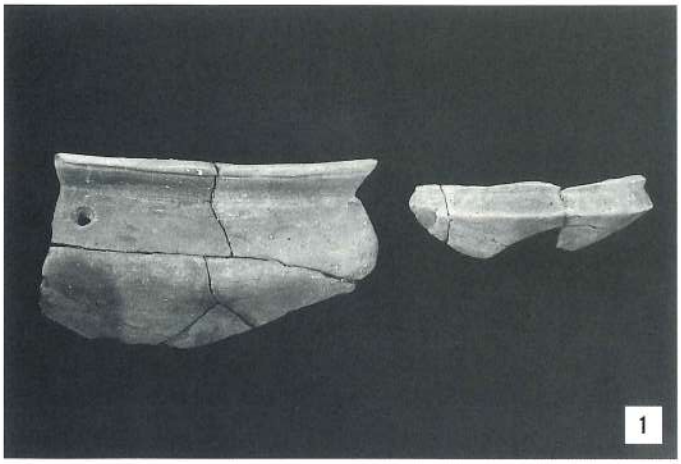



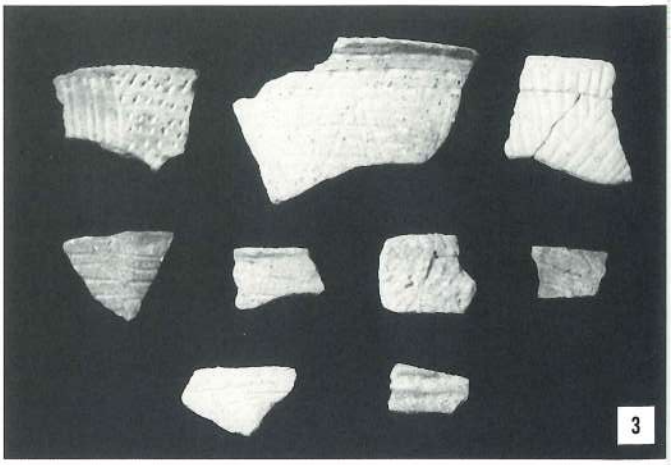



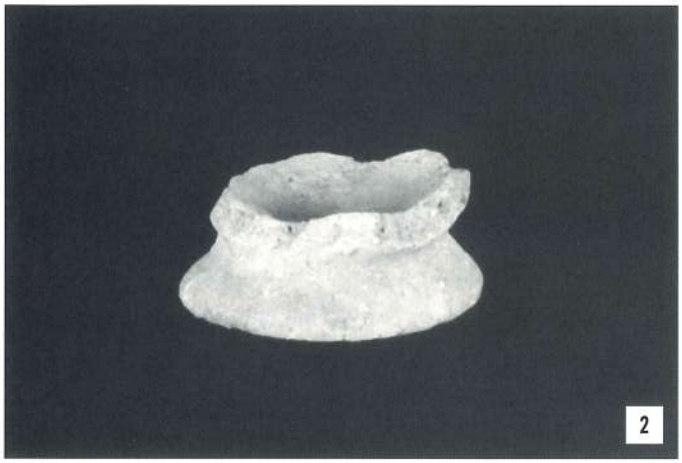



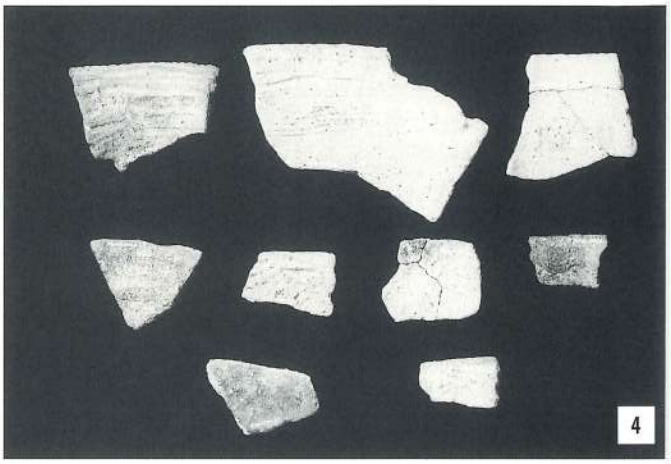




1．35　SK-1145
2．36　SK-1145
3．37　SK-1145
4．38　SK-1145
5．39　SK-1145
6．41　SK-1145
7．上）42・43　下）44～46　SK-1149
8．48　SK-1149



1．50・51　SK-1152

2．52　SK-1152

3．上）　53・54・56　中）　55・57～59
　　下）　60・61　SK-1155

4．3．に同じ

5．石斧　62・叩き石　63

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | やとういせきIII |
| 書名 | 八藤遺跡III |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 上峰町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第16集 |
| 編著者 | 原田　大介・鶴田　浩二 |
| 編集機関 | 上峰町教育委員会 |
| 所在地 | 佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4 上峰町民センター内 TEL0952-52-3833 |
| 発行年月日 | 1999年3月31日 |

| 所収遺跡名（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 八藤（やとう） | 佐賀県三養基郡（さがけんみやきぐん）<br>上峰町大字堤（かみみねちょうおおあざつつみ）<br>字迎原（あざむかえばる） | 41345 | 1004<br>2031<br>3015 | 33°25′40″ | 130°25′40″ | 平成3年度<br>1991. 7.26<br>～<br>1992. 3. 3 | 15,000m² | 農業基盤整備事業 |
| | | | | | | 平成4年度<br>1992. 6.25<br>～<br>1993. 2. 9 | 17,000m² | |
| | | | | | | 平成5年度<br>1193. 9. 7<br>～<br>1194. 1.21 | 5,000m² | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 八藤 | 集落跡 | 先土器時代<br>縄文時代<br>弥生時代<br>奈良・平安<br>中世 | 竪穴式住居址　12軒<br>掘立柱建物址　30棟<br>土壙　208基<br>火葬墓　1基<br>道路側溝状遺構　1条<br>中世大溝　1条<br>その他溝跡等 | 尖頭器・石斧・掻器・細石刃・石核等<br>縄文式土器（前期・晩期）<br>石匙・石剣・石鏃・石斧<br>弥生式土器（中期）<br>土師器・須恵器類<br>中世土器等 | |

上峰町文化財調査報告書第16集

**八藤遺跡 III**

平成11年3月24日印刷
平成11年3月31日発行

編集
発行　上峰町教育委員会
佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4

印刷　㈱昭和堂印刷 佐賀支店
佐賀県佐賀市高木瀬西4丁目12-1